

青森市埋蔵文化財調査報告書第54集-1

新町野遺跡

発掘調査報告書Ⅱ

平成12年度

青森市教育委員会

青森市埋蔵文化財調査報告書第 54集 - 1

新 町 野 遺 跡

発掘調査報告書

平成 12年度

青森市教育委員会



新町野遺跡遠景



円形周溝



円形周溝



円形周溝出土遺物

序

青森市教育委員会では、平成10年度に青森中核工業団地造成事業に先行して埋蔵文化財包蔵地の発掘調査を新町野遺跡において実施いたしました。

調査の結果、新町野遺跡は本市において類例の少ない平安時代の円形周溝（墓）がまとまった形で発見され、当時における人々の生活の様子を知るうえで貴重な資料を得ることが出来ました。

本報告書は、調査の成果をまとめたものであります。

本書が、今後、埋蔵文化財の保護と活用、さらに郷土「青森」の歴史学習等に役立つことができれば幸いです。

最後になりましたが、ここに本書を刊行できましたことは、ひとえに関係機関並びに関係各位からのご指導、地元各町会からのご協力、さらに工事主体者である地域振興整備公団のご理解に対しまして厚くお礼申し上げます。

平成12年3月

青森市教育委員会

教育長 池田 敬

例 言

- 1 本書は、青森県青森市大字合子沢字松森に所在する新町野遺跡（青森県遺跡番号 01 161）発掘調査報告書である。
- 2 本書に記載される内容は、青森市が地域振興整備公団の委託を受け、平成 10年度に青森市教育委員会が発掘調査を実施した地区についてまとめたものである。
- 3 調査は、青森中核工業団地造成工事に伴う発掘調査として平成 10年度に実施された。調査面積は、23 800㎡である。
- 4 新町野遺跡は、平成 7 年度から青森中核工業団地整備事業に係る試掘調査を平成 8・9 年度には発掘調査を青森県埋蔵文化財調査センターが実施しており、その調査成果については既報告済である（青森県教育委員会 1998）。また、遺跡内の周辺部は、本調査区から北西部では、牛館川防災調整池に係る試掘調査を平成 8 年度に当委員会が（青森市教育委員会 1997）、平成 10 年度に青森県埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施している（青森県教育委員会 2000）。また、本調査区から北東部分では市道新町野野木線道路改良事業に係る発掘調査を当委員会が実施している（青森市教育委員会 1998）。
- 5 本報告書は当委員会が担当した野木遺跡発掘調査報告書 と併せて 6 分冊構成とした。内容は第 1 分冊 = 新町野遺跡発掘調査報告書、第 2 分冊 = 野木遺跡発掘調査報告書（調査概要・環境・縄文時代・弥生時代編）第 3 分冊 = 野木遺跡発掘調査報告書（平安時代遺構編 1）第 4 分冊 = 野木遺跡発掘調査報告書（平安時代遺構編 2）第 5 分冊 = 野木遺跡発掘調査報告書（平安時代遺物編分析・総論編）第 6 分冊 = 野木遺跡発掘調査報告書（資料・写真図版編）である。本書は第 1 分冊目にあたる。
- 6 基準点測量・グリッド杭打設は駒みちのく計画に、ラジコンヘリによる空中写真測量については駒シン技術コンサルに委託した。
- 7 本書の執筆・編集は、青森市教育委員会が行い北林八洲晴が担当し、執筆について一部木村が加除修正した。編集については木村淳一・鷲尾智加子が補佐した。
- 8 挿図の縮尺は、各図ごとに示し、方位は真北である。なお、写真の縮尺は統一していない。
- 9 堆積土等の色調観察には、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄：1996）を参照した。
- 10 本書では、本遺跡における基本土層についての記載を割愛しているが、土層については、青森市埋蔵文化財調査報告書第 33 集（1997）及び同第 37 集（1998）に準拠した。
- 11 資料の鑑定及び同定並びに分析については、次の方々に依頼した。

火山灰及び須恵器の蛍光 X 線分析	奈良教育大学教授	三 辻 利 一
放射性炭素年代測定	八戸工業大学教授	村 中 健
石器の石質鑑定	青森県総合学校教育センター指導専事	工 藤 一 彌
- 12 本書に掲載した地形図（遺跡位置図）は、青森市遺跡地図を使用した。
- 13 本文及び図表中での略称、表現方法、スクリーンーン等については凡例によって使用した。
- 14 引用・参考文献は、依頼原稿を除いて巻末に収めた。文中に引用した文献は原則として編著者名、発行西暦年で示した。

- 15 出土遺物及び実測図並びに写真資料は、現在、青森市教育委員会で保管している。
- 16 発掘調査及び報告書の作成に当たり、次の諸機関並びに多くの方々からご指導、ご教示、ご助言を賜った（順不同、敬称略）。

青森県教育委員会文化課、青森県埋蔵文化財調査センター、八戸市教育委員会文化課、八戸市博物館、三沢市歴史民俗資料館、深浦町教育委員会、鯉ヶ沢町教育委員会

三浦圭介、中嶋友文、笹森一朗、宇部則保、長尾正義、桜田 隆、成田滋彦、白鳥文雄、神 康夫、工藤清泰、桜井清彦、葛西 勲、高橋 潤、福田友之、藤沼邦彦、岡村道雄、畠山 昇、木村 高、田中寿明、瀬川 滋、工藤竹久、三宅徹也、木村鐵次郎、相馬信吉、市川金丸、松谷泰英、藤沢敦、小島芳孝、工藤 肇、太田原 潤、工藤 大、高藤 淳

凡 例

1 本報告書で使用する略称、表現方法、スクリーン・トーンは次の通りである。

(1) アルファベット

P 土器 S 石器 LB ロ-ムブロック B Tm 白頭山・苫小牧火山灰
To a 十和田a火山灰 P1 ビット番号1 SP セクションポイント

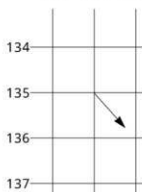
(2) 略 称

1 J H 縄文1号竪穴式住居跡、1 H 平安1号竪穴式住居跡、1円溝 1号円形周溝、
1土 1号土坑、1焼 1号焼土状遺構、1焼ピ 1号焼成ビット、1T 1号溝状ビット、1
溝 1号溝状遺構、1道 1号道路状遺構

文中や図版のキャプションなどで「竪穴式住居跡」の「竪穴式」を省略した箇所もある。

(3) グリッドの呼称

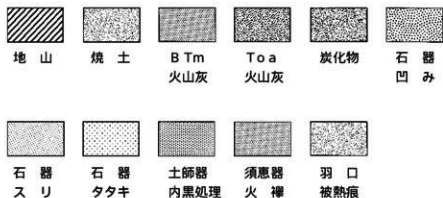
MA MB MC



(例：MB 135グリッド、北に向かって北西隅がグリッド名)



(4) 実測図に使用したスクリーン・トーン



目 次

巻首図版

序

例 言

凡 例

目 次

図版目次

写真目次

第 1 章 調査の概要	1
第 1 節 調査に至る経過	1
第 2 節 調査要項	1
第 3 節 調査方法	3
第 4 節 調査経過	3
第 2 章 遺跡の環境	7
第 1 節 遺跡の位置と調査抄録	7
第 2 節 周辺の遺跡	7
第 3 章 検出遺構と出土遺物	12
第 1 節 縄文時代の遺構と出土遺物	12
1 竪穴式住居跡	12
2 土 坑	16
3 溝状ピット	24
第 2 節 平安時代の遺構と出土遺物	34
1 竪穴式住居跡	34
2 円形周溝	127
3 土 坑	157
4 焼成ピット	175
5 焼土状遺構	184
6 柱穴状ピット群	189
7 道路状遺構	189
8 溝状遺構	191
9 その他の遺構	195
第 3 節 遺構外出土の遺物	197
1 縄文時代の遺物	197
(1) 土器 石器 土製品	197

2 平安時代の遺物	197
(1) 土師器	197
(2) 須恵器	200
(3) その他の遺物	203
第 4 章 自然科学的分析	204
第 1 節 新町野遺跡出土火山灰の蛍光 X 線分析	204
第 2 節 新町野遺跡出土須恵器の蛍光 X 線分析	207
第 3 節 放射性炭素年代測定結果について	212
第 5 章 調査の成果とまとめ	213
第 1 節 縄文時代の遺構について	213
第 2 節 平安時代の竪穴式住居跡	213
第 3 節 焼成ビット・土坑・焼土状遺構	219
第 4 節 円形周溝について	220
第 5 節 ま と め	234
引用参考文献	236
写真図版	239
報告書抄録	310

図 版 目 次

第 1 図	グリッド・遺構配置図	5-6	第 44 図	7 号住居跡 (2)	64
第 2 図	本遺跡の位置と周辺の遺跡	8	第 45 図	7 号住居跡出土遺物	65
第 3 図	縄文時代 1 号住居跡	13	第 46 図	8 号住居跡 (1)	66
第 4 図	縄文時代 1 号住居跡出土遺物 (1)	13	第 47 図	8 号住居跡 (2)	67
第 5 図	縄文時代 1 号住居跡出土遺物 (2)	14	第 48 図	8 号住居跡出土遺物 (1)	68
第 6 図	縄文時代 2 号住居跡	15	第 49 図	8 号住居跡出土遺物 (2)	69
第 7 図	縄文時代 2 号住居跡出土遺物	16	第 50 図	8 号住居跡出土遺物 (3)	70
第 8 図	縄文時代土坑 (1)	17	第 51 図	9 号住居跡 (1)	71
第 9 図	縄文時代土坑 (2)	21	第 52 図	9 号住居跡 (2)	72
第 10 図	縄文時代土坑 (3)	22	第 53 図	9 号住居跡出土遺物	72
第 11 図	縄文時代土坑 (4)	23	第 54 図	10 号住居跡 (1)	73
第 12 図	溝状ピット (1)	27	第 55 図	10 号住居跡 (2)	74
第 13 図	溝状ピット (2)	28	第 56 図	10 号住居跡出土遺物 (1)	75
第 14 図	溝状ピット (3)	30	第 57 図	10 号住居跡出土遺物 (2)	76
第 15 図	溝状ピット (4)	32	第 58 図	10 号住居跡出土遺物 (3)	76
第 16 図	溝状ピット出土遺物	32	第 59 図	11 号住居跡 (1)	77
第 17 図	平安時代 1 号住居跡	35	第 60 図	11 号住居跡 (2)	78
第 18 図	平安時代 1 号住居跡 (2)	36	第 61 図	11 号住居跡出土遺物	79
第 19 図	平安時代 1 号住居跡出土遺物 (1)	37	第 62 図	12 号住居跡	80
第 20 図	平安時代 1 号住居跡出土遺物 (2)	38	第 63 図	12 号住居跡出土遺物	80
第 21 図	平安時代 1 号住居跡出土遺物 (3)	39	第 64 図	13 号住居跡 (1)	81
第 22 図	平安時代 1 号住居跡出土遺物 (4)	40	第 65 図	13 号住居跡 (2)	82
第 23 図	2 号住居跡 (1)	42	第 66 図	13 号住居跡出土遺物	83
第 24 図	2 号住居跡 (2)	43	第 67 図	14 号住居跡 (1)	84
第 25 図	2 号住居跡出土遺物 (1)	44	第 68 図	14 号住居跡 (2)	85
第 26 図	2 号住居跡出土遺物 (2)	45	第 69 図	14 号住居跡出土遺物 (1)	85
第 27 図	3 号住居跡 (1)	46	第 70 図	14 号住居跡出土遺物 (2)	86
第 28 図	3 号住居跡 (2)	47	第 71 図	15 号住居跡	87
第 29 図	3 号住居跡出土遺物 (1)	47	第 72 図	15 号住居跡出土遺物	88
第 30 図	3 号住居跡出土遺物 (2)	48	第 73 図	16 号住居跡 (1)	89
第 31 図	3 号住居跡出土遺物 (3)	49	第 74 図	16 号住居跡 (2)	90
第 32 図	4 号住居跡	50	第 75 図	16 号住居跡出土遺物 (1)	91
第 33 図	4 号住居跡出土遺物 (1)	51	第 76 図	16 号住居跡出土遺物 (2)	92
第 34 図	4 号住居跡出土遺物 (2)	52	第 77 図	17 号住居跡 (1)	93
第 35 図	5 号住居跡 (1)	54-55	第 78 図	17 号住居跡 (2)	94
第 36 図	5 号住居跡 (2)	56	第 79 図	17 号住居跡出土遺物 (1)	94
第 37 図	5 号住居跡出土遺物 (1)	57	第 80 図	17 号住居跡出土遺物 (2)	95
第 38 図	5 号住居跡出土遺物 (2)	58	第 81 図	17 号住居跡出土遺物 (3)	96
第 39 図	5 号住居跡出土遺物 (3)	59	第 82 図	18 号住居跡	97
第 40 図	6 号住居跡 (1)	60	第 83 図	18 号住居跡出土遺物 (1)	98
第 41 図	6 号住居跡 (2)	61	第 84 図	18 号住居跡出土遺物 (2)	99
第 42 図	6 号住居跡出土遺物	62	第 85 図	19 号住居跡 (1)	100
第 43 図	7 号住居跡 (1)	63	第 86 図	19 号住居跡 (2)	101

第 87 図	19号住居跡出土遺物 (1)	102	第 132 図	7号円形周溝出土遺物 (4)	152
第 88 図	19号住居跡出土遺物 (2)	103	第 133 図	8号円形周溝	153
第 89 図	19号住居跡出土遺物 (3)	104	第 134 図	8号円形周溝出土遺物	154
第 90 図	20号住居跡 (1)	105	第 135 図	9号円形周溝	155
第 91 図	20号住居跡 (2)	106	第 136 図	9号円形周溝出土遺物	155
第 92 図	20号住居跡出土遺物 (1)	107	第 137 図	10号円形周溝	156
第 93 図	20号住居跡出土遺物 (2)	108	第 138 図	10号円形周溝出土遺物	157
第 94 図	21号住居跡 (1)	110	第 139 図	平安時代土坑 (1)	159
第 95 図	21号住居跡 (2)	111	第 140 図	平安時代土坑出土遺物 (1)	160
第 96 図	21号住居跡出土遺物 (1)	112	第 141 図	平安時代土坑 (2)	163
第 97 図	21号住居跡出土遺物 (2)	112	第 142 図	平安時代土坑出土遺物 (2)	164
第 98 図	21号住居跡出土遺物 (3)	113	第 143 図	平安時代土坑 (3)	167
第 99 図	22号住居跡 (1)	114	第 144 図	平安時代土坑出土遺物 (3)	168
第 100 図	22号住居跡 (2)	115	第 145 図	平安時代土坑 (4)	171
第 101 図	22号住居跡出土遺物	116	第 146 図	平安時代土坑出土遺物 (4)	172
第 102 図	23号住居跡	117	第 147 図	平安時代土坑 (5)	172
第 103 図	23号住居跡出土遺物	118	第 148 図	平安時代土坑 (6)	174
第 104 図	24号住居跡 (1)	120	第 149 図	焼成ピット (1)	176
第 105 図	24号住居跡 (2)	121	第 150 図	焼成ピット (2)	179
第 106 図	24号住居跡出土遺物	121	第 151 図	焼成ピット (3)	181
第 107 図	25号住居跡 (1)	122	第 152 図	焼成ピット出土遺物	183
第 108 図	25号住居跡 (2)	123	第 153 図	焼土状遺構 (1)	185
第 109 図	25号住居跡出土遺物 (1)	123	第 154 図	焼土状遺構 (2)・柱穴状ピット群	186
第 110 図	25号住居跡出土遺物 (2)	124	第 155 図	焼土状遺構出土遺物 (1)	187
第 111 図	円形周溝配置図	125・126	第 156 図	焼土状遺構出土遺物 (2)	188
第 112 図	1号・2号円形周溝、4号・4号 B土坑	129・130	第 157 図	道路状遺構・溝状遺構 (1)	190
第 113 図	1号円形周溝出土遺物	131	第 158 図	溝状遺構 (2)	193
第 114 図	2号円形周溝 4号土坑出土遺物	133	第 159 図	溝状遺構 (3)	194
第 115 図	3号円形周溝	135	第 160 図	竪穴遺構	195
第 116 図	3号円形周溝出土遺物 (1)	136	第 161 図	竪穴遺構出土遺物	196
第 117 図	3号円形周溝出土遺物 (2)	136	第 162 図	遺構外出土遺物 (1)	198
第 118 図	4号円形周溝	137	第 163 図	遺構外出土遺物 (2)	199
第 119 図	4号円形周溝出土遺物	137	第 164 図	遺構外出土遺物 (3)	200
第 120 図	5号・5号 B円形周溝	139・140	第 165 図	遺構外出土遺物 (4)	201
第 121 図	5号・5号 B円形周溝出土遺物 (1)	142	第 166 図	遺構外出土遺物 (5)	202
第 122 図	5号・5号 B円形周溝出土遺物 (2)	142	第 167 図	遺構外出土遺物 (6)	203
第 123 図	5号・5号 B円形周溝出土遺物 (3)	143	第 168 図	新町野遺跡出土土灰の蛍光 X線分析	206
第 124 図	11号・11号 B土坑出土遺物	144	第 169 図	新町野遺跡出土須恵器の蛍光 X線分析 (1)	210
第 125 図	6号・7号円形周溝	145・146	第 170 図	新町野遺跡出土須恵器の蛍光 X線分析 (2)	211
第 126 図	6号円形周溝出土遺物 (1)	147	第 171 図	住居跡の規模・床面積	216
第 127 図	6号円形周溝出土遺物 (2)	148	第 172 図	カマド主軸方位	217
第 128 図	6号円形周溝出土遺物 (3)	149	第 173 図	円形周溝配置図	222
第 129 図	7号円形周溝出土遺物 (1)	150	第 174 図	円形周溝・関連土坑出土土器集成図	228
第 130 図	7号円形周溝出土遺物 (2)	151			
第 131 図	7号円形周溝出土遺物 (3)	151			

写真図版目次

写真 1	縄文時代竪穴式住居跡・土坑 (1)	239	写真 44	柱穴状ビット群・道路状遺構・溝状遺構 (1)	282
写真 2	縄文時代土坑 (2)	240	写真 45	溝状遺構 (2)	283
写真 3	縄文時代土坑 (3)	241	写真 46	溝状遺構 (3) 竪穴遺構	284
写真 4	縄文時代土坑 (4)	242	写真 47	遺構内出土遺物 (1)	285
写真 5	縄文時代土坑 (5) 溝状ビット (1)	243	写真 48	遺構内出土遺物 (2)	286
写真 6	溝状ビット (2)	244	写真 49	遺構内出土遺物 (3)	287
写真 7	溝状ビット (3)	245	写真 50	遺構内出土遺物 (4)	288
写真 8	溝状ビット (4)	246	写真 51	遺構内出土遺物 (5)	289
写真 9	平安時代竪穴式住居跡 (1)	247	写真 52	遺構内出土遺物 (6)	290
写真 10	平安時代竪穴式住居跡 (2)	248	写真 53	遺構内出土遺物 (7)	291
写真 11	平安時代竪穴式住居跡 (3)	249	写真 54	遺構内出土遺物 (8)	292
写真 12	平安時代竪穴式住居跡 (4)	250	写真 55	遺構内出土遺物 (9)	293
写真 13	平安時代竪穴式住居跡 (5)	251	写真 56	遺構内出土遺物 (10)	294
写真 14	平安時代竪穴式住居跡 (6)	252	写真 57	遺構内出土遺物 (11)	295
写真 15	平安時代竪穴式住居跡 (7)	253	写真 58	遺構内出土遺物 (12)	296
写真 16	平安時代竪穴式住居跡 (8)	254	写真 59	遺構内出土遺物 (13)	297
写真 17	平安時代竪穴式住居跡 (9)	255	写真 60	遺構内出土遺物 (14)	298
写真 18	平安時代竪穴式住居跡 (10)	256	写真 61	遺構内出土遺物 (15)	299
写真 19	平安時代竪穴式住居跡 (11)	257	写真 62	遺構内出土遺物 (16)	300
写真 20	平安時代竪穴式住居跡 (12)	258	写真 63	遺構内出土遺物 (17)	301
写真 21	平安時代竪穴式住居跡 (13) 円形周溝 (1)	259	写真 64	遺構内出土遺物 (18)	302
写真 22	円形周溝 (2)	260	写真 65	遺構内出土遺物 (19)	303
写真 23	円形周溝 (3)	261	写真 66	遺構内出土遺物 (20)	304
写真 24	円形周溝 (4)	262	写真 67	遺構内出土遺物 (21)	305
写真 25	円形周溝 (5)	263	写真 68	遺構内出土遺物 (22)	306
写真 26	円形周溝 (6)	264	写真 69	遺構内出土遺物 (23)	307
写真 27	円形周溝 (7)	265	写真 70	遺構内出土遺物 (24) 遺構外出土遺物 (1)	308
写真 28	円形周溝 (8)	266	写真 71	遺構外出土遺物 (2)	309
写真 29	円形周溝 (9)	267			
写真 30	円形周溝 (10)	268			
写真 31	平安時代土坑 (1)	269			
写真 32	平安時代土坑 (2)	270			
写真 33	平安時代土坑 (3)	271			
写真 34	平安時代土坑 (4)	272			
写真 35	平安時代土坑 (5)	273			
写真 36	平安時代土坑 (6)	274			
写真 37	平安時代土坑 (7)	275			
写真 38	焼成ビット (1)	276			
写真 39	焼成ビット (2)	277			
写真 40	焼成ビット (3)	278			
写真 41	焼成ビット (4)	279			
写真 42	焼成ビット (5) 焼土状遺構 (1)	280			
写真 43	焼土状遺構 (2)	281			

第 章 調査の概要

第1節 調査に至る経過

新町野遺跡は、縄文時代と平安時代の遺跡として以前から知られていたが、昭和54年8月22日に青森市内では16番目の遺跡として登録された。

その後、青森県（商工労働部工業振興課）は産業構造の高度化並びに人口定住の促進を図ることを目的とした青森テクノポリス開発を計画し、産業振興の拠点として青森市野木・合子沢地区が選定され、地域振興整備公団と県の共同事業による青森中核工業団地造成予定地となった。

これに伴い平成5年度に青森県教育委員会が県内遺跡詳細分布調査を実施して本遺跡の範囲が拡大された。

青森中核工業団地の造成は平成7年度から予定されていたため、開発予定者である地域振興整備公団と県工業振興課及び県教育庁文化課との間でその対策について協議され、その結果、平成7年度から青森県埋蔵文化財調査センターが本遺跡及び野木遺跡の試掘調査を実施することになった。

試掘調査の結果、調査対象面積は本遺跡と野木遺跡を合算すると約17万5千平方メートルになることが判明し、翌8年度から青森中核工業団地の造成において最優先部分について事前の発掘調査が必要となり、県埋蔵文化財調査センターが調査を担当して実施された。

当初、埋蔵文化財発掘調査は平成11年度終了予定であったが、平成9年4月に地域振興整備公団並びに県工業振興課の要望により平成10年度終了に繰り上げ変更となり、この協議の段階で青森市教育委員会が協議に加わり、野木遺跡の北側幹線道路部分の発掘調査を分担することになった。

平成9年度は新町野遺跡の中核工業団地造成部分は県埋蔵文化財調査センターが実施し、同遺跡の市道新町野・野木線道路改良事業に伴う発掘調査は当教育委員会が担当した。

平成10年度は、青森中核工業団地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の現地における最終年度ということと、青森市教育委員会では新町野遺跡と野木遺跡について発掘調査を実施した。

第2節 調査要項

- | | | |
|---|--------------------|--|
| 1 | 調査目的 | 地域振興整備公団が計画している青森中核工業団地造成事業に先立ち、予定地内に所在する埋蔵文化財包蔵地の発掘調査を実施し、遺跡の記録保存をおこない、地域社会の文化財の活用に資する。 |
| 2 | 遺跡名及び所在地 | 新町野遺跡（しんまちの）（青森県遺跡番号01161）
青森県青森市大字合子沢字松森ほか |
| 3 | 事業予定期間 | 平成9年度～平成12年度（継続事業） |
| 4 | 調査実施期間
（発掘調査期間） | 平成10年4月1日～平成11年3月31日
当初、平成10年5月11日～平成10年11月27日
変更後、平成10年7月1日～平成10年11月20日 |
| 5 | 調査予定面積 | 23,800平方メートル |

6	調査委託者	地域振興整備公団	
7	調査受託者	青森市	
8	調査担当機関	青森市教育委員会生涯学習部社会教育課埋蔵文化財対策室	
9	調査指導機関	青森県教育庁文化課	
10	調査協力機関	青森県商工労働部工業振興課 青森県埋蔵文化財調査センター 青森市企業誘致推進室	
11	予算措置	調査委託者側で措置	
12	調査体制		
	調査指導員	村越 潔	青森大学考古学研究所所長兼教授 (考古学)
	調査員	高島 成侑	八戸大学教授 (建築史学)
	"	三辻 利一	奈良教育大学教授 (分析化学)
	"	赤沼 英男	岩手県立博物館主任専門学芸調査員 (文化財科学)
	"	工藤 一彌	県総合学校教育センター指導主事 (地質学)
	埋蔵文化財調査員	北林八洲晴	元県埋蔵文化財調査センター副参事 (調査担当)
	調査協力員	白鳥 弘明	南部四区連合町会長
	調査事務局	青森市教育委員会	
		教 育 長	池 田 敬
		生涯学習部長	斎 藤 勝
		社会教育課長	間 山 義 弘
		埋蔵文化財対策室長	遠 藤 正 夫
		室 長 補 佐	福 士 敦
		埋蔵文化財係長	石 岡 義 文
		主 事	田 澤 淳 逸
			小 野 貴 之
			木 村 淳 一 (調査担当)
			児 玉 大 成
			沼宮内 陽一郎
			設 案 政 健 (調査担当)

第3節 調査方法

1 調査区の設定

調査区（グリッド）の単位は、4m 4mとした。調査区の基準線（20m 20m）は、野木遺跡と共通できるように国土座標の軸に合わせて設定されていたものを踏襲した。レベル原点（ベンチマーク・BM）は、打設委託して新たに設置したものをを用いた。調査区は、北から南へ算用数字、西から東へアルファベットを配したものを組み合わせて使用した。グリッドの呼称は、北に向かって北西隅に位置する杭から採用した（凡例参照）。

2 発掘調査の方法

調査対象区域の表土の多くは表土処理されて、伐採された立ち木の根元だけが残っているところが多い状況であったので、発掘調査の方法は次のようにした。

- (1) 遺構確認を先行させて、遺構の落ち込みを確認して遺構数の全体を早く把握する。
- (2) 遺構の精査は、四分法、二分法で行い、土層観察は、火山灰と切り合いに留意する。
縮尺は、10分の1、20分の1、40分の1など必要に応じて用いる。
- (3) 遺構、遺物の実測は、簡易測り方、平板測量、写真測量を併用する。
- (4) 遺物の取り上げは、グリッド単位と層位ごとに行い、必要に応じて平面図を作成してレベルを記録する。
- (5) 土層の観察と注記には、『標準土色帖』を参照しながら行う。土層の記号は、基本土層にはローマ数字（Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ）遺構内堆積土には算用数字（1、2、3）を用いる。
- (6) 遺構の番号は、種類毎に確認順、調査順に通し番号を付ける。精査の結果、遺構でない判断された場合は欠番とする。
- (7) 写真撮影は、必要に応じて適宜行うこととし、35mmモノクローム、カラーリバーサルフィルムを同じ駒数撮る。

第4節 調査経過

7月1日 新町野遺跡発掘調査開始。調査環境の整備後、調査区域の東端寄り付近にある円形周溝群付近の抜根、粗掘り、遺構確認などの作業に入る。13日 1号、3号竪穴式住居跡の精査を開始する。14日午後 荒川市民センターで、青森市教育委員会が担当する遺跡の合同発掘調査打合せ会議が開催される。21日奈良文研の松井氏、秋田埋文の桜田氏、五十嵐氏、県埋文の木村課長、成田課長来跡。月末までに平安住居跡1軒、円形周溝10基などを確認、精査に入る。

8月4日 札幌国際大学の吉崎教授、5日 市川青森市史編集委員会考古部会長、福田青森市史執筆編集委員来跡。円形周溝周辺の粗掘りは一段落する。精査は続行中。12～17日作業員はお盆休み。18日村越調査指導員来跡。24日夜、埋文対策室の調査打合せ会議あり。新町野遺跡からは緑地と調査区域の境界線を明示して欲しい旨（公団）に要望する。

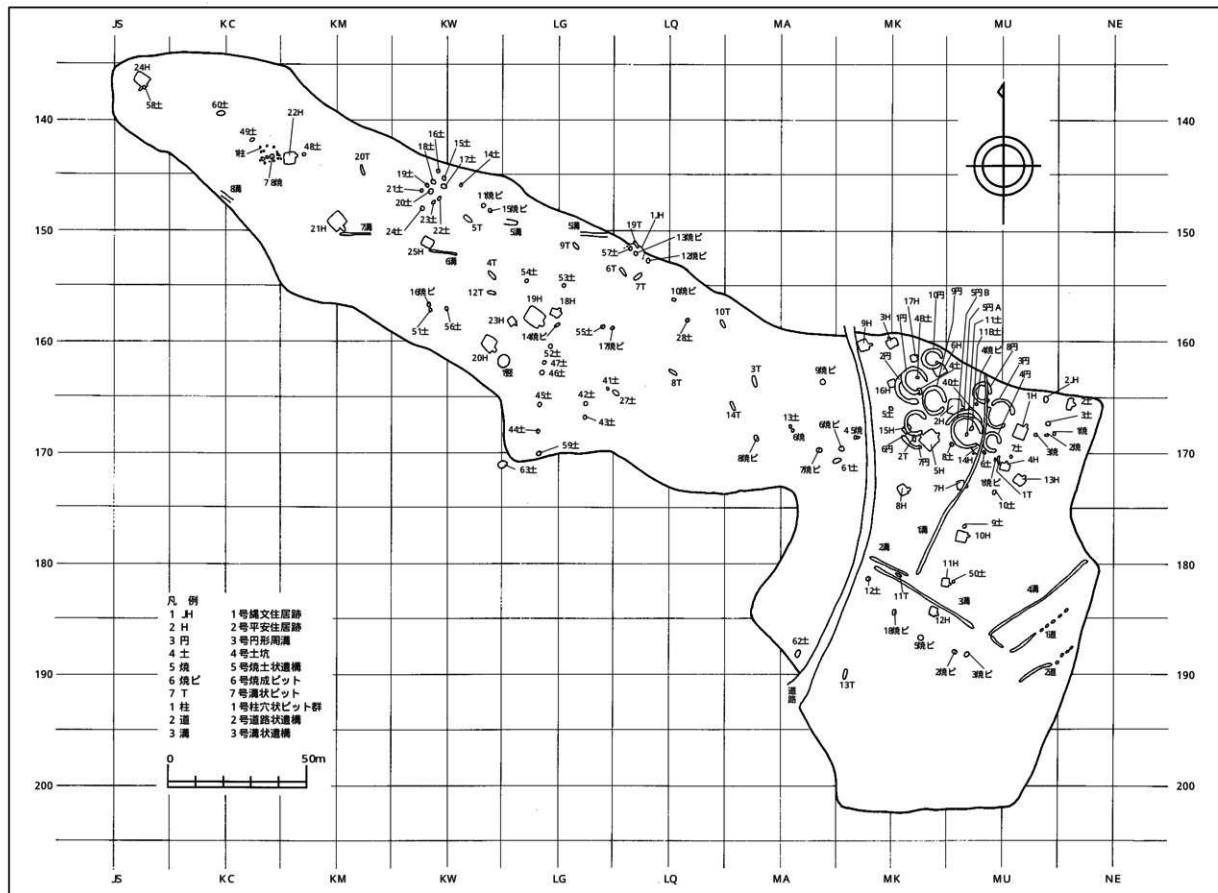
28日現在、平安住居跡16軒、円形周溝10基、土坑13基、焼成ピット10基、溝状ピット2基、溝状遺構4条、道路状遺構2条を確認、精査中。

9月1日 遠藤室長と調査担当者の調査打合せを現地で行う。夏日は初旬も続く。調査区域の西端寄り
りて2号平安住居跡などを確認する。平成8年度に作成された遺構分布図記載の遺構は、ほぼ再確認
できたが、まだ残っているらしい。14日 今後の調査工程の打合せを現場で行う。16日 5号台風来る。
被害軽微。21日 今後の調査工程などの打合せ会議を整理室で開く。24日 作業員の増員ある。斉藤
生涯学習部長、間山社会教育課長が現場視察。29日 市中教社会科部会の先生方40名が遺跡巡検。30
日 本遺跡の調査打合せを行う。

10月5日 1、2号円形周溝の盛土を地山まで削平する作業を開始する。7日 東北町の古屋敷、
田中両氏来跡。9日 青森市史編纂古代部会委員の一行来跡。17日(土)新町野・野木両遺跡で県、
市両教育委員会による合同現地説明会が開催される。見学者は100人以上ある。21日 野木遺跡から
応援チーム到着。28日 文化庁小林克調査官来跡。30日 作業員の一部雇用満了となる。

11月6日 岩木山初冠雪。2号平安住居跡確認。野木遺跡の調査完了に伴い、全面的な応援を受け
る。10日から空撮の準備に入るが悪天候が続く。12日 積雪。遺構内外を除雪後調査開始。遠藤室長
らと今後の調査と撤収について打合せ。調査最終日を今月20日に変更する。13日 10時30分空撮準
備完了。12時空撮完了。17日 遺構の実測を継続しながら、一方では現場撤収の準備を開始する。青
森中核工業団地整備促進対策特別委員会のメンバーによる現場視察あり。19日 積雪30～40cm。除雪
後調査及び撤収の準備。溝状遺構と道路状遺構の実測を残すだけとなる。20日 調査最終日。13時30
分実測終了。15時調査機材運搬用トラックの最終便を送り出して撤収作業を終了。現場作業終了の挨拶
後、解散する。

11月24日から報告書作成の整理作業に入る。



第1図 グリッド・遺構配置図

第 章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置と調査抄録

新町野遺跡は、県都青森市の市街地から南へ約6kmのところに広がる低丘陵地に位置して、その標高は約20～40mである。青森平野の前方（北）には、青い陸奥（青森）湾を望むことができる。また、八甲田山からのびる火山性の低丘陵地は、荒川の支流である牛館川と合子沢川に挟まれている。本遺跡の南方約1kmには平安時代の巨大集落跡である野木遺跡が所在している。

新町野遺跡は、昭和54年度に青森市では161番目の遺跡として登録された。以来、分布、試掘、発掘調査が行われてきた。次に、本遺跡の調査についてメモ（備忘録）しておく。

【平成5年度】青森県教育委員会による遺跡詳細分布調査によって遺跡の範囲が拡張された（県165集：1994）。

【平成7年度】県埋蔵文化財調査センターによる試掘調査によって平安時代の竪穴式住居跡1軒、焼成土坑5基、竪穴遺構1基、溝状遺構4条などが検出された。

【平成8年度】青森市教育委員会による牛館川防災調整池掘削工事に伴う試掘調査が実施された。この調査によって縄文時代の竪穴式住居跡6軒、平安時代の竪穴式住居跡8軒、土坑32基、などが確認された（市33集：1997）。この結果に基づいて平成10年度に県埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施することになった。

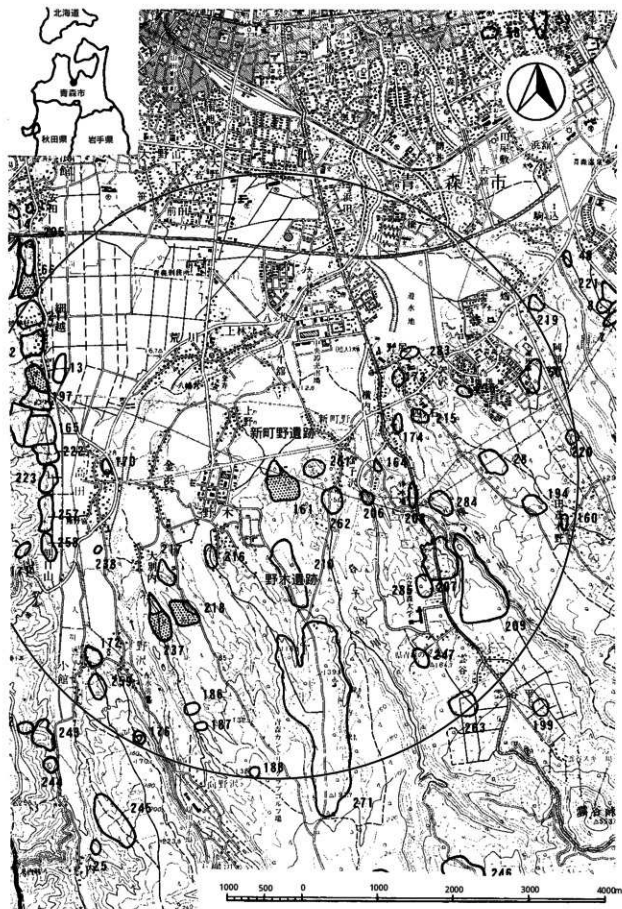
同年度 県埋蔵文化財調査センターでは、本遺跡の青森中核工業整備事業に伴う発掘調査を実施した（県239集：1998）。

【平成9年度】青森市教育委員会による市道新町野・野木線改良事業に係る発掘調査が実施される。縄文時代の竪穴式住居跡1軒、土坑24基、平安時代の竪穴式住居跡2軒、溝状遺構3条などが記録保存された（市37集：1998）。同年（1997年）県埋蔵文化財調査センターでは、本遺跡の青森中核工業団地整備事業に伴う発掘調査を継続した。平成8、9年度に検出された遺構は、縄文時代の竪穴式住居跡1軒、溝状ピット1基、平安時代の竪穴式住居跡2軒、土坑25基、竪穴遺構2基、溝状（道路状を含む）遺構11条である（県239集：1998）。

【平成10年度】新町野遺跡では事業別に調査区域を分けて2箇所で行われた。一つは本報告書に記載する発掘調査であり、もう一つは県埋蔵文化財調査センターによって実施された青森中核工業団地遊水池建設事業に伴う発掘調査である。同一遺跡を別々に調査をして報告書が別々に刊行されるので、参考までに遺構の概要などを引用しておく。縄文時代前期末葉頃の竪穴式住居跡7軒（大型4軒を含む）、埋設土器遺構3基、土坑56基、断面形がフラスコ状の土坑5基、陥し穴と考えられる溝状ピット9基、平安時代の竪穴式住居跡29軒、精錬炉2基、焼成ピット5基、溝跡2条などである（県埋文『平成10年度 青森県埋蔵文化財発掘調査報告会』発表要旨：1998）。

第2節 周辺の遺跡

平成11年3月末現在、青森市内の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）は、297箇所登録されている。時代的



第 2 図 本遺跡の位置と周辺の遺跡

に単純な遺跡もあるが複合した遺跡もある。これらの遺跡から平安時代の遺跡と平安時代を含む遺跡を抽出すると市内にある遺跡の約50%に近い147箇所が平安時代と掛かり合っている。

本遺跡の周辺にも多くの遺跡が知られているが、周辺の遺跡の範囲は何kmまでなのか、問題がないわけではないが、ここでは半径4kmにしたところ、45箇所が該当した。45箇所中の遺跡の中で発掘調査などが行われて、遺跡に関する情報が得られている、あるいは得られる予定を含めても13箇所だけである。この中で注目される遺跡は、平安時代では野木遺跡、縄文時代では小牧野遺跡であろう。周辺の遺跡の概要と文献等は、表1にまとめた。

表1 周辺の遺跡

番号	遺跡	遺跡名	所在地	時代(時期)	種別	文献番号
1	13	細越	細越字種元	縄文(晩) 平安	散布、水路	1
2	28	四ツ石	四ツ石字里見	縄文(中・後)	散布地	2~5
3	50	阿倍野	田茂木野字阿倍野	縄文、平安	集落	6~8
4	161	新町野	新町野字菅谷 合子沢字松森	縄文、平安	集落	9~12
5	164	横内(1)	合子沢字山崎	縄文(前)	散布地	13, 14
6	165	朝日山(1)	高田字朝日山	縄文(晩) 平安	墓地・集落	15~17
7	170	高田城跡	高田字朝日山	中世	館跡	18
8	171	高田蝦夷館	高田字朝日山	中世	館跡	18
9	173	野尻館	野尻字野田	中世	館跡	18
10	174	横内城跡	横内字亀井	中世	館跡	18
11	176	小牧野	野沢字小牧野	縄文(後) 弥生・平安	環状列石	19~23
12	186	山吹(1)	大別内字山吹	縄文(前~後)	散布地	24
13	187	山吹(2)	大別内字山吹	縄文	散布地	
14	188	山吹(3)	大別内字山吹	縄文	散布地	
15	194	四ツ石	四ツ石字里見	縄文(中・後)	散布地	
16	197	朝日山(2)	高田字朝日山	縄文、平安	集落	
17	198	朝日山(3)	高田字朝日山	縄文、平安	集落	25, 26
18	206	横内(2)	合子沢字山崎	縄文(前・中)	包蔵地	13, 27
19	207	桜藪(1)	横内字桜藪	縄文(前)	包蔵地	28~30
20	208	桜藪(2)	横内字桜藪	縄文(中)	集落	31
21	209	鏡山	横内字鏡山	縄文	散布地	
22	210	野木	野木字山口 野木字野尻 合子沢字松森	縄文、平安 平安	集落	32, 33 11, 12
23	211	栄山(1)	細越字栄山		散布地	
24	212	栄山(2)	細越、高田字朝日山	縄文、平安	散布地	
25	215	四ツ石(3)	四ツ石字里見	縄文(草)	散布地	27
26	216	野木沢田	野木字沢田	平安	散布地	39
27	217	葛野(1)	大別内字葛野	縄文	散布地	39

番号	副番号	遺跡名	所在地	時代(時期)	種別	文献番号
28	218	葛野(2)	大別内字葛野	縄文、平安	集落	36、37
29	220	阿倍野(3)	幸畑字阿倍野	平安	散布地	
30	222	朝日山(4)	高田字朝日山	平安	散布地	27
31	223	朝日山(5)	高田字朝日山	平安	散布地	27
32	236	大矢沢里見(1)	大矢沢字里見	縄文	散布地	38
33	237	山吹(4)	大別内字山吹	縄文、平安	散布地	38、39
34	238	川瀬(1)	高田字川瀬	平安	散布地	38
35	246	合子沢山崎(1)	合子沢字山崎	縄文	散布地	
36	247	雲谷山崎(1)	雲谷字山崎	縄文、平安	散布地	
37	257	朝日山(6)	高田字朝日山	平安	散布地	
38	258	朝日山(7)	高田字朝日山	平安	散布地	
39	259	桜苅(2)	小館字桜苅	縄文	散布地	
40	261	合子沢松森(1)	合子沢字松森	縄文	散布地	
41	262	合子沢松森(2)	合子沢字松森	平安	散布地	
42	263	雲谷山吹(2)	雲谷字山吹	縄文	散布地	
43	271	山口	合子沢字松森 野木字山口 小畑沢字小杉	縄文(前・後)	散布地	
44	283	野尻野田(1)	野尻字野田	平安	散布地	40
45	284	横内猿沢(1)	横内字猿沢	平安	散布地	40
46	285	雲谷山吹(3)	雲谷字山吹	縄文	散布地	40

本遺跡と周辺の遺跡概要に関する文献

番号	編著者	刊行年月	シリーズ	題名(書名)	所収書名	巻号
1	青森県教育委員会	1979	49集	細越遺跡		
2	青森市教育委員会	1965	(2)	四ツ石遺跡調査概報	青森市の文化財	
3	三宅 徹也	1972		四ツ石遺跡出土遺物から(1)	うとう	78
4	成田 滋彦	1982		青森市四ツ石(2)遺跡について	遺址	2
5	葛西 勲	1987		青森市四ツ石遺跡調査報告	燃糸文?	?
6	藤田 亮一	1975		青森市内出土の早期縄文式土器片	うとう	81
7	葛西 勲	1979		青森市阿倍野遺跡出土の縄文時代早期の土器	うとう	85
8	青森市教育委員会	1986	(13)	田茂木野遺跡発掘調査報告書	青森市の埋蔵文化財	
9	青森市教育委員会	1997	33集	新町野遺跡試掘調査報告書	青森市埋蔵文化財調査報告書	
10	青森市教育委員会	1998	37集	新町野遺跡発掘調査報告書	青森市埋蔵文化財調査報告書	
11	青森県教育委員会	1998	239集	新町野遺跡・野木遺跡		

番号	編著者	刊行年月	シリーズ	題名(書名)	所収書名	巻号
12	青森県教育委員会	1999	46集	新町野・野木遺跡発掘調査概報	青森市埋蔵文化財調査報告書	
13	青森市教育委員会	1995	24集	横内遺跡・横内2遺跡発掘調査報告書	青森市埋蔵文化財調査報告書	
14	三宅 徹也	1969		青森県青森市横内遺跡(1)	遮光器2	
15	青森県教育委員会	1984	87集	朝日山遺跡		
16	青森県教育委員会	1993	152集	朝日山遺跡		
17	青森県教育委員会	1994	156集	朝日山遺跡		
18	青森県教育委員会	1983		青森県の中世城館		
19	青森市教育委員会	1993	20集	小牧野遺跡発掘調査概報	青森市埋蔵文化財調査報告書	
20	青森市教育委員会	1996	30集	小牧野遺跡発掘調査報告書	青森市埋蔵文化財調査報告書	
21	青森市教育委員会	1997	35集	小牧野遺跡発掘調査報告書	青森市埋蔵文化財調査報告書	
22	青森市教育委員会	1998	40集	小牧野遺跡発掘調査報告書	青森市埋蔵文化財調査報告書	
23	青森市教育委員会	1999	45集	小牧野遺跡発掘調査報告書	青森市埋蔵文化財調査報告書	
24	青森市教育委員会	1991	16集	山吹1遺跡発掘調査報告書	青森市埋蔵文化財調査報告書	
25	青森県教育委員会	1996	167集	朝日山(3)遺跡		
26	青森県教育委員会	1997	215集	朝日山(3)遺跡		
27	青森市教育委員会	1994	21集	市内遺跡詳細分布調査報告書	青森市埋蔵文化財調査報告書	
28	青森市教育委員会	1996	27集	桜峯1遺跡発掘調査概報	青森市埋蔵文化財調査報告書	
29	青森市教育委員会	1997	32集	桜峯1遺跡発掘調査概報	青森市埋蔵文化財調査報告書	
30	青森市教育委員会	1998	36集	桜峯1遺跡発掘調査概報	青森市埋蔵文化財調査報告書	
31	青森市教育委員会	1995	26集	桜峯2遺跡発掘調査報告書	青森市埋蔵文化財調査報告書	
32	青森市教育委員会	1998	38集	野木遺跡発掘調査報告書	青森市埋蔵文化財調査報告書	
33	青森市教育委員会	1998	41集	野木遺跡発掘調査概報	青森市埋蔵文化財調査報告書	
34	青森県教育委員会	1999	264集	野木遺跡発掘調査報告書		
35	青森市教育委員会	1996	29集	市内遺跡詳細分布調査報告書	青森市埋蔵文化財調査報告書	
36	青森市教育委員会	1997	34集	葛野2遺跡発掘調査報告書	青森市埋蔵文化財調査報告書	
37	青森市教育委員会	1999	44集	葛野2遺跡発掘調査報告書	青森市埋蔵文化財調査報告書	
38	青森市教育委員会	1995	25集	市内遺跡詳細分布調査報告書	青森市埋蔵文化財調査報告書	
39	青森市教育委員会	1996	29集	市内遺跡詳細分布調査報告書	青森市埋蔵文化財調査報告書	
40	青森市教育委員会	1997	31集	市内遺跡詳細分布調査報告書	青森市埋蔵文化財調査報告書	

第 章 検出遺構と出土遺物

検出した遺構で時代を特定できるものは縄文時代と平安時代であるが、ここでは時代を特定する根拠が乏しい遺構も含めて記載することにしたい。

検出した遺構の内訳は、竪穴式住居跡2軒、円形周溝1基（拡張を含む）、土坑47基、焼成ピット18基、焼土状遺構7基、溝状ピット14基、柱穴状ピット13個（1群）、道路状遺構2条、溝状遺構8条である。これらの遺構について、縄文時代と平安時代に区分して記載する。

第 1 節 縄文時代の遺構と出土遺物

縄文時代の検出遺構は、竪穴式住居跡2軒、土坑15基、溝状ピット14基である。

1 竪穴式住居跡

現場で縄文時代の竪穴式住居跡とした遺構は1軒だけであったが、整理作業中に現場で1号土坑とした遺構が竪穴式住居跡であることが判明したのでこれを2号住居跡と改称して報告したい。

1号住居跡（第3～5図、写真1・47）

[位置] LM・LN-151・(152)グリッドに位置している。削平と重複のため遺存状態はよくない。

[重複] 本住居跡は、57号土坑、19号溝状ピット、13号焼成ピットと重複して、これらの遺構に掘り下げられている。

[平面形・規模] 平面プランは、推定径4mほどの楕円形が円形とみられるが、削平と重複のため全体の4分の3ほどが不明である。

[壁・床] 壁、床面ともに地山ローム層を掘り下げて構築されたものである。しかし、壁は削平と重複をまぬがれた北と東側の一部が残存しているだけで、壁高は23～47cmを測る。床面は、標高の高い北側が幅1.5mほどが残っている。残存している床はほぼ平坦である。

[壁溝] 東壁の内側から長さ1m、上端幅10cm、深さ4～14cmほどのものが1条と、これに平行して長さ45cm、深さ3cmほどのものが検出されている。

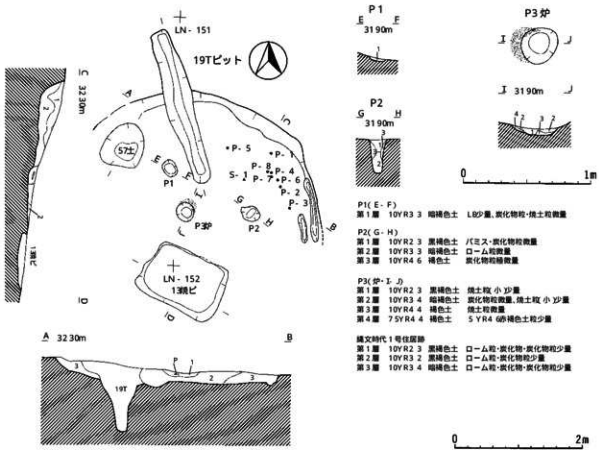
[ピット・柱穴] ピットは、床面から3個検出された。ピットの深さは、P1 8cm、P2 56cm、P3 10cmである。P3は、焼土（地床炉）が形成された後に掘り下げられたピットとみられる。また、P2は、規模、位置から主柱穴の可能性は十分あるが、対応するピットが発見されていない。

[炉] P3と重複している焼土が地床炉であろう。最大径50cm、床面から7cmほど浅く掘りくぼめられた中に径30cmほどの焼土が形成されたものとみられる。

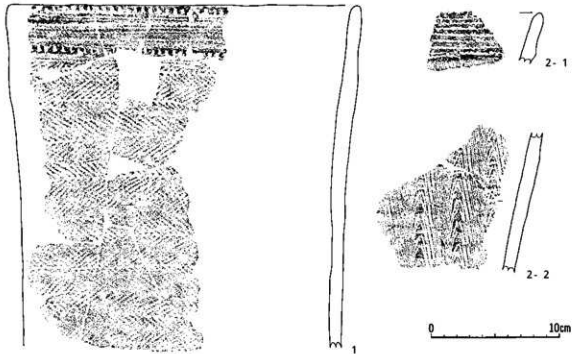
[堆積土] 3層に分けられた。自然堆積したものである。

[遺物] 縄文時代前期末葉～中期初頭の土器、礫石器、剥片などが出土した。

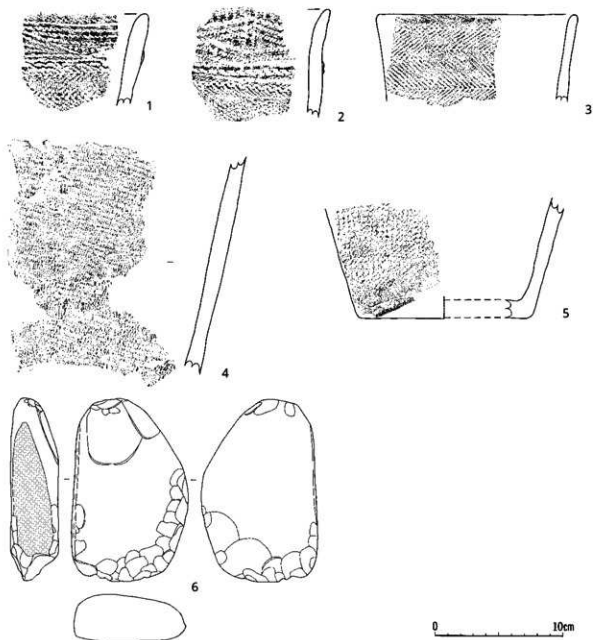
縄文土器は、床面一確認面から数個体分が発見されたが器形の全容を残したものはない。



第3図 縄文時代1号住居跡



第4図 縄文時代1号住居跡出土遺物(1)



第 5 図 縄文時代 1 号住居跡出土遺物 (2)

1 号住居跡出土遺物 1) (2)
図録番号 4 - 5

図録 番号	種別	器種	層位	計測値 (cm)			部位	文様など	時期 分類	備考
				口径	器高	底径				
4	縄文	深鉢	2 層 (284)	274	-	口一前	LR 圧痕、射突、単軸紡糸体第 3 類圧痕、L 圧痕、結束第 3 種	群	円下 d ₁ -円上 d ₂	
2	縄文	深鉢	1 層			口一前	L 圧痕、単軸紡糸体第 1A 類	群	円下 d ₁ -円上 d ₂	
5	縄文	深鉢	1 層			口縁	LR 圧痕、L 圧痕、射突、地帯射突、結束第 3 種	群	円下 d ₁ -円上 d ₂	
3	縄文	深鉢	1 層			口一前	射突、繩帯 L 圧痕、R L 縄文、結束回転文、R L 単軸紡糸体第 3 類	群	円下 d ₁ -円上 d ₂	
2	縄文	深鉢	2 層 (160)			口一前	LR 圧痕、LRR 結束第 3 種	群	円下 d ₁ -円上 d ₂	
4	縄文	深鉢	1 層			胴部	多軸紡糸体	群	円下 d ₁ -円上 d ₂	
5	縄文	深鉢	1 層	97	(170)	底部	LR L 縄文、上 7 底	群	円下 d ₁ -円上 d ₂	

1 号住居跡出土遺物 1) (2)
図録番号 5

図録 番号	分類	出土遺構	層位	計測値				材質	備考
				長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g		
5-4	半円状扁平打製石器	縄文 南住居跡	礎石面	14.7	9.3	3.8	764.0	安山岩	S X 整理番号 11

礫石は、確認面から半円状扁平打製石器が1点出ただけである。剥片は、床面から大小5点出土している。

2号住居跡（第6・7図、写真1・47）

〔位置〕 調査区域の北東端に近いMX - 164 165グリッドに位置している。平成9年度に県埋蔵文化財調査センターが調査した2号縄文住居跡とは同じライン（JN 165）上であって、45mほど離れている。

〔重複〕 認められないが、遺構は全面的に削平されている。

〔平面形・規模〕 楕円形を呈し、長軸は南東 - 北西にある。長径2.6m、短径2.3mを測り、床面積は4.29㎡の規模と考えられる。

〔壁・床〕 壁の高さは、残りのよい北壁で15cmほどである。床面は、削平された部分は不明であるが残存している床は堅く平坦である。壁、床面ともに地山ローム層を掘り下げたものである。

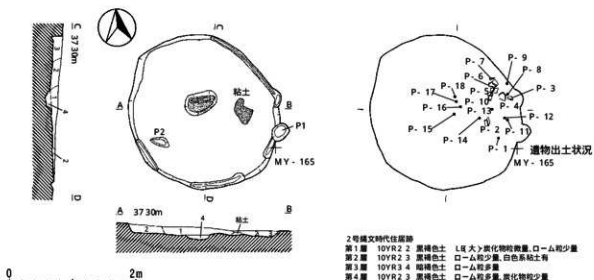
〔壁溝〕 深さ5cm前後の壁溝が断続的に巡っている。

〔ピット・柱穴〕 ピットは、床面から2個検出された。ピットの深さは、P1 37cm、P2 10cmである。対応するピットが不明であるため主柱穴が否か判断としない。

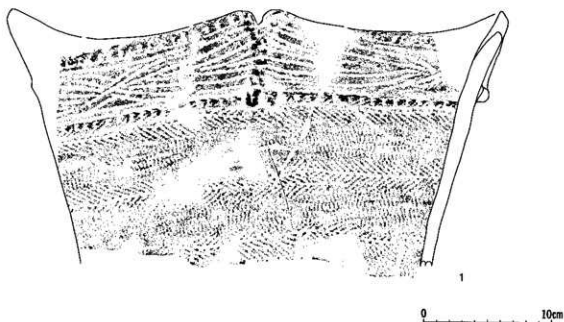
〔炉〕 床面の中央からやや北壁寄りに地床炉が設けられている。地床炉の焼土は楕円形で55×35cmの規模がある。炉の部分は床面から6cmほどくぼんでいるが、炉縁石の抜き取り跡とか判断とした火床面は認められなかった。

〔堆積土〕 4層に区分された。火山灰の分析試料として採取したものは、蛍光X線分析の結果、火山灰ではなく粘土と判定された。堆積土が薄いため自然堆積かどうか判断し難い。

〔遺物〕 床面直上から縄文時代前期末葉～中期初頭（円筒下層d式～上層a式相当）の土器が出土した（第7図）。また、堆積土から稜形土師器の細片が数点確認された。



第6図 縄文時代2号住居跡



第 7 図 縄文時代 2 号住居跡出土遺物

2 号住居跡出土遺物
図録番号 7

図録 番号	種類	素材	部位	計 測 値 (cm)			部位	文 様 など	時期 分類	備 考
				口 径	器 高	底 径				
7-11	織 文	深 鉢	埴輪土	(40D)	(204)	-	口一煎	刺交, RI庄痕, 浅草刺交, LRRI底裏面 種, 多輪縁各体	群	円下d<-円上d式

2 土 坑

現場では縄文時代の土坑としての通し番号は設けなかった。ここでは現場で土坑の 9、12～24、57 号とした 15 基について記載する。

9 号土坑 (第 8 図、写真 1)

[位 置] MQ - 176グリッドに位置している。本遺構の南側には 10号平安住居跡、北側には 7号平安住居跡が構築されている。

[形 状 ・ 規 模] 平面形は、不整な隅丸長方形である。開口部の径は 140 120cm、底部の径は 120 108cmで確認面からの深さは 58cmである。

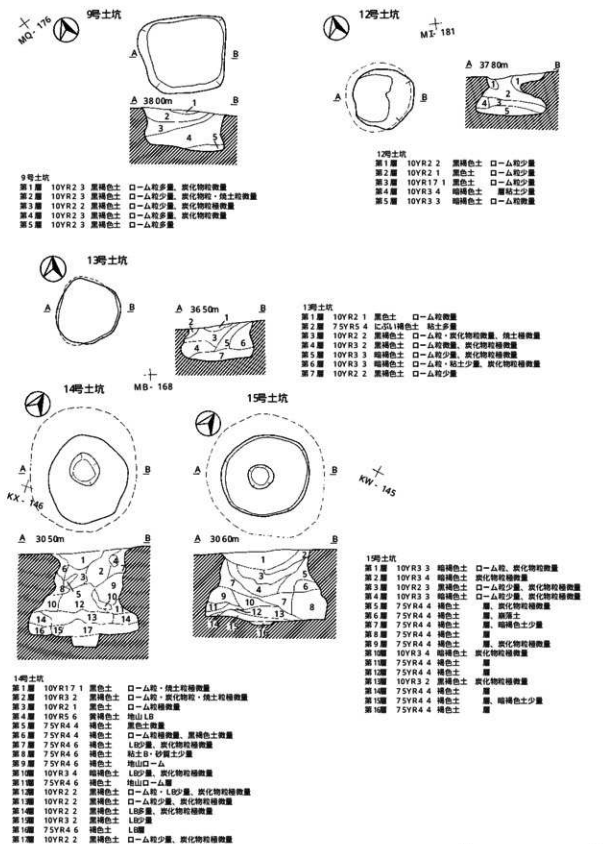
[壁 ・ 底] 基本層序の 層以下を掘り下げて壁と底面を形成している。壁の中間から底部にかけての箇所は開口部よりも外側に丸く膨らみ、底面は地山の傾斜に平行して傾いている。

[堆積土] 確認面以下は 5 層に区分された。自然堆積したものとみられる。

[遺 物] 出土しなかった。

12号土坑 (第 8 図、写真 1)

[位 置] MH - 181グリッドに位置している。近くにある縄文時代の遺構は、11号溝状ピットである。



第8図 縄文時代土坑(1)

[形状・規模] 開口部は若干崩落しているが、原形は円形とみられる。開口部の径は90cm前後、底部の径は100cm前後である。確認面からの深さは70cmで、次に記載する13号土坑と類似している。

[壁・底] 地山の粘質土を掘り下げて構築されている。崩落によって原形を失った箇所もあるが、残存している壁と底面から推定される断面形はフラスコ状である。

[堆積土] 5層に区分された。

[遺物] 出土しなかった。

13号土坑（第8図、写真2）

[位置] MA - 167グリッドに位置している。近くには6号焼土状遺構がある。

[形状・規模] 削平されているため原形は不明であるが、確認時の開口部と底部はともに不整な円形である。開口部の径は100cm前後、底部の径は110cm前後である。開口部から底部までの深さは60cmである。

[壁・底] 壁の一部は崩落しているが、フラスコ状に膨らんだ部分も残存している。底面は、弧状をなしている。

[堆積土] 7層に分けられた。

[遺物] 3層から縄文時代晩期の台付鉢形土器片が出土したが図化できなかった。

14号土坑（第8図、写真2）

[位置] KX - 145 146グリッドに位置している。本土坑の西側一帯には試掘調査以来確認されているフラスコ状土坑群（14～24号）がある。

[形状・規模] 開口部、底部とも不整な円形を呈している。断面形は、不揃なフラスコ状である。開口部の径は140 120cm、底部の径は200 185cmを測り、深さは135cmである。

[壁・底] 地山の粘質土を掘り下げて構築したものであるが、粘質土（ローム層）自体が脆いためか壁の上半部は崩落して原形を失っている。底面は、平坦で中央には深さ20cmのビットが設けられている。

[堆積土] 17層に区分された。全体に粘質土が混じっている。

[遺物] 出土しなかった。

15号土坑（第8図、写真2）

[位置] KV - 145グリッドに位置している。周囲には14、17、18号土坑が配置されている。この付近は丘陵の頂部に近く、標高は30.6mを測る。

[形状・規模] 開口部は160 120cmの楕円形であるが、底部は205 200cmの円形である。開口部から底面までの深さは115cmである。

[壁・底] 断面形は、フラスコ状で、比較的原形に近い状態である。底面には深さ5cmの小ビットが設けられている。

[堆積土] 16層に分けられた。自然堆積した部分と地山ロームが崩落した部分とが認められる。

[遺物] 表面が摩滅した円筒下層式土器？の細片が1点出土した。

16号土坑（第9図、写真2）

- [位置] KU・KV - 144グリッドに位置している。付近には15、17、18号土坑が配置されている。
- [形状・規模] 開口部、底部ともに楕円形で、断面形はフラスコ状である。開口部の径は140 120cm、底部の径は230 210cm、確認面からの深さは150cmを測る。
- [壁・底] 良好な状態で残存している。
- [堆積土] 8層に区分された。炭化物が全体に混入している。
- [遺物] 出土しなかった。

17号土坑（第9図、写真3）

- [位置] KV - 145・146グリッドに位置している。周囲には14～16号及び18～22号土坑が集中的に構築されている。
- [形状・規模] 開口部付近は崩壊が顕著であるが、開口部、底部ともにほぼ円形である。開口部の径220 200cm、底部の径は285 270cm、確認面からの深さは195cmである。断面形は台形を呈しているが、原形はフラスコ状であろう。
- [壁・底] 壁の上半部は損壊している。また、底面には深さ30cmの小ピットが設けられている。
- [堆積土] 13層に分けられた。
- [遺物] 出土しなかった。

18号土坑（第9図、写真3）

- [位置] KU - 145グリッドに位置している。周辺には多くのフラスコ状土坑が構築されている。
- [形状・規模] 開口部が崩壊して、本来くびれる箇所が拡大、陥没している。開口部は楕円形であるが底部は円形を呈している。開口部の径は180 150cm、底部の径は230 215cm、確認面からの深さは170cmである。
- [壁・底] 崩壊した壁の断面は台形に近いが、原形のフラスコ状に近い箇所も残っている。底面には深さ15cmほどの小ピットが付設されている。
- [堆積土] 11層に区分された。炭化物の混入が全般的に認められた。
- [遺物] 出土しなかった。

19号土坑（第9図、写真3）

- [位置] KU・KV - 145・146グリッドに位置している。近接している土坑は全てフラスコ状のタイプである。
- [形状・規模] 本来の形状は円形と考えられるが、現状は開口部、底部ともに楕円形である。開口部の径は180 125cm、底部の径は240 200cmである。断面はフラスコ状で、深さは140cmである。
- [壁・底] 開口部に近い壁は崩落している。底面は、平坦である。
- [堆積土] 10層に区分された。堆積土の多くは地山の崩落土が多く、堆積土と地山の区別が容易でない土坑の一つである。
- [遺物] 認められなかった。

20号土坑（第10図、写真3）

- [位置] KU - 146グリッドに位置している。フラスコ状土坑群のほぼ中央にある土坑である。
- [形状・規模] 開口部及び底部の平面形は、ともに円形に近い。開口部の径は180 160cm、底部の径は230 210cm、開口部から底面までの深さは160cmである。現状での断面は、胴部のくびれた臼の形状に似ている。
- [壁・底] 底面はよく残っているが、壁の上半部は崩落した箇所が多い。
- [堆積土] 16層に区分された。堆積土の多くは地山の壁が崩落したものである。
- [遺物] 出土しなかった。

21号土坑（第10図、写真4）

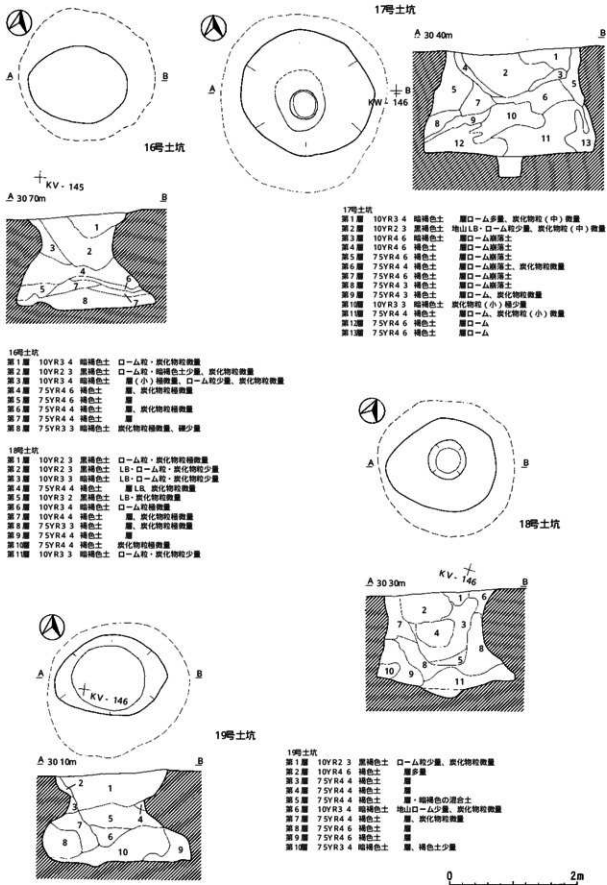
- [位置] KT - 146グリッドに位置している。本遺構の周囲には17～20号、22、23号土坑が構築されている。
- [形状・規模] 平面形は開口部、底部ともに円形である。開口部の径は180 175cm、底部の径は275 255cm、開口部から底部までの深さは220cmである。現状の断面は台形であるが本来はフラスコ状とみられる。断面がフラスコ状の土坑では、最大規模の土坑である。
- [壁・底] 壁の上半部は、土圧のため崩落している。底面には深さ25cmのビットが設けられている。このビットによって堆積土と底面とに区別することができた。
- [堆積土] 20層に区分された。堆積土の主体は壁の崩落したものである。
- [遺物] 出土しなかった。

22号土坑（第10図、写真4）

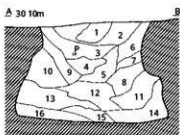
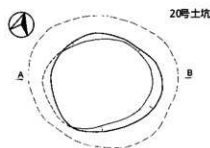
- [位置] KW - 146 147グリッドに位置している。周囲にある遺構はフラスコ状土坑のみで構成されている。
- [形状・規模] 平面形は、開口部、底部ともに円形である。開口部の径は130 115cm、底部の径は190 180cmである。開口部から底面までの深さは120cmである。
- [壁・底] 開口部に近い壁は崩落して、断面は打楽器の鼓（つつみ）に似ている。底面は平坦で堅くビットは設けられていない。
- [堆積土] 15層に区分された。崩落土と流入土の繰り返しによって形成されたようである。開口部に近い1、2層には焼土が、また全般的に炭化物が混じっている。
- [遺物] 認められなかった。

23号土坑（第11図、写真4）

- [位置] KU - 147グリッドに位置している。周囲には20、22、24号土坑が配置されている。
- [形状・規模] 開口部、底部ともに円形を呈している。開口部の径は、130 120cm、底部の径は210 95cmである。開口部から底部までの深さは135cmを測る。
- [壁・底] 開口部に近い壁は崩落している。本土坑を含めて壁の崩落は目立つが、これはこの付近の地山ローム層全体が脆弱であることに起因しているようである。崩落は調査中に何度も発生している。



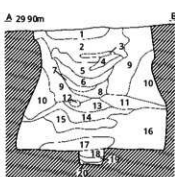
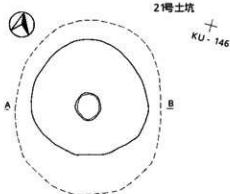
第9図 縄文時代土坑(2)



20号土坑

- 第1層 10YR2 2 栗褐色土 □-△粒、炭化物粒極微量
- 第2層 10YR3 3 暗褐色土 □-△粒、炭化物粒極微量
- 第3層 10YR2 3 栗褐色土 □-△粒微量、炭化物粒極微量
- 第4層 7.5YR4 4 褐色土 層口-△
- 第5層 10YR3 4 暗褐色土 □-△粒微量、炭化物粒極微量
- 第6層 10YR4 4 褐色土 層口-△
- 第7層 10YR5 4 灰-石灰質褐色土 層口-△
- 第8層 7.5YR4 4 褐色土 層
- 第9層 7.5YR4 4 褐色土 層

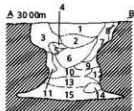
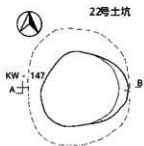
- 第10層 10YR4 4 褐色土 層口-△
- 第11層 7.5YR4 4 褐色土 層
- 第12層 10YR3 3 暗褐色土 □-△粒少量、炭化物粒極微量
- 第13層 7.5YR4 4 褐色土 層
- 第14層 7.5YR4 4 褐色土 層、炭化物粒微量
- 第15層 10YR3 3 暗褐色土 □-△粒極少量、炭化物粒極微量
- 第16層 7.5YR4 6 褐色土 層



21号土坑

- 第1層 10YR2 2 栗褐色土 □-△粒、燒土粒微量
- 第2層 7.5YR4 4 褐色土 地山口-△、炭化物粒微量、燒土粒極微量
- 第3層 10YR2 2 栗褐色土 □-△粒少量、炭化物粒微量、燒土粒極微量
- 第4層 10YR4 6 褐色土 地山口-△、炭化精粒、燒土粒極微量
- 第5層 10YR2 2 栗褐色土 LB少量、□-△粒、炭化物粒少量、燒土粒極微量
- 第6層 7.5YR4 4 褐色土 □-△粒、燒土粒極微量、炭化物粒少量
- 第7層 7.5YR4 4 褐色土 炭化物粒極微量、粘質土
- 第8層 7.5YR4 4 褐色土 炭化物粒少量、暗褐色土混合土
- 第9層 7.5YR4 4 褐色土 腐落土、炭化物粒極微量

- 第10層 7.5YR4 6 褐色土 地山口-△、炭化物粒少量
- 第11層 7.5YR4 6 褐色土 腐粘質土
- 第12層 7.5YR4 6 褐色土 地山口LB
- 第13層 10YR2 3 暗褐色土 LB、炭化物粒少量
- 第14層 7.5YR5 6 暗褐色土 炭化物粒少量
- 第15層 7.5YR4 6 褐色土 炭化物粒少量
- 第16層 7.5YR5 8 暗褐色土 炭化物粒少量
- 第17層 7.5YR4 4 褐色土 炭化物粒少量
- 第18層 7.5YR4 4 褐色土 層口-△、炭化物粒少量
- 第19層 7.5YR4 6 褐色土 腐落土
- 第20層 10YR3 4 暗褐色土 層口-△粒少量、炭化物粒微量、自然

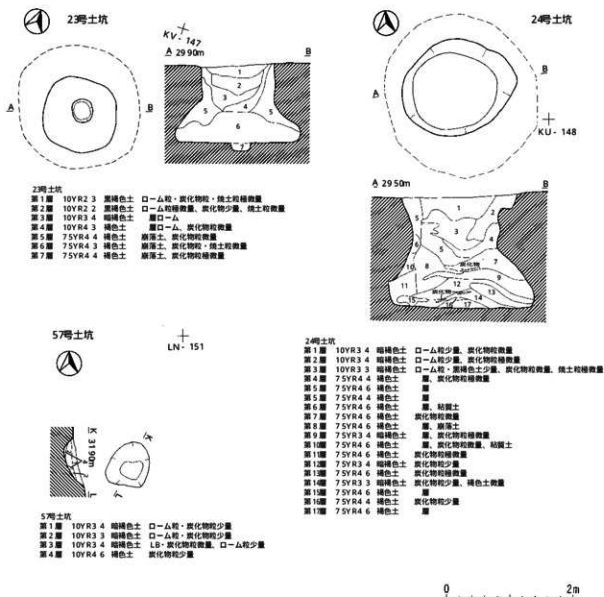


22号土坑

- 第1層 10YR2 3 栗褐色土 □-△粒、炭化物粒、燒土粒極微量
- 第2層 10YR3 4 暗褐色土 □-△粒極微量、炭化物粒、燒土粒微量
- 第3層 10YR4 6 暗褐色土 □-△粒、炭化物粒極微量
- 第4層 10YR4 6 褐色土 地山口-△、炭化物粒微量
- 第5層 10YR3 3 暗褐色土 炭化物粒、燒土粒極微量
- 第6層 7.5YR4 6 褐色土 地山口-△、炭化物粒微量
- 第7層 10YR3 4 暗褐色土 炭化物粒微量、燒土粒極微量
- 第8層 10YR4 6 褐色土 □-△粒、炭化物粒極微量
- 第9層 7.5YR4 6 褐色土 地山口-△、暗褐色土混合土、炭化物粒微量
- 第10層 10YR3 3 暗褐色土 □-△粒少量、炭化物粒微量、燒土粒極微量
- 第11層 10YR3 4 暗褐色土 層口-△、炭化物粒極微量
- 第12層 7.5YR4 6 褐色土 層口-△
- 第13層 10YR3 2 栗褐色土 □-△粒微量、炭化物粒少量
- 第14層 7.5YR4 6 褐色土 層口-△腐落土
- 第15層 10YR3 2 栗褐色土 LB、□-△粒、炭化物粒少量



第10圖 縄文時代土坑(3)



第1図 縄文時代土坑(4)

[堆積土] 7層に区分された。開口部に近い土層は自然堆積であるが、その下部は人為的堆積である。壁の崩落したものとみるよりも別の土坑を構築した際の排土を埋めたようにもみられる。

[遺物] 遺物は出土しなかった。

24号土坑(第11図、写真4)

[位置] KT-147 148グリッドに位置している。14~24号土坑のなかでは最も標高の低い地点 295mに位置している。

[形状・規模] 開口部と底部の平面形は、円形に近い。開口部の径は180 150cm、底部の径は260 250cm、深さ175cmの規模がある。

[壁・底] 壁の上半部は崩落しているが原形はフラスコ状であろう。底面は平坦で残存状況は良い。

[堆積土] 17層に分層された。地山の崩落したものが混入した割合が多い。10層と14層には炭化物が混入している。

[遺物] 出土したものはない。

57号土坑(第11図、写真5)

[位置] LM 151グリッドに位置している。周囲にある遺構は1号縄文住居跡、19号溝状ピット、3号焼成ピットである。

[重複] 本土坑は、1号縄文住居跡を掘り下げて構築されているのでその前後関係は明白であるが、同じく1号縄文住居跡を掘り下げて構築された19号溝状ピットとの新旧関係は明確ではない。

[形状・規模] 開口部、底部ともに歪な円形を呈している。断面形は、丸底状である。開口部の径は、80 60cm、深さ30cmの規模がある。

[壁・底] 壁、底面ともに1号住居跡の床面を掘り下げて造られたものである。

[堆積土] 4層に区分された。自然堆積したものとみられる。堆積土全体に炭化物の混入が認められている。

[遺物] 確認されなかった。

3 溝状ピット

溝状ピットは、14基検出された。ピット番号は1から20まで付けたが、7、8、15～18は欠番である。各遺構の特徴は、下記のとおりである。

1号溝状ピット(第12図、写真5)

[位置] MT - 170・171グリッドに位置している。溝状ピットとしては、2号溝状ピットに次いで高い地点に(38m)に設けられたピットである。

[重複] 認められなかった。

[形状・規模] 南北に長軸があるピットで長軸の側縁部は直線状であるが、両端の短辺は丸みがある。開口部の長径は335cm、その短径は50cm、底部の長径330cm、その短径25～40cmである。確認面からの深さは7cmで、極端に浅い。溝状ピットとしての機能は欠如しているが、構築を途中で放棄した可能性も捨て切れないので一応溝状ピットとした。

[方位] 長軸の方位は、N - 4度 - Eである。

[堆積土] 黒褐色土のみが1層自然堆積していた。

[遺物] 確認面以下からは出土しなかった。

2号溝状ピット(第12図、写真5)

[位置] ML - 168グリッドに位置している。本年度の調査では最も高い地点(39m)に設けられたピットで、丘陵頂部付近に立地して、周囲は北を除く三方向へ傾斜している。

[重複] 本遺構は、平安時代の6号円形周溝によって開口部の北端が削られている。

- [形状・規模] 重複のため正確な原形は不明であるが、現状から推定される平面形は短冊状である。開口部の長径は、295cmと推定され、その短径は30cmである。底部の長径は310cm、その短径は10cmである。深さは、確認面から90cmを測る。長軸の断面は、底部の両側面が開口部より膨らみがあり、また底面には起伏がある。短軸の断面は、三味線の撥状を呈し、開口部から底面に向けて直線的にすばまる形状である。
- [方位] 長軸の方位は、N - 1度 - Wである。
- [堆積土] 2層に分けられた。自然堆積したものである。
- [遺物] 確認面以下からは出土しなかった。

3号溝状ピット(第12図、写真5)

- [位置] L X - 163グリッドに位置して、西に向けて傾斜した斜面に設けられ、標高は33mほどである。10mほど南西には14号溝状ピット、北西20mには10号溝状ピットが分布している。
- [重複] 認められない。
- [形状・規模] 南北方向に長軸があるピットであるが、雨水と雪解け水の被害にあった遺構である。ピットの両端は中央に比べて幅が広い形状を呈している。規模の数値は、一部推定を含む。開口部の長径は400cm、短径は15~40cmである。底部の長径は455cm、短径は20~50cmである。深さは、確認面から110cmを測る。
- 長軸の断面は、開口部から末広がりに膨らみ、底面は弧状をなしている。短軸の断面は、開口部から底面に向けて直線状にすばまる形状と推定される。
- [方位] 長軸の方位は、N - 10度 - Wである。
- [堆積土] 3層に区分された。自然堆積したものと判断される。
- [遺物] 確認面以下からは出土しなかった。

4号溝状ピット(第12図、写真6)

- [位置] M Z ・ L A - 154グリッドに位置している。南に向けて傾斜した斜面に設けられ、標高27m付近に立地している。北西20mには5号溝状ピット、南方6mには12号溝状ピットが配置されている。
- [重複] 認められなかった。
- [形状・規模] 長軸が北西 - 南東を指しているピットである。平面形は、開口部が崩落しているため正確な原形は不明であるが、葉巻タバコのような形状とみられる。開口部の長径は350cm、短径は30~55cmである。底部の長径は340cm、短径は20cmである。深さは、確認面から120cmである。
- 長軸の断面は、左右非対称で、西寄りの断面はなだらかな弧状を呈して底面と連結しているが、東寄りの断面は、崩落したのかどうかが不明であるが楔状にえぐられている。短軸の断面は、三味線の撥状を呈している。
- [方位] 長軸方位は、N - 37度 - Wである。
- [堆積土] 2層に分けられるが、底面に接する2層目は雨水のため崩落したもののようである。
- [遺物] 出土しなかった。

5号溝状ピット(第12図、写真6)

[位置] K X - 14θ 149、K Y - 149グリッドに位置している。南と東に向けて傾斜した斜面に設けられ、標高は28mである。南東20mには4号溝状ピットが配置されている。

[重複] なし。単独遺構である。

[形状・規模] 長軸が北西-南東を指すピットである。開口部が若干崩落しているが、平面形はやや太めの葉巻タバコの形状を呈している。開口部の長径は340cm、短径は55~75cmで、底部の長径は384cm、短径は22~50cmを測る。深さは、確認面から98cmである。

長軸の断面は開口部から底部にかけては未広がりに膨らみ、底面に連結している。短軸の断面は、胴のくびれが弱い鼓状をなしている。

[方位] 長軸方位は、N - 56度 - Wである。

[堆積土] 4層に分けられた。

[遺物] 出土しなかった。

6号溝状ピット(第13図、写真6)

[位置] L L・L M - 153グリッドに位置している。南向きの斜面に設けられ、その標高は30mほどである。北西16mには9号溝状ピットが配置されている。

[重複] 認められなかった。

[形状・規模] 北西-南東に長軸があるピットで、平面形は葉巻タバコ状である。開口部の長径は390cm、短径は40~75cmである。また、底部の長径は425cm、短径25~30cmを測る。確認面からの深さは120cmである。

長軸の断面は、開口部から底部にかけては未広がりに膨らみ、底面でややしぼまり、底面は傾斜しているが起伏は少ない。短軸の断面は、多少の出入りはあるが基本的には三味線の撥状である。

[方位] 長軸方位は、N - 46度 - Wである。

[堆積土] 5層に分けられた。

[遺物] 出土しなかった。

7、8号溝状ピット(欠番)

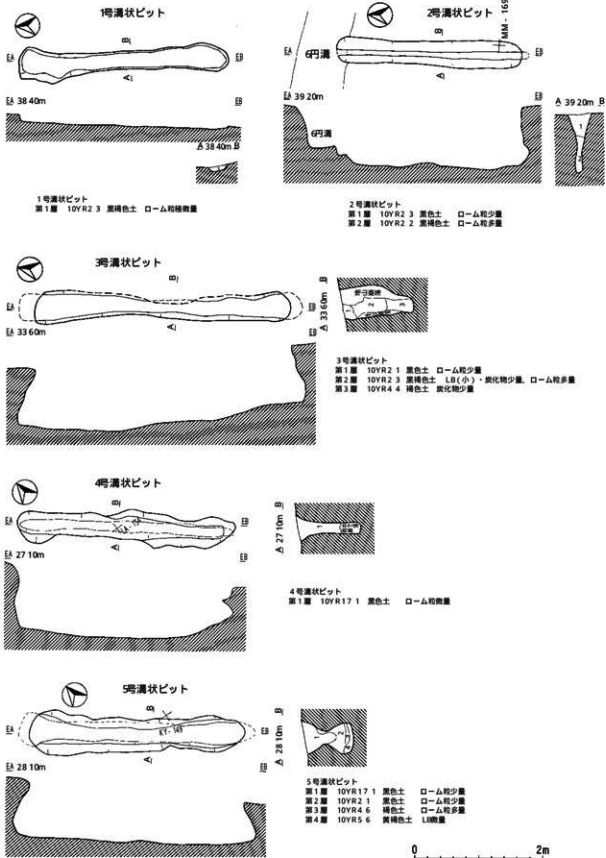
9号溝状ピット(第14図、写真6)

[位置] L H - 151グリッドに位置している。南向きの斜面に設けられ、標高は約31mである。南東16mには6号溝状ピットが配置されている。

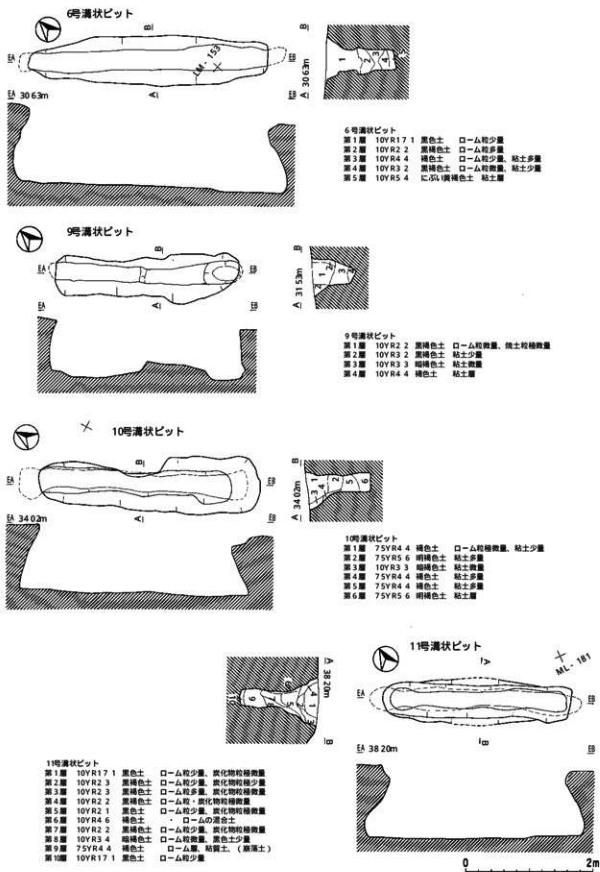
[重複] 認められなかった。

[形状・規模] 不整な隅丸長方形で、長軸は北西-南東方向にある。開口部の長径は290cm、短径は55~70cmである。底部の長径は305cm、短径は25~35cmである。確認面からの深さは、60~95cmを測る。

長軸の断面は、開口部から未広がりに膨らみ、平坦な底面につながるものとみられる。短軸の断面は U 字状である。



第1図 溝状ピット(1)



第1図 溝状ピット(2)

[方 位] 長軸の方位は、N - 45度 - Wである。

[堆積土] 4層に分層された。

[遺 物] 確認面以下からは出土しなかった。

10号溝状ピット(第13図、写真7)

[位 置] LU - 157・158グリッドに位置している。南と東に傾斜した斜面に設けられ、標高は33.5mほどである。南東20m付近には3号溝状ピットが配置されている。

[重 複] 認められなかった。

[形状・規模] 北西 - 南東方向に長軸があるピットで、平面形は隅丸長方形である。開口部の長径は35.5cm、短径65 - 90cmである。底部の長径は36.0cm、短径は20 - 40cmである。確認面からの深さは10.5cmを測る。

長軸の断面は、開口部から直線的に未広がりに膨らみ、平坦な底面に続いている。短軸の断面は、三味線の椀状である。

[方 位] 長軸の方位は、N - 25度 - Wである。

[堆積土] 6層に区分された。

[遺 物] 出土しなかった。

11号溝状ピット(第13図、写真7)

[位 置] MK - 18グリッドに位置している。北を除いた三方に傾斜した丘陵頂部に構築され、標高は3.8mを測る。

[重 複] 認められなかった。

[形状・規模] 長軸方向がほぼ東 - 西にあるピットで、平面形は不整な隅丸長方形である。開口部の長径は30.0cm、短径は50 - 70cmである。底部の長径は33.8cm、短径は25 - 35cmである。深さは、確認面から12.5cmを測る。

長軸の断面は、開口部から両側面に膨らみ、底面でややすぼまる形状である。短軸の断面は、三味線の椀状である。

[方 位] 長軸の方位は、N - 63度 - Wである。

[堆積土] 10層に区分された。自然堆積したものとみられる。

[遺 物] 確認面以下からは出土しなかった。

12号溝状ピット(第14図、写真7)

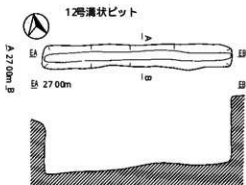
[位 置] KZ・LA - 155グリッドに位置している。南に面した斜面に構築されたピットで、標高は26.8mである。6m北には4号溝状ピットが設けられている。

[重 複] 認められなかった。

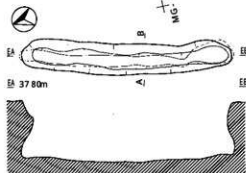
[形状・規模] 長軸が東 - 西にあるピットで、平面形は、隅丸の短冊状である。開口部の長径は300cm、短径が35cmである。底部の長径は297cm、また、短径は15cm前後である。深さは、確認面から90 - 105cmを測る。

長軸の断面は、開口部と底面がほぼ同じ大きさの箱形である。短軸の断面は開口部が底面

12号溝状ピット
 第1層 10YR2 1 黒色土 LB(大)微量
 第2層 10YR17 1 黒色土 ローム粒(中)少量
 第3層 10YR2 2 黒褐色土 LB(大)少量、ローム粒(大)少量

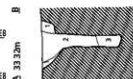
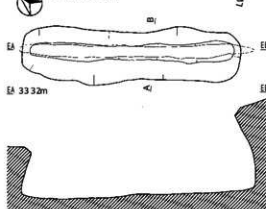


13号溝状ピット



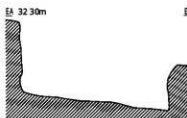
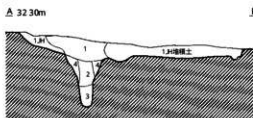
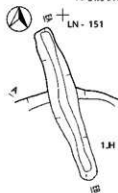
13号溝状ピット
 第1層 10YR2 2 黒褐色土 ローム粒少量、炭化物粒極微量
 第2層 10YR2 2 黒褐色土 ローム粒・黒色土少量、炭化物粒極微量
 第3層 10YR2 3 黒褐色土 LB(小)微量、ローム少量
 第4層 75YR4 4 褐色土 ローム層
 第5層 10YR2 2 黒褐色土 ローム粒微量

14号溝状ピット



14号溝状ピット
 第1層 10YR2 2 黒褐色土 LB(中)・炭化物粒少量
 第2層 10YR2 2 黒褐色土 LB(中)少量、炭化物粒、ローム少量
 第3層 10YR2 3 黒褐色土 LB(小)少量、炭化物粒少量

19号溝状ピット



19号溝状ピット
 第1層 10YR17 1 黒色土 LB・ローム粒少量
 第2層 10YR2 3 黒褐色土 ローム粒少量、炭化物粒微量
 第3層 10YR3 2 黒褐色土 ローム少量
 第4層 10YR2 2 黒褐色土 ローム少量



第14図 溝状ピット(3)

よりいくぶん広い筒形を呈している。

- [方 位] 長軸の方位は、N - 85度 - Wである。
 [堆積土] 3層に区分された。自然堆積したものである。
 [遺 物] 確認面以下からは出土しなかった。

13号溝状ピット(第14図、写真7)

- [位 置] MF - 189 190グリッドに位置している。北を除く三方に傾斜した尾根状の地点に設けられたピットで、その地点の標高は37.6mを測る。最寄りの11号溝状ピットとは32mほど離れている。最南端の遺構である。
 [重 複] 認められなかった。
 [形状・規模] 長軸が南 - 北にあるピットで、平面形は葉巻タバコに似ている。開口部の長径は335cmは45 - 55cmである。底部の長径は340cm、短径は25cm前後である。深さは、確認面から、90cmを測る。
 長軸の断面は、開口部よりも底部が若干膨らむ形状である。短軸の断面は T 字状である。
 [方 位] 長軸の方位は、N - 14度 - Eである。
 [堆積土] 5層に区分した。
 [遺 物] 確認面以下からは出土しなかった。

14号溝状ピット(第14図、写真8)

- [位 置] LV - 165 166グリッドに位置している。標高33mの地点に構築されている。最寄りの溝状ピットは、10m北東にある3号溝状ピットである。
 [重 複] 認められなかった。
 [形状・規模] 南北方向に長軸があるピットで、平面形は隅丸長方形に近い形状を呈している。開口部の長径は348cm、短径が75 - 90cmである。底部の長径は370cm、短径が15 - 20cmである。深さは、確認面から112cmを測る。
 長軸の断面は、開口部から両側へ丸く膨らみ、底面に向けてすぼまるタイプである。短軸の断面は、三味線の撥状である。
 [方 位] 長軸の方位は、N - 20度 - Wである。
 [堆積土] 3層に区分された。
 [遺 物] 確認面以下から遺物は出土していない。

15～18号溝状ピット(欠番)

19号溝状ピット(第14図、写真8・47)

- [位 置] LM・LN - 151グリッドに位置している。南向きの斜面に構築されたピットで、付近の標高は32mほどである。最寄りの溝状ピットは、6号溝状ピットである。
 [重 複] 本遺構は、1号縄文住居跡を掘り下げて構築されたもので、本遺構が新しい。
 [形状・規模] 平面形は、短冊のような形状で、長軸方向はほぼ南北を指している。開口部の長径は

230cm、短径45cm、底部の長径230cm、短径15cm、確認面からの深さ、110cmを測る。

長軸の断面は、削平のため片側は原形を失っている。短軸の断面は、三味線の撥状を呈するが多少崩れている。

[方 位] 長軸方向は、N - 18度 - Wである。

[堆積土] 4層に区別された。黒色土の下部は暗褐色土が基調をなしている。

[遺 物] 縄文時代前期末葉～中期初頭の土器片が3点、剥片石器が1点出土した。住居跡からの流れ込みであろう。本遺構が縄文時代前期末葉～中期初頭とみられる竪穴式住居跡を掘り下げて構築されていることから、本遺跡から検出された一連の溝状ピット群の帰属年代は、仮に遺物を共伴していなくともある程度絞り込めるものと考えられる。

20号溝状ピット (第15図、写真8)

[位 置] MO - 144グリッドに位置している。溝状ピットでは最西端にあるピットである。

[重 複] 認められなかった。

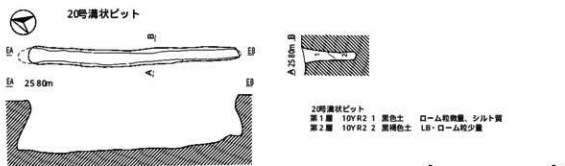
[形状・規模] ピットの長軸は南北を指し、平面形は細長い帯状を呈している。開口部の長径は335cm、その短径は20～25cmである。底部の長径は353cm、その短径は20～25cmである。深さは、確認面から85cmを測る。

長軸の断面は、開口部と底面の長さに差がなく、箱形に近い。短軸の断面は、三味線の状を呈するが、やや細身である。

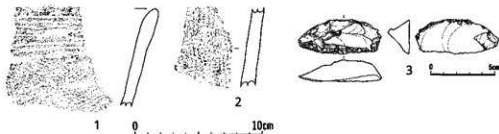
[方 位] 長軸の方位は、N - 21度 - Wである。

[堆積土] 2層に分けられた。

[遺 物] 出土しなかった。



第15図 溝状ピット(4)



第16図 溝状ピット出土遺物

19号溝状ピット出土遺物

図録番号 16

図録番号	種別	器種	層位	部位	文様など	時期分類	備考
5-1	縄文	深鉢	1層	口縁部	円形痕・局部回転文・羽状縄文・車輪結糸体 痕	群	
2	縄文	深鉢	1層	胴部	車輪結糸体 痕	群	

19号溝状ピット出土遺物

図録番号 16

図録番号	分類	出土遺構	層位	計測値				石質	備考
				長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g		
5-1	不定形石器	19号溝状ピット	増穂土	27	66	17	278	珩質頁岩	S X、整理番号 12

第 2 節 平安時代の遺構と出土遺物

検出した遺構は、竪穴式住居跡 2 軒、円形周溝 11 基、土坑 36 基、焼成ピット 18 基、焼土状遺構 8 基、柱穴状ピット 13 基（1 群）道路状遺構 2 条、溝状遺構 8 条である。これらの中には時代、時期を特定し得ないものも含まれている。

1 竪穴式住居跡

1 号住居跡（第 17～22 図、写真 9・47～50）

[位置] MV・MW - 167 168グリッドに位置している。最も東寄りの平安住居跡である。周囲には 3、4 号円形周溝などが構築されているが、重複した遺構は認められない。

[平面形・規模] 住居跡本体の平面形は方形を呈しているが、北西壁には方形の張出部がある。住居の四隅は各方位に突き出ている。各辺の壁長は、北東壁 4.5m、南東壁 4.5m、南西壁 3.75m、北西壁 4.15m である。床面積は、18.15㎡を測る。

[壁・床] 壁、床ともに基本層序の、層（以下、地山ローム層）を掘り下げて構築したものである。各辺の壁面は、幾分外側に傾きながら立ち上がっている。壁の高さは、北東壁 20～56cm、南東壁 20～40cm、南西壁 40～67cm、北西壁 56～67cm である。東隅付近が最も低く、西隅が最も高い構造である。床面は、全体に起伏は少なく堅緻であるが、一部には貼床も認められる。

[壁溝] カマドがある箇所を除いた北東壁、南東壁の東隅寄り及び南西壁の一部に付設されている。溝幅 8～18cm、溝の深さ 6～9cm を測る。

[ピット・柱穴] 床面から 3 個のピットを確認した。P1とP2は、貼床の下部から発見された。主柱穴の配置は明確ではない。

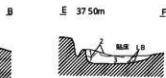
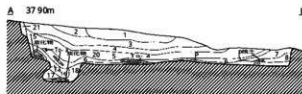
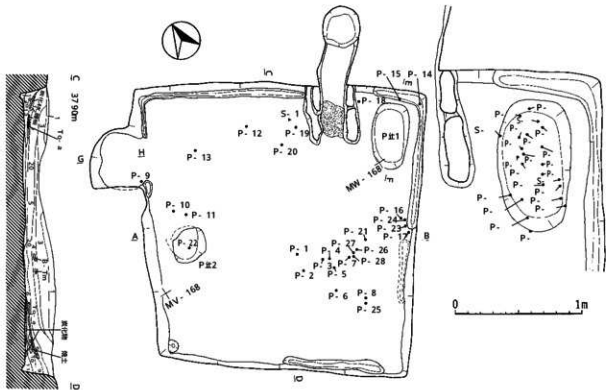
[カマド] 北東壁の北隅寄りに付設されている。袖部の残りは良くないが土師器（P40）に粘土を詰めて芯材としている。煙道部は半地下式の構造が採用されている。全長 250cm、袖幅 100cm、袖奥行 100cm の規模とみられる。主軸方位は、N - 45度 - E である。

[その他の施設] 北西壁の北隅寄りから、下端で 80～70cm ほどの張出部を確認した。床面から開口部までの高さは 70cm を測るが、ここには踏台のような施設や床の硬化面などは認められないことから出入口とは推測し難いが、住居と同時に使用された施設とみられる。

[堆積土] 確認面から床面までの堆積土は 21 層に区分された。自然堆積したものである。床面に近い 6 層と 12 層には To a 火山灰、また 4 層には B Tm 火山灰が認められた。採取した試料の分析結果も同じ判定が報告されている。堆積土の全般に焼土、炭化物、炭化材の混入が目立っている。火災により焼失した住居跡とみられる。

[炭化材] 焼失住居跡とみられ炭化材は多いが、それによって住居の構造が推測できるような出土状況ではない。炭化材は、壁の造りが高い南西壁から北西壁付近から多く出土している。炭化材は、板材の割合が多いが、一部細目の丸太状の部材も認められた。南西壁の壁溝直上から炭化した板材が折れた状態で出土したが、壁の腰板であろう。

[遺物] 床面、床面直上から土師器の坏が 5 個体、カマドから 4 個体、須臾器の坏が 1 個体出土した。土師器の 1 個（P₂₇）は内黒土器である。土師器の襷は、床面から 8 個体、カマドから



1号住居跡

- | | | | |
|------|----------|------|----------------------------|
| 第1層 | 10YR 2 2 | 黒褐色土 | □-△粒少量、炭化物粒数多、焼土粒極微量 |
| 第2層 | 10YR 2 3 | 黒褐色土 | □-△粒少量、焼土粒極微量 |
| 第3層 | 10YR 2 3 | 黒褐色土 | □-△粒少量、炭化物粒数多、焼土粒極微量 |
| 第4層 | 10YR 2 2 | 黒褐色土 | □-△粒、炭化物粒少量、B Tm少量、焼土粒微量 |
| 第5層 | 10YR 3 4 | 暗褐色土 | LB、□-△粒、炭化物粒少量、焼土粒微量 |
| 第6層 | 10YR 3 3 | 暗褐色土 | To aP層、□-△粒少量、焼土粒微量、炭化物粒少量 |
| 第7層 | 10YR 4 6 | 褐色土 | □-△粒、炭化物粒少量、焼土粒微量 |
| 第8層 | 10YR 4 4 | 褐色土 | 焼土少量、暗褐色土混合 |
| 第9層 | 10YR 3 3 | 暗褐色土 | □-△粒少量 |
| 第10層 | 10YR 4 6 | 褐色土 | □-△粒少量、焼土粒多量 |

1号住居跡南寄り出し (G-H)

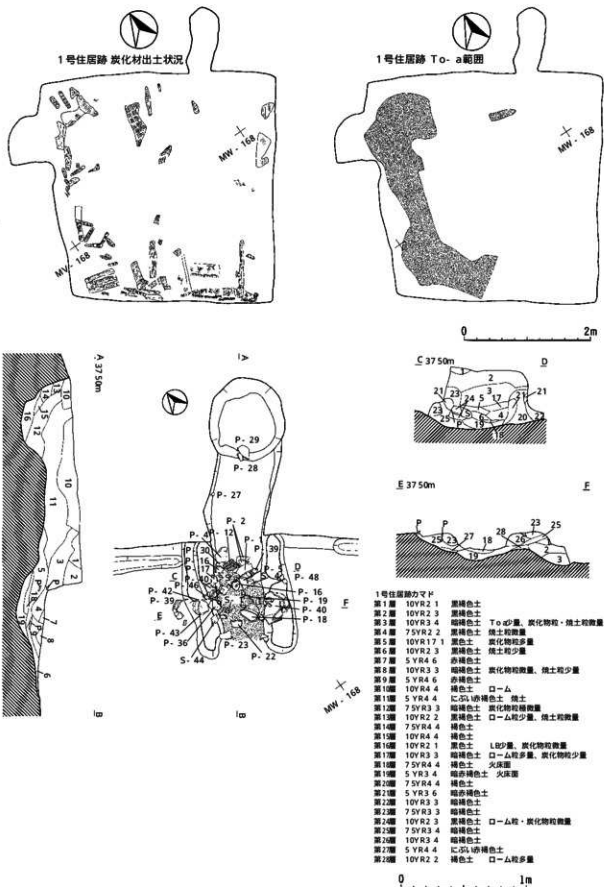
- | | | | |
|-----|----------|------|------------------|
| 第1層 | 10YR 3 4 | 暗褐色土 | 層流れ込み |
| 第2層 | 10YR 2 2 | 黒褐色土 | LB、□-△粒微量 |
| 第3層 | 10YR 2 3 | 黒褐色土 | □-△粒少量、To c、炭粒数 |
| 第4層 | 10YR 3 3 | 暗褐色土 | To、aP層、□-△粒、線粒数 |
| 第5層 | 10YR 2 2 | 黒褐色土 | □-△粒少量 |
| 第6層 | 10YR 2 1 | 灰色土 | LB、□-△粒微量、炭化物粒少量 |
| 第7層 | 10YR 2 2 | 黒褐色土 | □-△粒多量 |

- | | | | |
|------|-----------|------|-----------------------|
| 第1層 | 10YR 2 3 | 黒褐色土 | □-△粒、焼土粒少量、炭化物多量 |
| 第2層 | 10YR 3 3 | 暗褐色土 | To、aP層、□-△粒多量、炭化材多量 |
| 第3層 | 10YR 3 4 | 暗褐色土 | LB、炭化物粒少量、焼土粒微量 |
| 第4層 | 10YR 2 2 | 黒褐色土 | □-△粒、炭化物粒少量 |
| 第5層 | 10YR 2 2 | 黒褐色土 | 炭化物多量 |
| 第6層 | 10YR 3 3 | 暗褐色土 | □-△粒、炭化物粒、焼土粒少量 |
| 第7層 | 10YR 4 4 | 褐色土 | □-△粒、炭化物、焼土粒少量 |
| 第8層 | 10YR 2 2 | 黒褐色土 | □-△粒、炭化物、炭化物粒多量、焼土粒微量 |
| 第9層 | 10YR 4 4 | 褐色土 | 層混合土 |
| 第20層 | 7.5YR 6 6 | 褐色土 | □-△粒微量 |
| 第21層 | 10YR 2 2 | 黒褐色土 | □-△粒微量 |

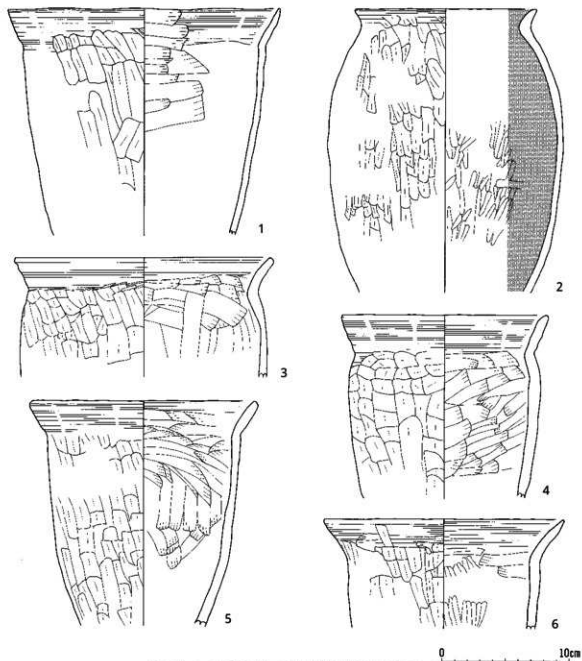
1号住居跡マド右袖P.16 (E-F)

- | | | | |
|-----|----------|------|-------------------|
| 第1層 | 10YR 4 6 | 褐色土 | 粘土 |
| 第2層 | 10YR 2 2 | 黒褐色土 | □-△粒極微量、焼土粒微量 |
| 第3層 | 10YR 3 4 | 暗褐色土 | □-△粒、炭化物粒少量、焼土粒多量 |

第17図 平安時代1号住居跡(1)



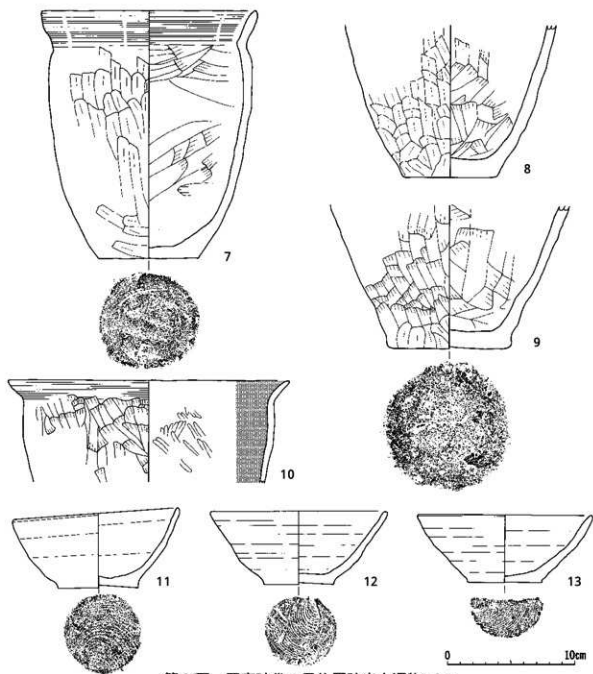
第18図 平安時代1号住居跡(2)



第19図 平安時代1号住居跡出土遺物(1)

1号住居跡出土遺物(1)

図録 番号	種別	器種	部位	計測値(cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
				口径	器高	底径					
1	土師器	甕	カマド	21.8	18.4	-	ヨコナデ ヘラケズリ	ヨコナデ ヨコナデ	-	-	KP 40 外
2	土師器	甕	カマド	19.0	22.6	-	ヨコナデ ヘラケズリ	ミガキ 肉肌	-	-	P 2 採取
3	土師器	甕	カマド	20.8	9.6	-	ヨコナデ ヘラケズリ	ヨコナデ ヘラナデ	-	-	P 15 外
4	土師器	甕	床 皿	17.4	14.6	-	ヨコナデ ヘラケズリ	ヨコナデ ナデツク	-	-	P 20 3 4次
5	土師器	甕	カマド	18.3	18.0	-	ヨコナデ ヘラケズリ	ヨコナデ ナデツク	-	-	P 1, 1 2次
6	土師器	甕	カマド	19.2	8.7	-	ヨコナデ ヘラケズリ	ヨコナデ ケズリ・ナデ	-	-	KP 20 外

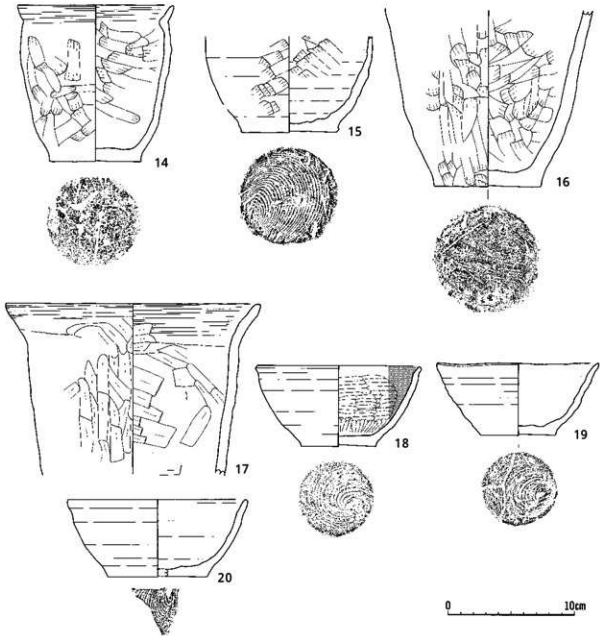


第2図 平安時代1号住居跡出土遺物(2)

1号住居跡出土遺物(2)

図版番号 20

図版番号	種別	器種	部位	計測値 (cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
				口径	器高	底径					
20-7	土師器	甕	底面	17.4	20.0	7.8	ヨコナデ ヘラケズリ	ヨコナデ ミガキ	ヘラケズリ		P 19, 22
8	土師器	甕	カマド	-	12.2	7.6	ヘラケズリ ヘラナデ	ヘラナデ ナデツク	ヘラナデ		P 17, 18
9	土師器	甕	底面	-	11.6	10.0	ヘラケズリ ナデ	ヘラナデ ナデツク	(ヘラナデ アメツク)		P 25
10	土師器	甕	底面	22.6	8.2	-	ヨコナデ ヘラナデ	ミガキ・内裏	-		P 5, 1 3次
11	土師器	杯	底面	13.6	6.4	6.4	ロクロ	ロクロ	磨転糸切り		P 35, 1 5次
12	土師器	杯	カマド	14.2	5.8	5.8	ロクロ	ロクロ	磨転糸切り		P 42, 2 3次
13	土師器	杯	縁・底	13.8	5.2	5.8	ロクロ	ロクロ	磨転糸切り		K.P. & P 26



第2図 平安時代1号住居跡出土遺物(3)

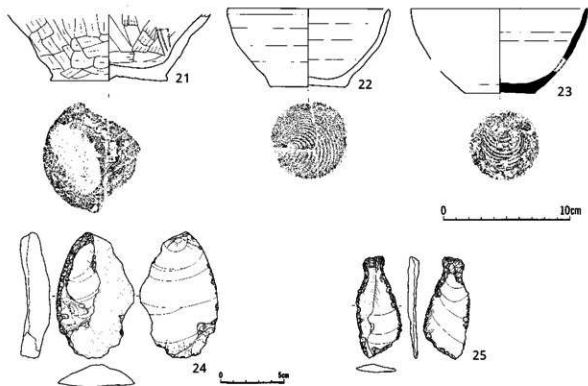
1号住居跡出土遺物(3)

図録番号 21

図録 番号	種別	器種	部位	計測値(cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
				口径	器高	底径					
21-14	土師器	甕	カマド口	12.6	12.6	7.2	ヨコナデ ヘラナデ	ヨコナデ ナデ	木炭焼		1 2次 割線
15	土師器	甕	カマド	-	7.7	7.8	ロクロ	ロクロ	明転糸切り		KP 41-47
16	土師器	甕	カマド	-	14.2	8.6	ヘラナデ	ナデ ナデツケ	ヘラナデ		KP 40-30
17	土師器	甕	カマド-器縁	20.4	13.4	-	ヨコナデ ヘラケズリ	ヨコナデ ヘラナデ	-		KP 33 P 45
18	土師器	杯	底直	13.2	6.4	5.8	ロクロ	ロクロ	明転糸切り		P 27.1 2次
19	土師器	杯	カマド	14.2	5.8	5.8	ロクロ	ロクロ	明転糸切り		P 11. 15. 19
20	土師器	杯	底直	(14.5)	6.2	(8.0)	(工具)ロクロ	(工具)ロクロ	明転糸切り		P 21.外

2 個体出土した。床面から出土した 2 個体は内黒土器である。その他堆積土から石匙と不定形石器が各 1 点記録されている。

【時 期】 床面に近い堆積土で確認された火山灰の降下年代（915年）によって住居の廃棄年代が推定されるものと考えられる。



第 2 図 平安時代 1 号住居跡出土遺物 (4)

1 号住居跡出土遺物 (4)

図録番号 22

図録番号	種 別	器 種	層 位	計 測 値 (cm)			外 面 調 整	内 面 調 整	底 面 調 整	分 類	備 考
				口 径	器 高	底 径					
22-1	土師器	椀	床 面	-	5.3	9.4	ヘラケズリ	ヘラナデ ナデツク	(木葉痕)		P. Ⅱ. 1 3次
22-2	土師器	杯	カマド	13.2	6.4	6.0	ロクロ	ロクロ	回転糸切り		P. 43. 1 3次
22-3	土師器	杯	床 面	14.2	6.8	5.6	ロクロ	ロクロ	回転糸切り		P. 31. Ⅱ. 7 次

1 号住居跡出土遺物 (4)

図録番号 22

図録番号	分 類	出 土 遺 構	層 位	計 測 値					石 質	備 考
				長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	容積 g		
22-4	不定形石器	1号住居跡	堆積土	6.3	10.1	2.4	129.7	珪質頁岩	東西セクション内、整理	6
22-5	石匙	1号住居跡	堆積土	8.2	3.7	0.9	16.7	珪質頁岩	縮形、整理	2

2号住居跡(第23 2図、写真9・49 50)

〔位置〕 MP・MQ - 165 166グリッドに位置している。1号平安住居跡から西へ20mほど離れたところに立地して、両者の間には3～5号円形周溝などが構築されている。

〔重複〕 本住居跡は、5号B円形周溝に掘り下げられているのでその新旧関係は明白である。

〔平面形・規模〕 長方形を呈して、各辺は東へ若干傾いている。壁の長さは、東壁4.1m、南壁4.2m、西壁3.8m、北壁4.3mを測る。床面積は、16.84㎡である。

〔壁・床〕 壁、床ともに地山ローム層を掘り下げたものである。壁の高さは、北東壁30cm、南東壁25cm、南西壁35cm、北西壁35cm前後である。床面のレベルは、38.65m～38.72mであることからほぼ平坦である。

〔壁溝〕 5号円形周溝との切り合いによって、南東隅付近は不鮮明であるがカマドの付設されている箇所を除いて一周していたものとみられる。溝幅15～20cm、溝の深さは10～15cmを測る。

〔ピット・柱穴〕 住居の内外から大小7個のピットを発見した。P2は、住居の外にある。また、P2、P3は円形周溝によって削平されていたが、堆積土中から遺物も出土した。これらのピットの位置、規模から支柱穴を割り出すことは容易でない。

〔カマド〕 東壁の北東隅寄りに付設されている。袖部は、土師器を芯材にして造られ、また、支脚は土師器が転用されている。煙道部は、半地下式の構造が採用されている。全長200cm、袖幅90cm、袖奥行70cmほどの規模とみられる。主軸方位は、N - 105度 - Eである。

〔堆積土〕 住居跡本体の堆積土は、1層に区分された。確認面以下は自然堆積したものと認められる。2層中にはB Tm火山灰、床面直上の7層にはTo a火山灰とみられるものが混入していたが、蛍光X線による分析結果では風化が進んでいたためかどちらとも判定されなかった。

〔遺物〕 出土した土器は、その全容を残したものは少ないが、土師器では確認面から底部を補修された可能性のある坏が1点ある。床面、床面直上、カマドなどから内黒坏底部、塙底部、覆底部3個体などが出土した。須恵器は、床面、床面直上から大甕と、坏が出土した。これらの生産地を推定するため胎土分析を依頼したところ、大甕は五所川原窯群産、坏は五所川原窯群(?)と判定された(須恵器の胎土分析 5.10)。(第 2章第2節参照) その他の遺物ではP3から砥石が1点出土した。底部穿孔の坏は、5号B円形周溝から流れ出したことも考えられる。

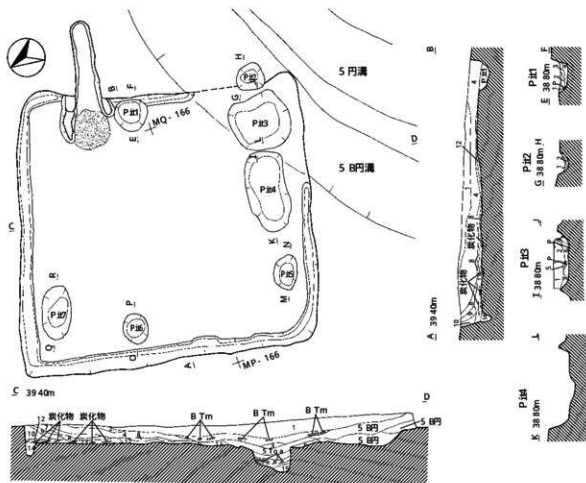
〔時期〕 床面直上の火山灰はTo aと判定されなかったが、住居跡の廃棄時期を示唆しているものと思われる

3号住居跡(第27 3図、写真10 50 51)

〔位置〕 MJ・MK - 159 160グリッドに位置している。南東へ6m離れたところには17号住居跡、西方7mには9号住居跡が所在しているが重複した遺構は認められていない。

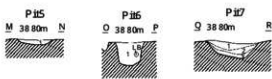
〔平面形・規模〕 西へ幾分偏向した不整な長方形を呈している。各辺の壁長は、東壁3.0m、南壁3.5m、壁3.4m、北壁3.8mを測る。床面の規模は、12.50㎡である。

〔壁・床〕 地山ローム層を利用したものである。各辺の壁の高さは、東壁22～30cm、南壁15～24cm、西壁17～27cm、北壁24～35cmを測る。床の一部には貼床が認められ、また、10cm前後の起伏がある。P1～P3の上部は貼床であった。



2号住居跡

- 第1層 10YR2 1 灰色土 □-△粒・炭化物粒微量、木炭多量
 第2層 10YR2 3 黒褐色土 B Tm多量、□-△粒微量
 第3層 10YR2 2 黒褐色土 □-△粒微量、炭化物粒少量
 第4層 10YR3 2 黒褐色土 □-△粒小・大減少、炭化物粒微量
 第5層 10YR3 2 黒褐色土 □-△粒小・大減少、LB・炭化物粒、焼土粒微量
 第6層 75YR2 3 暗褐色土 LB(小・大)多量、炭化物粒微量
 第7層 75YR3 3 暗褐色土 □-△粒小・大減少、To a・炭化物粒・焼土粒微量
 第8層 10YR3 3 暗褐色土 To a少量、火山灰層



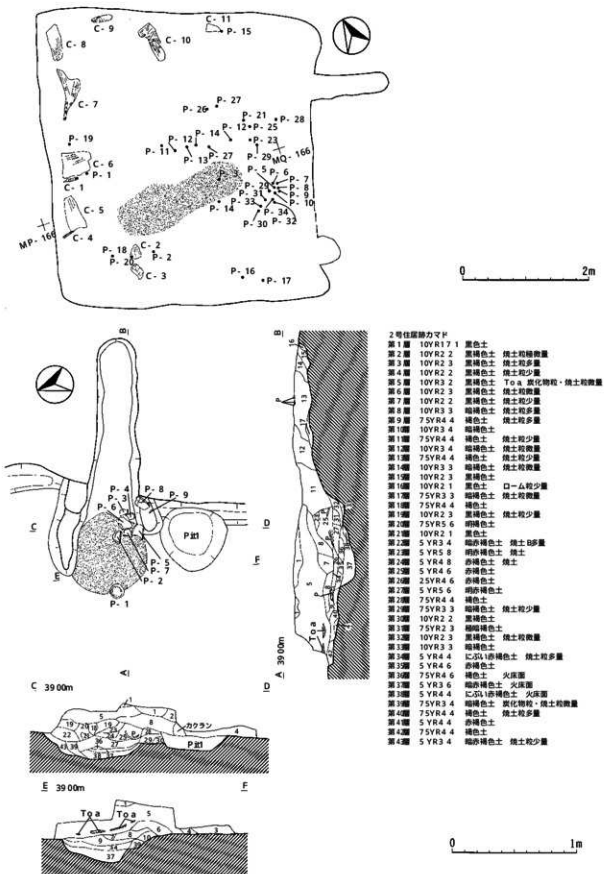
- P15(E F)**
 第1層 10YR2 3 黒褐色土 焼土粒微量
 第2層 10YR2 2 黒褐色土 焼土LB多量
 第3層 10YR3 2 黒褐色土 焼土粒微量
 第4層 10YR4 3 灰色土 焼土粒微量
- P16(G H)**
 第1層 10YR2 3 黒褐色土 □-△粒少量、炭化物粒微量
 第2層 10YR3 3 暗褐色土 □-△粒少量
- P17(I J)**
 第1層 10YR4 4 褐色土 LB少量、炭化物、焼土粒微量
 第2層 10YR3 3 暗褐色土 LB・焼土粒微量、炭化物粒多量
 第3層 10YR2 2 黒褐色土 炭化物粒多量
 第4層 10YR3 3 暗褐色土 炭化物粒少量
 第5層 10YR3 2 黒褐色土 炭化物粒微量
 第6層 75YR4 4 褐色土 焼土粒少量、炭化物粒微量
 第7層 75YR5 6 暗褐色土

- 第9層 10YR2 3 黒褐色土 □-△粒(中)微量、炭化物粒少量
 第10層 10YR2 3 黒褐色土 □-△粒(中)微量、炭化物粒少量、焼土粒微量
 第11層 10YR3 2 黒褐色土 炭化物粒微量、焼土粒少量
 第12層 75YR3 3 暗褐色土 焼土層、炭化物粒微量
 第13層 10YR2 2 黒褐色土 □-△粒、焼土粒微量、炭化物粒(小・大)少量、炭化物多量
 第14層 10YR2 3 黒褐色土 LB・□-△粒少量、炭化物粒少量
 第15層 10YR4 3 灰色土 LB少量、□-△粒・焼土粒微量、炭化物粒少量

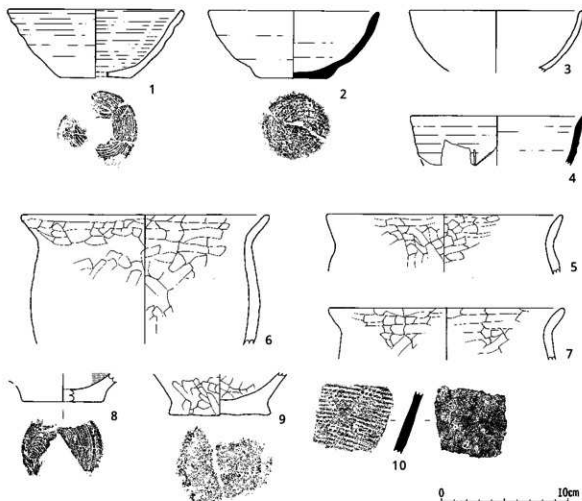
- P18(M N)**
 第1層 10YR4 6 褐色土 炭化物粒少量、焼土粒中量
- P19(O P)**
 第1層 10YR3 4 暗褐色土 □-△粒、炭化物粒微量、焼土粒少量
- P20(Q R)**
 第1層 10YR3 4 暗褐色土 □-△粒少量、炭化物粒多量
 第2層 10YR3 4 暗褐色土 炭化物層
 第3層 10YR4 6 褐色土 □-△粒微量、炭化物粒少量



第2図 2号住居跡(1)



第24図 2号住居跡(2)



第 2 図 2 号住居跡出土遺物 (1)

2 号住居跡出土遺物 (1)

図版番号 25

図版番号	種別	器種	部位	計測値 (cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
				口径	器高	底径					
25-1	土師器	坏	縁・土	14.2	5.5	5.6	ロクロ	ロクロ	煎転糸切り		
2	須恵器	坏	床・床底	13.8	5.4	5.4	(ロクロ)	(ロクロ)	(煎転糸切り)		P 11, 12
3	土師器	坏	床・カマド	-	2.4	6.4	ロクロ	ロクロ	三ガキ内裏 煎転糸切り		1 次
4	須恵器	坏	カマド (13B)	4.0	-	-	ロクロ	ロクロ	ハクリ 煎転糸切り		P 12, 分析 10
5	土師器	甕	鉢・ビット (14D)	4.8	-	-	(ロクロ)	ロクロ	ハクリ (煎転糸切り)		3 次
6	土師器	甕	カマド (21E)	10.6	-	-	ヨコナデ	(ケズリ) マメツ	ヨコナデ (ナデ)		P 11
7	土師器	甕	# (20D)	10.4	-	-	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ		P 16
8	土師器	甕	ビット	19.0	4.2	-	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ		P 6
9	土師器	甕	床底	-	3.4	8.2	ヘラナデ	ナデ	ナデツケ (マメツ)		P 8
10	須恵器	大甕	床底	-	5.5	-	縁目状平行印巻	ナデ			P 2, 分析 5

2 号住居跡出土遺物 (2)

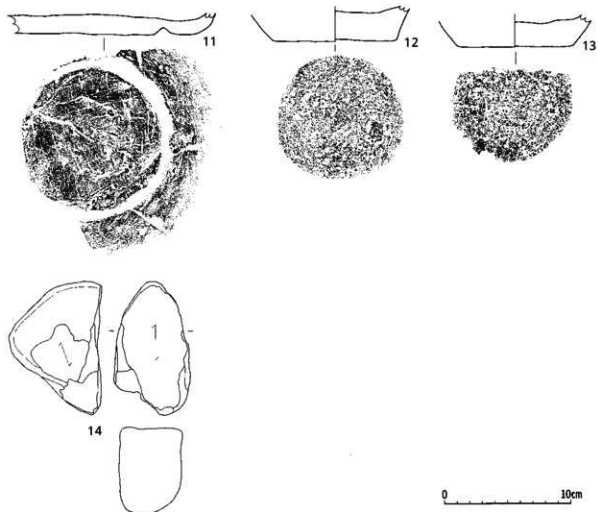
図版番号 26

図版番号	種別	器種	部位	計測値 (cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
				口径	器高	底径					
26-1	土師器	瓿・鉢	床底	-	2.4	18.0	ヘラナデ	ナデ	木炭層	ナデ	P 5, P 7
2	土師器	甕	カマド	-	2.6	10.0	ヘラナデ	ナデツケ	(マメツ)		P 1
3	土師器	甕	カマド	-	2.1	9.4	ヘラナデ	ナデツケ	(マメツ)		P 2

2 号住居跡出土遺物 (2)

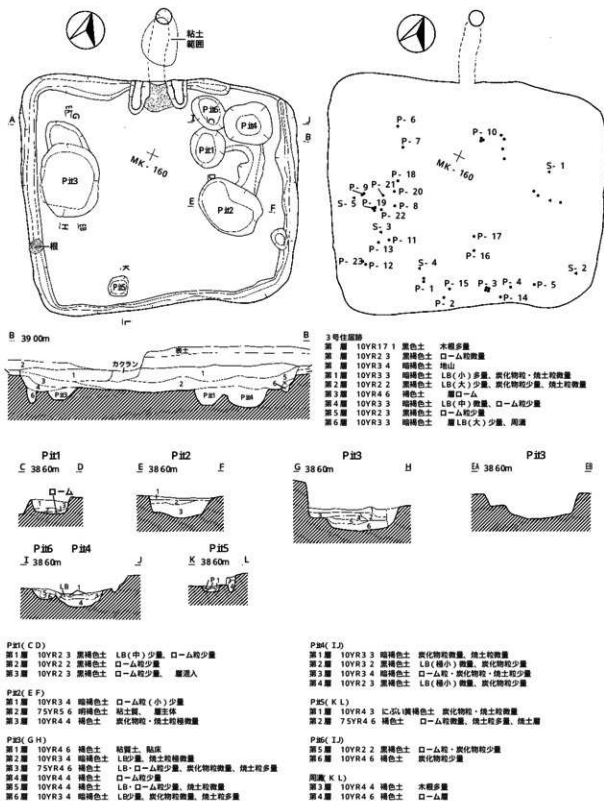
図版番号 26

図版番号	分類	出土遺構	部位	計測値				石質	備考
				長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g		
26-14	磁石	2号住居跡	P3 6層	10.7	6.2	7.4	492.0	石英安山岩	源使用, 整理 15



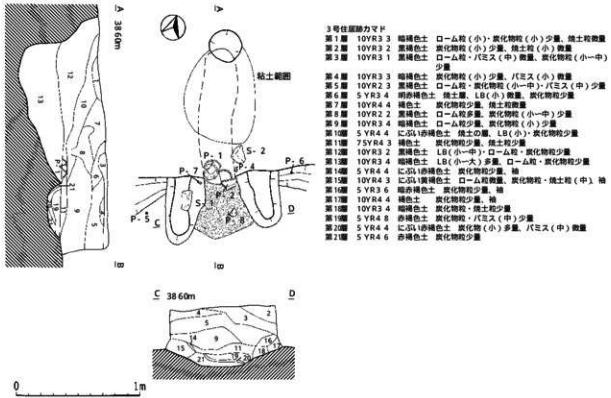
第2図 2号住居跡出土遺物(2)

- 〔壁・溝〕 カマドのある北壁の一部を除いてほぼ一周している。溝幅は5～18cm、溝の深さ8～24cmを測る。
- 〔ビット・柱穴〕 床面と壁溝から大小8個のビットを検出した。P3の堆積土中には焼土が介在していたがビットの用途、機能などは把握できなかった。また、ビットの規模、位置から主柱穴とみなすことができるものは抽出できなかった。
- 〔カマド〕 北壁のほぼ中央に付設されている。同じ位置で改築が行われたカマドである。
 【新期のカマド】 袖は円礫を半載したものを芯材としている。煙道部は、古い地下式の煙道と煙出し孔を埋めて半地下式に改造している。全長180cm、袖幅90cm、袖奥行70cm前後の規模を測る。主軸方位は、N - 23度 - Wである。
 【古期のカマド】 同じ位置で新しいカマドに改築されているため煙道部の底面と煙出し孔の輪郭以外に確認できた箇所はない。煙道部は地下式の構造である。
- 〔堆積土〕 確認面から床面までの堆積土は、6層に区分されたが、火山灰は未確認である。
- 〔遺物〕 土師器と須恵器が出土した。床面、カマド、P3～P5から土師器の坏、内黒土器、甕、磁石、また、床面直上とP3から須恵器の坏と大甕が出土した。坏(分析 8)と大甕(分析 4)の胎土分析を依頼したところ共に五所川原窯群産と推定された。

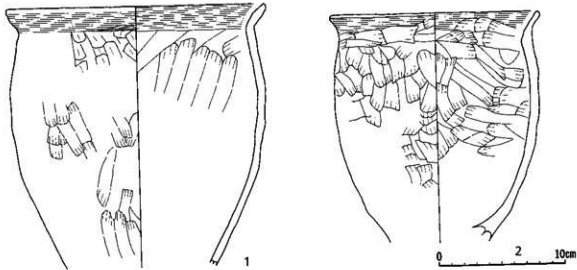


第 2 図 3号住居跡(1)

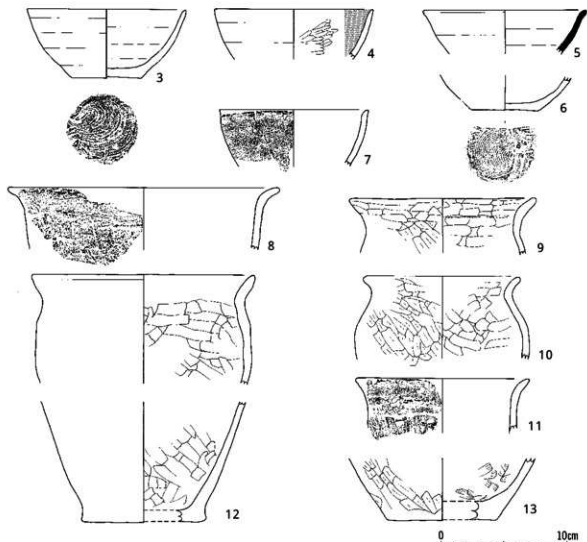
〔時期〕 火山灰の堆積が確認されていないため、それによる時期の推定はできないが、須恵器で生産地が推定されたものがあるので、それに基づいておよその年代を推定することは可能であろう。



第28図 3号住居跡(2)



第29図 3号住居跡出土遺物(1)

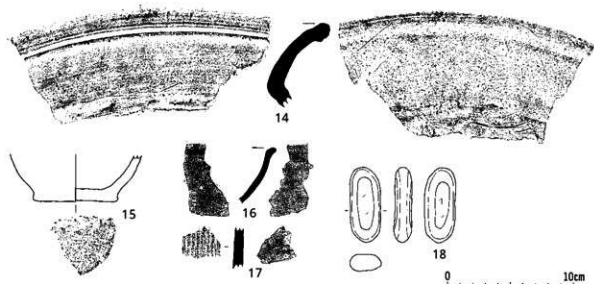


第30図 3号住居跡出土遺物(2)

3号住居跡出土遺物 1)~(3)

図録番号 29-31

図録番号	種別	器種	属性	計測値 (cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
				口径	器高	底径					
28	土師器	甕	床・P3	210	210	-	ヨコナデ ヘラナデ	ヨコナデ ヘラナデ	-	P. 1 補P. 7	
2	土師器	甕	カマド床	170	182	100	ヨコナデ ヘラナデ	ヨコナデ	-	P. 2	
30	土師器	坏	カマド (128)	56	56	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	-	P. 1, 4 1 次	
4	土師器	坏	カマド (128)	48	-	ロクロ	ロクロ	三方キ・内底	-	5 6 次	
5	須恵器	坏	カマド (132)	46	-	ロクロ	ロクロ	-	-	5 6 次	
6	土師器	坏	P3	28	54	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	-	P. 26 糸切失敗	
7	土師器	坏	カマド (120)	46	-	ロクロ	ロクロ	-	-	P. 3, 3 4 次	
8	土師器	甕	床 直 (164)	55	-	ヨコナデ ヘラズリ	ヨコナデ ヨコナデ	-	-	P. 2 と同じ體付?	
9	土師器	甕	床 直 (154)	50	-	ヨコナデ ヘラズリ	ヨコナデ (粘土層ママ)	-	-	P. 10, 3 4 次	
10	土師器	甕	床 直 (128)	80	-	ヨコナデ ケズリ・ナデ	ヨコナデ ヨコナデ	-	-	P. 13, 3 4 次	
11	土師器	甕	床 直 (146)	48	-	ヨコナデ ヘラズリ	ヘラズリ	-	-	5 6 次, 赤皮	
12	土師器	甕	床・P3 (162)	90	110	(マメツ不明)	ヨコナデ ヘラズリ	木葉織	-	P. 9 外, 3 4 次	
13	土師器	甕	増殖土	56	84	ヘラズリ	ナデ	-	-	P. 9 外, 3 4 次	
31-14	須恵器	大甕	増殖土 (480)	70	-	ロクロ	ロクロ	-	-	M.J 160c 採出	
15	土師器	甕	P3	38	72	ヘラナデ	ナデ	(ヘラナデ・マメツ)	-	-	
16	須恵器	坏	床 直	45	-	ロクロ	ロクロ	-	-	分析 Ⅷ・P. X	
17	須恵器	大甕	カ・カ・P3	23	-	縄目状平行叩き	当て具履 ナデ	-	-	分析 Ⅷ・P. X	



第3図 3号住居跡出土遺物(3)

3号住居跡出土遺物(3)

図録番号 31

図録 番号	分類	出土遺構	層位	計測値					石質	備考
				長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	目録 No.		
31-1	磁石	阿住居跡	P堆積土	6.1	2.5	1.5	292		石瓦安山岩	燻使用、小型、整理 16

4号住居跡(第32~34図、写真10・51・52)

[位置] 本住居跡は、MT・MU-170 171グリッドに位置している。周辺には13号住居跡、4号円形周溝などが構築されているが重複した遺構はない。

[平面形・規模] 平面プランは、方形で、規模は小型である。各辺の壁長は、北東壁2.4m、南東壁3.5m、南西壁2.4m、北西壁2.55mを測る。床面積は、6.12㎡の規模がある。

[壁・床] 地山ローム層を掘り下げて構築したもので堅固な造りである。壁の高さは、カマドのある北東壁44~27cm、南東壁27~40cm、南西壁40~33cm、北西壁33~44cmを測る。北隅寄りの壁が高く東隅の壁が低い。床面は凹凸が少なく、硬化した部分も多い。

[壁溝] 認められなかった。

[ビット・柱穴] 床面の南隅と西隅から3個のビットを検出した。P1の堆積土には土器が混じり、P2、P3の深さは6cmほどである。これらのビットは主柱穴とはみなし難い。

[カマド] 北東壁の東寄りに設けられている。カマド本体は、芯材を使用しないタイプとみられる。煙道部の構造は、地下式を採用している。全長170cm、袖幅90cm、袖奥行80cmほどの規模とみられる。主軸方位は、N-26度-Eである。

[堆積土] 11層に区分された。自然堆積したものとみられる。3層中にはB Tm火山灰が、また、カマドの煙出し孔にはTo a火山灰が確認されている。試料の分析結果も同様である。分析 3外

[遺物] カマド、煙道部、床面、及び堆積土から土師器の坏、甕が出土した。甕形土師器には、内黒

第 3 章 検出遺構と出土遺物

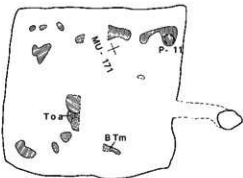
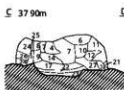
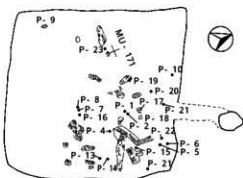
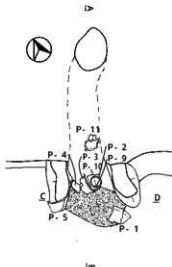
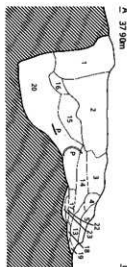
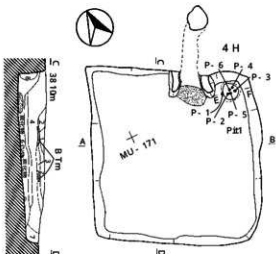
4号住居跡

- | | | | |
|------|---------|------|--------------------|
| 第1層 | 10VR3 3 | 暗褐色土 | □-△粘粒微量、炭化土混入 |
| 第2層 | 10VR2 3 | 黒褐色土 | □-△粘粒微量、木屑多量 |
| 第3層 | 10VR2 3 | 黒褐色土 | 8 Tm多量、□-△粘粒微量 |
| 第4層 | 10VR3 4 | 暗褐色土 | □-△粘、粘土微量、炭化物粒少量 |
| 第5層 | 10VR2 3 | 黒褐色土 | □-△粘、炭化物粒微量 |
| 第6層 | 10VR2 3 | 黒褐色土 | LB(小)少量、□-△粘微量 |
| 第7層 | 10VR3 4 | 暗褐色土 | LB(小)少量、□-△粘微量 |
| 第8層 | 10VR3 4 | 暗褐色土 | □-△粘微量、炭化物粒微量 |
| 第9層 | 10VR3 3 | 暗褐色土 | □-△粘微量、炭化物粒微量 |
| 第10層 | 10VR3 4 | 暗褐色土 | □-△粘粒微量、炭化物粒微量 |
| 第11層 | 10VR3 3 | 暗褐色土 | LB(中)少量、炭化物粒、粘土粒微量 |

P址(E F)

- | | | | |
|-----|---------|------|----------------|
| 第1層 | 10VR3 3 | 暗褐色土 | LB(小)少量、□-△粘少量 |
|-----|---------|------|----------------|

0 2m

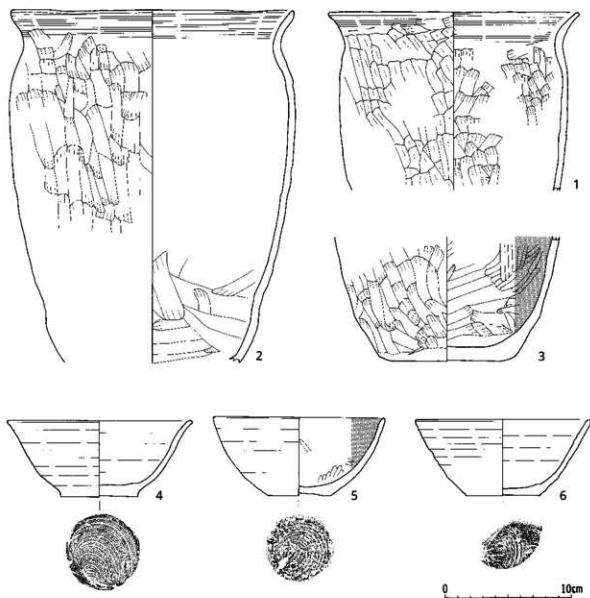


4号住居跡カマドF

- | | | | |
|------|---------|----------|----------------------|
| 第1層 | 75VR4 4 | 褐色土 | To 微量 |
| 第2層 | 10VR5 4 | 比5/1黄褐色土 | □-△層 |
| 第3層 | 10VR2 2 | 黒褐色土 | □-△粘、炭化物粒少量 |
| 第4層 | 10VR5 4 | 比5/1黄褐色土 | LB |
| 第5層 | 10VR2 2 | 黒褐色土 | □-△粘、粘土粒微量、炭化物粒少量 |
| 第6層 | 10VR3 3 | 黒褐色土 | □-△粘、炭化物粒微量 |
| 第7層 | 10VR2 2 | 黒褐色土 | □-△粘、粘土粒、粘土微量、炭化物粒微量 |
| 第8層 | 10VR2 3 | 黒褐色土 | 粘土粒、粘土少量 |
| 第9層 | 10VR2 2 | 黒褐色土 | □-△粘微量、炭化物粒、粘土粒微量 |
| 第10層 | 75VR4 4 | 褐色土 | □-△粘粒微量、粘土粒、粘土少量 |
| 第11層 | 75VR5 6 | 明褐色土 | 粘土粒少量、粘土層 |
| 第12層 | 75VR3 3 | 暗褐色土 | □-△粘、□-△粘少量 |
| 第13層 | 10VR2 1 | 褐色土 | □-△粘微量 |
| 第14層 | 75VR4 4 | 褐色土 | □-△粘粒微量、粘土粒微量 |
| 第15層 | 10VR2 2 | 黒褐色土 | □-△粘、粘土少量、粘土粒微量 |

- | | | | |
|------|---------|---------|-------------------|
| 第10層 | 75VR5 4 | 比5/1褐色土 | □-△粘少量 |
| 第11層 | 75VR3 3 | 暗褐色土 | 炭化物粒微量、粘土粒少量 |
| 第12層 | 75VR4 4 | 褐色土 | 炭化物粒、粘土粒微量 |
| 第13層 | 10VR2 2 | 黒褐色土 | □-△粘、粘土粒微量 |
| 第14層 | 10VR2 1 | 褐色土 | □-△粘微量 |
| 第15層 | 5 YR4 6 | 暗赤褐色土 | 粘土層 |
| 第16層 | 75VR4 4 | 褐色土 | □-△層 |
| 第17層 | 75VR2 2 | 暗褐色土 | 粘土粒微量 |
| 第18層 | 10VR2 2 | 暗褐色土 | □-△粘少量 |
| 第19層 | 75VR3 4 | 暗褐色土 | □-△粘、炭化物粒微量、粘土粒微量 |

第 3 図 4号住居跡

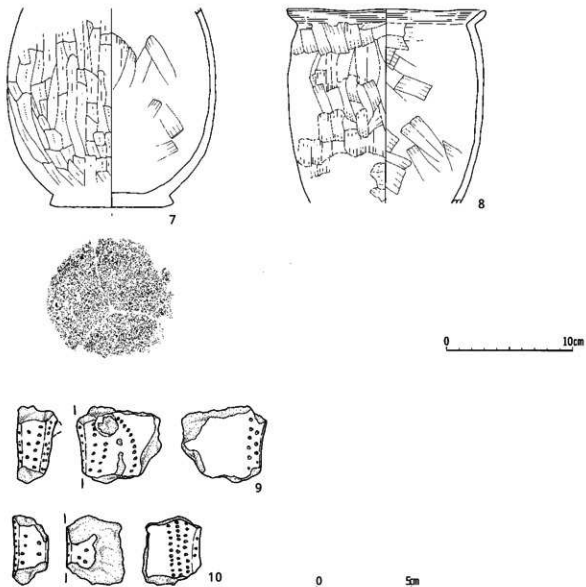


第3図 4号住居跡出土遺物(1)

4号住居跡出土遺物(1)

図録番号 33

図録 番号	種別	器種	部位	計 高さ (cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
				口 径	器 高	底 径					
33-1	土師器	甕	カマド (202)	143	-	ヨコナデ ヘラズリ	ヨコナデ オサエナデツク	-	-	P. 4, 3 4次	
2	土師器	甕	カマド	228	285	-	ヨコナデ ヲズリナデ	ヨコナデ ヘラナデナデ	-	-	P. 1-20, 1 3次
3	土師器	甕	ビット	-	100	118	ヘラズリ ヘラナデ	ナデ ナデツク-内裏	不織(マメツ)	-	P. 3
4	土師器	鉢	床 皿 (150)	62	62	ロクロ	ロクロ	ロクロ	面転糸切	-	P. 9, 3 4次
5	土師器	鉢	増積土 (138)	64	50	ロクロ	ロクロ	ミガキ-内裏	面転糸切	-	P. 12, 3 4次
6	土師器	鉢	増積土	142	61	60	ロクロ	ロクロ	静止糸切	-	P. 5, 1 2次



第 34 図 4 号住居跡出土遺物

4号住居跡出土遺物

図版番号 34

図版 番号	種 別	器 種	厚 位	計 測 値 (cm)			外 面 調 整	内 面 調 整	底 面 調 整	分 類	備 考
				口 径	口 縁 高	底 径					
34-7	土師器	壺	堆積土	-	160	100	ヘラケズリ	ナツク	不肌(マメツ)		P. 7, 13, 14
7	土師器	壺	577-遺跡	160	156	-	ヨコナデケズリ・ナデ	ヨコナデヘラナデ・ナデ	-		P. 8

4号住居跡出土遺物

図版番号 34

図版 番号	分 類	出 土 遺 構	厚 位	計 測 値				備 考
				長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	
34-9	土 甕	4号住居跡	堆積土	3.7	3.1	1.8	18.4	P. X, 銅部片, 整理 12・25別個体
10	土 甕	4号住居跡	堆積土	4.1	4.5	2.2	34.6	P. 15, 銅部片, 整理 12とは別個体, 右乳房刺鏝

土器も混じっている。また、堆積土から中期末～後期初頭の土偶が2点出土している。

〔時期〕 降下火山灰の年代からおよその廃棄時期が推定される住居跡である。

5号住居跡(第35 39図、写真11・52・53)

〔位置〕 MM-MO-16と169グリッドに位置している。本住居跡の周囲には5～7号円形周溝が構築されているが、直接的な重複は認められない。

〔平面形・規模〕 方形を呈し、各コーナーは各方位を指している。各辺の規模は、北東壁5.1m、南東壁5.25m、南西壁5.0m、北西壁5.1mである。床面積は、28.33㎡で最大級の住居跡である。

〔壁・床〕 壁は全体的に低い造りで、床は貼床が目立ち、起伏もみられる。各辺の壁の高さは、北東壁28cm前後、南東壁14cm前後、南西壁17cm前後、北西壁58cm前後である。

〔壁溝〕 北東壁辺と南西壁辺に設けられている。溝幅7～15cm、深さ5～9cmの規模である。北東壁辺の壁溝は、古いカマドの袖部分を撤去後に付設されたものであろう。

〔ビット・柱穴〕 床面と壁溝内から大小13個のビットを検出した。これらのビットの中でP4、P13、P10、P11が主柱穴と判断できる。主柱穴の配置は方形である。その他のビットはP6を除くと浅いものが多く、主柱穴とは認めがたい。土器を伴出したビットもあるがP3からは少量であるが砂鉄も検出されている。

〔カマド〕 北西壁の西隅寄りと北東壁の東隅寄りから新旧2基検出された。前者が新しいカマドである。

【新期のカマド】 本体は、礫を芯材としたもので、煙道部は地下式の構造である。煙出し孔は6号円形周溝と接している。全長190cm、袖幅、奥行きともに90cm前後とみられる。主軸方位は、N-50度-Wである。

【古期のカマド】 本体は削平されていたが、袖の芯材に礫を利用した痕跡がみられた。地下式の煙道部は住居跡外に140cmほどのびている。この主軸方位は、N-42度-Eである。

〔堆積土〕 15層に区分された。自然堆積したものである。1層は、6、7号円形周溝の盛土が流れ込んで形成されたものであろう。床面に接した5～7層で確認された火山灰は、蛍光X線分析を依頼していないが、Toa火山灰とみてほぼ間違いない。

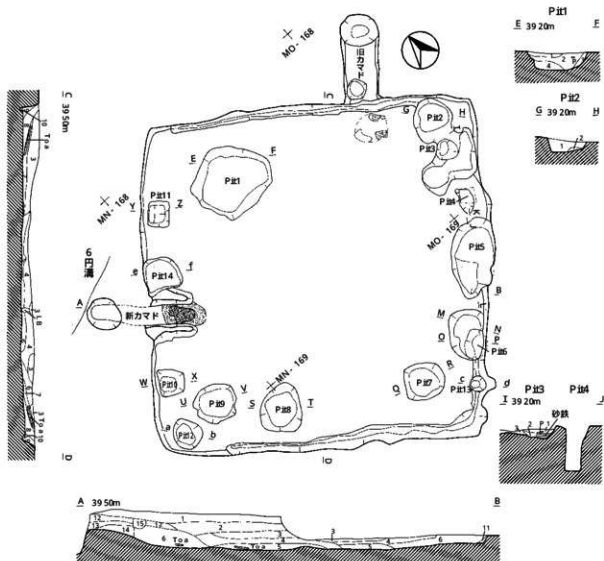
〔遺物〕 土師器、須恵器、鉄器、砂鉄、石製品、石器などがカマド、床面、ビット、床面直上、及び堆積土から出土した。

土師器は、坏3点、小型甕2点、手捏土器1点などである。

須恵器は、大甕、長頸壺、坏である。胎土分析の結果、大甕と長頸壺の各1点は、五所川原窯群産(分析 3.20)、長頸壺の2点は岩手・瀬谷子産(分析 12.16)と推定された。(胎土分析 12は、6円溝出土の同一個体を分析したので、5号住居の観察表には不記載)鉄器は、3点である。床面直上から出土した2点(F2は錆着して器種は不詳である。その他の1点(F1は確認面から発見したものである)。

石製品は、砥石で床面から3点まとまって出たものである。石器は、石鏃で確認面から出たものである。

〔時期〕 カマドの煙道部が地下式から半地下式に改築された時期は、Toa火山灰降下以前である。また、この火山灰の降下年代によって住居跡の年代が推定されるものと考えられる。



5号住居跡

第1層 10YR3 1	黒褐色土	ローム粒微量、炭化物粒極微量、6円溝土の流れ込み
第2層 10YR1 7 1	黒褐色土	ローム粒微量、炭化物粒極微量、7円溝土の流れ込み
第3層 10YR3 4	暗褐色土	ローム粒、黒褐色土少量、炭化物粒微量
第4層 10YR2 3	黒褐色土	ローム粒、黒褐色土少量、炭化物粒微量
第5層 10YR5 6	黄褐色土	To 6%微量、層8%少量、層ローム粒多量
第6層 10YR3 4	暗褐色土	To 6%微量、ローム粒少量、炭化物粒微量
第7層 10YR3 3	暗褐色土	To 6%微量、ローム粒少量、炭化物粒微量
第8層 10YR3 4	暗褐色土	ローム粒微量、炭化物粒微量
第9層 10YR3 4	暗褐色土	ローム粒少量
第10層 10YR4 6	褐色土	ローム粒、炭化物粒極微量
第11層 10YR4 6	褐色土	層ローム粒少量
第12層 10YR4 4	褐色土	ローム粒微量、6円溝土の流れ込み
第13層 10YR3 3	暗褐色土	層地山、層粒微量、炭化物粒極微量
第14層 10YR5 8	黄褐色土	層地山、炭化物粒微量
第15層 10YR4 4	褐色土	第1層のブロック

P#1(E,F)

第1層 10YR4 6	褐色土	ローム粒少量、炭化物粒・焼土粒極微量
第2層 10YR4 4	褐色土	LB(大)少量、炭化物粒微量
第3層 10YR4 4	褐色土	黒褐色土多量、ローム粒・炭化物粒少量
第4層 10YR5 6	黄褐色土	層・焼土粒極微量

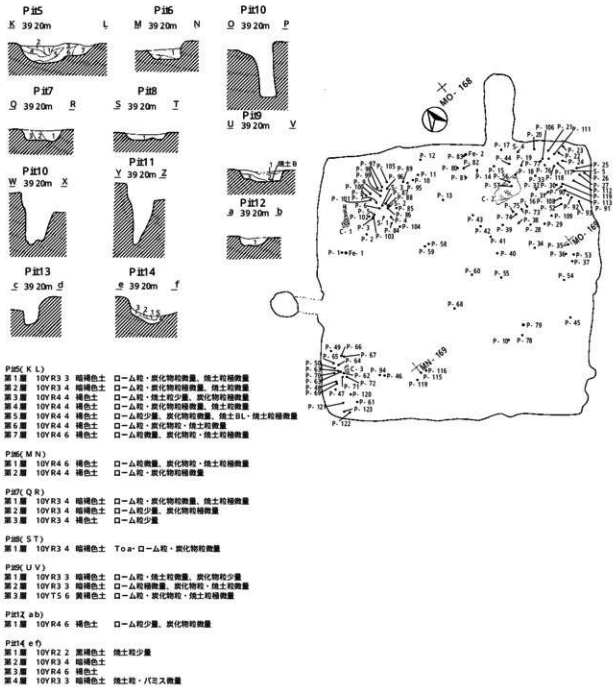
P#2(G,H)

第1層 10YR4 4	褐色土	ローム粒・炭化物粒極微量、焼土粒微量
第2層 10YR4 6	褐色土	ローム粒極微量

P#3(I,J)

第1層 10YR4 6	褐色土	ローム粒・焼土粒少量、炭化物粒微量
第2層 10YR3 3	暗褐色土	ローム粒・焼土粒微量
第3層 10YR4 4	褐色土	ローム粒・炭化物粒・焼土粒極微量

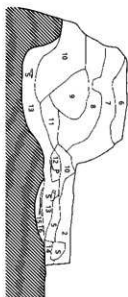
第3図 5号住居跡(1)



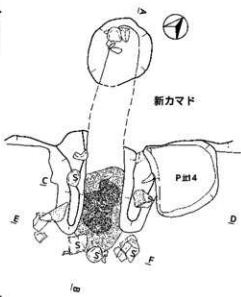
第35図 5号住居跡(1)

5号住居跡新カマド

- | | | | |
|------|-----------|-------|-------------------|
| 第1層 | 10YR3 3 | 暗褐色土 | 焼土粒少量 |
| 第2層 | 10YR4 4 | 褐色土 | To・炭屑、炭化植物・焼土粒粒少量 |
| 第3層 | 10YR3 3 | 暗褐色土 | 焼土粒少量 |
| 第4層 | 10YR3 2 | 灰褐色土 | 炭化植物・焼土粒少量 |
| 第5層 | 7.5YR4 4 | 褐色土 | 焼土粒粒少量 |
| 第6層 | 10YR3 3 | 灰褐色土 | 焼土粒粒少量、パリス粉少量 |
| 第7層 | 10YR4 4 | 褐色土 | パリス粉少量 |
| 第8層 | 10YR3 4 | 暗褐色土 | Le砂少量 |
| 第9層 | 10YR5 6 | 黄褐色土 | |
| 第10層 | 10YR4 6 | 褐色土 | |
| 第11層 | 7.5YR3 4 | 暗褐色土 | |
| 第12層 | 5 YR3 6 | 暗赤褐色土 | 焼土粒少量 |
| 第13層 | 7.5YR3 4 | 暗褐色土 | 焼土粒少量 |
| 第14層 | 10TR 17 1 | 黒色土 | 炭化植物、焼土粒少量 |
| 第15層 | 5 YR4 6 | 赤褐色土 | 火床面 |
| 第16層 | 5 YR3 6 | 暗赤褐色土 | 火床面 |
| 第17層 | 7.5YR4 6 | 褐色土 | 釉、焼土粒少量 |



A 39.60m



新カマド

E 39.60m

B



F

C 39.60m

新カマド

D

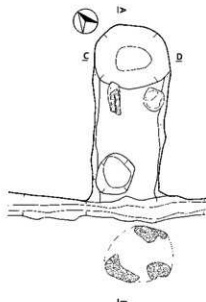


5号住居跡旧カマド

- | | | | |
|------|----------|------|---------------|
| 第1層 | 10YR3 4 | 暗褐色土 | 焼土粒少量、パリス粉少量 |
| 第2層 | 10YR4 4 | 褐色土 | 焼土粒少量 |
| 第3層 | 7.5YR4 4 | 褐色土 | 焼土粒少量 |
| 第4層 | 7.5YR3 4 | 暗褐色土 | パリス粉少量 |
| 第5層 | 10YR3 4 | 暗褐色土 | パリス粉少量 |
| 第6層 | 7.5YR4 4 | 褐色土 | 焼土粒少量 |
| 第7層 | 10YR3 3 | 暗褐色土 | ローム粒少量、炭化植物少量 |
| 第8層 | 10YR3 3 | 暗褐色土 | ローム粒少量、炭化植物少量 |
| 第9層 | 10YR3 4 | 暗褐色土 | ローム粒・焼土粒少量 |
| 第10層 | 7.5YR4 4 | 褐色土 | 焼土粒少量 |
| 第11層 | 5 YR4 6 | 赤褐色土 | 火床面 |
| 第12層 | 7.5YR3 4 | 暗褐色土 | |



A 39.60m



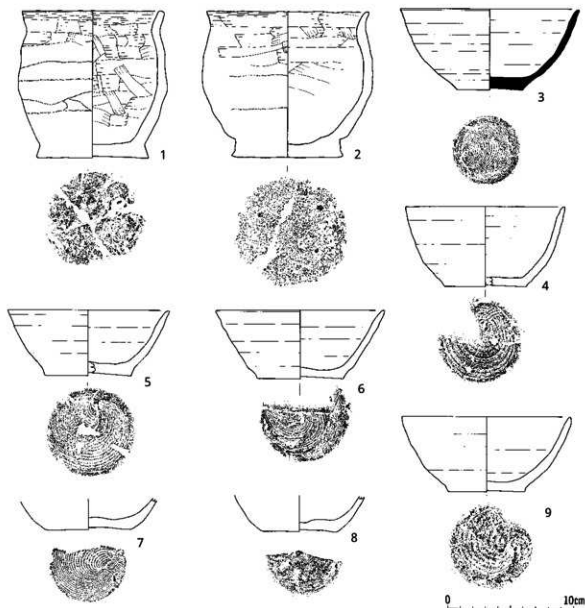
C 39.60m

旧カマド



0 1m

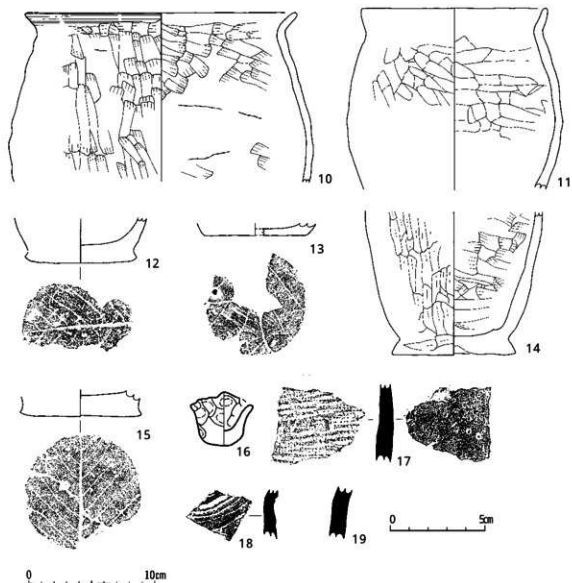
第3図 5号住居跡(2)



第3図 5号住居跡出土遺物(1)

5号住居跡出土遺物(1)
図録番号 37

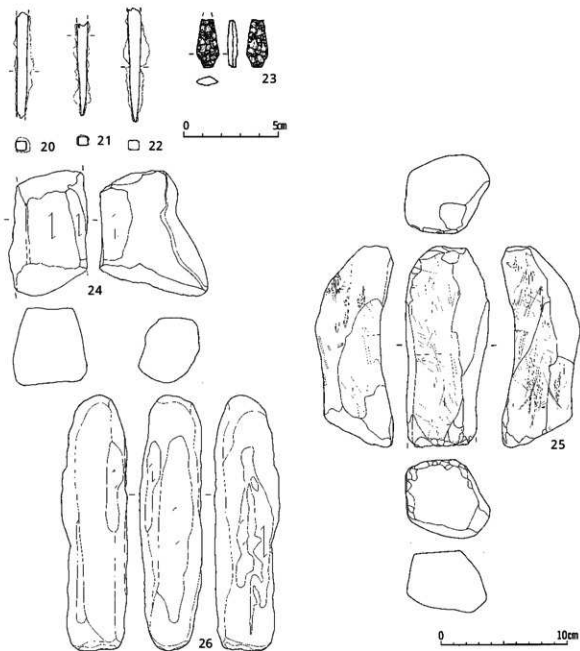
図録 番号	種別	器種	部位	計測値(cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
				口径	器高	底径					
37-1	土師器	甕	ビット	115	118	90	ヨコナデ 粘土色オサエマ	ヨコナデ ヘラナデナデ	(ヘラナデリ)		
2	土師器	甕	底	131	117	90	ヨコナデ 新漆丹 不明	ヨコナデ ナデツク	不明 マメツ		P 50 左脚粘用
3	須恵系	埴	底	144	65	54	ロクロ	ロクロ	回転糸切り		P 11, 6, 1 2次
4	土師器	埴	底	128	64	66	ロクロ	ロクロ	(静止糸切り)		P 71, 72, 2 次
5	土師器	埴	底	130	53	70	ロクロ	ロクロ	回転糸切り		P 45, 46, 1 2次
6	土師器	埴	新力マド	136	55	70	ロクロ	ロクロ	回転糸切り		KP. 4 5, 2 次
7	土師器	埴	底	-	25	70	ロクロ	ロクロ	糸切り ケズリ		P 67
8	土師器	埴	新力マド	-	29	60	ロクロ(マメツ)	ロクロ ナデ	(糸切り ナデ)		P 3 底面腐化
9	土師器	埴	底	136	60	62	ロクロ	ロクロ	回転糸切り		3 次, ヘラおこし



第 38 図 5号住居跡出土遺物 2)

5号住居跡出土遺物 2)

図録 番号	種別	器種	部位	計測値 (cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
				口径	器高	底径					
38	土師器	壺	肩直	220	135	-	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	-		P. 56, 57 外
11	土師器	壺	P3・床直	154	146	-	ヨコナデ ヘラズリ	ヨコナデ ヨコナデ	-		P. 31, 108
12	土師器	壺	肩直	-	34	9.0	ヘラナデ	ナデツケ	木製		P. 41
13	土師器	壺	肩直	-	15	8.4	(ヘラズリ)	ナデ	木製		P. 33
14	土師器	壺	P1	-	115	105	ヘラズリ ナデ	ヨコナデ ナデツケ	(印き付け) ナデ		P. 105
15	土師器	壺	新力マド	-	21	9.8	(ヘラナデ)	(ナデツケ)	木製		P. 8, 9
16	土師器	手摺	埴輪土	3.4	2.9	1.8	ヨビオサエ	ヨビオサエ	無調整		P. 55
17	須恵器	大甕	床直				縄目状平行印	ナデ	-		P. 54 分析 3
18	須恵器	長頸壺	埴輪土				口ウ(凸部有り)	口ウ口	-		P. 1 分析 20
19	須恵器	長頸壺	埴輪土				口ウ口	口ウ口	-		P. X 分析 16



第39図 5号住居跡出土遺物(3)

5号住居跡出土遺物(3)

図説番号 39

図説 番号	分類	出土遺構	層位	計測値					備考
				長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g		
20	鉄製品	5号住居跡	礎石層	5.7	0.5	0.8	5.4		細い角棒の一端が先折れ状、F. 1整理 25
21	鉄製品	5号住居跡	床 直	5.1	0.6	0.6	2.9	同上	F. 2 1整理 26
22	鉄製品	5号住居跡	床 直	6.1	0.7	0.5	6.8	同上	F. 2 1c調整、整理 27

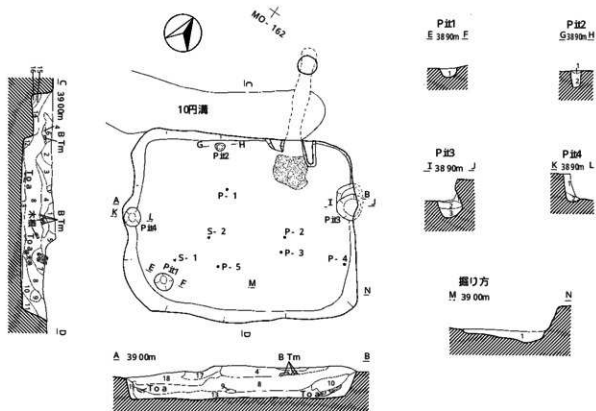
図説 番号	分類	出土遺構	層位	計測値				材質	備考
				長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g		
23	石 錘	5号住居跡	礎石層	2.5	1.1	0.5	1.3	地盤貫刺	Y基、折損、アスファルト付、整理 1
24	砥 石	5号住居跡	床直直上	10.1	6.3	8.7	6077	石英安山岩	S. 4同編次、2面使用、整理 17
25	砥 石	5号住居跡	床 直	16.2	6.7	6.8	6600	変形安山岩	S. 3丹孔、砂、2面使用、整理 19
26	砥 石	5号住居跡	床 直	20.5	5.0	5.3	5777	緑色凝灰岩	S. 2同編打痕、3面使用、整理 18

6号住居跡(第40~42図、写真11・53)

[位置] MN・MO-162 163リッドに位置している。本住居跡の周囲には1、8、9、10号円形周溝が構築されている。

[重複] 10号円形周溝と重複して、本住居の北西壁が一部削平されている。

[平面形・規模] 隅丸長方形である。各コーナーは、ほぼ各方位を向いている。各壁の長さは、北東



6号住居跡

第1層	10VR 2 3	黒褐色土	ローム粒・炭化物粒極微量
第2層	10VR 2 1	黒色土	ローム粒微量。炭化物粒極微量
第3層	10VR 2 2	黒褐色土	ローム粒。炭化物粒極微量
第4層	10VR 2 1	黒色土	ローム粒少量。炭化物粒・焼土粒極微量
第5層	10VR 2 2	黒褐色土	ローム粒・炭化物粒・焼土粒極微量
第6層	10VR 2 2	黒褐色土	ローム粒極微量。炭化物粒微量
第7層	10VR 2 2	黒褐色土	ローム粒少量。炭化物粒・焼土粒極微量
第8層	10VR 3 3	暗褐色土	B Tm・LB・ローム粒少量。炭化物粒極微量。焼土粒微量
第9層	10VR 2 2	黒褐色土	ローム粒少量。炭化物粒微量
第10層	10VR 3 3	暗褐色土	LB少量。炭化物粒極微量
第11層	10VR 3 3	暗褐色土	ローム粒少量。炭化物粒・焼土粒極微量
第12層	10VR 3 3	暗褐色土	ローム粒微量
第13層	10VR 3 3	暗褐色土	Toa・ローム粒・焼土粒微量。炭化物粒極微量
第14層	10VR 3 3	暗褐色土	ローム粒微量。炭化物粒極微量
第15層	10VR 4 4	褐色土	ローム粒極微量
第16層	10VR 2 3	黒褐色土	ローム粒少量
第17層	10VR 4 3	にぶい黒褐色土	LB・ローム粒少量
第18層	10VR 4 3	暗褐色土	LB・ローム粒。炭化物粒少量
第19層	10VR 3 2	黒褐色土	ローム粒・炭化物粒少量

P.11(E F)

第1層 10VR 4 3 にぶい黒褐色土 LB・焼土粒・炭化物粒少量

P.12(G H)

第1層 10VR 4 3 にぶい黒褐色土 炭化物粒少量

第2層 10VR 4 6 褐色土 炭化物粒少量

P.13(I J)

第1層 10VR 3 2 黒褐色土 ローム粒・炭化物粒少量

第2層 10VR 4 4 褐色土 LB・炭化物粒少量。焼土粒微量

第3層 75VR 4 6 褐色土 炭化物粒・焼土粒少量

P.14(K L)

第1層 10VR 2 2 黒褐色土 ローム粒・炭化物粒少量

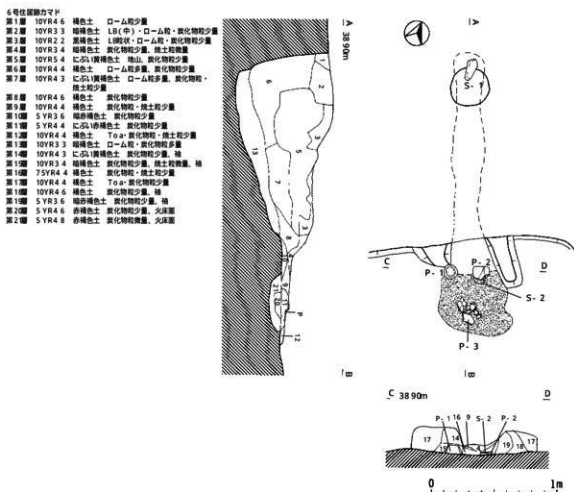
第2層 10VR 4 4 褐色土 LB・炭化物粒少量。焼土粒微量

掘り方(M N)

第1層 10VR 3 2 黒褐色土 LB多量。ローム粒・炭化物粒少量

0 2m

第4図 6号住居跡(1)



第4図 (6号住居跡 2)

壁 2.5m前後、南東壁 3.1m前後、南西壁 2.5m前後、北西壁 3.2m前後である。また、床面積は 8.66㎡を測る。

〔壁・床〕 壁、床ともに地山ローム層を掘り下げて構築されたもので堅緻である。各壁の高さは、北東壁 40～35cm、南東壁 38cm前後、南西壁 35～40cm、カマドが付設された北西壁は重複のため 15cm前後残存していたが、本来の高さは 45cm前後とみられる。床面は、10cm前後の起伏が認められる。床の標高は、38.28m～38.37mである。

〔壁 溝〕 確認されなかった。

〔ピット・柱穴〕 住居の床面から大小 4 個のピットを検出した。これらのピットは、位置、規模など

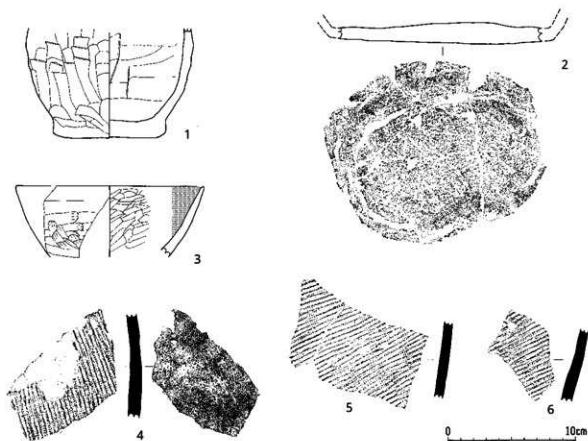
からみて主柱穴とは判断できかねるものである。

〔カマド〕 北西壁の北隅寄りに付設されている。本体の遺存状態は、良好でないが、土師器と礫を芯材としたカマドとみられる。煙道部は、地下式の構造である。全長 240cm、袖幅 85cm、奥行 90cmほどの規模と推定される。主軸方位は、N - 25度 - W である。

〔堆積土〕 19層に分層された。根による攪乱も多少みられるが自然堆積したものである。4層には B Tm 火山灰、床面直上には To a 火山灰が確認されている。

〔遺物〕 出土した遺物は僅少である。カマドと床面直上から埴の底部、甕形土師器、須恵器の大甕片が出ただけである。須恵器大甕は、胎土分析の結果、五所川原窯群産（分析 1）と判定された。堆積土からは、内黒の坏、縄文土器なども出ている。

〔時期〕 To a 火山灰の降下年代から本住居跡の廃棄年代が推定できるものと考えてよからう。



第 4 図 6号住居跡出土遺物

6号住居跡出土遺物

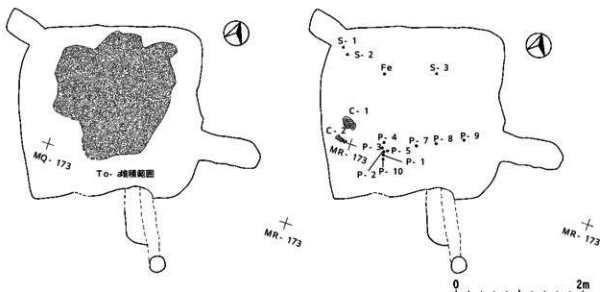
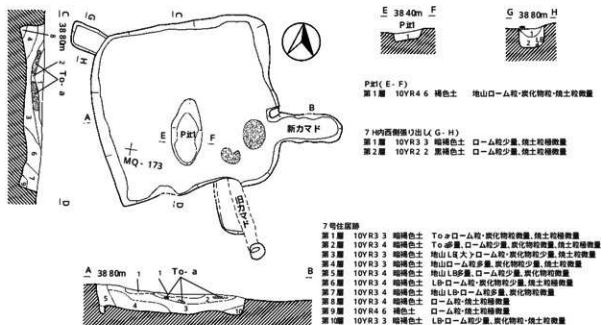
図録番号	種別	器種	部位	計測値 (cm)		外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
				口径	器高					
42-1	土師器	甕	カマド	-	9.8	9.0	ヘラケズリ ナデ	ナデ ナデツケ	ナデ マメツ	P. 1 下半部支脚
2	土師器	(壊)	頸F・底	-	13	17.5	ヘラナデ	ヘラナデ	(ヘラナデ) マメツ	PK. 2, P. 3
3	土師器	坏	堆積土	15.0	5.4	口ウロ	口ウロ 乱ガキ・内黒	-	-	5 破
4	須恵器	大甕	床直				縄目状平行叩き	当て具履 ナデ	-	胎土分析 1
5	須恵器	大甕	堆積土				縄目状平行叩き	当て具履 ナデ	-	同一器体 2/4
6	須恵器	大甕	床直				縄目状平行叩き	当て具履 ナデ	-	P. 2 外

7号住居跡(第43~45図、写真12・54)

[位置] MP・MQ・172・173グリッドに位置している。標高38mほどの東に面した斜面に立地した住居跡である。

[重複] 時期的に相当新しい1号溝状遺構によって切られている

[平面形・規模] 住居の本体は方形であるが、住居の北西隅に30・50cmほどの張出部が認められる。



第4図 7号住居跡(1)

各辺の壁の長さは、東壁 2.4m、南壁 2.4m、西壁 2.5m、北壁 2.3mの規模である。床面積は、6.37㎡を測り、比較的小型の住居である。

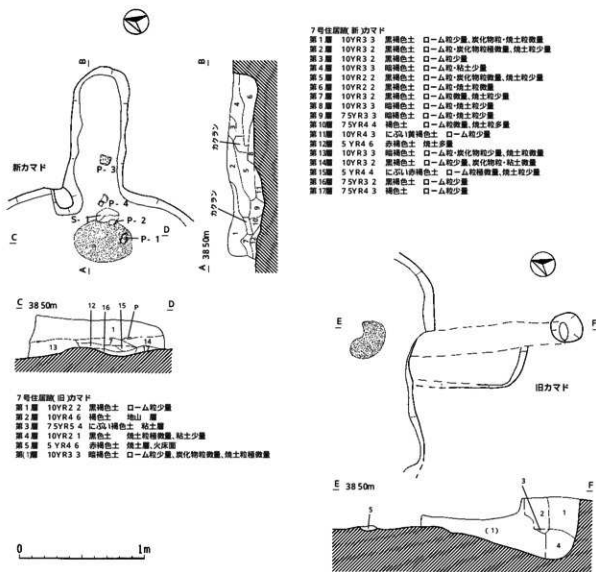
〔壁・床〕 壁、床ともに地山ローム層を掘り下げて造られたものである。各壁の高さは、ほぼ平均している。東壁 28cm前後、南壁 35cm前後、西壁 30cm前後、北壁 25cm前後の規模である。床面は堅緻な箇所もあるが、起伏もある。

〔壁 溝〕 認められなかった。

〔ピット・柱穴〕 ピットは、1個だけ確認したが、柱穴とは捉え難い形状である。

〔カマド〕 東壁の南東隅寄りと南壁の南東隅寄りから新旧 2 基のカマドを検出した。東壁のカマドが新しいカマドである。

【新期のカマド】 本体はすでに破損していたが、芯材として礫を利用したカマドとみられる。煙道部の構造は半地下式で、全長 180cm、袖幅 100cm、袖奥行 70cm前後の規模と推測さ



第 44 図 7号住居跡(2)

れる。主軸方位は、N - 80度 - Eである。

【古期のカマド】 本体は削平されて、火床面と煙道部だけを確認した。当初、張出部とみて対応したが、床面を精査したところ火床面が現れた。煙道部は、地下式の構造が採用されて、全長190cmほどとみられ、煙道部は住居外へ100cmほどのびている。この時期の主軸方位は、N - 152度 - Eを指している。

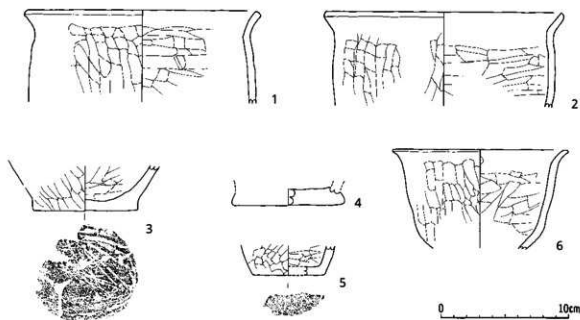
【その他の施設】 北西隅の壁が床と同じレベルまで掘り下げられて、30 50cmの張出部が造られていた。出入口とすれば規模が小さいようであるが、住居と同時に使用された施設と考えられる。

【堆積土】 10層に分けられた。自然堆積したものである。暗褐色土が基調をなしている。確認面に近い2層にはTo a火山灰が確認された。分析結果も同様の判定が示されている。

【遺物】 床面から大小の硯形土師器が7個体出土した。

堆積土からは、長頸壺、鉄滓などが出土している。

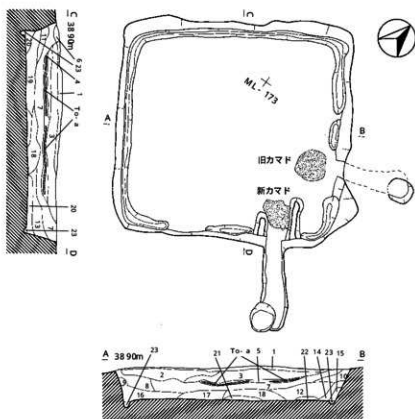
【時期】 本住居跡は、To a火山灰降下以前に廃絶したものとみられる。また、カマド煙道部の改築（地下式 半地下式の開始）も、十和田a火山灰降下以前であることを明白に残している住居跡である。



第45図 7号住居跡出土遺物

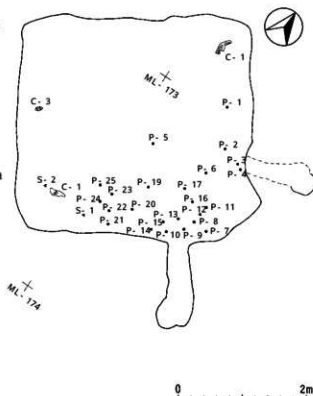
7号住居跡出土遺物

図面番号	種別	種類	部位	計測値 (cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
				口径	器高	底径					
6-1	土師器	甕	床面	190	75	-	ヨコナデ ヘラナデ	ヨコナデ ヘラナデ	-		P. 6.3 收
2	土師器	甕	床面	190	75	-	ヨコナデ ヘラケズリ	ヨコナデ ヨコハケメ	-		P. 6.2 二次焼成
3	土師器	甕	カマド	-	35	84	ヘラケズリ	ナゲツケ	ナゲツケ		P. 1.2 二次焼成
4	土師器	甕	床面	-	15	90	ヘラナデ	ナゲツケ	(不明 穴メツ)		P. 10.2 二次焼成
5	土師器	甕	床面	-	29	58	ヘラナデ	ヨコナデ	ヘラナデ		P. 6
6	土師器	甕	床面	140	79	-	ヨコナデ ヘラケズリ	ヨコナデ ヘラナデ	-		P. 17.2 二次焼成



8号住居跡

- | | | | |
|------|----------|------|-------------------------|
| 第1層 | 10YR17 1 | 黒色土 | ローム粒極微量 |
| 第2層 | 10YR3 3 | 暗褐色土 | ローム粒・炭化物粒極微量 |
| 第3層 | 10YR2 3 | 黄褐色土 | ローム粒微量 |
| 第4層 | 10YR3 3 | 暗褐色土 | To a微量・L中微量、ローム粒・炭化物粒微量 |
| 第5層 | 10YR3 3 | 暗褐色土 | To a微量、ローム粒微量、炭化物粒微量 |
| 第6層 | 10YR4 4 | 褐色土 | ローム粒・炭化物粒極微量 |
| 第7層 | 10YR3 4 | 暗褐色土 | ローム粒少量、炭化物粒極微量 |
| 第8層 | 10YR4 4 | 褐色土 | ローム粒中少量、炭化物粒微量 |
| 第9層 | 10YR3 3 | 暗褐色土 | L中大微量 |
| 第10層 | 10YR3 3 | 暗褐色土 | ローム粒・焼土粒微量 |
| 第11層 | 10YR3 4 | 暗褐色土 | ローム粒少量、炭化物粒極微量 |
| 第12層 | 10YR3 4 | 暗褐色土 | L中少量炭化物粒微量、ローム粒大少量 |
| 第13層 | 10YR2 3 | 黄褐色土 | ローム粒大少量、炭化物粒微量 |
| 第14層 | 10YR2 3 | 黄褐色土 | ローム粒・炭化物粒・焼土粒極微量 |
| 第15層 | 10YR3 4 | 暗褐色土 | 黄褐色土少量 |
| 第16層 | 10YR4 4 | 褐色土 | ローム粒・炭化物粒少量 |
| 第17層 | 10YR3 4 | 暗褐色土 | L中少量 |
| 第18層 | 10YR2 3 | 黄褐色土 | ローム粒少量 |
| 第19層 | 10YR3 4 | 暗褐色土 | L中大少量、ローム粒・炭化物粒微量 |
| 第20層 | 10YR2 3 | 黄褐色土 | L中少量、ローム粒微量、炭化物粒極微量 |
| 第21層 | 10YR5 4 | 灰色土 | L中少量、ローム粒微量、炭化物粒極微量 |
| 第22層 | 7.5YR3 4 | 暗褐色土 | 粘質土、焼土混入 |
| 第23層 | 10YR4 4 | 褐色土 | 粘質土、炭化物粒微量、焼土粒極微量 |



第4図 8号住居跡(1)

8号住居跡(第46~50図、写真12・54)

〔位置〕 MK・ML-172 173グリッドに位置している。本住居跡から東へ15mの位置には7号住居跡、また、南東へ20mには10号住居跡が配置されている。

〔重複〕 認められなかった。

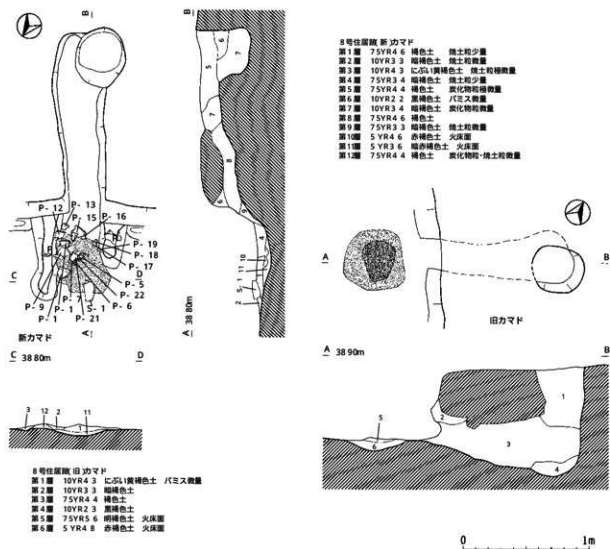
〔平面形・規模〕 住居跡は、方形である。その対角線は、各方位に向いている。各壁の長さは、31~33mで、床面積は、1088㎡を測り、本遺跡では中規模の住居跡である。

〔壁・床〕 壁、床ともに地山ローム層を掘り下げて構築したものである。各壁の高さは、平均的に高く50~55cmである。床面は、平坦で相当に堅い造りである。

〔壁溝〕 新旧のカマドが付設された箇所を除いてほぼ一周している。規模は、溝幅10~25cm、深さ7~14cmである。

〔ピット・柱穴〕 ピット、柱穴などの施設は全く検出されなかった。

〔カマド〕 新旧2基検出された。



第4図 8号住居跡(2)

【新期のカマド】南東壁の東隅寄りに設けられているが、廃絶後相当攪乱されている。本体の構造は判然としないが、土師器と礫を芯材に利用した形跡が若干残っている。煙道部は地下式の構造である。全長 215cm、袖幅 80cm、袖奥行 70cm 前後の規模とみられる。主軸方位は、N - 143度 - E である。

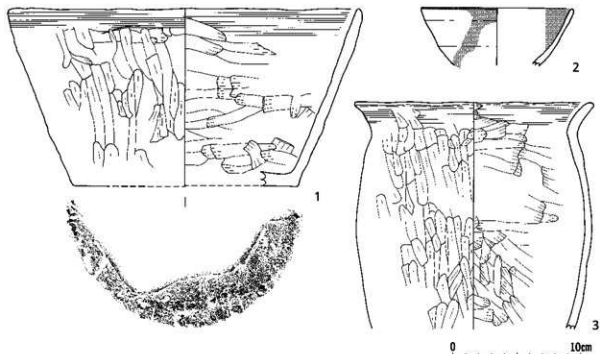
【古期のカマド】改築以前のカマドは、北東壁の東隅寄りに設けられている。火床面と煙道部だけが遺存しているカマドである。煙道部は、地山ローム層を掘り抜いた地下式の構造である。全長 200cm、煙道の長さ 100cm、煙出し孔の深さ 80cm、煙出し孔の径 30 - 40cm の規模を測る。主軸方位は、N - 70度 - E である。

【堆積土】 壁が高いためか 23層に区分された。自然堆積したものとみられる。堆積土のほぼ中間にある 5 層では To a 火山灰が確認された。この火山灰は、分析を依頼しなかったがほぼ間違いなく To a 火山灰であろう。

【遺物】 土師器、須恵器、石製品が出土した。

土師器は、硯、鉢、埴、坏が床面と新期のカマドから、また、須恵器は、長頸壺が認められる。須恵器の胎土分析を依頼した（分析 15）ところ、産地は不明と判定された。

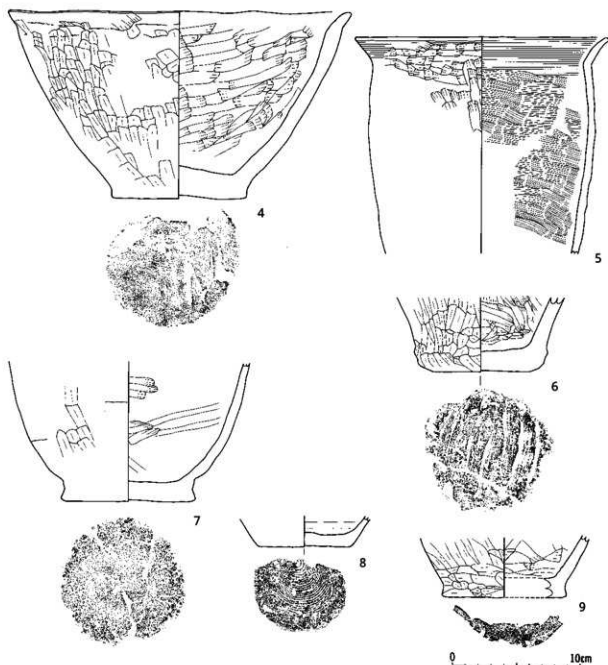
【時期】 住居跡及び遺物の時期は、To a 火山灰の降下以前、9 世紀後半から 10 世紀初頭までの間と考えられる。



第 4 図 8 号住居跡出土遺物 1)

8 号住居跡出土遺物 1)

図録番号	種別	種類	部位	計測値 (cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
				口径	底径	高さ					
46-1	土師器	鉢	底・リム	27.6	14.2	18.0	ヨコナデ ケズリナデ	ヨコナデ ヘラナデ	(マメツ 不明)		3 枚
2	土師器	坏	カマド	12.2	4.6	-	ロクロ	ロクロ ミガキ・内裏	-		KP 4
3	土師器	硯	底・カマド	19.0	18.2	-	ヨコナデ ヘラケズリ	ヨコナデ ヘラナデ	-		P L KP 7, 3 枚

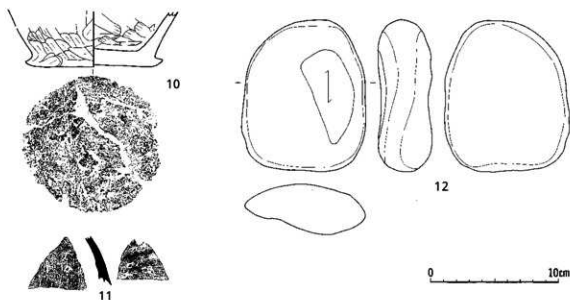


第4図 8号住居跡出土遺物(2)

8号住居跡出土遺物 2(3)

図録番号 49-50

図録 番号	種別	器種	部位	計測値 (cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
				口径	器高	底径					
49-4	土師器	(縄文)	新カマド	27.4	15.0	10.8	ヘラナデ ヘラケズリ	ヘラナデ ヘラナデ	ヘラナデ		平成 3. 4次
5	土師器	壺	新カマド	20.2	17.3	-	ヨコナデ ハケメナデ	ヨコナデ ヨコハケメ			P. 1, 11. 3 4次
6	土師器	壺	新カマド	-	6.0	10.0	ヘラケズリ	(ヘラ) ナデツツケ	(ヘラ) ナデツツケ		P. 14. 二次焼成
7	土師器	壺	新カマド	-	11.2	10.8	ヘラケズリ	ヨコナデ	(マメツ) 汗濁		1. 2次
8	土師器	壺	カマド	-	2.4	7.6	判断不明	ロクロ	糸印リ ナデ		P. 3. 二次焼成
9	土師器	壺	カマド	-	4.7	10.0	ヘラケズリ	ヘラケズリ ナデツツケ	ヘラナデ		P. 2. 二次焼成
50-10	土師器	壺	新カマド	-	4.4	11.0	ヘラケズリ	ヘラケズリ ナデツツケ	(ヘラナデ) 汗メツ		P. 12. 二次焼成
11	須恵器	長頸壺	カマド	22.0	26.3	-	(ロクロ) ケズリ	ロクロ			P. 13分析 15



第 50図 8号住居跡出土遺物(3)

8号住居跡出土遺物(3)

図録番号 50

図録 番号	分 類	出土遺構	厚 位	計 測 値				石 質	備 考
				長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g		
10-12	磁 石	阿住居跡	床 面	12.1	9.9	4.3	583.2	石炭安山岩	S. I. 湖使用, 整理 20

9号住居跡(第51~53図、写真13・54)

〔位置〕 MH-159 160グリッドに位置している。最寄りの3号住居跡とは約7m離れている。住居跡の北側は調査区域外(緑地予定地)になっている。

〔重複〕 認められなかった。

〔平面形・規模〕 長方形よりも台形にちかい。各辺の壁の長さは、推定を含めて次のとおりである。東壁2.7m、南壁2.5m、西壁2.4m、北壁2.4m。推定床面積、2.86㎡を測る。

〔壁・床〕 地山ローム層(にぶい黄褐色粘質土)を35~50cmほど掘り下げて壁と床にしている。各辺の壁の高さは、東壁50cm前後、南壁45cm前後、西壁推定50cm前後、北壁35cm前後である。床面は、堅くしまっているが最大20cmの高低差がある。

〔壁 溝〕 北壁と東壁の内側に設けられている。溝幅12~18cm、深さ10~12cmを測る。壁溝は、カマドの煙道部が古いタイプの地下式から半地下式に改築した際に新設されたものと推定される。

〔ピット・柱穴〕 住居内から大小3個のピットを確認した。これらのピットは位置、規模などからみて主柱穴とは考え難い。

〔カマド〕 東壁のほぼ中央と北壁の北東隅寄りで新旧2基のカマドを確認した。

【新期のカマド】東壁に設けられている。袖部は欠損して火床面と煙道部だけが確認された。煙道部の構造は地下式である。全長180cm、袖幅90cm、袖奥行70cm前後と推測される。主

軸方位は、N - 65度 - Eである。

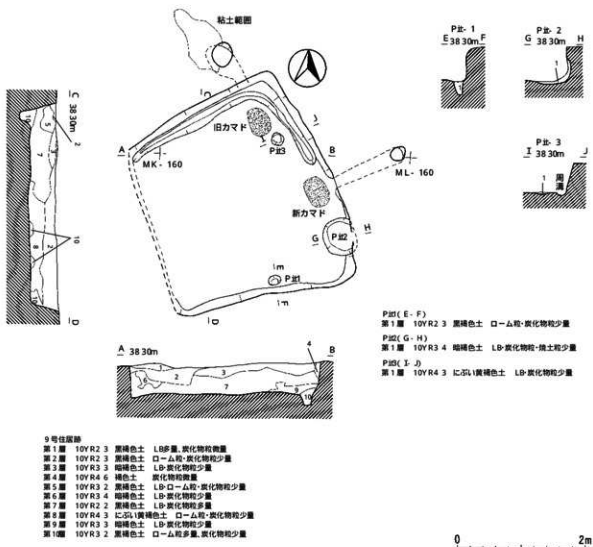
【古期のカマド】新しいカマドを構築した際に袖部が削平されたものと考えられる。煙道部の構造は地下式が採用されている。全長180cm、推定袖幅80cm、奥行70cm前後とみられる。この時期の主軸方位は、N - 40度 - Wである。

〔堆積土〕 確認面以下の土層は、10層に分けられた。人為的に埋め戻した部分も認められた。恐らく近くで竪穴式住居が構築された際排土の捨て場所になったものとみられる。なお、火山灰は確認されなかった。

〔遺物〕 床面とカマドから出土した遺物で図示できるものは少ない。

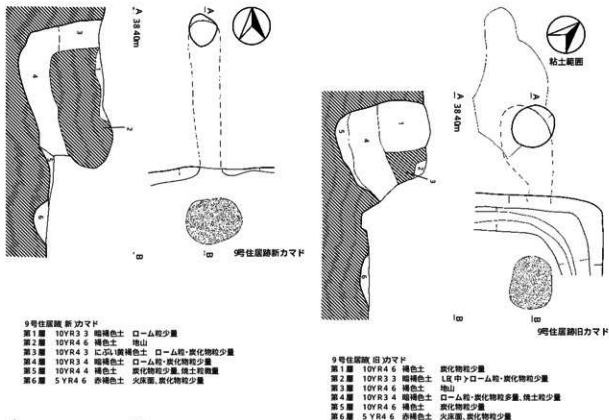
堆積土から手控土器1点と長頸壺が出ている。長頸壺は、住居跡の近くを掘削して造成した現代の林道脇の土手から発見された土器と接合したが、この土器は底部を故意に破損した(穿孔?)可能性が認められる。また、この土器の胎土分析を依頼した(分析 17, 21)が、産地は不明と判定された。

〔時期〕 時期を判断できる遺物及び火山灰などは出土していないが、カマドに伴う煙道の構造が新

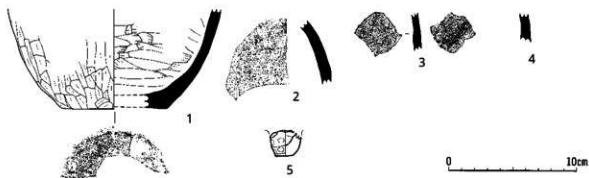


第51図 9号住居跡(1)

旧ともに地下式であることに注目すれば、本住居跡もTo a火山灰が降下する以前に構築、廃絶したものとも考えることも可能であろう。



第 5 図 9号住居跡(2)

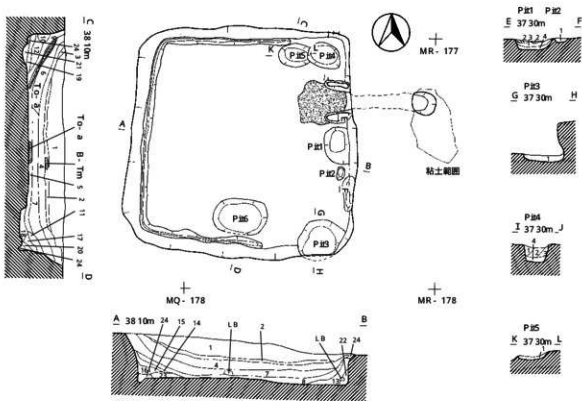


第 5 図 9号住居跡出土遺物

9号住居跡出土遺物

図録番号 53

図録番号	種別	器種	層位	計測値 (cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
				口径	径	底径					
53-4	深鉢	長脚器	暗褐色土	8.0	8.4		(口径) ヘラケズリ	口径ロオデナデツク	ヘラケズリ		分析 17.21 底面穿孔?、MH-157
5	土師器	手捏	暗褐色土	2.6	2.2	1.8	ユビオサエ	ユビオサエ	無調整		C、X、口縁部欠



10号住居跡

- | | | |
|--------------|---------|--------------------------------|
| 第1層 10YR17 1 | 黒色土 | □-△粒少量, 炭化物粒少量 |
| 第2層 10YR2 2 | 黒褐色土 | B Tm-□-△粒少量, 炭化物粒微量 |
| 第3層 10YR2 3 | 黒褐色土 | □-△粒微量 |
| 第4層 10YR3 3 | 暗褐色土 | Lt 小-△ 少量, 炭化物粒少量 |
| 第5層 10YR3 3 | 暗褐色土 | □-△粒少量, 炭化物粒微量, 焼土粒微量 |
| 第6層 10YR3 2 | 黒褐色土 | □-△粒少量, 炭化物粒微量, 焼土粒微量 |
| 第7層 10YR3 3 | 暗褐色土 | Lt 小-中 少量, 炭化物粒微量 |
| 第8層 10YR4 3 | にぶい黄褐色土 | To aB 量, □-△粒少量, 炭化物粒微量, 焼土粒微量 |
| 第9層 10YR3 3 | 暗褐色土 | □-△粒少量, 炭化物粒微量 |
| 第10層 10YR3 4 | 暗褐色土 | □-△粒多量 |
| 第11層 10YR3 3 | 暗褐色土 | □-△粒微量 |
| 第12層 10YR2 2 | 黒褐色土 | □-△粒少量 |
| 第13層 10YR3 3 | 暗褐色土 | □-△粒微量, 炭化物粒微量 |
| 第14層 10YR4 4 | 褐色土 | □-△粒-To aB 量, 炭化物粒微量 |
| 第15層 10YR3 3 | 暗褐色土 | □-△粒少量 |
| 第16層 10YR4 6 | 褐色土 | □-△粒多量 |
| 第17層 10YR3 3 | 暗褐色土 | □-△粒少量, 炭化物粒微量 |
| 第18層 10YR3 4 | 暗褐色土 | □-△粒少量, 炭化物粒少量 |
| 第19層 10YR2 2 | 黒褐色土 | □-△粒少量 |
| 第20層 10YR4 6 | 褐色土 | □-△粒微量 |
| 第21層 10YR3 3 | 暗褐色土 | □-△粒微量 |
| 第22層 10YR4 4 | 褐色土 | □-△粒少量, 粘性有 |
| 第23層 10YR3 3 | 暗褐色土 | □-△粒少量, 炭化物粒微量 |
| 第24層 10YR4 3 | にぶい黄褐色土 | □-△粒少量, 相混 |

P27 (E-F)

- | | | |
|-------------|---------|-----------------|
| 第1層 75YR4 4 | 褐色土 | □-△粒微量 |
| 第2層 10YR4 3 | にぶい黄褐色土 | □-△粒-焼土粒微量 |
| 第3層 75YR4 6 | 褐色土 | 炭化物粒微量, 焼土粒少量 |
| 第4層 75YR5 6 | 明褐色土 | □-△粒-炭化物粒-焼土粒微量 |

P22 (E-F)

- | | | |
|-------------|------|--------|
| 第1層 10YR2 2 | 黒褐色土 | □-△粒少量 |
|-------------|------|--------|

P23 (G-H)

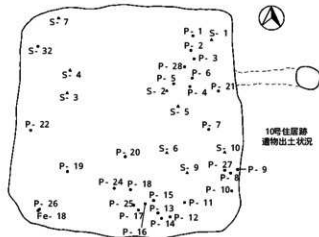
- | | | |
|-------------|------|--------------------|
| 第1層 10YR3 3 | 暗褐色土 | □-△粒少量, 炭化物粒-焼土粒微量 |
|-------------|------|--------------------|

P24 (I-J)

- | | | |
|-------------|---------|--------------------|
| 第1層 10YR3 3 | 暗褐色土 | □-△粒微量, 粘土多量 |
| 第2層 10YR3 2 | 黒褐色土 | □-△粒少量, 炭化物粒-焼土粒微量 |
| 第3層 10YR3 4 | 暗褐色土 | □-△粒-焼土粒微量, 焼土粒少量 |
| 第4層 10YR4 3 | にぶい黄褐色土 | 炭化物粒-焼土粒微量 |

P25 (K-L)

- | | | |
|-------------|---------|----------------|
| 第1層 10YR4 3 | にぶい黄褐色土 | □-△粒微量, 炭化物粒微量 |
|-------------|---------|----------------|



第54図 10号住居跡(1)

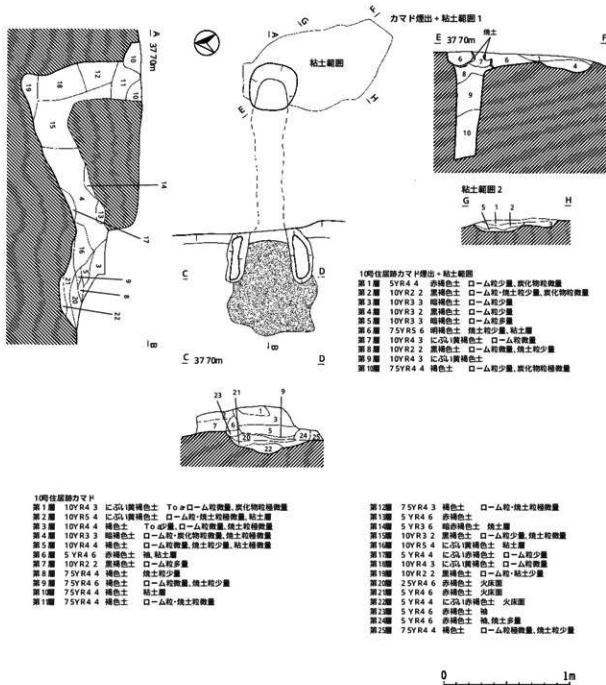
10号住居跡(第54~58図、写真13・54・55)

[位置] MP・MQ・177グリッドに位置している。本住居跡から15~20cm離れたところには7、8、11号住居跡が配置されている。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 多小不揃いであるが方形を呈する。各辺の壁の長さは、東壁3.3m、南壁3.25m、西壁3.2m、北壁3.05mを測る。床面積は、10.53㎡で中型の住居跡である。

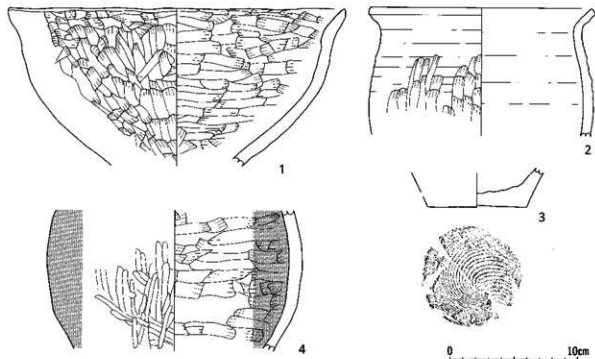
[壁・床] 地山ローム層を50~70cmほど掘り下げて構築されている。各壁の高さは、東壁50cm前後、南壁60cm前後、西壁70cm前後、北壁65cm前後を測る。床面は、壁寄りのピットと壁溝のあ



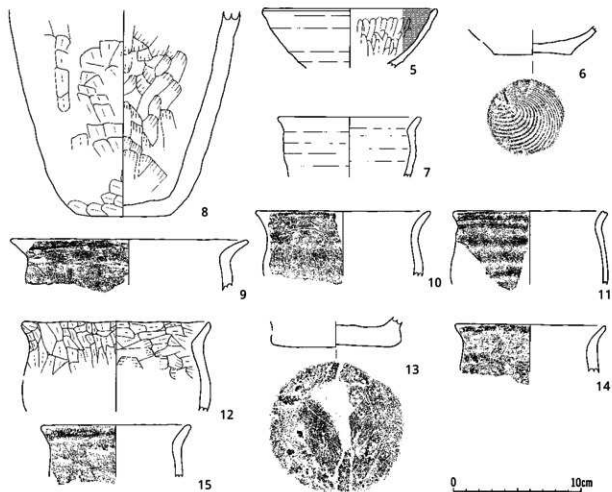
第58図 10号住居跡(2)

る部分を除くと堅緻で平坦であるが、標高の低い東側の床面は西側よりも全体的に低い。

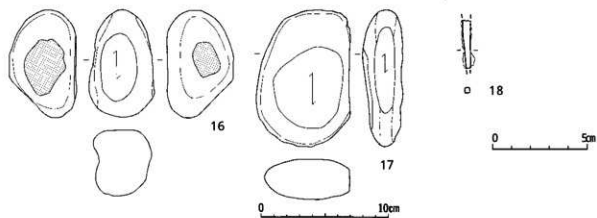
- [壁溝] 標高が若干高い住居西側2分の1に、幅10～15cm前後、深さ10cm前後の溝が半周している。
- [ピット・柱穴] 床面から大小6個のピットを確認した。5～28cmの比較的浅いピットが多い。ピットの配置はカマドの設けられた東壁辺と北東隅、南東隅にのみ認められ、壁溝のある住居西半には構築されていない。P3とP4は、柱穴の可能性はあるが、対応する位置にあるピットが不明である。
- [カマド] 東壁の北東隅寄りに付設されている。カマド本体は、芯材を使用しないタイプとみられる。煙道部の構造は地下式で住居外へ130cmほどのびている。全長220cm、袖幅80cm、奥行90cmほどの規模とみられる。主軸方位は、N - 45度 - Eである。
- [堆積土] 24層に区分された。自然堆積したものとみられる。2層でB Tm火山灰、床面直上の5層ではTo a火山灰を確認した。火山灰の分析結果でも同様と判定された。
- [遺物] 床面とカマドから出土した遺物は、土師器、鉄器、石製品である。
土師器は、ロクロ製、非ロクロ製の襷、内黒・球胴の襷、埴、内黒の坏などがある。
鉄器は、細い角棒状の断面を呈した断片である。その名称、用途などは目下のところ不詳である。石製品は、砥石で2点出土した。
- [時期] 本住居跡の廃絶年代は、To a火山灰が降下する以前と考えられる。



第56図 10号住居跡出土遺物(1)



第 5 図 10号住居跡出土遺物(2)



第 5 8 図 10号住居跡出土遺物(3)

10号住居跡出土土物(1)(2)

図録番号 56-57

図録番号	種別	経緯	層位	計測値(cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
				口径	断面	底径					
56-1	土師器	環	床・床面	27.0	12.6	-	(ヘラズリ)ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ(丸底)	-	P.17, 3 4次
2	土師器	甕	床 直	18.0	10.3	-	口クロ ヘラナデ	口クロ	-	-	P. 1, 1 3次
3	土師器	甕	カマド	-	2.8	8.0	口クロ	口クロ	回転糸切り	-	二次焼成
4	土師器	甕	床 直	-	11.2	-	ヘラミガキ	ヨコナデ(内蓋)	-	-	外蓋黒色片定
5	土師器	環	床 直	14.0	4.8	-	口クロ	口クロ ミガキ・内蓋	-	-	P. 13, 15, 16
6	土師器	環	床 直	-	2.4	6.0	口クロ	口クロ	回転糸切り	-	P. 10, 二次焼成
7	土師器	小 甕	床 直	11.4	4.8	-	口クロ	口クロ	-	-	P. 18, 二次焼成
8	土師器	甕	床 直	-	16.5	7.6	ヘラズリ	(ウズリ)サデ・オサエ	ヘラナデ	-	経緯厚・丸底状
9	土師器	甕	カマド	19.0	3.7	-	ヘラズリ ヘラズリ	ヘラズリ ヘラナデ	-	-	二次焼成
10	土師器	甕	カマド	14.0	5.2	-	ヨコナデ ヘラナデ	ヨコナデ	-	-	二次焼成
11	土師器	小 甕	床 面	12.4	5.9	-	口クロ	口クロ	-	-	P. 18, P. 24と同一
12	土師器	甕	跡・カマド	15.2	7.2	-	ヘラズリ	ヘラズリ ナデ	-	-	P. 3, 1 4次
13	土師器	甕	床 面	-	2.4	11.0	(ヘラズリ)	ヘラナデツタ	木蓋類 ヘラナデ	-	P. 2, 二次焼成
14	土師器	甕	床 面	12.0	3.8	-	ヨコナデ ヘラナデ	ヨコナデ ヘラナデ	-	-	P. 21
15	土師器	甕	床 面	12.0	4.2	-	ヨコナデ ヘラズリ	ヨコナデ ナデ	-	-	P. 10, 二次焼成

10号住居跡出土土物(3)

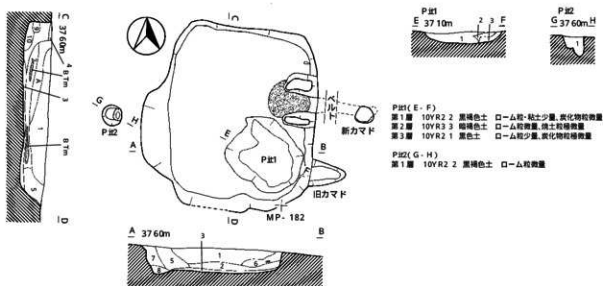
図録番号 58

図録番号	分類	出土遺構	層位	計測値 cm				石質	備考
				長さ	幅	厚さ	重さ		
58-1	礎石	10号住居跡	床 面	8.6	5.2	5.3	278.6	石炭山石	S 1 礎使用, 凹み 27, 整理 21
2	礎石	10号住居跡	床 面	10.9	7.5	3.2	321.4	石炭山石	S 3 礎使用, 整理 22

図録番号	分類	出土遺構	層位	計測値				備考
				長さ	幅	厚さ	重さ	
58-3	瓦割片	10号住居跡	床 面	2.6	0.5	0.3	0.8	断面角形で端1様状, F. 1, 整理 29

11号住居跡(第59-61図、写真14・56)

[位置] MO・MP・181グリッドに位置している。北東へ14m離れたグリッドには10号住居跡が、また、北へ8mのところにあるグリッドには12号住居跡が配置されている。



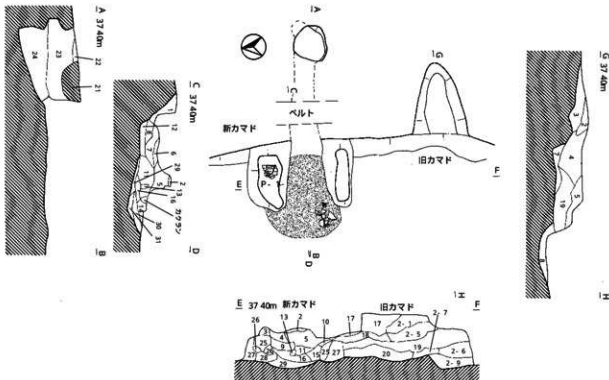
第59図 11号住居跡(1)

〔重複〕 認められなかった。

〔平面形・規模〕 隅丸長方形である。各壁の長さは、東壁 2.3m、南壁 1.9m、西壁 2.6m、北壁 2.0m を測る。床面積は、5.39㎡の規模で本遺跡では小型である。

〔壁・床〕 地山ローム層を掘り下げて構築されている。壁の高さは、東壁と南壁は30cm前後、西壁と北壁は40～45cmの規模がある。地山を利用した床面は堅緻であるが、床面の4分の1を占める古いカマド付近の床は（P1の上部）貼床である。

〔壁 溝〕 小型住居の例に洩れず確認されなかった。



1号住居跡 新カマド

- 第1層 10YR4 3 にごい黄褐色土 ローム粒少量
- 第2層 10YR3 3 暗褐色土 焼土粒少量
- 第3層 10YR4 3 にごい黄褐色土 ローム粒・焼土粒少量
- 第4層 10YR3 3 暗褐色土 ローム粒・焼土粒少量
- 第5層 10YR3 2 黄褐色土 ①Tm少量、炭化物粒少量
- 第6層 10YR4 3 褐色土 炭化物粒少量
- 第7層 10YR3 3 暗褐色土 ローム粒少量、焼土粒少量
- 第8層 10YR3 4 暗褐色土 ローム粒少量、炭化物粒少量
- 第9層 10YR3 3 暗褐色土 ローム粒・焼土粒少量
- 第10層 7.5YR4 4 褐色土 ローム粒少量
- 第11層 10YR4 3 にごい黄褐色土 ローム粒・炭化物粒・焼土粒少量
- 第12層 10YR3 3 暗褐色土 ローム粒少量
- 第13層 10YR2 2 黄褐色土 ローム粒・焼土粒少量
- 第14層 10YR4 3 にごい黄褐色土 ローム粒少量、焼土粒少量
- 第15層 7.5YR4 4 褐色土 ローム粒・焼土粒少量、炭化物粒少量

- 第16層 7.5YR4 4 褐色土 焼土少量
- 第17層 10YR2 2 黄褐色土 ローム粒少量、焼土粒少量
- 第18層 10YR3 2 黄褐色土 ローム粒・炭化物粒少量
- 第19層 10YR3 3 暗褐色土 ローム粒少量
- 第20層 10YR3 2 黄褐色土 ローム粒少量、焼土粒少量
- 第21層 10YR4 3 にごい黄褐色土 層地山
- 第22層 10YR2 2 黄褐色土 ローム粒少量
- 第23層 10YR3 3 暗褐色土 ローム粒・炭化物粒少量
- 第24層 10YR2 2 黄褐色土 ローム粒少量、炭化物粒少量
- 第25層 5YR4 8 赤褐色土 焼土粒少量
- 第26層 7.5YR4 4 褐色土 焼土粒少量
- 第27層 10YR4 3 にごい黄褐色土 焼土粒少量
- 第28層 7.5YR4 6 褐色土 焼土粒少量
- 第29層 7.5YR4 4 褐色土 焼土粒少量
- 第30層 5YR4 6 赤褐色土 火床面
- 第31層 5YR4 6 赤褐色土 火床面

1号住居跡 旧カマド

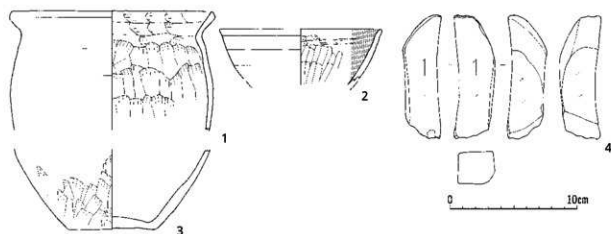
- 第1層 10YR3 3 暗褐色土 ローム粒少量
- 第2層 7.5YR5 6 明褐色土 焼土粒少量
- 第3層 10YR3 3 暗褐色土 ローム粒・炭化物粒少量
- 第4層 10YR3 3 暗褐色土 ローム粒・炭化物粒少量、焼土粒少量

- 第5層 10YR2 1 灰色土 ローム粒少量
- 第6層 10YR4 3 にごい黄褐色土 ローム粒少量、焼土粒少量
- 第7層 7.5YR4 4 褐色土 火床面
- 第8層 10YR3 2 黄褐色土 火床面、ローム・焼土少量
- 第9層 10YR3 3 暗褐色土 ローム粒少量、炭化物粒少量

0 1m

第6図 1号住居跡(2)

- 【ビット・柱穴】 床面から1個、西壁の外側から1個、計2個のビットを確認した。住居外のP2は、住居に伴うものか否か不明である。住居内のP1は、古いカマドを撤去した時に生じた痕跡であろう。
- 【カマド】 東壁から新旧2基確認した。新期のカマドは北東隅寄りに、また、古いカマドは南東隅寄りに設けられている。
- 【新期のカマド】 芯材を使用しないカマドで、煙道部の造りは地下式が採用されている。全長180cm、袖幅90cm前後、奥行80cmほどの規模とみられる。主軸方位は、N - 100度 - Eである。
- 【古期のカマド】 本体及び火床面はほとんど削平された後、貼床状に補修されたようである。煙道部は、トンネル部分が埋められて残存していることから地下式とみられる。煙道部は、住居外に120cm延びている。主軸方位は、N - 92度 - Eと推定される。
- 【堆積土】 10層に分けられた。自然堆積したものと認められる。2層で確認した火山灰は、B Tmとみて採取したが、分析結果も同様と判定された。
- 【遺物】 点数は少ないが床面とカマドから出土した。土師器の甕と内黒の坏が数点伴出した。他に床面直上から砥石が1点出ている。
- 【時期】 本住居跡の時期は、数少ない遺物から判断することは容易でないが、堆積土中に認められたB Tm火山灰の降下年代から推測できるものと考えられる。



第6図 11号住居跡出土遺物

11号住居跡出土遺物

図版番号 61

図版番号	種別	経緯	部位	計測値 (cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
				口径	最高径	底径					
61-1	土師器	甕	カマド	160	96	-	ロクロ	ロクロ	-		P. 2, 3 4枚
2	土師器	坏	カマド	100	45	-	ロクロ	ロクロ ミガキ・ナデ内黒	(部転車切り)		P. 1, 2枚
3	土師器	甕	カマド	-	64	70	ヘラナデ	(ナデナデツクヌスツ)	ヘラナデ		二次焼成

11号住居跡出土遺物

図版番号 61

図版番号	分類	出土遺構	部位	計測値					材質	備考
				長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g			
61-4	砥石	1号住居跡	床面直上	9.9	3.3	3.1	136.1		石炭安山岩	S-1 4面使用、磨理 23

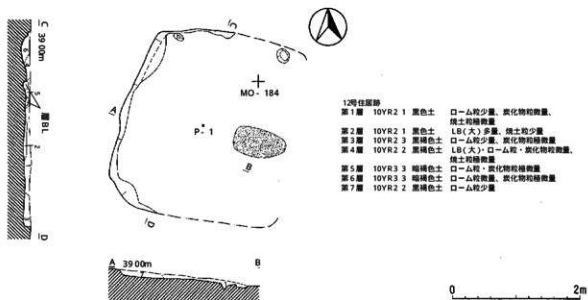
12号住居跡(第62・63図、写真14・56)

【位置】 MN・MO-183・184グリッドに位置している。本年度の調査では最南端に位置する住居跡である。最寄りの11号住居跡とは8mほど離れている。

【重複】 認められなかった。

【平面形・規模】 削平されてほとんど原形は残っていないが、方形と推定される。残存している壁の長さは西壁2.7m、北壁2.7m前後である。残存床面積は、7.48㎡である。

【壁・床】 残存している壁の高さは、10cm以下である。住居の東側は、地山の傾斜度以上に削平さ



第62図 12号住居跡



第63図 12号住居跡出土遺物

12号住居跡出土遺物

図録番号 63

図録番号	種別	器種	部位	計測値(cm)		外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
				口径	高さ					
63	土器類	甕	埴輪土	-	94	-	ヘラケズリ	オサエナデ	-	P.1-8

れている。辛うじて残った床面も堆積土が浅いため木の根によって攪乱されている。

【壁溝】 確認されなかった。

【ピット・柱穴】 床面から2個のピットを確認した。北東隅と北西隅に配置されているが、対応する位置にピットを見出せないため柱穴が否か判断し難い。

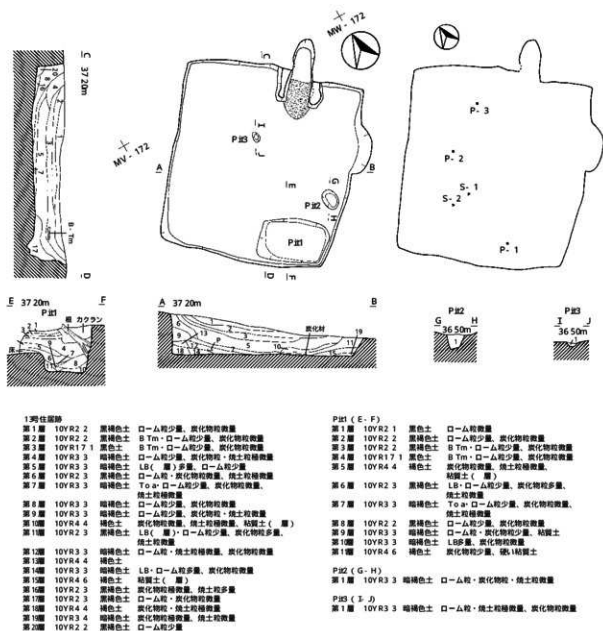
【カマド】 カマド本体及び煙道部とも削平されて跡形もない。削平された火床面下部の焼土から辛う

じてカマドと判断した。推定主軸方位は、N - 45度 - Eとみられる。

[堆積土] 7層に分けられた。黒褐色土が主体であるが火山灰は確認されていない。

[遺物] 堆積土から、口縁部と底部を欠損した小型甕形土師器が1個体出土しただけである。

[時期] 火山灰は堆積していない。しかも床面やカマドなどから遺物が出土していない住居跡であるが、平安時代10世紀ころのものと推定される。



第64図 13号住居跡(1)

13号住居跡(第64~66図、写真14・15・56)

[位置] MV-171・172グリッドに位置している。最寄りの4号住居跡とは4mの距離がある。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 隅丸長方形を呈し、住居の対角線が各方位を向いている。各壁の長さは、北東壁2.7m、南東壁2.9m、南西壁2.8m、北西壁2.8mの規模である。床面積は、8.13㎡を測り本遺跡では比較的小型の部類に含まれる。

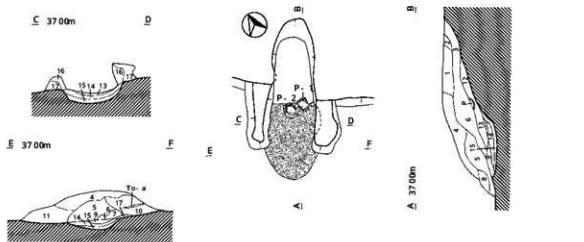
[壁・床] 地山ローム層を掘り下げて構築したものである。各辺の壁の高さは、カマドのある北東壁55~12cm、南東壁12~35cm、南西壁35~66cm、北西壁66~55cmを測る。カマドに近い東隅付近が最も低い壁であることから、この一角に出入り口があった可能性がある。床面は、P10の上面が貼床となっている以外は地山ローム層を利用したものである。

[壁溝] 痕跡は認められなかった。

[ピット・柱穴] 床面から3個のピットを確認した。P1は、その規模から柱穴とは考えられない。残る2個のピットは柱穴の可能性もあるが、対応する位置にピットがないことから決めつけ難い。

[カマド] 北東壁の東隅寄りに付設されている。カマド本体は、芯材などを使用しないで構築されたものとみられる。半地下式の煙道部が確認されている。全長140cm、袖幅90cm、奥行70cmほどの規模とみられる。主軸方位は、N-45度-Eである。

[堆積土] 20層に区分された。木の根による攪乱はあるが、自然堆積したものとみられる。3層中にはB Tm火山灰、また、5層中にはTo a火山灰が堆積していた。火山灰の分析結果もそのように判定されている。



13号住居跡カマド

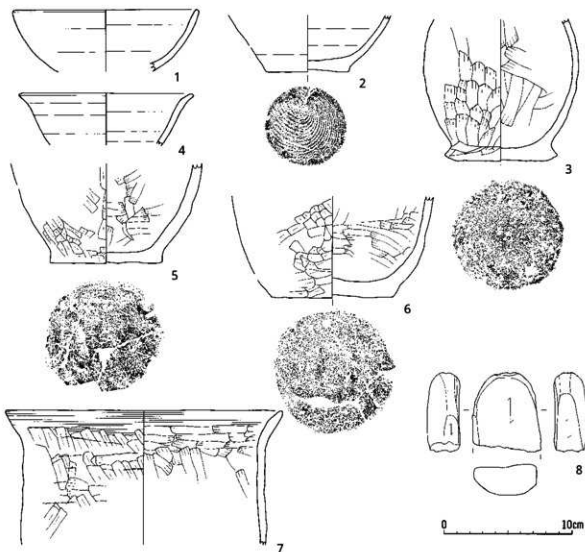
- 第1層 75YR4 4 褐色土 □-ム粘粉量
- 第2層 75YR3 3 暗褐色土 □-ム粘粉少量、粘土粒少量
- 第3層 75YR3 4 暗褐色土 □-ム粘・粘土粒少量
- 第4層 10YR4 3 に近い暗褐色土 To a 炭化物粒微量、ローム粒少量、粘土少量
- 第5層 10YR3 3 暗褐色土 To a 微量、ローム粒少量
- 第6層 10YR3 3 暗褐色土 □-ム粘少量、粘土粒少量
- 第7層 75YR4 4 褐色土 粘土層
- 第8層 10YR2 1 黒色土 To a 炭化物少量、ローム粒微量
- 第9層 5 YR4 4 に近い赤褐色土 火床面、ローム粒微量、粘土粒微量

- 第1層 10YR4 3 に近い暗褐色土 To a 少量、ローム粒・炭化物粒微量
- 第1層 10YR3 3 暗褐色土 To a 炭化物粒微量、ローム粒・粘土粒・粘土少量
- 第1層 75YR3 3 暗褐色土 □-ム粘少量、粘土粒少量
- 第1層 10YR5 4 に近い暗褐色土
- 第1層 5 YR4 4 赤褐色土 火床面
- 第1層 5 YR4 4 に近い赤褐色土 火床面
- 第1層 5 YR4 6 赤褐色土 袖
- 第1層 75YR4 4 褐色土 袖

第65図 13号住居跡(2)

〔遺物〕 年代を判定できるような遺物は僅少である。カマドから支脚に転用された？小型楕形土師器底部1点と床面直上から砥石が1点出土しただけである。そのほかは、堆積土から土師器の甕と坏の破片が認められている。

〔時期〕 本住居跡の年代は、出土遺物からは決めかねるが、火山灰の堆積状況からTo a火山灰の降下以前に廃棄されていたものとみられる。



第68図 13号住居跡出土遺物

1号住居跡出土遺物

図版番号 66

図版番号	種別	器種	部位	計測値 (cm)				外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
				口径	器高	底径						
16	土師器	坏	破損面	14.8	5.0	-	ロクロ	ロクロ	-		3 4收	
2	土師器	坏	ビット	-	4.6	6.6	ロクロ	ロクロ	回転糸切り		二次焼成	
3	土師器	甕	カマド	-	11.4	9.0	ヘラナデ	ナデ	(マメツ) 不磨		P. 2 KP. 1 支脚か	
4	土師器	坏	カマド	14.0	4.2	-	ロクロ	ロクロ	-		3 4收, 二次焼成	
5	土師器	甕	カマド	-	8.0	9.0	ヘラケズリ	ヘラナデ ナデツケ	ヘラケズリ		P. 2 二次焼成	
6	土師器	甕	堆積土	-	8.2	9.7	ヘラケズリ	ヘラナデ	(マメツ) 不磨		二次焼成	
7	土師器	甕	堆積土	22.2	10.8	-	ヨコナデ ヘラケズリ	ヨコナデ ヘラナデ	-		二次焼成	

図版番号	分類	出土遺構	部位	計測値				石質	備考
				長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g		
16	砥石	1号住居跡	床上直上	6.3	5.5	2.6	118.4	石英安山岩	S. 2. 3 磨使用, 破損後再使用, 磨理 24

14号住居跡(第67~70図、写真15・56)

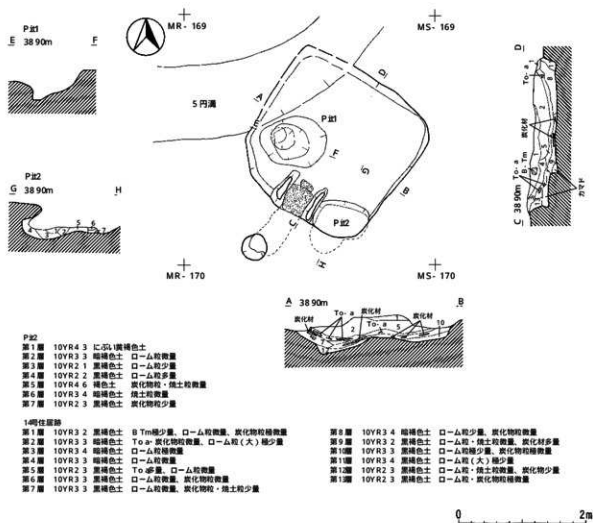
[位置] MR-169グリッドに位置している。周辺には4、5号円形周溝が構築されている。

[重複] 本住居跡は、5号円形周溝によって北西壁が削られている。また、1号溝状遺構によって東隅付近が掘り下げられている。新旧関係は明白である。

[平面形・規模] 切り合いと抜根による攪乱によって平面形は判然としなが、台形あるいは不整な方形とみられる。また、住居の四隅は各方位と向かい合っている。各辺の壁の長さは、推定を含めて、北東壁(2.2)m、南東壁2.1m、南西壁2.2m、北西壁(2.2)mの規模である。推定床面積は、4.78㎡である。

[壁・床] 地山ローム層を20~35cmほど掘り下げて構築されている。各壁の高さは、北東壁20cm前後、南東壁25cm前後、南西壁35cm前後、北西壁は5号円形周溝によって削り取られて不明である。床面は、その2分の1が重複とビツのため判然としなが残りの床面は起伏が少ない。38.29mから38.36mのレベルが計測されている。

[壁溝] 付設されていなかった。



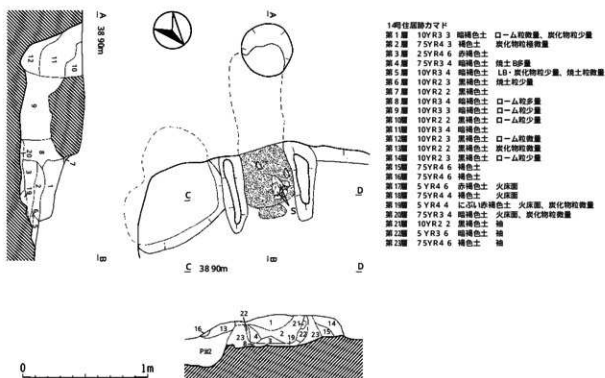
第6図 14号住居跡(1)

[ピット・柱穴] 大小2個確認した。P2の形状は、柱穴とは認め難い。

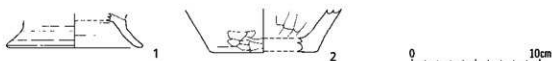
[カマド] 南西壁中央に付設されてある。カマド本体は、芯材を使用しないタイプとみられる。煙道部は、短いが地下式の構造である。全長170cm、袖幅80cm、奥行70cmほどの規模とみられる。主軸方位は、N - 140度 - Wである。

[堆積土] 確認面以下の堆積土は、13層に区分された。自然堆積したものとみられる。黒褐色土が基調となっている。床直上には炭化材、6層中にToa火山灰、また、1層中にはB Tm火山灰とみられるものが混入していた。

[遺物] ロクロ製高坏(脚部2片が接合)が床面から出土しただけである。その他は、図化できない襍形土師器の破片が16点みとめられている。また、確認面から細い角棒状の鉄器が1点



第68図 14号住居跡(2)

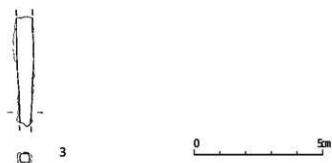


第69図 14号住居跡出土遺物(1)

14号住居跡出土遺物(1)

図版番号 69

図版番号	種別	器種	單位	計測値(cm)		外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
				口径	底径					
1	土師器	高坏	底直	31	112	ロクロ	ロクロ	ロクロ		P.2外、底 台
2	土師器	襍	底直	38	114	ヘラナデ	ナデ	ヘラナデ		P.3



第70図 14号住居跡出土遺物 2)

14号住居跡出土遺物 2)

図録番号 70

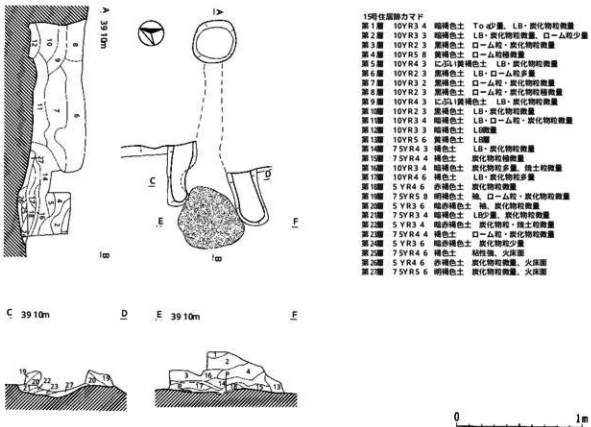
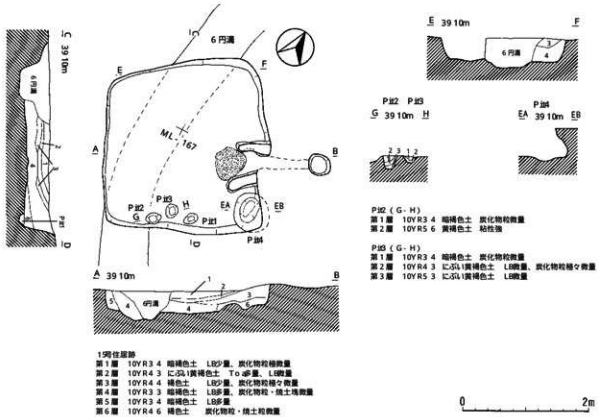
図録 番号	分 類	出土遺構	層 位	計 測 値				備 考
				長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	
70-1	鉄製品	14号住居跡	礎石層	4.3	0.6	0.5	3.5	新図方形で鋭い棒状、F-X、整理 30

出ているが、この鉄器は5号円形周溝からの流れ込みの可能性もある遺物である。

- [時 期] 本住居跡の年代を推定できる遺物は極端に少ない。遺物から年代を決めつけることは容易でないが火山灰が堆積していたことから、それによって一応の年代が得られるものと考えてよからう。

15号住居跡(第71・72図、写真15・56)

- [位 置] MK・ML-166・167グリッドに位置している。最寄りの5号住居跡からは8mほど、また5号土坑とは5mほど離れている。
- [重 複] 本住居跡は、6号円形周溝によって縦断されている。
- [平面形・規模] 重複のため本来の平面形は判然としないが、台形あるいは不整な方形とみられる。各辺の壁の長さは、北東壁2.5m、南東壁(2.5)m、南西壁(2.1)m、北西壁2.1mを測る。床面積は、推定5.85㎡である。
- [壁・床] 地山ローム層を35~47cmほど掘り下げて構築されている。残存している壁の高さは、北東壁35~47cm、南東壁40cm前後、南西壁40cm、北西壁40cm前後である。床面は堅緻であるが、多少の起伏が認められた。38.46m~38.55mのレベルが測られている。
- [壁 溝] 構築された形跡は認められない。
- [ピット・柱穴] 床面から4個のピットを検出した。これらのピットは、その位置関係から主柱穴とは認め難い。
- [カマド] 北東壁のほぼ中央に構築されている。土師器を袖の芯材に利用した痕跡が残っている。煙道部の構造は地下式である。全長200cm、袖幅80cm、奥行80cm前後の規模とみられる。主軸方位は、N-67度-Eである。
- [堆積土] 6層に分層された。自然堆積したもののみみられる。2層中にはTo α 火山灰がレンズ状に堆積していた。なお、6号円形周溝の溝の中にはB Tm火山灰が確認されている。
- [遺 物] カマドから器内面に刷毛目痕のある襖形土師器などが出土しただけで遺物は少ない。この襖形土師器は、5号土坑出土の土器 P15と接合した。



第7図 15号住居跡

[時期] 本住居跡の時期は、Toa火山灰の降下年代（西暦915年）以前に構築、廃棄されたものとみられる。



第7図 15号住居跡出土遺物

15号住居跡出土遺物

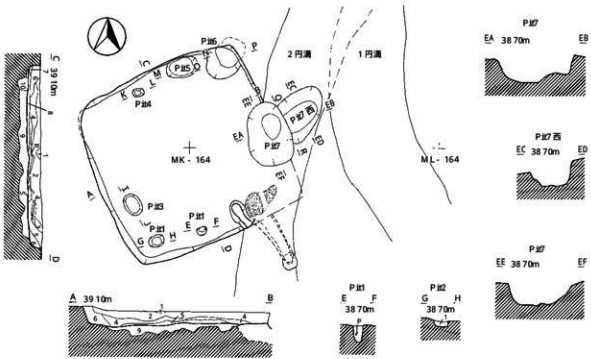
図面 番号	種別	器種	単位	計測値 (cm)		外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
				口径	高さ					
71	土師器	壺	カマド	(232)	342	116	ヨコナデ ケズリナデ	ヨコナデ ハケメナデ	ナデ	
2	土師器	壺	カマド	(192)	226	-	ヨコナデ ヘラケズリ	ヨコナデ ハケメ	-	P. 4 52, 196合
3	土師器	壺	カマド	(256)	110	-	ヨコナデ ヘラケズリ	ヨコナデ ハケメ	-	P. 3, K.P. 7, 15H
4	土師器	壺	埴輪土	(144)	33	-	ヨコナデ ヘラケズリ	ヨコナデ ナデ	-	P. 9 二次焼成

16号住居跡（第73～76図、写真16 56-57）

[位置] MJ・MK-163 164グリッドに位置している。最寄りの15、17号住居跡とはそれぞれ10mほど離れている。また、1、2号円形周溝は至近距離にある。

[重複] 本住居跡は、2号円形周溝によって掘り下げられている。新旧関係は明白である。

[平面形・規模] 重複しているため平面形は判然としない箇所もあるが方形とみられる。各壁の長さ
は、推定を含めて東壁（27）m、南壁（27）m、西壁265m、北壁（27）mを測る。推

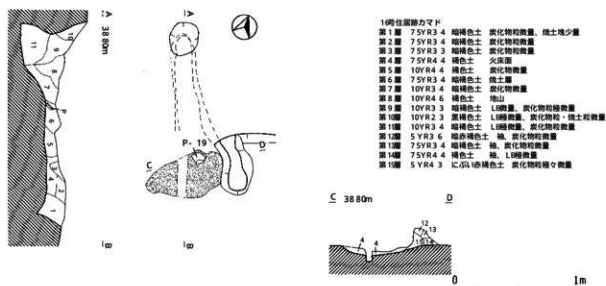


- 16号住居跡
- 第1層 10VR2 2 黄褐色土 炭化物粒少量
 - 第2層 10VR3 3 暗褐色土 LB少量、炭化物粒少量
 - 第3層 10VR3 3 暗褐色土 To a・炭化物粒少量、LB少量
 - 第4層 10VR4 2 灰黄褐色土 To a少量、LB少量、炭化物粒少量
 - 第5層 75VR4 4 褐色土 LB粒々少量、炭化物粒粒々少量
 - 第6層 10VR2 3 黄褐色土 LB・炭化物粒少量
 - 第7層 10VR3 4 暗褐色土 炭化物粒少量、焼土粒粒々少量
 - 第8層 10VR4 6 褐色土
 - 第9層 10VR5 6 黄褐色土 LB少量、炭化物粒少量
 - 第10層 10VR4 4 褐色土 LB少量、炭化物粒少量

- P17 (E - F)
第1層 10VR3 3 暗褐色土 炭化物少量
- P17 西 (G - H)
第1層 10VR3 3 暗褐色土 LB・炭化物粒少量
- P11 (I - J)
第1層 10VR3 4 暗褐色土 □-△粒、炭化物粒少量
- P12 (K - L)
第1層 10VR3 2 黄褐色土 □-△粒、炭化物粒粒少量
第2層 10VR4 3 灰色土 炭化物粒、焼土粒少量
- P13 (M - N)
第1層 10VR2 2 黄褐色土 炭化物粒、焼土粒粒々少量
第2層 10VR4 4 褐色土 炭化物粒粒々少量
- P14 (O - P)
第1層 10VR3 2 暗褐色土 □-△粒少量、炭化物粒粒々少量
第2層 10VR4 3 灰色土 炭化物粒、焼土粒少量
- P15 (Q - R)
第1層 10VR3 3 暗褐色土 LB少量、炭化物粒少量
第2層 10VR2 2 黄褐色土 LB少量、炭化物粒粒少量
第3層 10VR4 6 褐色土 炭化物粒粒々少量



第7図 16号住居跡(1)



第7図 16号住居跡(2)

定床面積は、748㎡とみられる。

〔壁・床〕 地山ローム層を16～30ほど掘り込んで構築されたものである。壁の造りは、全般に低い。高さは、東壁16～20cm、南壁20～25cm、西壁23～30cm、北壁25cm前後を測る。床面は、掘り方を均したものとみられ、堅固さはなく、床のレベルは38.31m～38.42mで、起伏がある。

〔壁 溝〕 痕跡はなかった。

〔ピット・柱穴〕 住居の内外から7個のピットを確認した。P7は、2号円形周溝と重複しているが、本住居に伴うピットが否か明らかでない。柱穴の可能性があるとすればP1とP4であろう。

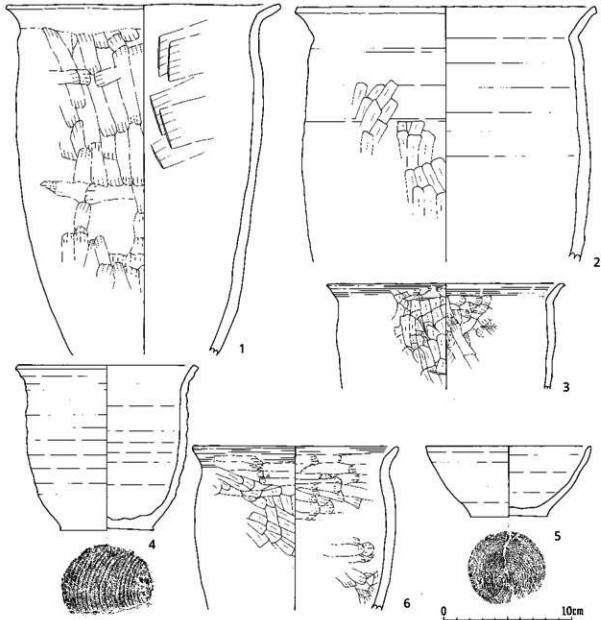
〔カマド〕 南壁の東隅寄りに付設されているが、袖の片側は2号円形周溝によって破壊されている。袖には芯材は使用されなかったようである。カマドの支脚は、土師器が利用されている。煙道部の構造は、地下式である。全長150cm、袖幅90cm、奥行50cm前後の規模とみられる。主軸方位は、N - 145度 - Eである。

〔堆積土〕 円形周溝との重複箇所を除くと自然堆積したものとみられる。土層は、10層に区分された。3層と4層にはTo a火山灰が確認された。

〔遺物〕 土師器と須恵器が床面、カマド、ピットなどから出土した。また、重複した遺構から出土した土師器と同一個体とみられるものも含まれている。

土師器の襪には上半部ロクロ製、下半部ロクロナデ後削りの類、ロクロ・静止糸切りの類が含まれている。坏は、須恵器も含まれている。

〔時期〕 住居跡の年代は、To a火山灰とみられる火山灰から推測できるものと考えてよからう。



第75図 16号住居跡出土遺物(1)

16号住居跡出土遺物(1)

図面番号	種別	器種	部位	計測値(cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
				口径	器高	底径					
75-1	土師器	甕	床蓋P6	22.0	28.2	-	ヨコナデ ケズリナデ	ヨコナデ ケズリナデ	-		1 2次
2	土師器	甕	カマド	23.8	20.5	-	ロクロ 口ケロケズリ	ロクロ	-		1 2次
3	土師器	甕	P6 (190)	8.5	-	-	ヨコナデ ヘラケズリ	ヨコナデ ナデ	-		2次 + P. 13 + P. 1, 2
4	土師器	小 甕	内+縁上	14.6	13.3	7.4	ロクロ	ロクロ	静止糸切り		P. 12, 21, 1 2次
5	土師器	坪	カマド	13.2	5.7	6.1	ロクロ	ロクロ	留糸糸切り		P. 14, 2次焼成
6	土師器	甕	床蓋P6 (164)	13.2	-	-	ヨコナデ ヘラケズリ	ヨコナデ ヘラナデ	-		



第7図 16号住居跡出土遺物(2)

16号住居跡出土遺物(2)

図面 番号	種別	器種	量位	計測値(cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
				口径	器高	底径					
7a	土師器	埴	P6	-	4.6	5.8	ロク口ロ	ロク口ロ	面輪糸切り	-	二次焼成
8	土師器	埴	(12.4)	4.7	-	ロク口ロ	ロク口ロ	-	-	-	P.4.3.4c
9	土師器	罎	カマド (17.0)	8.0	-	ヨコナデヘラケズリ	ヨコナデヘラナデ	-	-	-	P.11.2.2a焼成

17号住居跡(第77~81図、写真16・57)

[位置] ML・MM - 161グリッドに位置している。最寄りの3号住居跡から5mほど離れた位置にある。その他に1号、10号円形周溝などが構築されている。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 長方形を呈している。住居の四隅は、各方位と対峙している。各辺の壁の長さは、北東壁19m、南東壁2.2m、南西壁1.8m、北西壁2.1mを測る。床面積は、4.04㎡で規模は小型の類である。

[壁・床] 壁と床は、25~45cmほど地山ローム層を掘り下げて構築されたものである。各壁の長さは、北東壁4.5cm前後、南東壁2.5cm前後、南西壁30~40cm、北西壁3.5cm前後を測る。床面のレベルは38.05m~38.10mで、起伏は少なく堅固な造りである。

[壁溝] 構築された形跡はない。

[ピット・柱穴] 住居の内外から大小10箇のピットを確認した。P1~P3は、床面内から検出した。これらのピットは、配置、規模などからみて主柱穴とは認め難い。P4~P10は、住居の壁から50~150cm離れた位置から検出された。これらのピットには規則的な配置は認められない。本住居に伴う掘立柱建物の柱穴が否か判断し難い。

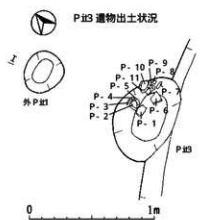
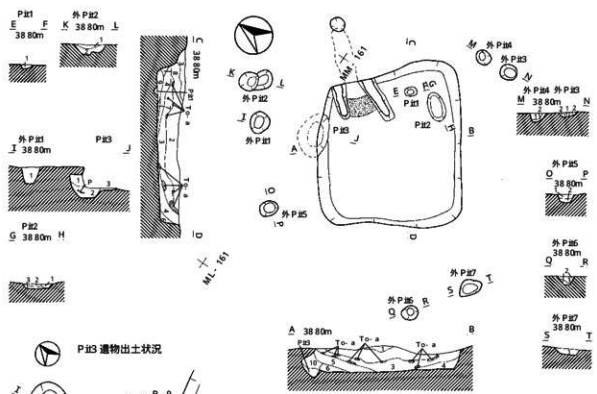
[カマド] 北東壁の北隅寄りに付設されている。カマドの本体は、土師器と半截した礫を芯材としたものである。煙道部の構造は、地下式が採用されている。全長190cm、袖幅80cm、奥行70cm前後の規模とみられる。

[堆積土] 1層に区分された。自然堆積したものとみられる。2層~3層においてTo a火山灰とみられる火山灰が認められた。

[遺物] カマド、ピット、床面直上などから土師器、須恵器、鉄器などが出土した。

土師器は、長胴甕とロク口製球脚甕がある。須恵器は、大甕の一部であるが、胎土分析の結果、五所川原窯群産(分析7)と推定された。鉄器は、紡錘車である。

[時期] 本住居跡出土の火山灰は、分析を依頼しなかったが、To a火山灰とみられ、その降下以前に廃棄されたものとみなしてもほぼ間違いないだろう。



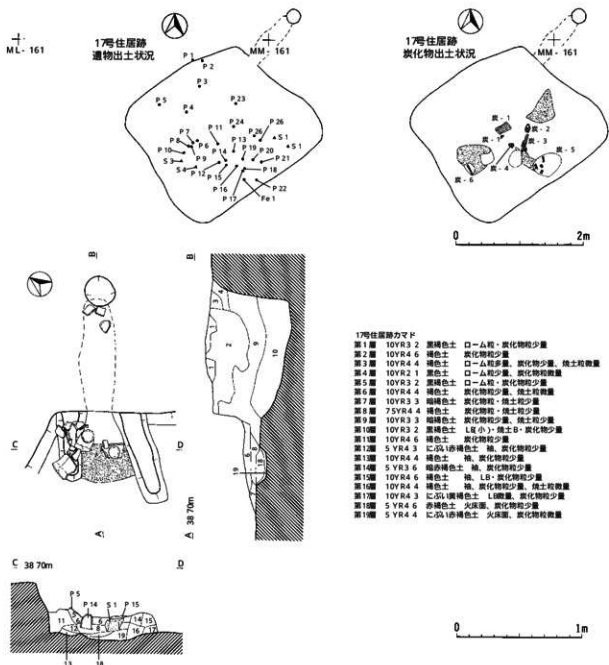
- 1号住居跡
- 第1層 10YR2 2 黒褐色土 LB・炭化物粒少量
 - 第2層 10YR3 3 暗褐色土 LB・炭化物粒少量
 - 第3層 10YR3 2 黒褐色土 To a層、LB・炭化物粒少量
 - 第4層 10YR2 3 黒褐色土 口-ム粒、焼土粒多量、炭化物粒(小)多量
 - 第5層 10YR3 4 暗褐色土 LB・炭化物粒少量
 - 第6層 10YR4 4 褐色土 炭化物粒少量
 - 第7層 10YR3 2 黒褐色土 LB・炭化物粒、焼土粒少量
 - 第8層 5 YR4 4 灰色土 炭化物粒少量
 - 第9層 10YR3 4 暗褐色土 口-ム粒、炭化物粒少量
 - 第10層 10YR3 2 黒褐色土 口-ム粒、炭化物粒、焼土粒少量

- P11 (E-F)
- 第1層 10YR3 4 暗褐色土 LB・炭化物粒、焼土粒少量
- P12 (G-H)
- 第1層 10YR2 3 黒褐色土 炭化物粒少量
 - 第2層 10YR3 4 暗褐色土 LB・炭化物粒少量
 - 第3層 10YR4 6 褐色土 炭化物粒少量
- P13 (I-J)
- 第1層 10YR2 3 黒褐色土 口-ム粒多量、炭化物粒少量
 - 第2層 7.5YR4 6 褐色土 炭化物、焼土粒少量
 - 第3層 10YR3 4 暗褐色土 炭化物粒、焼土粒少量
- 外P11 (I-J)
- 第1層 10YR3 3 暗褐色土 口-ム粒、バミ土、炭化物粒少量
- 外P12 (K-L)
- 第1層 10YR2 1 灰色土 LB・炭化物粒少量
 - 第2層 10YR3 3 暗褐色土 LB・炭化物粒、口-ム粒多量、炭化物粒少量

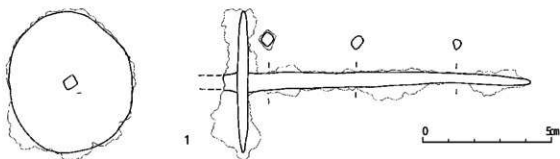
- 外P13 (M-N)
- 第1層 10YR4 6 褐色土 炭化物粒少量
 - 第2層 10YR3 4 暗褐色土 口-ム粒、炭化物粒、バミ土少量
- 外P14 (M-N)
- 第1層 10YR3 2 黒褐色土 口-ム粒、炭化物粒少量
 - 第2層 10YR4 6 褐色土 炭化物粒少量
- 外P15 (O-P)
- 第1層 10YR3 4 暗褐色土 LB・炭化物粒少量
 - 第2層 10YR4 6 褐色土 炭化物粒少量
- 外P16 (Q-R)
- 第1層 10YR3 2 黒褐色土 LB・口-ム粒、炭化物粒少量
 - 第2層 10YR4 6 褐色土 炭化物粒少量
- 外P17 (S-T)
- 第1層 10YR3 3 暗褐色土 口-ム粒、炭化物粒少量



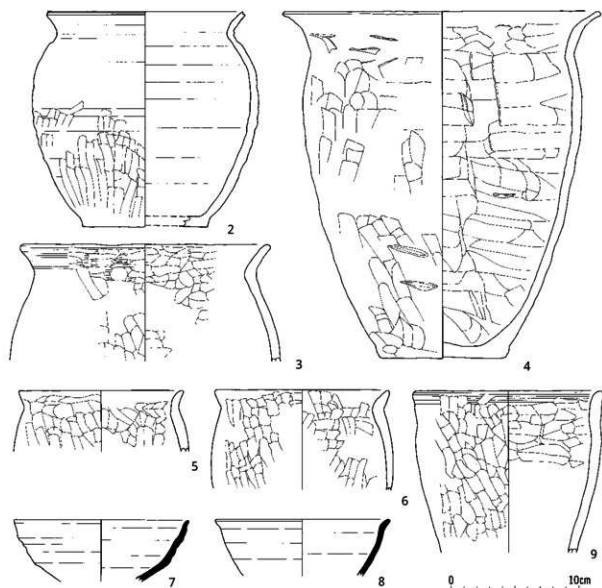
第7図 1号住居跡(1)



第7図 17号住居跡(2)



第79図 17号住居跡出土遺物(1)



第80図 17号住居跡出土遺物(2)

17号住居跡出土遺物(1)

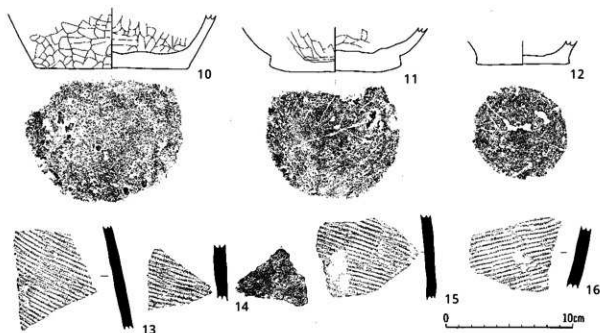
図録番号 79

図録番号	分類	出土遺構	層位	計測値				備考
				長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	
79-1	鉄製紡車	17号住居跡	4層	12.1	5.6	0.4	336	F.1整理 31

17号住居跡出土遺物(2)

図録番号 80

図録番号	種別	器種	層位	計測値(cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
				口径	器高	底径					
80-2	土師器	甕	カマド	15.8	17.3	10.0	ロクロヘラケズリ	ロクウ(ミガキ)	ケズリ	-	P.13.6, 1.32次
3	土師器	甕	カマド	(200)	9.4	-	ヨコナデケズリ・ナデ	ヨコナデヘラナデ	-	-	KP.2-A.二次焼成
4	土師器	甕	穴方TP	(25.4)	27.9	10.0	ヨコナデヘラケズリ	ヨコナデヘラナデ	(マメツ) 平焼	-	P.1.KP.1.1.2次
5	土師器	甕	砂底瓦	(15.2)	4.9	-	ヨコナデヘラケズリ	ヨコナデナデ	-	-	P.1.3.4次
6	土師器	甕	P3	(140)	8.0	-	ヨコナデヘラケズリ	ヨコナデ(ヘラナデ)	-	-	P.6.二次焼成
7	須恵器	坏	埴埴土	(140)	5.0	-	ロクロ	ロクロ	-	-	3.4次, 二次焼成
8	須恵器	坏	埴埴土	(140)	5.6	-	ロクロ	ロクロ	-	-	5.6次, 二次焼成
9	土師器	甕	カマド	(15.2)	1.30	-	ヨコナデケズリ・ナデ	ヨコナデヘラナデ	-	-	P.24



第 8 図 17号住居跡出土遺物(3)

17号住居跡出土遺物(3)

図録番号 81

図録番号	種別	器種	部位	計測値 (cm)		外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
				口径	器高					
10	土師器	甕	カマド	-	44	12.4	ヘラケズリ	(ユビナデツケ)	ヘラナデ	KP. 26, 二次焼成
11	土師器	甕	カマド	-	36	10.6	ヘラケズリ	ヘラナデツケ	木炭燻 ケズリ	KP. 15, 二次焼成
12	土師器	甕	埋積土	-	19	7.5	(ナデ)	ヘラナデツケ	ヘラナデ	二次焼成
13	須恵器	大甕	床直				縞目状平行叩き	当て具燻 ナデ		P. 6, 17, 25
14	須恵器	大甕	床直				縞目状平行叩き	当て具燻 ナデ		P. 10, 分析 7
15	須恵器	大甕	床直				縞目状平行叩き	当て具燻 ナデ		P. 19, 同一器体
16	須恵器	大甕	床直				縞目状平行叩き	当て具燻 ナデ		

18号住居跡(第82~84図、写真17・58)

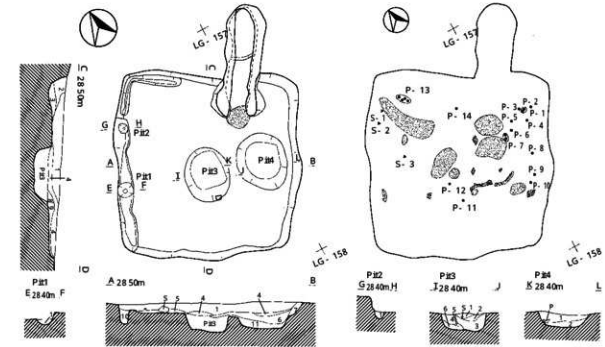
【位置】 L F・L G - 157グリッドに位置している。1号から17号までの住居跡よりも10mほど標高が低い位置に立地している。西側には19号住居跡が隣接している。

【重複】 認められなかった。

【平面形・規模】 方形で、その四隅は各方位とほぼ一致している。各辺の壁の長さは、北東壁2.6m、南東壁2.55m、南西壁2.5m、北西壁2.7mを測る。床面積は、7.17㎡ほどで本遺跡では小型の類である。

【壁・床】 地山ローム層を掘り下げて造られたものである。各辺の壁の高さは、北東壁20~29cm、南東壁8~19cm、南西壁8~20cm、北西壁7~24cmで、全体に壁の高さは低い。床は、全面的に貼床の構造となっている。

【壁溝】 地形的に標高の高い北西壁と北東壁の一部に掘り込まれている。溝幅10~20cm、溝の深さ11~21cmの規模がある。



18号住居跡

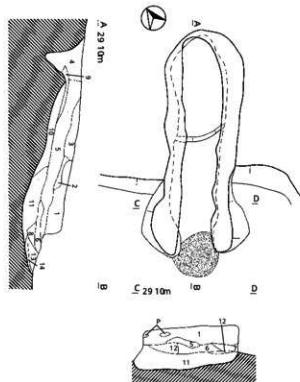
- | | |
|---------------------|----------------------------------|
| 第1層 10YR 3 3 暗褐色土 | ローム粒(大)少量、炭化粒粒(中)微量、
焼土粒(中)多量 |
| 第2層 10YR 3 2 黒褐色土 | 焼土粒少量 |
| 第3層 10YR 3 4 暗褐色土 | LB(大)微量 |
| 第4層 10YR 2 1 黒色土 | 焼土少量 |
| 第5層 10YR 2 2 黒褐色土 | ローム粒(小)少量 |
| 第6層 7.5YR 4 4 暗褐色土 | 焼土粒微量 |
| 第7層 7.5YR 2 3 暗暗褐色土 | ローム粒(大)少量 |
| 第8層 7.5YR 4 6 暗褐色土 | 焼土粒(中)微量 |
| 第9層 10YR 2 2 黒褐色土 | パズルB・パズル粒(中)少量 |
| 第10層 10YR 4 4 暗褐色土 | パズル粒微量 |
| 第11層 10YR 2 3 黒褐色土 | パズルB(大)・パズル粒(小)少量 |

P12 (E F)

- | | |
|--------------------|------------------|
| 第1層 10YR 2 3 黒褐色土 | |
| P12 (G H) | |
| 第1層 10YR 2 3 黒褐色土 | |
| P13 (I J) | |
| 第1層 10YR 2 1 黒色土 | 炭化粒粒(大)・焼土粒(大)少量 |
| 第2層 10YR 2 2 黒褐色土 | パズル少量 |
| 第3層 10YR 2 3 黒褐色土 | 炭化粒粒(中)・パズル少量 |
| 第4層 7.5YR 3 4 暗褐色土 | 焼土粒粒微量、パズル粒微量 |
| 第5層 10YR 3 3 暗褐色土 | パズル粒B少量 |
| 第6層 7.5YR 3 3 暗褐色土 | LB(大)多量、焼土粒微量 |

P14 (K L)

- | | |
|-------------------|-----------|
| 第1層 10YR 3 3 暗褐色土 | パズル粒(小)多量 |
| 第2層 10YR 2 3 黒褐色土 | パズルB(大)微量 |



18号住居跡カマド

- | | |
|---------------------|---------------|
| 第1層 10YR 2 3 黒褐色土 | ローム粒・焼土粒微量 |
| 第2層 10YR 2 2 黒褐色土 | |
| 第3層 7.5YR 2 3 暗褐色土 | 焼土B・焼土粒少量 |
| 第4層 10YR 2 2 黒褐色土 | ローム粒・炭化粒粒微量 |
| 第5層 7.5YR 3 4 暗褐色土 | ローム粒・焼土粒(大)少量 |
| 第6層 7.5YR 4 4 暗褐色土 | ローム粒(大)・焼土粒少量 |
| 第7層 10YR 3 3 暗褐色土 | ローム粒少量 |
| 第8層 10YR 2 2 黒褐色土 | |
| 第9層 10YR 2 2 黒褐色土 | |
| 第10層 10YR 3 4 暗褐色土 | ローム粒少量 |
| 第11層 10YR 3 3 暗褐色土 | ローム粒(大)少量 |
| 第12層 7.5YR 3 4 暗褐色土 | ローム粒・焼土粒少量 |
| 第1層 5YR 2 3 暗暗褐色土 | 焼土粒少量 |
| 第1層 5YR 4 6 赤褐色土 | 火床面 |

第8図 18号住居跡

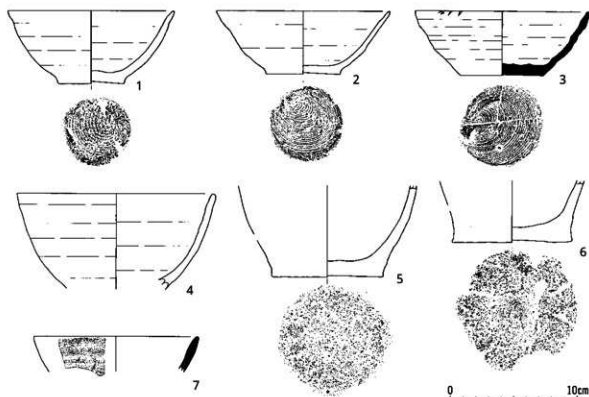
〔ビット・柱穴〕 ビットは、壁溝と床面から各2個、計4個確認した。P1、P2は、柱穴の可能性はあるが対応する位置にビットが認められていない。P3とP4は、貼床の下部から検出したもので、規模、位置などからみて土坑の類とみられる。

〔カマド〕 北東壁の中央から若干東隅寄りに設けられている。カマド本体には、芯材は使用されなかったものとみられる。煙道部の造りは半地下式である。全長200cm、袖幅90cm、奥行80cmほどの規模である。主軸方位は、N-43度-Eである。

〔堆積土〕 11層に分層された。火山灰の有無は記録されていない。

〔遺物〕 土師器と須恵器がカマド、床直上、ビットなどから出土した。土師器は、甕と坏、須恵器は、坏のみである。

〔時期〕 火山灰が確認されていないので時期については今後検討を要する住居跡である。

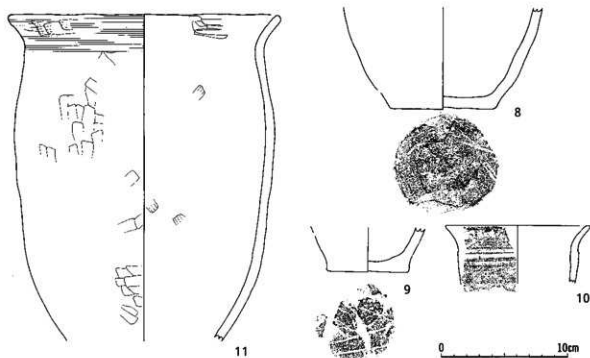


第83図 18号住居跡出土遺物(1)

18号住居跡出土遺物(1)

図説番号 83

図説番号	種別	器種	部位	計測値(cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
				口径	器高	底径					
83-1	土師器	坏	底直	135	59	54	ロクロ	ロクロ	磨転糸切り		P. 2, 7, 18外
2	土師器	坏	底直	140	51	60	ロクロ	ロクロ	磨転糸切り		P. 13, 12次
3	須恵器	坏	カマド	140	52	68	ロクロ	ロクロ	磨転糸切り		P. 1, 14次
4	土師器	球	堆積土	160	77	-	ロクロ	ロクロ	-		P. 8, 12次
5	土師器	小甕	P3#	-	74	90	(ヘラケズリ) マメツ	(ヘラナデ) マメツ	マメツ		
6	土師器	小甕	P4#	-	53	96	(ヘラケズリ)	ヘラナデツケ	マメツ不明		
7	須恵器	坏	底直	134	30	-	ロクロ	ロクロ	-		P. 12, 9, 10次



第84図 18号住居跡出土遺物(2)

19号住居跡出土遺物(2)

図録番号 84

図録番号	種別	器種	部位	計高値 (cm)		外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
				口径	底径					
84-1	土器類	小甕	埴輪土	-	83 80	ヘラケズリ	ハケメ・ナデツケ	ケズリ・ナデ		
84-2	土器類	甕	埴輪土	-	38 (70)	ヘラケズリ	ナデ	木製網		
84-3	土器類	小甕	埴輪土	116	56	(工具)ロクロ	ロクロ	-		P.X.4 5次
84-4	土器類	甕	P4粘	220	265	(ナデ)ヘラケズリ	(ハケメ)メツ	-		P.X.

19号住居跡(第85～89図、写真17・58・59)

〔位置〕 LD・LE・157-158グリッドに位置している。本住居跡の周囲には18、20、23号住居跡が配置されている。

〔重複〕 認められなかった。

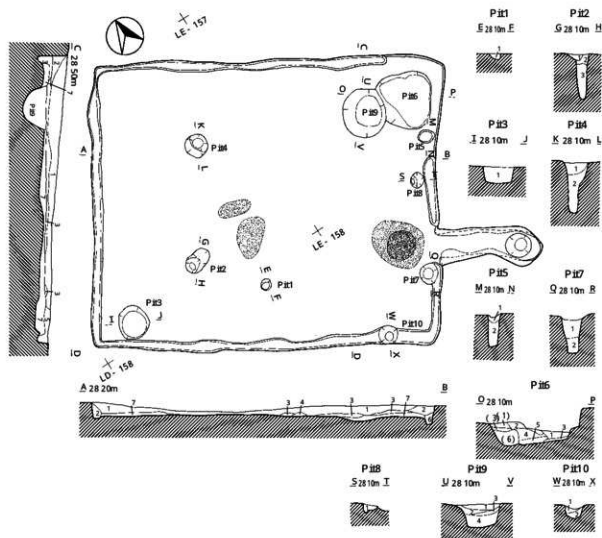
〔平面形・規模〕 長方形である。住居の四隅は各方位と向き合っている。各辺の壁の長さは、北東壁5.5m、南東壁4.55m、南西壁5.55m、北西壁4.55mを測る。床面積は、25.30㎡で比較的大型の住居跡である。

〔壁・床〕 壁は、高さを確認できる箇所がほとんど認められない。ほぼ一周している壁溝によって住居の内外を区別できるような状態である。床は、一部を除き貼床で占められている。

〔壁溝〕 カマドのある南東壁の一部と東隅付近を除き一周している。溝の規模は、幅6～20cm、深さは、北東壁辺4～10cm、南東壁辺15cm前後、南西壁辺11～20cm、北東壁辺6～17cmを測る。

〔ピット・柱穴〕 床面から9個のピットを確認した。主柱穴は、位置と規模からみてP2、P4、P5、P7と判断される。P6とP9は土坑の類とみられる。

〔カマド〕 南東壁の中央から若干南隅寄りに付設されている。遺存状態が悪くて判然としなが、芯



19号住居跡

- 第1層 10YR3 3 暗褐色土 To Δ燻炭量, LB(大)・ロ-ム粒(小)・
焼土粒(大)少量, 炭化物粒微量
第2層 10YR2 4 暗褐色土 LB(中)・炭土粒微量
第3層 10YR2 3 黒褐色土 炭化物(中)・焼土粒微量, 炭化物粒(中)少量
第4層 10YR3 3 暗褐色土 LB(大)少量
第5層 10YR2 3 黒褐色土 LB(大)微量, ロ-ム粒(大)少量, 焼土粒(小)
燻炭量
第6層 10YR4 4 褐色土 LB(大)・炭化物粒少量
第7層 10YR2 3 黒褐色土 LB(大)・ロ-ム粒(大)少量

P11 (EF)

- 第1層 10YR3 3 暗褐色土 ロ-ム粒(中)多量

P12 (GH)

- 第1層 10YR2 2 暗褐色土 ロ-ム粒(小)少量
第2層 10YR4 4 褐色土 ロ-ム質
第3層 10YR2 3 黒褐色土 ロ-ム粒(中)少量

P13 (IJ)

- 第1層 10YR3 3 褐色土 ロ-ム粒(小)多量

P14 (KL)

- 第1層 10YR3 3 暗褐色土 ロ-ム粒少量
第2層 10YR2 3 黒褐色土

P15 (MN)

- 第1層 10YR3 3 暗褐色土 ロ-ム粒(中)多量
第2層 10YR2 2 黒褐色土

P16 (OP)

- 第1層 10YR2 2 黒褐色土 バミズブロック(中)少量
第2層 10YR3 2 暗褐色土 焼土粒(中)少量
第3層 10YR2 1 黄褐色土 LB(中)微量
第4層 10YR3 3 暗褐色土 焼土粒(中)多量
第5層 10YR3 3 暗褐色土 炭化物粒(小)微量, 焼土粒(小)微量
第6層 10YR5 6 黄褐色土 ロ-ム質

P17 (QR)

- 第1層 10YR3 3 暗褐色土 ロ-ム粒(小)少量
第2層 10YR2 2 暗褐色土

P18 (ST)

- 第1層 10YR2 3 暗褐色土

P19 (UV)

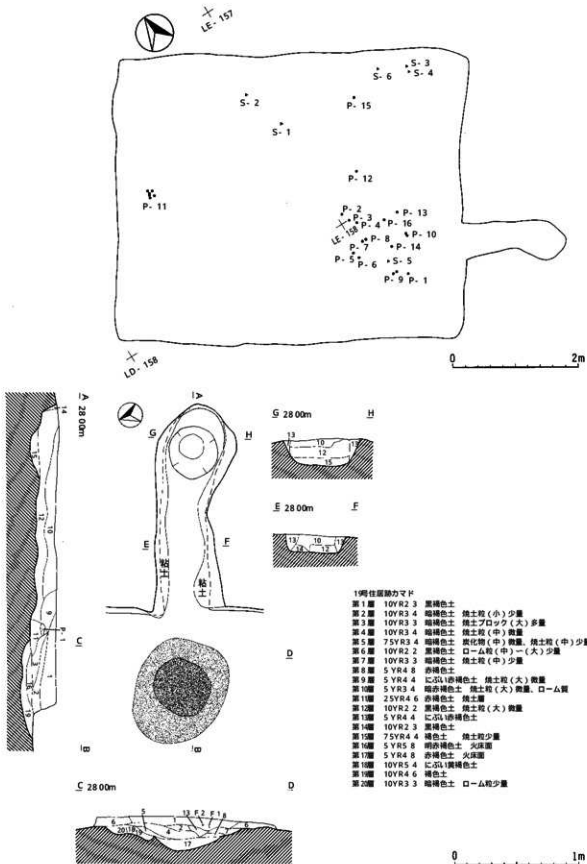
- 第1層 10YR2 3 暗褐色土 LB(大)・ロ-ム粒微量
第2層 75YR2 3 暗褐色土 炭化物(大)少量, 焼土粒(中)微量
第3層 75YR3 3 暗褐色土 炭化物(大)多量, 焼土粒(大)少量
第4層 10YR3 3 暗褐色土 ロ-ム質, LB(大)多量

P20 (WX)

- 第1層 10YR3 3 暗褐色土 LB(中)少量
第2層 10YR2 3 暗褐色土 炭化物粒(中)微量

0 2m

第 8 図 19号住居跡(1)



第8図 19号住居跡(2)

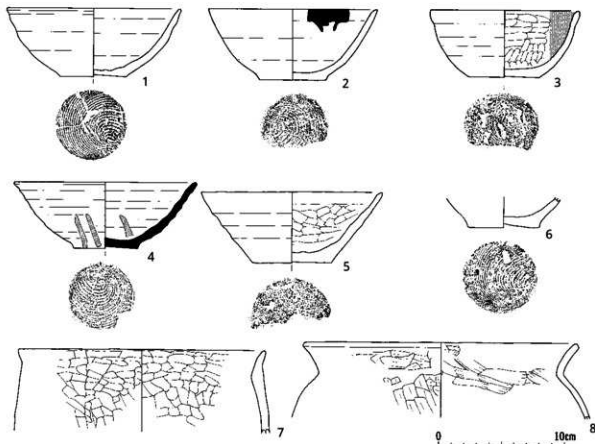
材を使用しないカマドとみられる。煙道部の構造は、半地下式の造りである。全長 280cm、袖幅 90cm、奥行 110cm ほどの規模と推定される。主軸方位は、N - 120 度 - E である。

【堆積土】 7 層に区分されたが、火山灰は確認されていない。確認面以下は自然堆積したものとみられる。

【遺 物】 土師器、須恵器、鉄器などが床面、カマド、ピットなどから出土した。

土師器は、椀と坏で内面黒色処理した坏も含まれている。須恵器は、坏と長頸壺に分けられる。鉄器は、紡錘車である。

【時 期】 火山灰が確認されていないので、時期については今後検討を要する。

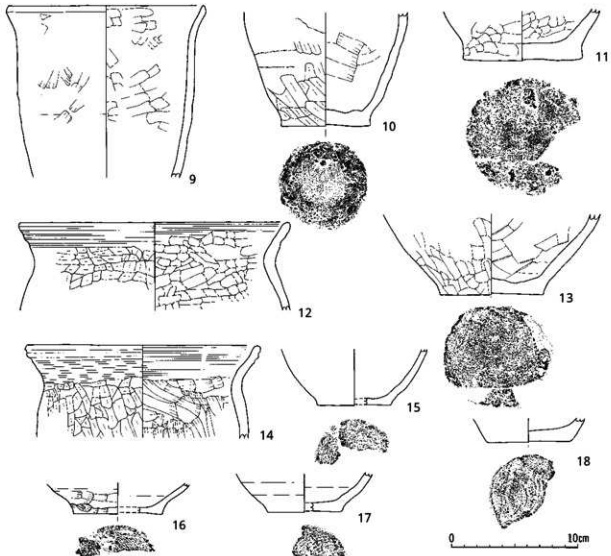


第 8 図 19号住居跡出土遺物(1)

19号住居跡出土遺物(1)

図面番号 87

図面番号	種別	器種	層位	計測値(cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考	
				口径	器高	底径						
1	土師器	钵	床面	(140)	55	54	ロクロ	ロクロ	回転糸切り		P 11.1 2次	
2	土師器	钵	4 層	(156)	57	54	ロクロ	ロクロ	回転糸切り		1 次、灯明皿	
3	土師器	钵	床面	(120)	54	58	ロクロ	ヨコナデ	糸切りナデ		1 次	
4	須恵器	钵	床面	148	53	52	ロクロ	ロクロ	回転糸切り		P 11.1 5次	
5	土師器	钵	床面	(146)	57	64	ロクロ	ロクロ	回転糸切り		2 次	
6	土師器	钵	カマド	-	23	58	ロクロ	ロクロ	回転糸切り		P X	
7	土師器	壺	P 9	(200)	66	-	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	ヨコナデ	-	5 次
8	土師器	壺	P 6	(222)	60	-	ヘラナデ	ヘラケズリ	ヘラナデ	ヘラナデ	-	

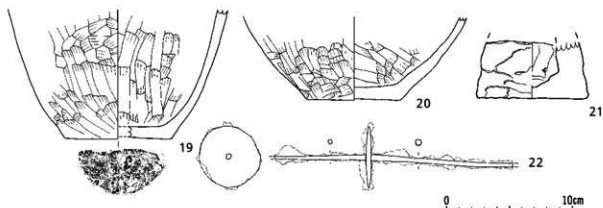


第88図 19号住居跡出土遺物(2)

19号住居跡出土遺物(2)

図録番号 88

図録 番号	種別	器種	部位	計測値(cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
				口径	高さ	底径					
19	土師器	甕	P 6	(160)	138	-	ロクロ	ロクロ 瓦メツ	-	-	罐
10	土師器	甕	P 6	-	92	72	ヘラケズリ	ナデ 瓦メツ	ケズリ ナデ	-	P. 3 二次焼成
11	土師器	甕	P 9	-	40	96	ナデ	ナデ 瓦メツ	(ナデ 瓦メツ)	-	土灰 1 P6
12	土師器	甕	底	(220)	71	-	ヨコナデ ヘラケズリ	ヨコナデ ケズリ・ナデ	-	-	-
13	土師器	甕	P 6	-	65	83	ヘラケズリ	ヘラケズリ	外マメツ	-	二次焼成
14	土師器	甕	輪・縁底	(190)	74	-	ヨコナデ ヘラケズリ	ヨコナデ ナデ	-	-	P. 16. 1 3次
15	土師器	杯	P 9	-	45	(60)	(ロクロ 瓦メツ)	ロクロ 瓦メツ	(糸切り 瓦メツ)	-	土灰 2 P9
16	土師器	杯	カマド	-	24	(67)	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	-	P4 二次焼成
17	土師器	杯	底	-	31	(60)	ロクロ	ロクロ	(回転糸切り)	-	P. 5
18	土師器	甕	カマド	-	19	(68)	ロクロ ケズリ	ロクロ	糸切り ケズリ	-	P. 2



第 89 図 19号住居跡出土遺物(3)

19号住居跡出土遺物(3)

図版番号 89

図版番号	種類	器種	部位	計測値(cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
				口径	器高	底径					
19	土師器	甕	底	10.5	(86)		ヘラナデ	ナデ・ナデツケ	ヘラナデ		P.6外, 1.2次
20	土師器	甕	底	6.7	(76)		ヘラナデ	ヘラナデ	(ヘラナデ穴メツ)		P.1.3 4次

図版番号	分類	出土遺物	部位	計測値				備考
				長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	
19	土師器	19号住居跡	地盤土	4.5	8.7		117.8	C-X.整理 5, V字状切り込み型の破片?
22	鉄製細線	19号住居跡	カマド	19.3	4.9	0.4	31.2	F.1.整理 32

20号住居跡(第90-93図、写真18・59・60)

[位置] KZ・LA-159 160グリッドに位置している。最寄りの23号住居跡までは8mほどの間隔がある。

[重複] P8が北東壁を掘り下げている。

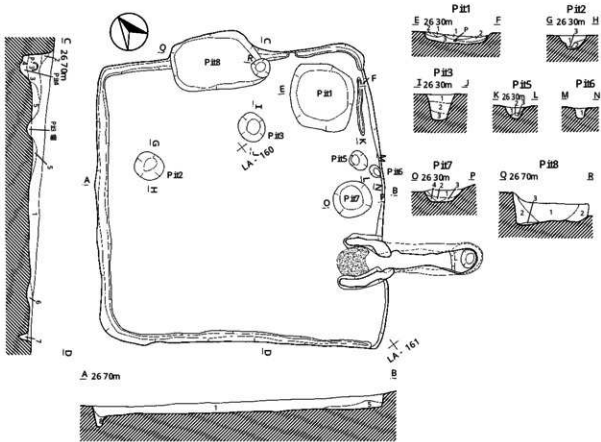
[平面形・規模] 住居の四隅が各々東西南北を向いているような隅丸方形を呈している。各辺の壁の長さは、北東壁4.15m、南東壁4.75m、南西壁4.4m、北西壁4.2mを測る。床面積は、20.00㎡で本遺跡では比較的大きな住居跡である。

[壁・床] 地山ローム層を掘り込んで構築されている。各辺の壁の高さ、北東壁27cm前後、南東壁32cm前後、南西壁13cm前後、北西壁27cm前後を測る。床面は、起伏が少なく多くは堅緻であるがカマド右袖付近とP6、P7の上部には貼床もみられる。

[壁溝] カマドの両側を除いて一周している。規模は、溝幅7~25cm、深さは北東壁辺18~2cm、南東壁辺2~8cm、南西壁辺8~20cm、北西壁辺18~27cmを測る。

[ピット・柱穴] 床面から7個のピットを確認した。P6、P7は、貼床の下部から検出した。P2、P5は、形状、規模からすれば主柱穴ともみられるが、対応する位置には柱穴状のピットは見当たらない。P8は土坑とみられる。

[カマド] 南東壁の南隅寄りにあるが、ほぼ破壊された状態であった。袖の芯材には礫を使用したよ



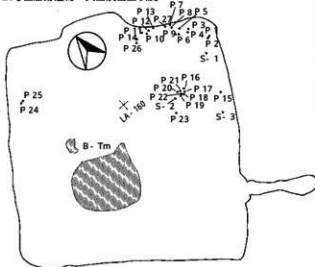
20号住居跡

- 第1層 10YR2 3 黄褐色土 B Tm層状に少量、焼土粒微量
- 第2層 10YR3 3 暗褐色土 LB(大) 微量
- 第3層 10YR3 4 暗褐色土 炭化微粒微量
- 第4層 10YR3 2 黄褐色土 ローム粒微量、P11
- 第5層 10YR3 3 暗褐色土 LB(大) 少量
- 第6層 10YR2 3 黄褐色土 ローム粒少量
- 第7層 10YR3 3 暗褐色土 LB(中) 微量
- 第8層 10YR2 2 黄褐色土 ローム粒少量

P11 (E F)

- 第1層 10YR5 6 黄褐色土 パミス
- 第2層 10YR2 2 黄褐色土 ローム粒・焼土粒少量、炭化微粒微量
- 第3層 10YR3 3 暗褐色土 炭化物少量

20号住居跡遺物・火山灰出土状況



P12 (G H)

- 第1層 10YR3 3 暗褐色土 ローム粒少量
- 第2層 10YR4 4 褐色土 ローム粒少量
- 第3層 10YR3 4 暗褐色土

P13 (I J)

- 第1層 10YR3 2 黄褐色土 LB(大) 微量、ローム粒少量
- 第2層 10YR3 3 暗褐色土 ローム粒(中) 少量
- 第3層 10YR4 4 褐色土 ローム粒(中) 少量

P15 (K L)

- 第1層 10YR3 3 暗褐色土 ローム粒(中) 少量
- 第2層 10YR2 2 黄褐色土 炭化微粒微量
- 第3層 10YR4 4 褐色土 ローム粒多量

P16 (M N)

- 第1層 10YR3 3 暗褐色土 ローム粒(大)・炭化粒(中) 少量

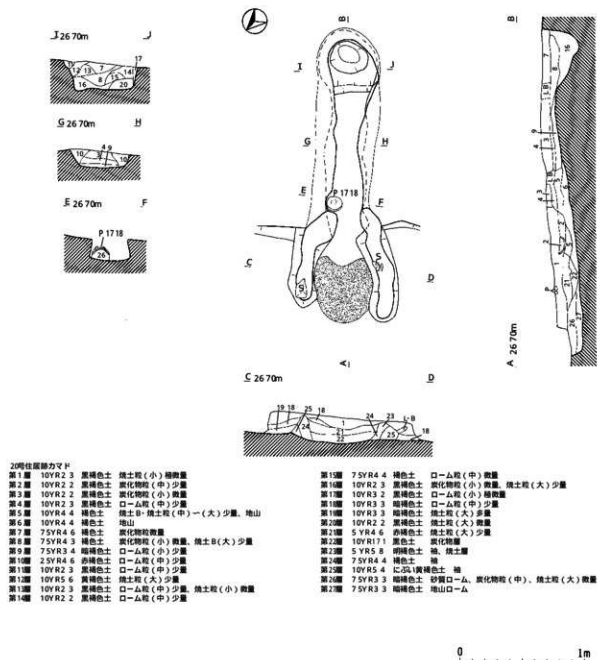
P17 (O P)

- 第1層 10YR5 6 黄褐色土 黄褐色土状に多量
- 第2層 10YR2 2 黄褐色土 炭化微粒微量
- 第3層 10YR4 4 褐色土 炭化微粒微量
- 第4層 10YR2 3 黄褐色土 ローム粒(中) 少量

P18 (Q R)

- 第1層 10YR2 3 黄褐色土 LB(大) 微量、ローム粒(小) 少量
- 第2層 10YR2 3 黄褐色土 ローム粒微量、炭化微粒微量
- 第3層 10YR4 4 褐色土 ローム粒・炭化微粒微量

第9図 20号住居跡(1)



20号住居跡カマド

- | | | | |
|------|-----------|------|---------------------|
| 第1層 | 10YR2 3 | 黒褐色土 | 焼土粒(小)少量 |
| 第2層 | 10YR2 2 | 黒褐色土 | 炭化粒粒(中)少量 |
| 第3層 | 10YR2 2 | 黒褐色土 | 炭化粒粒(小)少量 |
| 第4層 | 10YR2 3 | 黒褐色土 | ローム粒(中)少量 |
| 第5層 | 10YR4 4 | 褐色土 | 焼土B・焼土粒(中)→(大)少量、地山 |
| 第6層 | 10YR4 4 | 褐色土 | 地山 |
| 第7層 | 7.5YR 4 6 | 褐色土 | 炭化粒粒少量 |
| 第8層 | 7.5YR 4 3 | 褐色土 | 炭化粒粒(小)少量、焼土B(大)少量 |
| 第9層 | 7.5YR 4 4 | 暗褐色土 | ローム粒(小)少量 |
| 第10層 | 2.5YR 6 6 | 赤褐色土 | ローム粒(中)少量 |
| 第11層 | 10YR2 3 | 黒褐色土 | ローム粒(中)少量 |
| 第12層 | 10YR5 6 | 黄褐色土 | 焼土粒(大)少量 |
| 第13層 | 10YR2 3 | 黒褐色土 | ローム粒(中)少量、焼土粒(小)少量 |
| 第14層 | 10YR2 2 | 黒褐色土 | ローム粒(中)少量 |

- | | | | |
|------|-----------|---------|------------------------|
| 第1層 | 7.5YR 4 4 | 褐色土 | ローム粒(中)少量 |
| 第14層 | 10YR2 3 | 黒褐色土 | 炭化粒粒(小)少量、焼土粒(大)少量 |
| 第17層 | 10YR3 2 | 黒褐色土 | ローム粒(小)少量 |
| 第18層 | 10YR3 3 | 暗褐色土 | ローム粒(中)少量 |
| 第19層 | 10YR3 3 | 暗褐色土 | 焼土粒(大)少量 |
| 第20層 | 10YR2 2 | 黒褐色土 | 焼土粒(大)少量 |
| 第21層 | 5YR 4 6 | 赤褐色土 | 焼土粒(大)少量 |
| 第22層 | 10YR17 1 | 黒色土 | 炭化粒層 |
| 第23層 | 5YR 5 8 | 暗褐色土 | 焼土層 |
| 第24層 | 7.5YR 4 4 | 褐色土 | 焼土層 |
| 第25層 | 10YR5 4 | にじみ黄褐色土 | 焼土層 |
| 第26層 | 7.5YR3 3 | 暗褐色土 | 砂質ローム、炭化粒粒(中)、焼土粒(大)少量 |
| 第27層 | 7.5YR3 3 | 暗褐色土 | 地山ローム |

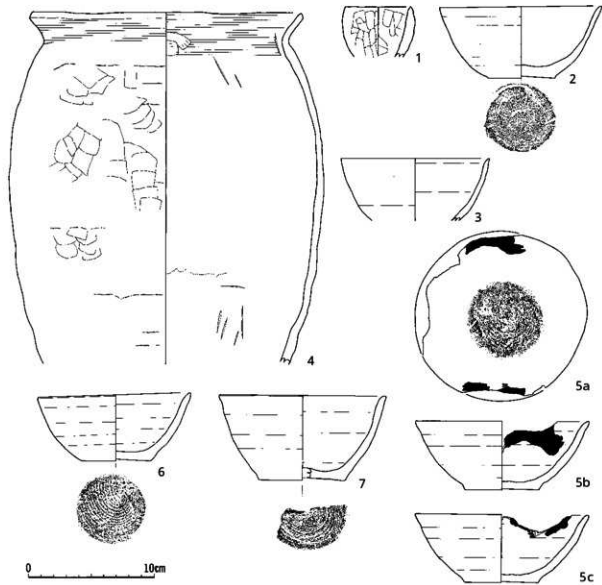
第 9 図 20号住居跡(2)

うで、また、支脚として2個の坯を重ねて用いたようである。煙道部の構造は、半地下式である。全長230cm、袖幅90cm、奥行70cmの規模とみられる。主軸方位は、N - 125度 - Eである。

[堆積土] 確認面以下の堆積土は、8層に分層された。自然堆積したものとみられる。1層にはB Tm火山灰、また、P7付近の貼床下部にはTo a火山灰が認められた。

[遺物] 床面、カマド、床直上から土師器と須恵器が出土した。

土師器は、長胴甕、坏、手捏土器が、また、須恵器は、坏、長頸壺、小鉢、広口甕などである。

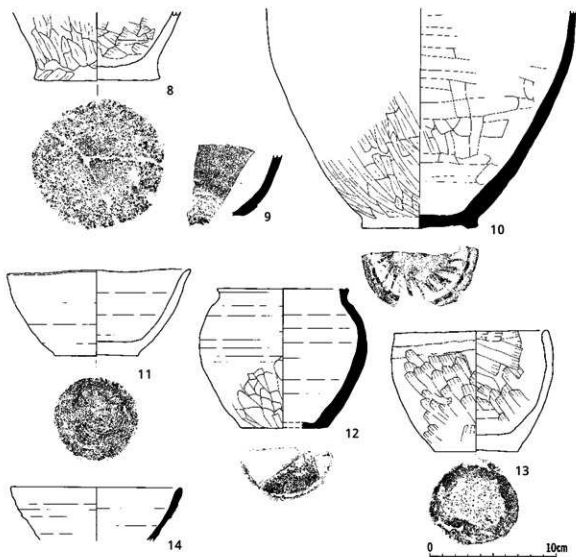


第9図 20号住居跡出土遺物(1)

20号住居跡出土遺物(1)

図録番号 92

図録 番号	種別	器種	部位	計測値(cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
				口径	器高	底径					
10	土師器	平埴	カマド (54)	40	-	-	ナデヘラナデ	ナデ	-	-	二次焼成
1	土師器	埴	カ火床	130	58	54	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	P. 17, 18	支脚 1
11	土師器	埴	竈口方	(120)	50	-	ロクロ	ロクロ	-	-	赤土 厚塗
4	土師器	壺	カマド	220	38.3	-	3コマチヘラズリナデ	3コマチオサエナデ	-	-	1次
11	土師器	埴	カ火床	140	55	60	ロクロ	ロクロ	(回転糸切り)	-	K.P. 1, 灯明皿
14	土師器	埴	カ火床	124	55	56	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	-	P. 18, 支脚
7	土師器	埴	埴積土 (135)	68	64	-	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	-	P. X



第9図 20号住居跡出土遺物(2)

20号住居跡出土遺物(2)

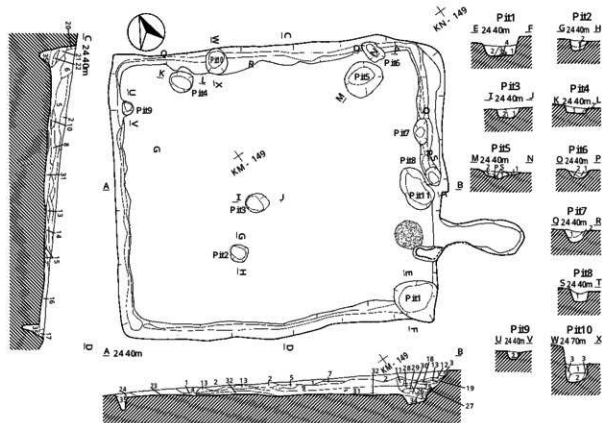
図録番号 93

図録 番号	種別	器種	器位	計測値 (cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
				口径	器高	底径					
93-1	土師器	甕	カマド	-	55	102	ヘラケズリ	ヘラナデ	(ナデ) マメツ		
93-2	須恵系	長頸甕	埴積土	-	48	(94)	(ロクロ) ヘラケズリ	ロクロ	ヘラナデ		焼台跡
93-3	須恵系	長頸甕	床面	-	172	94	050 7477-994-591刻	ロクロ 当て具用-ロクロ	菊花状ケズリ		P. 3.6 外
93-4	土師器	埴	埴積土	148	70	68	ロクロ	ロクロ	(部転丸切り)		P. 14.1 3次
93-5	須恵系	広口甕	床面	104	110	(72)	ロクロ ナデヘラナデ	ロクロ	ヘラナデ		P. 21.外.1 2次
93-6	土師器	甕	カマド	124	98	67	ヘラナデ	ヘラナデ ナデツケ	ナデ		P. 1.2.1 4次
93-7	須恵系	埴	床面 (138)	43	-	-	ロクロ	ロクロ	-		P. 10.12 外

[時期] 本住居跡と伴出した遺物の年代は、火山灰の降下年代からみる限り9世紀末葉から10世紀初頭と推定することができる。

21号住居跡(第94-98図、写真18・60)

- [位置] 本年度の調査区域では西端に近いKL・KM-148 149グリッドに位置している。最寄りの22号住居跡とは20mあまり離れている。
- [平面形・規模] 住居の対角線が東西南北を向くような長方形である。各辺の壁の長さは、北東壁4.85m、南東壁4.3m、南西壁4.9m、北西壁4.3mを測る。床面積は、21.98㎡で本年度の調査で検出した住居跡では大型に含められる規模である。
- [壁・床] 地山ローム層を掘り下げて構築されたものである。壁は、地形を巧みに利用したもので住居跡の西側よりも東側が高い。北東壁20-55cm、カマドのある南東壁60-27cm、南西壁7-3cm、北東壁6-14cmを測る。床は、地山のローム層を掘り下げた部分と地山の低い部分に盛土をして貼床にした部分とに分けられるが、貼床の面積は広く、黒褐色を呈している。
- [壁溝] カマドのある部分を除いて一周している。溝幅は7-20cmであるが、深さは壁の高さと反比例しているようで、北東壁-南東壁の深さは20-6cm、南西壁-北西壁の深さは16-26cmを測る。
- [ピット・柱穴] 床面から大小11個のピットを検出した。P1、P6-P8、P10は壁溝の中から確認したものである。これらのピットは位置、規模からすればP2、P3と共に柱穴の可能性もあるが、主柱穴とすれば規則性が乏しい配置となる。P5からは遺物が出ている。
- [カマド] 南東壁の南隅寄りに付設されているが、相当破壊されている。袖に芯材を使用しないカマドとみられる。煙道部は、半地下式の構造が採用されている。全長210cm、袖幅80cm、袖奥行70cmの規模とみられる。主軸方位は、N-125度-Eである。
- [堆積土] 確認面から掘り方までの堆積土は、3層に区分されたが、床面までは自然堆積したものである。貼床の上に堆積した3層にはTo_a火山灰が確認された。
- [遺物] 土師器、須恵器、鉄器、鉄滓、羽口などが床面直上、ピット、カマドから出土した。土師器は、坏と長胴甕、須恵器は坏、長頸壺、大甕である。長頸壺の底面には放射状調整痕がある。大甕の胎土分析を依頼したが(分析6)産地は不明と判定された。鉄器は、堆積土から工具状のものが出土した。鉄滓は、碗形のを半截したような形状である。羽口は、断面形が隅丸三角形を呈した大型のものの破片である。
- [時期] 本住居跡の時期は、床面上に堆積したTo_a火山灰の降下年代によって推定することができよう。



2号住居跡

- | | |
|--------------------|---------------------------|
| 第1層 10YR2 1 黒色土 | B Tm粒状混入、口-ム粒多量 |
| 第2層 10YR2 2 黒褐色土 | B Tm少量、口-ム粒多量 |
| 第3層 10YR3 3 暗褐色土 | 口-ム粒少量 |
| 第4層 10YR2 2 黒褐色土 | 口-ム粒少量 |
| 第5層 10YR3 4 暗褐色土 | To a 少量、焼土(B・六)少量、焼土粒多量 |
| 第6層 10YR2 3 黒褐色土 | 口-ム粒少量、炭化物粒少量 |
| 第7層 10YR2 2 黒褐色土 | L少量、口-ム粒少量 |
| 第8層 10YR3 3 暗褐色土 | To a 少量、口-ム粒少量 |
| 第9層 10YR2 3 黒褐色土 | To a 粒状混入、口-ム粒少量、炭化物粒少量 |
| 第10層 10YR4 4 褐色土 | L少量、口-ム粒少量 |
| 第11層 10YR2 2 黒褐色土 | L少量、口-ム粒少量 |
| 第12層 10YR3 2 黒褐色土 | 口-ム粒多量 |
| 第13層 10YR2 2 黒褐色土 | To a 粒状混入、口-ム粒少量、焼土粒少量 |
| 第14層 10YR5 6 黄褐色土 | To a 炭化物粒少量、焼土粒少量 |
| 第15層 10YR2 1 黒色土 | 口-ム粒、炭化物粒少量 |
| 第16層 10YR3 3 暗褐色土 | To a 焼土粒少量 |
| 第17層 10YR2 2 黒褐色土 | |
| 第18層 10YR3 3 暗褐色土 | To a 口-ム粒少量 |
| 第19層 10YR2 3 黒褐色土 | L少量 |
| 第20層 10YR4 6 褐色土 | 炭化物粒少量、崩落土 |
| 第21層 10YR4 6 褐色土 | 崩落土 |
| 第22層 10YR3 4 暗褐色土 | |
| 第23層 10YR2 1 黒色土 | 炭化物粒少量、灰混入 |
| 第24層 10YR2 3 暗褐色土 | 炭化物粒、焼土粒少量 |
| 第25層 10YR3 3 暗褐色土 | 口-ム粒少量 |
| 第26層 10YR2 3 暗褐色土 | 焼土粒少量 |
| 第27層 10YR2 3 暗褐色土 | 口-ム粒少量 |
| 第28層 10YR5 6 黄褐色土 | 炭化物粒少量 |
| 第29層 10YR3 3 暗褐色土 | 炭化物粒少量 |
| 第30層 10YR3 4 暗褐色土 | 口-ム粒少量 |
| 第31層 10YR3 4 暗褐色土 | To a 粒状混入、炭化物粒少量、焼土・焼土粒多量 |
| 第32層 7.5YR5 6 黄褐色土 | 焼土粒多量 |
| 第33層 10YR2 3 暗褐色土 | 炭化物粒少量 |
| 第34層 10YR2 2 暗褐色土 | 炭化物粒少量 |
| 第35層 10YR3 3 暗褐色土 | 炭化物粒少量 |

P.11 (E F)

- | | |
|------------------|--------|
| 第1層 10YR3 3 暗褐色土 | 焼土粒少量 |
| 第2層 10YR2 2 暗褐色土 | 口-ム粒少量 |
| 第3層 10YR2 2 暗褐色土 | 炭化物粒少量 |
| 第4層 10YR3 4 暗褐色土 | 口-ム粒少量 |

P.12 (G H)

- | | |
|------------------|-------------|
| 第1層 10YR2 2 暗褐色土 | 口-ム粒、炭化物粒少量 |
| 第2層 10YR4 4 褐色土 | 口-ム粒少量 |

P.13 (I J)

- | | |
|------------------|--------|
| 第1層 10YR2 2 暗褐色土 | |
| 第2層 10YR2 3 暗褐色土 | 口-ム粒少量 |

P.14 (K L)

- | | |
|------------------|--------|
| 第1層 10YR2 2 暗褐色土 | 炭化物粒少量 |
| 第2層 10YR5 6 黄褐色土 | 黒褐色土少量 |

P.15 (M N)

- | | |
|------------------|-----------|
| 第1層 10YR2 2 暗褐色土 | 炭化物粒少量 |
| 第2層 10YR2 3 暗褐色土 | To a 粒状混入 |

P.16 (O P)

- | | |
|------------------|--------|
| 第1層 10YR3 3 暗褐色土 | 炭化物粒少量 |
| 第2層 10YR3 4 暗褐色土 | パミス多量 |

P.17 (Q R)

- | | |
|------------------|--------------|
| 第1層 10YR3 3 暗褐色土 | 炭化物粒少量 |
| 第2層 10YR3 4 暗褐色土 | 炭化物粒少量、パミス少量 |

P.18 (S T)

- | | |
|------------------|--|
| 第1層 10YR3 3 暗褐色土 | |
|------------------|--|

P.19 (U V)

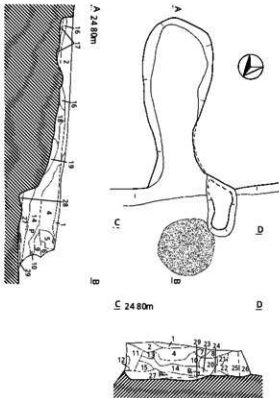
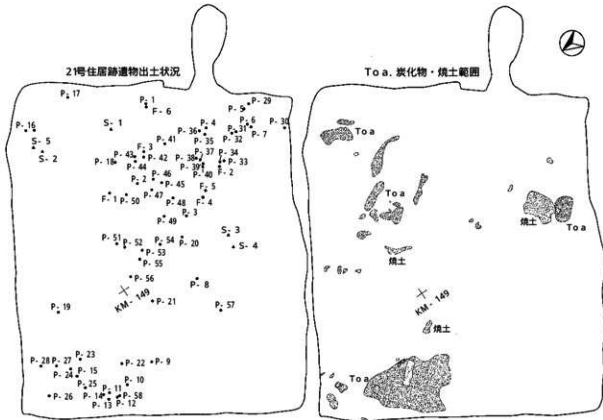
- | | |
|------------------|--------|
| 第1層 10YR3 3 暗褐色土 | 口-ム粒多量 |
| 第2層 10YR3 3 暗褐色土 | 炭化物粒少量 |

P.110 (W X)

- | | |
|------------------|--------|
| 第1層 10YR2 1 黒色土 | 口-ム粒少量 |
| 第2層 10YR17 1 黒色土 | |
| 第3層 10YR2 2 暗褐色土 | 口-ム粒少量 |

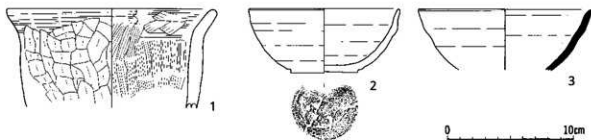


第9図 2号住居跡(1)

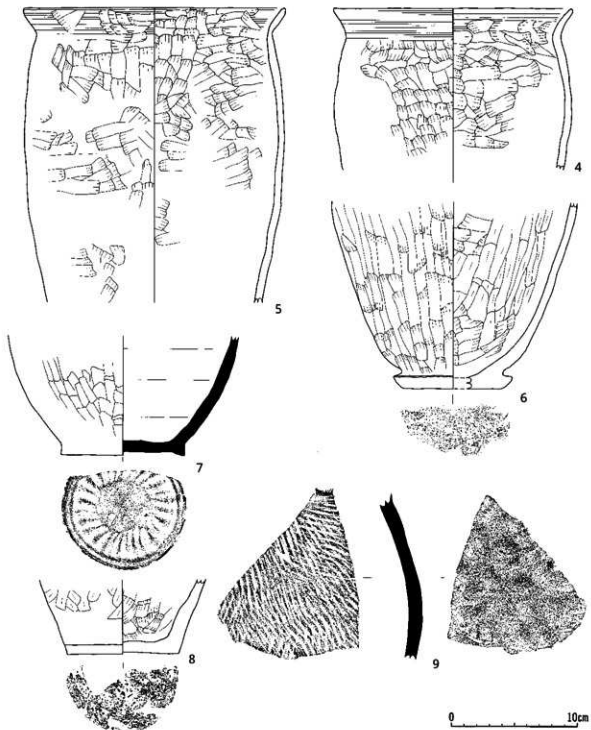


- 2号住居跡カマド
- 第1層 10YR2 2 黒褐色土 LRF少量、焼土粒散見
 - 第2層 10YR2 3 黒褐色土 ローム粒少量
 - 第3層 10YR2 3 黒褐色土 ローム粒散見
 - 第4層 10YR2 3 黒褐色土 焼土粒少量
 - 第5層 7.5YR3 4 暗褐色土 焼土粒少量
 - 第6層 10YR2 1 黒色土 焼土粒少量
 - 第7層 10YR2 3 黒褐色土 焼土粒少量
 - 第8層 10YR2 2 黒褐色土 焼土粒少量
 - 第9層 10YR3 3 暗褐色土 炭化物粒散見
 - 第10層 5 YR4 8 赤褐色土 炭化物粒散見
 - 第11層 10YR3 3 暗褐色土 炭化物粒散見、焼土粒散見
 - 第12層 10YR2 3 黒褐色土
 - 第13層 10YR5 4 灰色土 炭化物粒散見
 - 第14層 10YR4 3 灰色土 炭化物粒散見
 - 第15層 10YR3 4 暗褐色土 LRF少量
 - 第16層 10YR2 1 黒色土 ローム粒少量、焼土粒散見
 - 第17層 10YR2 3 黒褐色土 焼土粒散見
 - 第18層 10YR2 3 黒褐色土 炭化物粒散見
 - 第19層 5 YR4 4 赤褐色土 LRF少量
 - 第20層 10YR2 2 黒褐色土 焼土粒散見
 - 第21層 10YR2 3 黒褐色土 ローム粒少量
 - 第22層 5 YR4 6 赤褐色土
 - 第23層 10YR2 2 黒褐色土 LRF少量、焼土粒散見
 - 第24層 10YR3 3 暗褐色土 ローム粒散見
 - 第25層 10YR3 4 暗褐色土 ローム粒少量
 - 第26層 7.5YR3 4 暗褐色土 焼土粒少量
 - 第27層 7.5YR4 3 褐色土 焼土粒少量
 - 第28層 5 YR4 6 赤褐色土 灰床層

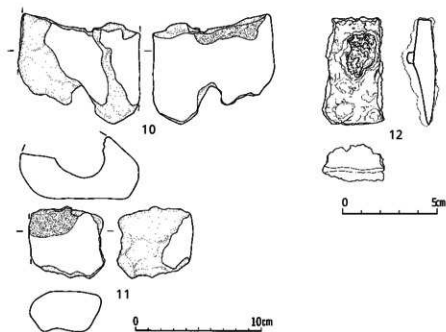
第9図 2号住居跡(2)



第96図 21号住居跡出土遺物(1)



第97図 21号住居跡出土遺物(2)



第9図 2号住居跡出土遺物(3)

2号住居跡出土遺物(1)(2)

図録番号 96・97

図録番号	種別	器種	部位	計測値(cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分期	備考
				口径	器高	底径					
96-1	土師器	甕	カマド	(170)	80	-	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・タテハケメ	-	-	3-4次, 二次焼成
2	土師器	坏	床蓋	(122)	52	54	ロクロ	ロクロ	面転糸切り	-	P. 2外, 1-2次
3	須恵器	坏	P8	(140)	49	-	ロクロ	ロクロ	-	-	3-4次, 二次焼成
97-4	土師器	甕	カ・床蓋	(192)	130	-	ヨコナデ(ヘラナデ)	ヨコナデ・ヨコナデ	-	-	P. 17外, 1-2次
5	土師器	甕	P1	(213)	237	-	ヨコナデ(ヘラナデ)・メツ	ヨコナデ・ヘラナデ	-	-	P. 6, 3-4次
6	土師器	甕	カ・床蓋	-	150	(96)	ナデ	ケズリ・ヨコナデ	(マメツ) 不磨	-	P. 11, 二次焼成
7	須恵器	長頸甕	床蓋	-	96	100	(ロクロ)・ヘラケズリ	ロクロ・ナデツケ	菊花状ケズリ	-	P. 9, 30, 3-4次
8	土師器	甕	床蓋	-	60	90	ケズリ・ナデ	ナデツケ	スナゾコ	-	P. 16, 二次焼成
9	須恵器	大甕	57P・床	-	125	-	平行交差叩き	当て具類・ナデ	-	-	P. 28分析 6

2号住居跡出土遺物(3)

図録番号 98

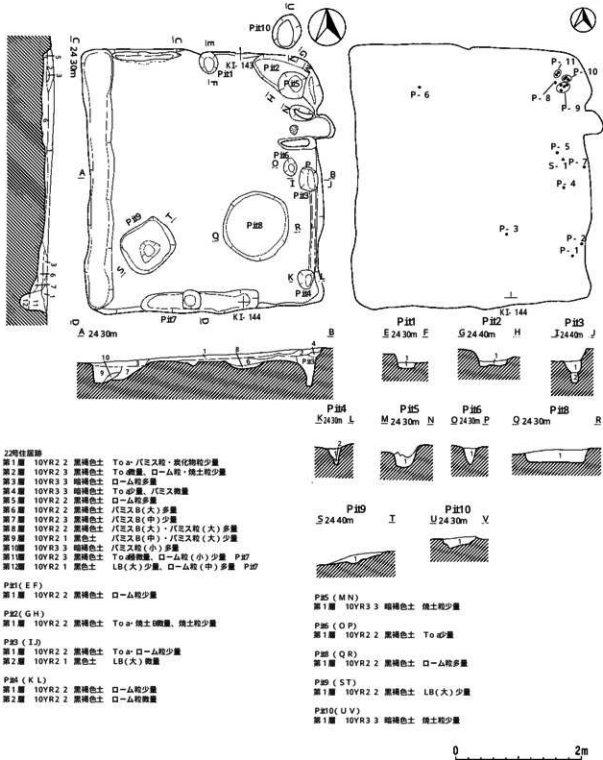
図録番号	分期	出土遺構	部位	計測値					備考
				長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g		
98-1	縄目口	2号住居跡	床蓋	5.8	5.9	3.3	1025	C. 1, 整理 6, 整理 7と同一個体, カマドコ型	
11	縄目口	2号住居跡	床蓋	8.9	9.8	3.1	2082	C. 1, 整理 7, 整理 6と同一個体	

図録番号	分期	出土遺構	部位	計測値					備考
				長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g		
98-12	鉄製品	2号住居跡	埴輪土	5.8	3.3	1.5	529	工具(袋状でなし?) F. 4, 整理 33	

2号住居跡 (第99~101図、写真19・61)

[位置] ほぼKH・KI-I-143グリッドに位置している。周辺には48、49号土坑が構築されている。

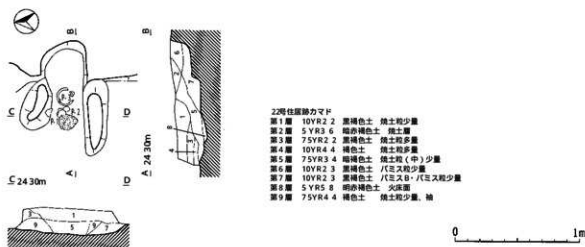
[平面形・規模] 隅丸長方形で、長軸は南北をさしている。各辺の壁の長さは、東壁3.8m、南壁



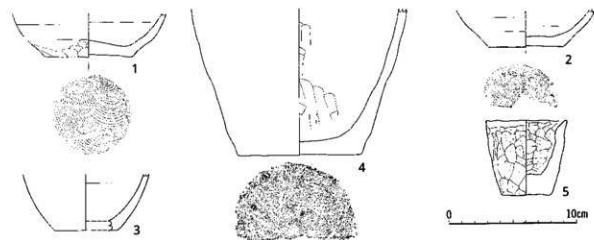
第99図 2号住居跡(1)

3.65m西壁4.1m、北壁3.6mを測る。床面積は、14.63㎡で中型の住居跡である。

- [壁・床] 壁は、全体的に低い造りである。これが本来のものであるかどうか判然としないが、壁の高さは7～20cmである。カマドのある東側の床面は、地山ローム層を利用したもので、床面積の3分の2を占めている。残りの床は貼床で、その一部は試掘の際トレンチ状に掘り下げられたようである。
- [壁溝] 東壁辺と北壁辺に設けられている。溝幅は、10～15cm、深さは東壁辺で25～32cm、北壁辺で17～21cmを測る。
- [ピット・柱穴] 住居の内外から大小10個のピットを確認した。P8～P10は、その形状から柱穴とは認め難い。P1、P3～P5、P7は壁溝に設けられ、支柱穴の可能性は高い。
- [カマド] 東壁の北東隅寄りに設けられているが、相当削平されたようである。カマド本体は、芯材などを用いないタイプとみられる。支脚は、土器を倒立させて代用させている。煙道部は、極めて短いが半地下式の構造である。全長(残存)90cm、袖幅70cm、袖奥行60cmが現存の規模である。主軸方位は、N-44度-Eである。
- [堆積土] 確認面以下の堆積土は、12層に区分された。黒褐色土が基調をなしている。自然堆積したものとみられる。1層と4層中にはTo a火山灰が塊状に確認された。
- [遺物] 出土した遺物は僅少で、土師器の坏と手捏土器がピットから出ただけである。
- [時期] 住居跡の年代を推定できる遺物はほとんど見当たらないが、堆積土中にTo a火山灰が確認されていることによっておよその年代は絞り込めるであろう。



第10図 2号住居跡(2)



第 10 図 2号住居跡出土遺物

2号住居跡出土遺物
図録番号 101

図録 番号	種 別	器 種	層 位	計 測 値 (cm)		外 面 調 整	内 面 調 整	底 面 調 整	分 類	備 考
				口 径	器 高					
101	土器類	鉢	埴積土	-	35	70	ロクロ	ロクロ	糸切りケズリ	P. 1, 6, 19, 61
2	土器類	鉢	P. 2	-	29	40	ロクロ	ロクロ	脚輪糸切り	二次焼成
3	土器類	鉢	埴積土	-	45	(50)	ロクロ	ロクロ	(脚輪糸切り)	P. 3, 二次焼成
4	土器類	壺	埴積土	-	118	(100)	ヘラナデ	ヘラナデ・ナデツケ	ヘラナデ 穴メツ	二次焼成
5	土器類	手摺	P. 1	(64)	60	(46)	ヘラケズリ	ヘラナデ	ヘラナデ	2, 3, 二次焼成

2号住居跡(第102～103図、写真19・61)

【位置】LB・LC・157・158グリッドに位置している。19号住居跡と20号住居跡との中間に構築された住居跡で、両者とは4～6m離れている。

【平面形・規模】北西壁だけが長い台形を呈している。住居の四隅は東西南北を指している。各辺の壁の長さは、北東壁2.0m、南東壁2.2m、南西壁2.0m、北西壁2.5mを測る。床面積は、2.54㎡で規模は小さい。

【壁・床】規模は小さいが、地山ローム層を掘り下げて構築されたものである。各辺の壁の高さは、北東壁29～40cm、南東壁37～25cm、南西壁17cm前後、北西壁17～31cmを測る。床面は、かたく平坦である。

【壁 溝】カマドのある箇所を除いて一周している。溝幅7～15cm、溝の深さは、北東壁辺14～22cm、南東壁辺22～12cm、南西壁辺16～29cm、北西壁辺25～14cmを測る。

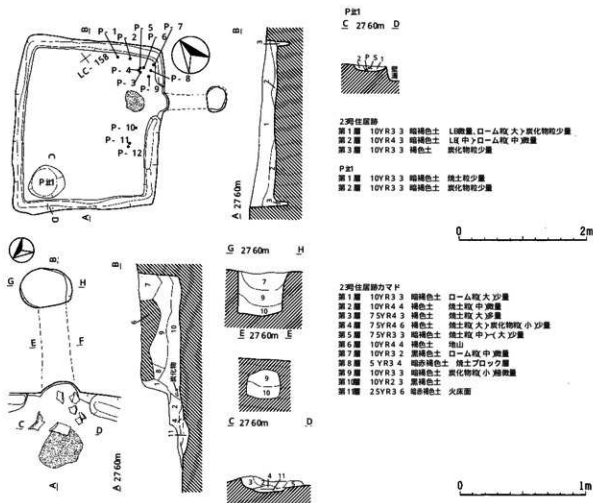
【ピット・柱穴】西隅付近からピットを1個確認した。規模、形状、遺物の出土状況からみてその用途は柱穴である可能性は小さい。

【カマド】南西壁の中央からやや東隅寄りに構築されている。カマド本体は、相当破壊されているが、土師器を芯材に使用したものとみられる。煙道部の構造は、地下式である。全長170cm、袖幅70cm、袖奥行70cmほどの規模とみられる。主軸方位は、N - 130度 - Eである。

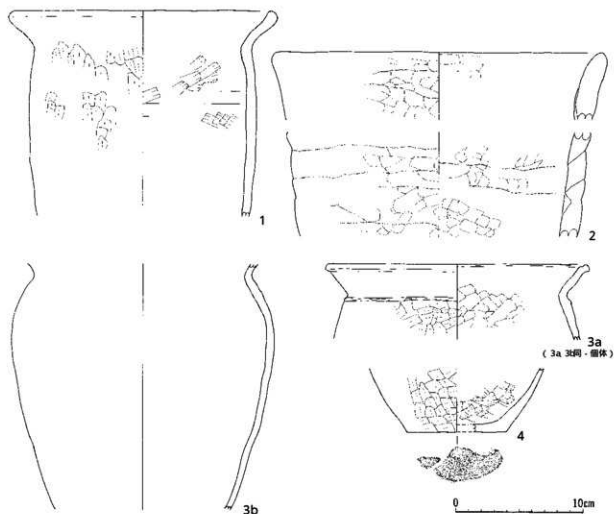
〔堆積土〕 3層に区分された。確認面以下は自然堆積したものとみられる。火山灰は、確認されていない。

〔遺物〕 出土した遺物は僅かである。床直上、カマド、ヒットなどから土師器の甕、埴[?]が出ただけである。埴[?]は製埴土器の可能性が高く15mm以上の器厚がある。

〔時期〕 時期については、手掛かりは少ない。



第10図 23号住居跡



第 10 図 2号住居跡出土遺物

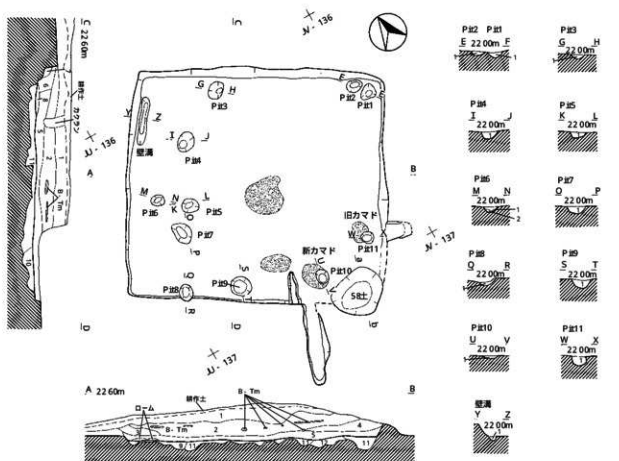
2号住居跡出土遺物

図版番号 103

図版番号	種別	器種	部位	計測値 (cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
				口径	器高	底径					
103-1	土師器	甕	カ・火床	(21.4)	16.5	-	ロクロ ヘラケズリ	ロクロ	-		K.P. 1. 2-二次焼成
2	土師器	甕	カ・火床	(26.8)	11.6	-	粘土層巻き上げ オサエ	(剥離) 汗明	-		P. 2外, 器厚 2
3	土師器	甕	床 直	(22.0)	24.0	-	ロクロ ヘラケズリ	(ロクロ) 穴メツ	-		P. 1-13 同一器体
4	土師器	甕	P. 1	-	51	80	ヘラケズリ	ケズリ ナデ	ヘラナデ		粘土結付着

24号住居跡(第104~106図、写真20・61)

- [位置] 本年度の調査区域では最西端にある住居跡である。JU-136・137グリッドを中心に位置している。
- [重複] 本住居跡の南隅付近を58号土坑が掘り下げている。58号土坑が本住居跡よりも新しい。
- [平面形・規模] 隅丸長方形を呈して、住居の対角線は各方位を向いている。各辺の壁の長さは、北東壁3.8m、南東壁(3.3)m、南西壁(3.8)m、北西壁3.5m、推定床面積は13.76㎡である。
- [壁・床] 地山を掘り下げた壁の部分は、全体に低い。各辺の壁の高さは、北東壁1.7~3.5m、南東壁1.0~2.9m、南西壁4~6cm、北西壁6~1.7cmである。床は、全体的に貼床の造りで軟弱である。床面の下部には掘り方が認められた。
- 床面には焼土面が2箇所確認された。床面中央の焼土面は径60cm前後である。南西壁寄りの焼土面は径50cmほどである。
- [壁溝] 北西壁の北隅寄りに長さ80cm、幅14~18cm、深さ6cmほどの小さな溝が設けられている。
- [ピット・柱穴] 住居内から12箇のピットを確認した。1個は、住居の南隅付近とカマドを壊して構築された58号土坑である。また、P10とP11は新旧のカマドに関連するもので、それぞれの火床面と重複している。これら以外のピットは深さ7~20cm、堆積土は黒色土1層のものが多い。ピットの規模と配置などから主柱穴を選出することは容易ではない。
- [カマド] 南西壁の南隅寄りと南東壁の南隅寄りの2箇所から新旧2基のカマドを確認した。南西壁のカマドが新しい。2基のカマドは相当に壊されている。
- 【新期のカマド】本体はほとんど削平されて不明なところが多いが、礫を芯材に利用した可能性はみられる。煙道部の構造は地下式とみられるが地山を削り貫いた煙道部の天井部は欠失していた。全長200cm前後、推定袖幅70cm、奥行60cm、煙道部は約130cm住居外に延びている。カマドの主軸方位は、N-159度-Wである。
- 【古期のカマド】本体部分は新期のカマドを構築する際に削平されたものとみられる。また、煙道部も破損を免れた箇所は少ない。確認された規模は、全長100cm、火床面の幅32cm、奥行47cmである。煙道部は、ほとんど残存していないが半地下式の可能性が高い。カマドの主軸方位は、N-114度-Eと推測される。
- [堆積土] 掘り方を含めて12層に区分された。9層~12層は、人為的な掘り方の土層である。掘り方以外の堆積土は黒色土~黒褐色土が基調をなして、自然堆積したものとみられる。2層中にはブロック状のB Tm火山灰が介在していた。
- [遺物] 床面、カマド、掘り方などから土師器、須恵器、剥片などが出土した。
- 須恵器の坏、内黒の坏、甕形土師器は、床面~床面直上から出たものである。小型の土師器は新期のカマド右袖上部から発見された。図化した遺物以外は甕形土師器の細片が35点ほどである。なお、剥片は掘り方から発見されたものである。
- [時期] 本住居跡は、B Tm降下火山灰と須恵器などの出土遺物から10世紀中葉には廃棄されていたものと推定される。



24号住居跡

- | | | | |
|------|---------|------|-------------------------------|
| 第1層 | 10YR2 1 | 黒色土 | ローム粒・炭化物粒・焼土粒微量 |
| 第2層 | 10YR2 2 | 黒褐色土 | B Tm少量、ローム粒・炭化物粒・焼土粒微量 |
| 第3層 | 10YR2 2 | 黒褐色土 | ローム粒少量、炭化物粒・焼土粒微量 |
| 第4層 | 10YR2 3 | 黒褐色土 | L R(小一中)少量、ローム多量、炭化物粒微量、焼土粒微量 |
| 第5層 | 10YR2 1 | 黒色土 | L R(小一中)粒少量、ローム粒少量、炭化物粒微量 |
| 第6層 | 10YR2 1 | 黒色土 | ローム粒極少量、炭化物粒・焼土粒微量 |
| 第7層 | 10YR2 1 | 黒色土 | ローム粒微量 |
| 第8層 | 10YR2 1 | 黒色土 | ローム粒・炭化物粒微量、焼土粒微量 |
| 第9層 | 10YR2 1 | 黒色土 | ローム粒少量 |
| 第10層 | 10YR2 2 | 黒褐色土 | L R(小一中)少量 |
| 第11層 | 10YR2 2 | 黒褐色土 | L R(小一中)少量 |
| 第12層 | 10YR5 6 | 黄褐色土 | 黄褐色土少量 |

P#9(S T)

- 第1層 10YR2 1 黒色土 L R(中)微量、ローム粒極少量

P#1(Q U V)

- 第1層 10YR4 4 褐色土 炭化物粒微量、焼土粒極少量

P#1(W X)

- 第1層 10YR2 2 黒褐色土 ローム粒極少量、炭化物粒・焼土粒微量

同層(Y Z)

- 第1層 10YR2 2 黒褐色土 ローム粒微量

P#1-Z(E F)

- 第1層 10YR2 1 黒色土 ローム粒少量

P#3(G H)

- 第1層 10YR2 1 黒色土 ローム粒微量

P#4(I J)

- 第1層 10YR2 2 黒褐色土 L R(小一中)ローム粒極少量

P#5(K L)

- 第1層 10YR2 1 黒色土 ローム粒少量

P#6(M N)

- 第1層 10YR2 1 黒色土 ローム粒微量

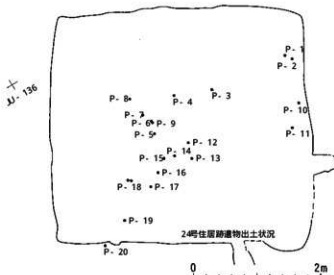
- 第2層 10YR3 3 暗褐色土 ローム粒多量

P#7(O P)

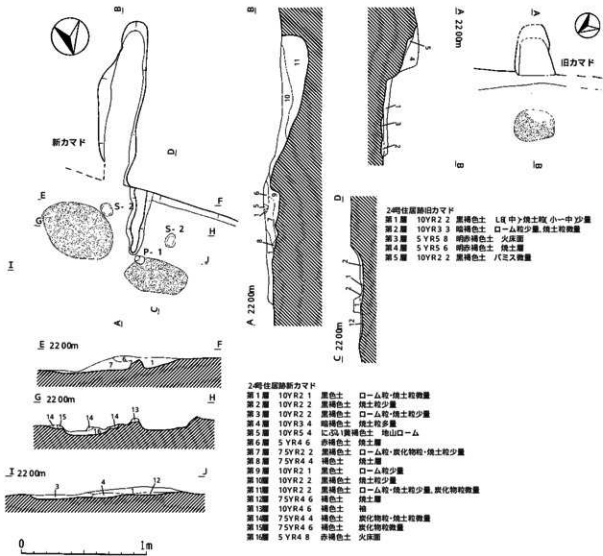
- 第1層 10YR2 1 黒色土 ローム粒少量

P#8(Q R)

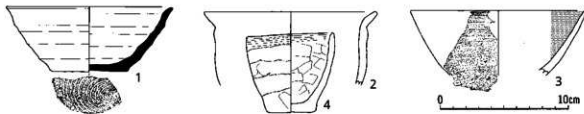
- 第1層 10YR2 1 黒色土 ローム粒微量



第104図 24号住居跡(1)



第10図 2号住居跡(2)



第10図 2号住居跡出土遺物

2号住居跡出土遺物

図録番号 106

図録番号	種別	器種	層位	計測値 (cm)		外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
				口径	器高					
106	土器類	杯	床面 (134)	52	(62)	ロク口	ロク口	面転糸結び		P1, 火傷痕
2	土器類	甕	床面 (138)	59	-	ヨコナデ ヘラナデ	ヨコヘラナデ	-		P18, 3枚
3	土器類	杯	床面 (140)	52	-	ロク口	ロク口 三方弁・内裏	-		P10, 11 12次
4	土器類	小甕	堆積土 (70)	63	40	ヨコナデ ユビオサエ	ナデ	ヘラナデ		片口?

第2号竪穴住居跡（第107～109図、写真20・21・62）

〔位置〕 K T・K U - 150・151グリッドに位置する。

〔重複〕 6号溝状遺構と重複し、本住居跡が6号溝状遺構より古い。

〔平面形・規模〕 東壁2m80cm、西壁3m5cm、南壁3m90cm、北壁3m5cmを測り、南側が広がる台形である。床面積は、101m²である。また、主軸方位はN-68°Wである。

〔壁・床面〕 壁高は、東壁23cm、西壁41cm、南壁12cm、北壁43cmである。各壁は基本層序第6層を掘り込んで構築され、ほぼ垂直に立ち上がる。床面はやや起伏がみられる。

〔周溝〕 深さ12～25cmの周溝が、北壁の一部を除いてほぼ全周する。

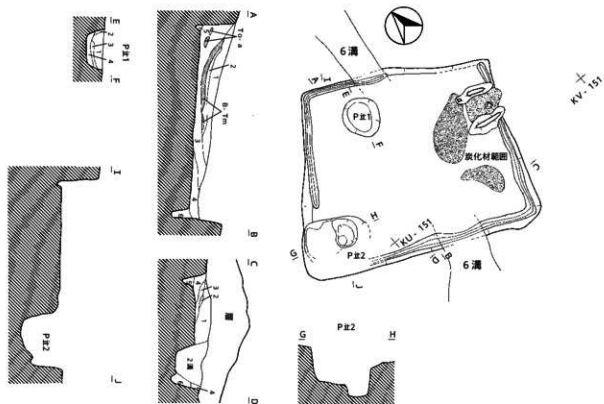
〔ピット〕 検出したピットは2個で、いずれのピットも主柱穴とは考えられない。

〔カマド〕 東壁の北寄りに構築されているが、上面がほとんど削平されており、火床面と粘土で造られたソデ、半地下式と考えられる煙道部、裏の底部を支脚に用いている以外、構造については不明である。

〔堆積土〕 6層に分層される。3層上面にB-Tm、3層下にToaが堆積している。

〔出土遺物〕 床面、貼床下部、カマドなどから、土師器の坏2個体、甕5個体などが出土した。

〔時期〕 本住居跡の年代は、火山灰の降下年代によって推定し得るものと考えられる。



2号竪穴住居跡

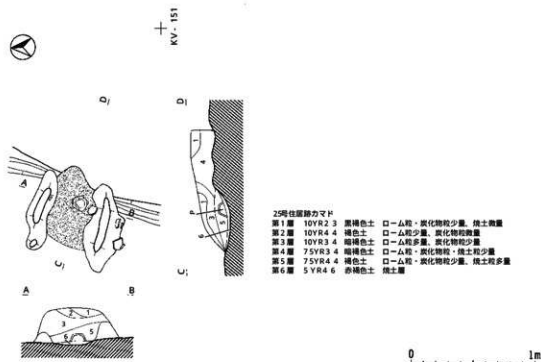
第1層	10YR2 3 黄褐色土	ロ～ム粒多量、炭化物粒微量
第2層	10YR2 1 褐色土	ロ～ム粒、焼土粒微量
第3層	10YR3 4 暗褐色土	ロ～ム粒少量
第4層	10YR2 3 黄褐色土	ロ～ム粒・炭化物粒・浮石微量
第5層	10YR4 6 褐色土	ロ～ム粒多量
第6層	10YR4 4 褐色土	ロ～ム粒多量、炭化物粒微量

P#1 (EF)

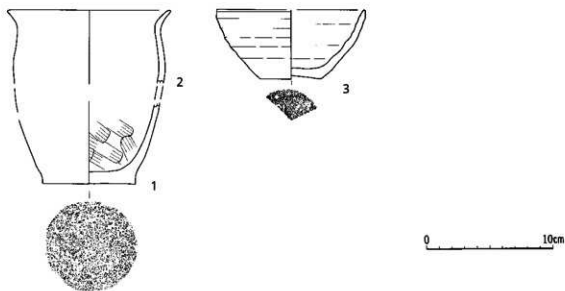
第1層	10YR3 4 暗褐色土	Toa混入、ロ～ム粒・炭化物粒少量、焼土粒微量
第2層	10YR4 6 褐色土	炭化物粒微量
第3層	10YR3 3 暗褐色土	ロ～ム粒多量、炭化物粒微量
第4層	10YR5 6 黄褐色土	炭化物粒少量

0 2m

第10図 25号住居跡(1)



第108図 25号住居跡(2)

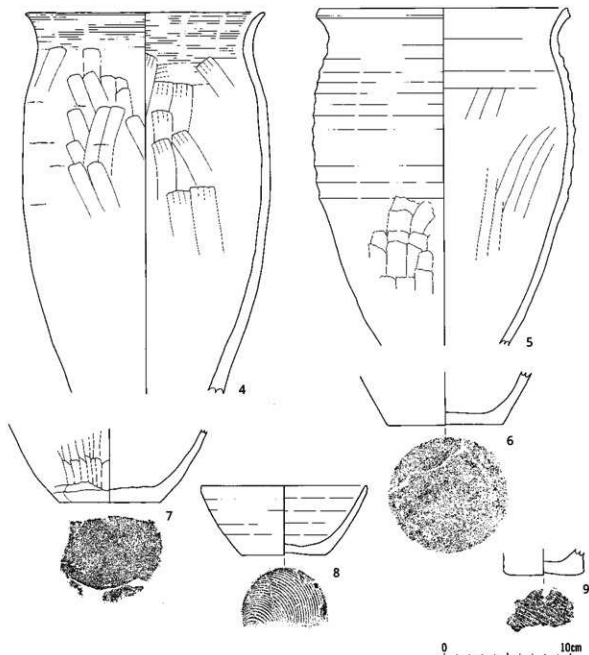


第109図 25号住居跡出土遺物(1)

25号住居跡出土遺物(1)

図版番号 109

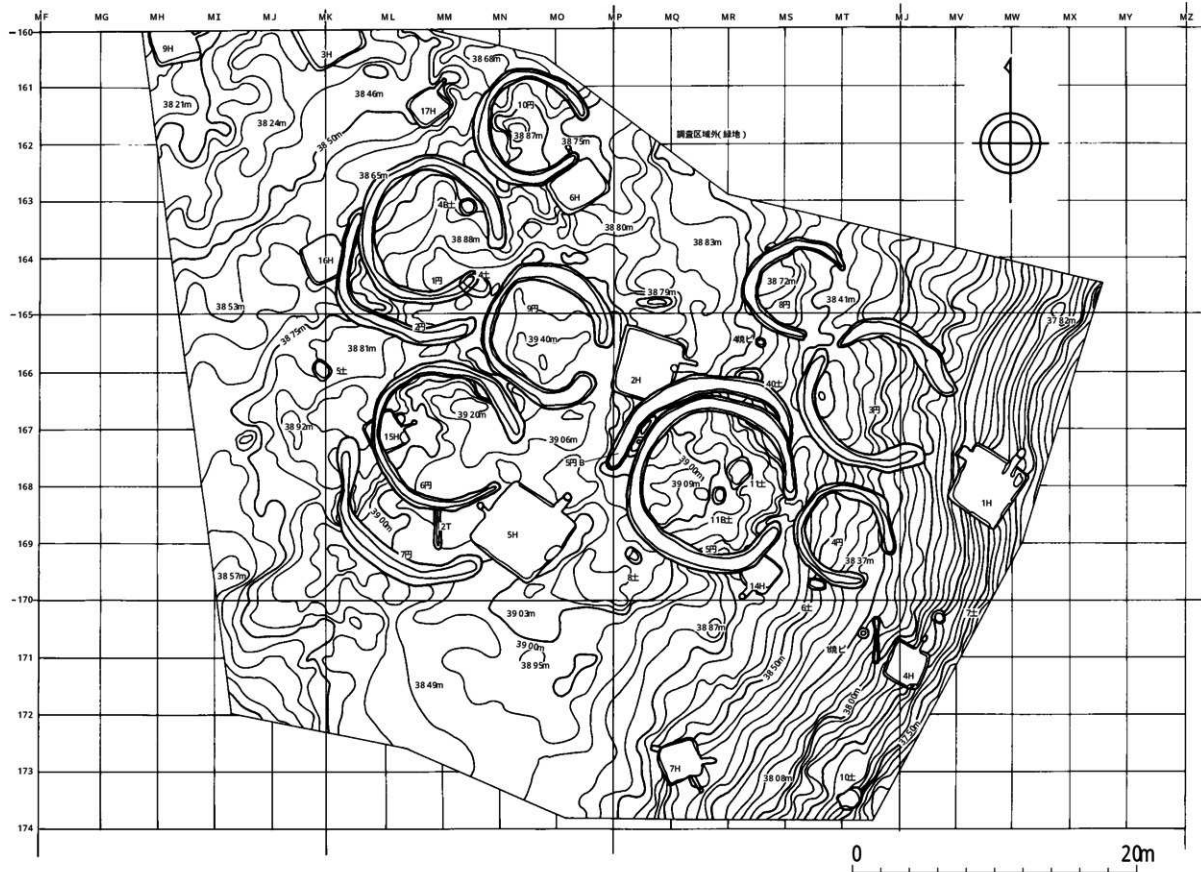
図版 番号	種別	器種	器位	計測値 (cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分期	備考
				口径	器高	底径					
109	土器類	小 甕	27P-158B	-	58	7.5	(ハクリワメイ)	ユビナデ	(ケズリ) 瓦メツ		P-11, 整理 70, 80
2	土器類	小 甕	27P-158B	(124)	60	-	(ハクリワメイ)	ユビナデ	-		P-11と同じ, 整理
3	土器類	埴	埴模土	(128)	52	(50)	(ロクロ) 瓦メツ	(ロクロ)	回転糸切り		P-2, 3-4次, 整理 1



第 11 図 25号住居跡出土遺物(2)

25号住居跡出土遺物(2)
図版番号 110

図版 番号	種 別	器 種	属 位	計 測 値 (cm)			外 面 調 整	内 面 調 整	底 面 調 整	分 類	備 考
				口 径	器 高	底 径					
10-	土師器	壺	271+縁	196	302	-	ヨコナデ ヘラケズリ	ヨコナデ ヘラナデ	-		P. 17, 外, 整理 68
	土師器	壺	271+縁?	(240)	270	-	ロクロ ヘラケズリ	ロクロ(ママツ)	-		P. 2, 外, 整理 69
	土師器	壺	271+縁	-	45	95	ロクロ ヘラケズリ	ナデ	ケズリ		P. 8, 7c 同-, 整理 71
	土師器	表 床 面	-	65	80		ヘラケズリ	ナデ	ケズリ		P. 6, 23, 24, 整理 2
	土師器	坏 床 面	(166)	56	68		ロクロ ケズリ	ロクロ	(ロクロ ケズリ)		P. 10, 1 2c, 整理 5
	土師器	小 壺	船床下	-	22	(58)	ヘラケズリ	ユビナデ	(輪物製品 妊娠)		P. 34, 整理 4



第 11 図 円形周溝配置図

2 円形周溝

円形周溝は、拡張したものを含めると1基検出した。うち6基は平成8年度に青森県埋蔵文化財調査センターが試掘調査を実施した際に確認されていたものである。

これらの円形周溝は、本年度の発掘調査区域では北東端に位置する標高38～39mほどの丘陵頂部から集中的に検出された。円形周溝が構築されていたおおよその面積は、東西44m、南北36m、約1500㎡である。また、検出した円形周溝のうちの5基は、平安時代の竪穴式住居跡と重複している。

1号円形周溝（第112図、写真21・22・23・63）

〔位置〕 MK-MN - 162-164グリッドに位置している。周辺には6、16、17号住居跡、2、9、10号円形周溝などが構築されている。

〔重複〕 本周溝の南東端を4号土坑が掘り下げている。また、周溝の内側（内郭と仮称する）には4号B土坑が設けられている。さらに本周溝の南西側には2号円形周溝の北端が密着している。本周溝は2号周溝よりも古く、4号B土坑は、本周溝よりも古い可能性が高い。また、4号土坑は、本周溝よりも新しい。

〔平面形・規模〕 周溝は、円形を呈しているが、周溝が途切れた開口部は南東部にある。開口部の幅は、19mである。内郭の中心と開口部両端の中間点を結ぶ主体部推定軸線は、S - 60度 - Eである。周溝の規模は、縦横3個づつのグリッドの中に収まる位の大きさである。外周壁径（以下、外径と省略）10.2～10.6m、内周壁径（以下、内径と省略）8.8～8.5m、周溝の幅0.9～1.2m、周溝の深さは開口部の両側が0.6～0.7mで、その他のところが0.4～0.5m前後を測る。

〔主体部〕 検出されなかった。

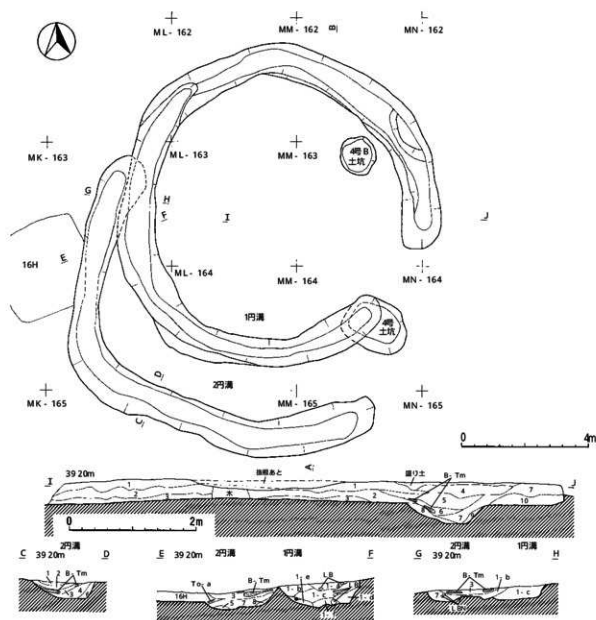
〔関連土坑〕 関連のありそうな土坑は、4号土坑と4号B土坑の2基である。

4号土坑は、1号円形周溝の南東端を不整な隅丸長方形に浅く掘り下げて構築されている。規模は、開口部の径200 160cm、底部の径160 110cm、確認面からの深さ25cmである。長軸の方向は、S - 60度 - Eである。堆積土は、3層に区分された。本土坑内から出土した遺物は、内黒土師器の坏と小礫である。遺物は土坑の北西側の底面近くに位置していた。本土坑をここで取り上げたが、1号円形周溝を拡張して造られた2号円形周溝に伴う可能性が高い。

4号B土坑は、1号円形周溝内郭北東部の地山を円形丸底状に掘り込んで構築されたものである。開口部の径125 115cm、底部の径105 95cm、確認面からの深さ20cmの規模がある。堆積土は3層に分けられ黒褐色土が基調をなしている。遺物は、確認されなかった。1号円形周溝との新旧関係は、周溝よりも古い可能性がある。

〔壁・底〕 壁面は、内周壁、外周壁ともに底面から末広がりに立ち上がっている。内周壁の傾斜角度は外周壁の傾きよりも小さい。底面は、全体的に起伏が目立っている。掘り方にはロームブロック混じりの黒褐色土を掘り残したまま均したような箇所もある。

〔堆積土〕 盛土、地山表土から周溝底面までの堆積土は10層に区分された。周溝内の堆積土は、盛土などが自然に流れ込んで形成されたものとみられる。周溝内の6層中にはB Tm火山灰が



1号内沟南溝 (I, J)

- | | | | |
|------|----------|------|-----------------------|
| 第1層 | 10VR2 2 | 黑褐色土 | 口—△灰粉層, 灰化粉粒層 |
| 第1層 | 10VR2 3 | 黑褐色土 | 口—△灰粉層, 灰化粉粒層 |
| 第2層 | 10VR2 2 | 黑褐色土 | 口—△灰粉層, 灰化粉粒層 |
| 第3層 | 10VR3 3 | 暗褐色土 | 層L(中)少量, 口—△灰粉層 |
| 第4層 | 10VR2 2 | 黑褐色土 | 口—△灰粉層, 灰化粉粒層 |
| 第5層 | 10VR2 3 | 黑褐色土 | B Tm多量, 口—△灰粉層, 灰化粉粒層 |
| 第6層 | 10VR2 2 | 黑褐色土 | B Tm多量, 口—△灰粉層, 灰化粉粒層 |
| 第7層 | 10VR2 1 | 黑褐色土 | 口—△灰粉層, 灰化粉粒層 |
| 第8層 | 10VR2 2 | 黑褐色土 | 口—△灰粉層, 灰化粉粒層 |
| 第9層 | 10VR3 2 | 黑褐色土 | 口—△灰粉層, 灰化粉粒層 |
| 第10層 | 10VR2 2 | 黑褐色土 | 口—△灰粉層, 灰化粉粒層 |
| 第11層 | 10VR17 1 | 黑褐色土 | 口—△灰粉層, 灰化粉粒層 |

1-2号内沟南溝 (E, F)

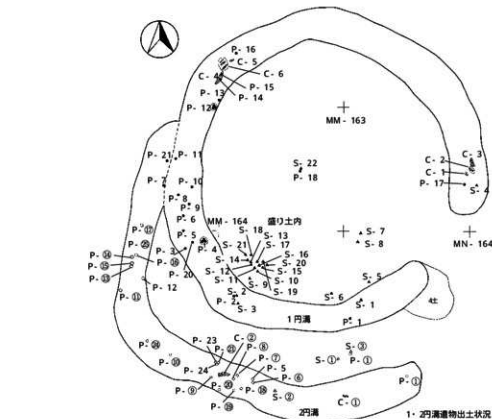
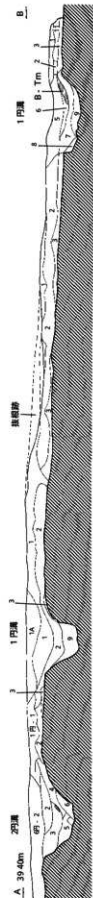
- | | | | |
|-----|---------|------|------------------------|
| 第1層 | 10VR3 4 | 暗褐色土 | L區中少量, 口—△灰粉層 |
| 第1層 | 10VR3 3 | 暗褐色土 | 口—△灰粉層, 灰化粉粒層 |
| 第1層 | 10VR2 2 | 黑褐色土 | L區中少量, 口—△灰粉層, 灰化粉粒層 |
| 第1層 | 10VR3 3 | 暗褐色土 | L區中少量, 口—△灰粉層, 灰化粉粒層 |
| 第1層 | 10VR2 3 | 暗褐色土 | 口—△灰粉層, 灰化粉粒層 |
| 第2層 | 10VR2 3 | 暗褐色土 | B Tm多量, 口—△灰粉層, 灰化粉粒層 |
| 第3層 | 10VR2 2 | 黑褐色土 | 口—△灰粉層, 灰化粉粒層 |
| 第4層 | 10VR2 2 | 黑褐色土 | 口—△灰粉層, 灰化粉粒層 |
| 第5層 | 10VR3 3 | 暗褐色土 | 層L(中)少量, 口—△灰粉層, 灰化粉粒層 |
| 第6層 | 10VR3 3 | 暗褐色土 | 層L(中)少量, 口—△灰粉層, 灰化粉粒層 |

1-2号内沟北溝 (G, H)

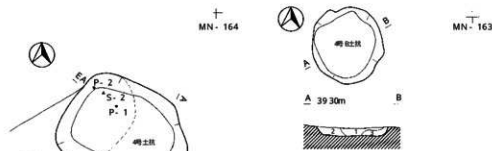
- | | | | |
|-----|---------|------|-----------------------|
| 第1層 | 10VR3 4 | 暗褐色土 | 口—△灰粉層, 灰化粉粒層 |
| 第1層 | 10VR2 2 | 黑褐色土 | L區中少量, 口—△灰粉層, 灰化粉粒層 |
| 第2層 | 10VR2 2 | 黑褐色土 | B Tm多量, 口—△灰粉層, 灰化粉粒層 |
| 第3層 | 10VR3 3 | 暗褐色土 | L區中少量, 口—△灰粉層, 灰化粉粒層 |

2号内沟南溝 (C, D)

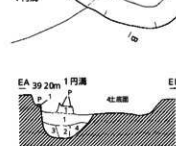
- | | | | |
|-----|---------|------|-----------------------|
| 第1層 | 10VR2 2 | 黑褐色土 | 口—△灰粉層, 灰化粉粒層 |
| 第2層 | 10VR2 2 | 黑褐色土 | 口—△灰粉層, 灰化粉粒層 |
| 第3層 | 10VR2 3 | 暗褐色土 | B Tm多量, 口—△灰粉層, 灰化粉粒層 |
| 第4層 | 10VR3 3 | 暗褐色土 | 口—△灰粉層, 灰化粉粒層 |
| 第6層 | 10VR2 2 | 黑褐色土 | 口—△灰粉層, 灰化粉粒層 |



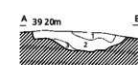
1-2号溝遺物出土状況



1号沟



A 39 20m



4号北坑 (A, B)

- | | | | |
|-----|---------|------|------------------------|
| 第1層 | 10VR2 3 | 黑褐色土 | 口—△灰粉層, 灰化粉粒層 |
| 第2層 | 10VR2 2 | 黑褐色土 | 口—△灰粉層, 灰化粉粒層 |
| 第3層 | 10VR3 4 | 暗褐色土 | 層L(中)少量, 口—△灰粉層, 灰化粉粒層 |
| 第4層 | 10VR3 3 | 暗褐色土 | 層L(中)少量, 口—△灰粉層, 灰化粉粒層 |

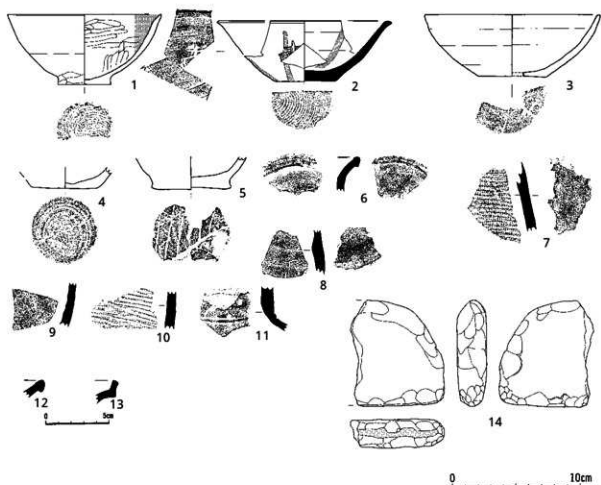
4号土坑 (EA, EB)

- | | | | |
|-----|---------|------|------------------------|
| 第1層 | 10VR3 4 | 暗褐色土 | 層L(中)少量, 口—△灰粉層, 灰化粉粒層 |
| 第2層 | 10VR3 4 | 暗褐色土 | 層L(大)少量 |
| 第3層 | 10VR3 3 | 暗褐色土 | 層L(小)口—△灰粉層, 灰化粉粒層 |
| 第4層 | 10VR3 3 | 暗褐色土 | 層L(中)口—△灰粉層, 灰化粉粒層 |

4号土坑 (A, B)

- | | | | |
|-----|----------|------|---------------|
| 第1層 | 10VR2 3 | 黑褐色土 | 口—△灰粉層, 灰化粉粒層 |
| 第2層 | 10VR2 2 | 黑褐色土 | 口—△灰粉層, 灰化粉粒層 |
| 第3層 | 10VR17 1 | 黑褐色土 | 口—△灰粉層, 灰化粉粒層 |

第11图 1号·2号円形周溝、4号·4号土坑



第113図 1号円形周溝出土遺物

1号円形周溝出土遺物

図録番号 113

図録番号	種別	器種	層位	計測値 (cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
				口径	器高	底径					
113-1	土師器	杯	濠埴雑土 (124)	57	4.2	ロク口	ロク口 三方半・内底	回転糸切り		P X	
2	須恵器	杯	濠埴雑土	14.8	5.2	4.8	ロク口	ロク口		P 17, 分析 2例	
3	須恵器	杯	濠埴面	(14.0)	5.9	(5.5)	ロク口	ロク口	(回転糸切り)	MG 163C 検命	
4	土師器	杯	濠埴雑土	-	1.7	5.3	ロク口	ロク口	回転糸切り	P X	
5	土師器	甕	濠埴雑土	-	2.5	6.2	ナデ	ナデ	木葉柄	P 16, 2に2例確認	
6	須恵器	長柄杓	濠埴雑土 (66)	2.8	-	ロク口	ロク口	-			
7	須恵器	大甕	濠埴雑土	-	5.8	-	横目状平行切欠 (ナデ)			P X, 分析 2	
8	須恵器	長柄杓	雑土	-	3.3	-	ロク口	ロク口		P X, 分析 22	
9	須恵器	長柄杓	雑土	-	3.5	-	ロク口	ロク口		皿下部	
10	須恵器	大甕	濠埴雑土	-	3.4	-	横目状平行切欠	ナデ		朽又	
11	須恵器	長柄杓	雑土	-	4.2	-	ロク口	ロク口		頸部合層付き	
12	須恵器	長柄杓	濠埴雑土 (102)	1.4	-	ロク口	ロク口			P X	
13	須恵器	長柄杓	濠埴雑土 (102)	2.0	-	ロク口	ロク口			MM 163C同一器体あり	

図録番号	分類	出土遺構	層位	計測値				材質	備考
				長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g		
113-14	半円状扁平打製石碇	1号円溝	濠埴雑土	8.5	7.5	2.4	226.3	安山岩	S X, 整理 10

自然堆積していたが、火山灰の分析結果も同じであると報告されている。

[遺物] 円形周溝の堆積土と盛土下部（内郭の盛土と地山を総称、以下同じ）から土師器、須恵器、縄文土器、炭化材、礫石器、礫などが出土した。

周溝内からは、土師器の坏 10点（内黒 1 個体） 裏 54点（口縁 4、底部 3） 須恵器の坏、長頸壺（2 個体） 大甕、炭化材が出土した。須恵器の坏と大甕は、胎土分析を依頼したところ 分析 2 9 2 点とも五所川原窯群産と判定された。この坏と同一個体は、2、9、10 号円形周溝からも発見されて接合したものもある。礫石器は、半円状扁平打製石器である。盛土下部の内郭からは、長頸壺片 1 点、縄文土器片 20 点、自然礫 河原石 10 数点などが出土した。この須恵器の胎土分析を依頼したところ（分析 22）、五所川原窯群産と推定された。縄文土器は、前期から晩期までのものである。

[小 結] 1号円形周溝は、周溝内に自然堆積していた B Tm 火山灰の降下年代が西暦 947 年とすればその年代以前に構築された可能性が大きい。しかも、本円形周溝を拡張して構築したとみられる 2号円形周溝は、To a 火山灰（西暦 915 年）が堆積していた 16号住居跡を掘削して、なおかつその周溝堆積土中に B Tm 火山灰が確認されていることは、本遺構の上限を示唆しているものと考えられる。

2号円形周溝（第 112、114 図、写真 21・22・63）

[位置] MK - 163-165、ML - MM - 165 グリッドに位置している。周辺には 1、6、9 号円形周溝と 16号住居跡が配置されている。

[重複] 本周溝の北端は 1号円形周溝の西側中央部と密着して、さらに 16号住居跡を縦断している。本周溝は、1号円形周溝及び 16号住居跡よりも新しい。なお、16号住居跡には To a 火山灰の堆積が確認されている。

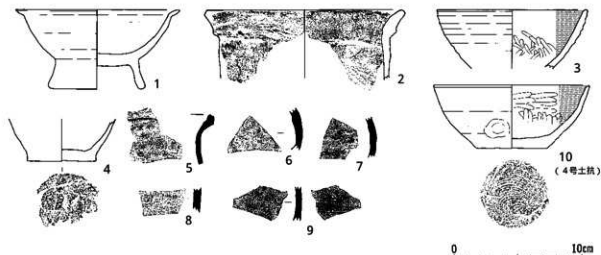
[平面形・規模] 2号周溝本体は、弧状あるいは丸みのある L 字状を呈している。全体の大きさの目安として L 字状のグリッド 5 個に収まる位の大きさである。東西の長さ 9.4m、南北の長さ 7.3m、周溝の幅 0.8-1.3m、周溝の深さ 0.23-0.57m の規模を測る。

本周溝は、1号円形周溝を拡張して新たに構築された周溝とみられる。1号周溝と 2号周溝とが合体した平面形は、隅の丸い五角形のような形状を呈している。開口部は、南東部に設けられている。その幅は 5.0m、内郭の中心と開口部の中間点を結ぶ主体部推定軸線は、S - 60度 - E である。

拡張された 2号周溝の規模は、外径 11.0-13.2m、内径 9.5-11.0m、グリッド 12 個分に相当する大きさである。

[主体部] 想定される位置からは検出されなかった。

[関連土坑] 4号土坑がある。この土坑は、2号円形周溝の開口部中央から内郭中心部寄りに位置して、その長軸方向は S - 60度 - E である。これは 2号周溝の主体部推定軸線とほぼ一致している。また、1号周溝の主体部推定軸線とも平行している。4号土坑は、1号円形周溝が構築された後に新たに掘削されたことはその切り合い関係から明白である。したがって 2号周溝は 4号土坑と同時に幾分後に構築された可能性は大きいと考えてよさそう。この土坑からは、破壊された内黒の坏が出ている（第 110 図 10）。



第114図 2号円形周溝・4号土坑出土遺物

2号円形周溝出土遺物

図録番号 114

図録番号	種別	器種	層位	計測値 (cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
				口径	器高	底径					
1W1	土師器	有台杯	溝堆積土	13.2	6.4	7.8	ロクロ	ロクロ	(ナゲツケ)		P 15, 16, 1 2次
2	土師器	甕	溝堆積土 (16.1)	5.7	-	-	ヨコナデ ヘラケズリ	ヨコナデ ヘラナデ	-		P 12, 5 6次
3	土師器	杯	地層・外 (12.0)	4.8	-	-	(工具) ロクロ	非上げロクロ ミガキ内裏	-		MM 16.5c 推定, 1 2次
4	土師器	甕	溝堆積土	-	3.4	(5.5)	ケズリ・ナデ	ヘラナデ	ヘラケズリ		1 2次
5	須恵器	長頸壺	溝堆積土 (6.2)	4.6	-	-	ロクロ	ロクロ	-		P 6, 8, 分析 11
4-1	須恵器	長頸壺	溝堆積土	-	-	-	ロクロ	ロクロ	-		6-個一群体

4号土坑出土遺物

図録番号 114

図録番号	種別	器種	層位	計測値 (cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
				口径	器高	底径					
114	土師器	杯	堆積土 (12.4)	5.1	5.6	-	ロクロ	ロクロ ミガキ内裏	面転糸切り		1 2次, 2次付属

【壁・底】 壁面は、内外面ともに外傾して立ち上がっているが、内周壁面は外周壁面よりも直立に近い箇所が多い。底面は、起伏が相当認められる。掘り方には、地山のロームブロックと暗褐色土の混合した土が確認された。

【堆積土】 8層に分層された。盛土が周溝内に自然に流れ込んだものである。3層の黒褐色土中にはB Tm火山灰が確認されている。

【遺物】 周溝の堆積土と盛土下部から土師器、須恵器、炭化材、縄文土器、礫、剥片などが出土した。多くは細片で器形を捉えられるものは1点のみである。

周溝内から足高台の土師器有台杯(16号住居跡を切った箇所)1点、内黒の杯2点、甕37点(口縁底部各3)、須恵器は長頸壺5点が出ている。長頸壺の1点は、胎土分析の結果(分析 11)五所川原窯群産と推定された。その他、炭化材、縄文土器1点(後期)が出た。

内郭の盛土下部からは、土師器の杯3点、甕17点(口縁2、底部1)、須恵器の杯1点などが認められた。その他縄文時代後期の土器片が8点出土している。

【小 結】 本遺構及び1号円形周溝で取り上げた4号土坑は、円形周溝内の位置、主体部推定軸線との整合性、規模、出土遺物などからみて2号円形周溝と密接な関連があるものと考えられる。位置関係からみると主体部と考えるよりも追葬等を含む副次的な施設であった可能性も十分指摘できよう。本周溝の構築年代は、降下した2枚の火山灰の間ではなからうかと考えられる。

3号円形周溝（第115～117図、写真23・63）

〔位置〕 MS→MU - 165→167グリッドに位置している。円形周溝では最も東寄りの遺構である。周辺には4、5、8号円形周溝、1号平安住居跡が配置されている。

〔重複〕 周辺の遺構とは近接しているが重複関係は認められなかった。

〔平面形・規模〕 弧状と半円状の溝が連結されたような形状を呈している。主体部への出入口と考えられている開口部の幅は4.0m、周溝内郭の中心と開口部の中間を結ぶ主体部推定軸線は、S - 63度 - Eと推定される。全体の大きさは、グリッド9個分に相当する。外径10.3→11.0m、内径7.7→8.3m、周溝の幅0.6→1.6m、深さ0.22→0.54mを測る。

〔主体部〕 削平されたのか形跡は認められなかった。

〔関連土坑〕 確認できなかった。

〔壁・底〕 壁面は、内外面とも底面から外傾しながら立ち上がっている。内周面の壁は、傾斜が急な箇所が多い。底面は、幅、高低差とも相当出入りがある。掘り方に残った地山ロームブロックと暗褐色土の混じった部分は均して整地したようにみえる。

〔堆積土〕 周溝内には盛土などが自然に流れ込んで堆積土を形成したものとみられるが、盛土、旧表土はすでに削平されていた。15層に区分された土層観察地点（SP）もあるが、2、3層中にはB Tm火山灰が確認されている。蛍光X線による火山灰分析結果も同様であると報告されている。

〔遺物〕 周溝内のみから出土した。土師器、須恵器、縄文土器、火熱をうけた礫などである。

土師器は、坏と甕がある。坏は3個体のうち2個体が回転糸切り後ケズリを加えて再調整したものである。甕はすべて破片で31点（口縁2、底部4）あるが、ロクロ成形した類が1点みられる。須恵器は、坏の破片が1点のみで、これが遺構外のMQ - 165グリッドから出たものと接合した。縄文土器は、前期末葉～中期初頭の破片が2点である。礫は、カマドの芯材として使用された類が多く、9点を数える。

〔小 結〕 本円形周溝は、周溝内に堆積したB Tm火山灰の降下年代から推定すると10世紀中葉よりも以前に構築されたものと考えられる。

4号円形周溝（第118・119図、写真22・24・63）

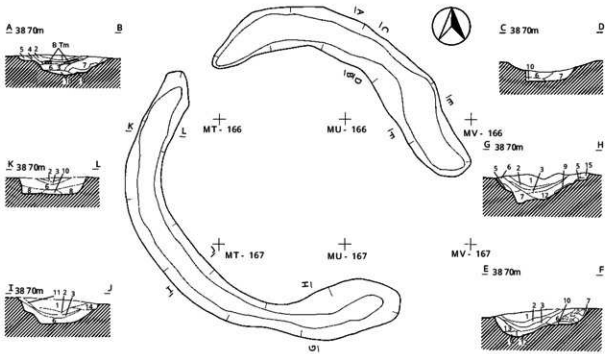
〔位置〕 MS・MT - 168・169グリッドにほぼ位置している。周辺には1、4、14号住居跡、3、5号円形周溝が配置されている。

〔重複〕 重複した遺構は認められないが、本周溝の南側にある6号土坑が目される。

〔平面形・規模〕 主体部への出入口と考えられている開口部がある円形あるいは馬蹄形を呈している。周溝が途切れた開口部は、南東部にある。開口部の幅は、2.3mを測る。主体部推定軸線はS - 48度 - Eである。およその大きさは、グリッド4個分に収まる位で、本遺跡では小型の類である。外径6.7→7.4m、内径5.1→6.0m、周溝の幅0.6→1.2m、周溝の深さ0.29→0.53mの規模を測る。

〔主体部〕 主体部が存在する可能性がある内郭からは確認できなかった。

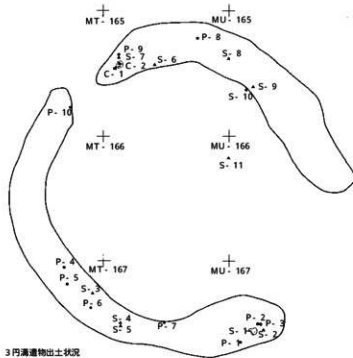
〔関連土坑〕 6号土坑が目される。この土坑については土坑の項でも取り上げているが、その位置、形状から注目しておきたい。6号土坑は隅丸長方形で、開口部の径115・75cm、深さ37cm



3号円形周溝 (A~L)

- 第1層 10YR2 3 栗褐色土 L&中>ロ-ム粒少量,炭化物粒数多
- 第2層 10YR2 2 栗褐色土 ロ-ム粒-炭化物粒数多, B Tm粒状少量
- 第3層 10YR2 3 栗褐色土 B Tm少量
- 第4層 10YR2 3 栗褐色土 ロ-ム粒少量,炭化物粒数多
- 第5層 10YR4 6 褐色土 堆山炭粒込み
- 第6層 10YR2 3 栗褐色土 ロ-ム粒大量
- 第7層 10YR2 3 栗褐色土 L&大少量

- 第8層 10YR3 4 暗褐色土 層底土
- 第9層 10YR4 6 褐色土 層底れ込み
- 第1層 10YR2 3 栗褐色土 B Tm少量,ロ-ム粒数多
- 第2層 10YR2 3 栗褐色土 L&小少量,炭化物粒数多
- 第3層 10YR2 3 栗褐色土 L&小少量,ロ-ム粒数多
- 第4層 10YR3 4 暗褐色土 ロ-ム粒数多,炭化物粒数多
- 第5層 10YR3 4 暗褐色土 ロ-ム粒少量



3号円形周溝出土状況

第115図 3号円形周溝

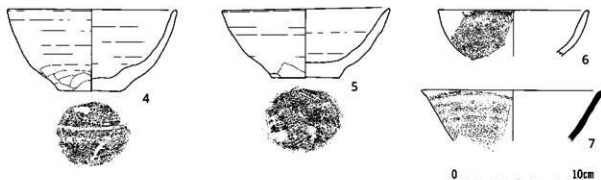


第 116 図 3号円形周溝出土遺物 1)

3号円形周溝出土遺物 1)

図面番号 116

図面番号	種別	器種	部位	計測値 (cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
				口径	器高	底径					
1161	土師器	甕	溝地積土 (168)	4.0	-	-	ロクロ	ロクロ	-		P 10
2	土師器	甕	溝底面	-	6.2	-	タテハケメ	ヨコハケメ	-		P X
3	土師器	甕	溝・底	-	3.1	8.6	ヘラケズリ	ヘラナデ	(ヘラナデバメツ)		二次焼成



第 117 図 3号円形周溝出土遺物 2)

3号円形周溝出土遺物 2)

図面番号 117

図面番号	種別	器種	部位	計測値 (cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
				口径	器高	底径					
1174	土師器	埴	溝堆積土	13.6	6.6	5.2	ロクロ	ロクロ	糸切りケズリ		P 2, 1 次
5	土師器	埴	溝堆積土	13.4	5.7	5.4	ロクロ	ロクロ	糸切りケズリ		P 2, 1 次
6	土師器	埴	溝堆積土 (128)	3.3	-	-	ロクロ	ロクロ	-		P 8
7	須恵器	埴	溝堆積土 (146)	4.1	-	-	ロクロ	ロクロ	-		MQ 165c 接合

の規模がある。遺物は出土していないが、地山ローム層を掘り下げてから間もなく埋め戻したような堆積状況が認められる。

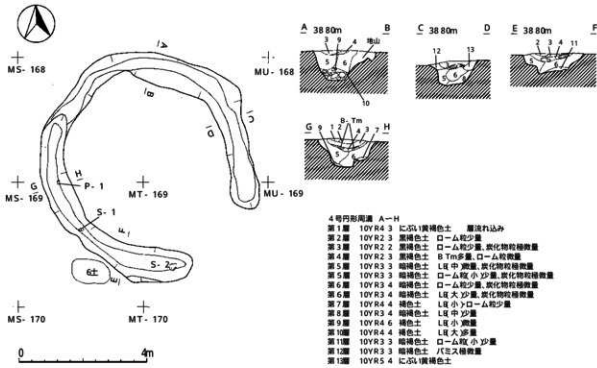
〔壁・底〕 壁面は、底面から内、外周壁とも外に開きながら立ち上がっている。また、壁が崩落した箇所も認められる。特に内郭の北側にある風倒木の跡で顕著である。底面は、時計回りと逆の順に段差が認められているが、掘り方に残されたロームブロックと暗褐色土の混合土を掘り上げてしまったからであろう。

〔堆積土〕 盛土、旧表土は既に削平されていた。周溝内の堆積土は13層に分層された。自然堆積したものとみられる。4層の黒褐色土中にはB Tm火山灰が認められた。火山灰の分析結果も同じであると報告されている。

〔遺物〕 土師器の坏、甕、須恵器の長頸壺と自然礫であるが数は少ない。

坏は4個体の内1個体は静止糸切り底である。甕は、11点(口縁、底部各1)である。須恵器は、胎土分析の結果(分析 18)、五所川原窯群産と推定された。

〔小 結〕 本周溝の年代は、周溝に堆積していたB Tm火山灰の降下年代によって導き出されるものと考えられる。



第118図 4号円形周溝



第119図 4号円形周溝出土遺物

4号円形周溝出土遺物

調査番号 119

図号 番号	種別	器種	層位	計測値 (cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分期	備考
				口径	器高	底径					
1	土器類	杯	遺埋積土	13.3	4.8	5.6	□×□	□×□	面縁角部北側凹み		P.L. 1 2次
2	土器類	杯	遺埋積土 (116)	2.3	-	-	□×□	□×□	-		2次
3	漆器類	長筒盃	遺埋積土	-	4.0	-	□×□	□×□	-		分析 1R, PX

5号円形周溝（第120～124図、写真24～26・64）

〔位置〕 MP～MS - 166～169グリッドに位置している。周辺には2、5、14号住居跡、3、4、8号円形周溝が配置されている。

〔重複〕 本周溝は、14号住居跡の北西壁を削平して構築されている。また、本遺構の北側には5号B円形周溝が隣接しているが、5号B円形周溝が本周溝よりも新しいものとみられる。

〔平面形・規模〕 開口部が狭いので馬蹄形よりも円形に近い形状を呈して、開口部は南東側にある。開口部の幅は13mを測る。主体部推定軸線はS - 72度 - Eとみられる。

遺構の大きさは、グリッド12個分ほどである。外径117～127m、内径97～101m、周溝の幅08～14m、周溝の深さ025～060mの規模を測る。

〔主体部〕 主体部が期待された位置からは主体部のような土坑は検出されなかった

〔関連土坑〕 関連性が期待される土坑は2基認められている。11号土坑と11号B土坑である。11号土坑は、5号円形周溝の中心からやや北東寄りに設けられ、不整な隅丸長方形を呈して、長軸方位はS - 140度 - Eを示している。規模は、開口部の径200 150cm、底部の径170 110cm、確認面からの深さ20 ほどである。堆積土は、黒褐色土が1層のみである。遺物は、縄文土器と土師器の破片が9点（口縁1、胴部8）である。この土坑は、5号円形周溝の主体部推定軸線とは一致していない。

11号B土坑は、内郭のほぼ中央に位置し、当初、地山の粘質土（ローム）で被われていたので風倒木跡の扱いで対応していたが、主体部が粘土郭の出土例もあることから四分法で精査したところ土坑と判明した。南北に長い楕円形で開口部の径は120 97cm、確認面からの深さ50cmの規模がある。断面は鍋底状である。堆積土は8層に分層された。注目されたことは、多量の炭化材が壁面から底面に沿って凹レンズ状に堆積して、しかもその中から破壊された？甕形土師器が1個体出土したことである。また、この土器は、炭化材の火熱によって内面が黒色処理されたように黒く変色していた。この土坑は、位置的には主体部に擬すことも可能であるが、その長軸方向が主体部推定軸線とは異なっているので5号円形周溝とセットの土坑なのか否か判断し難いところである。

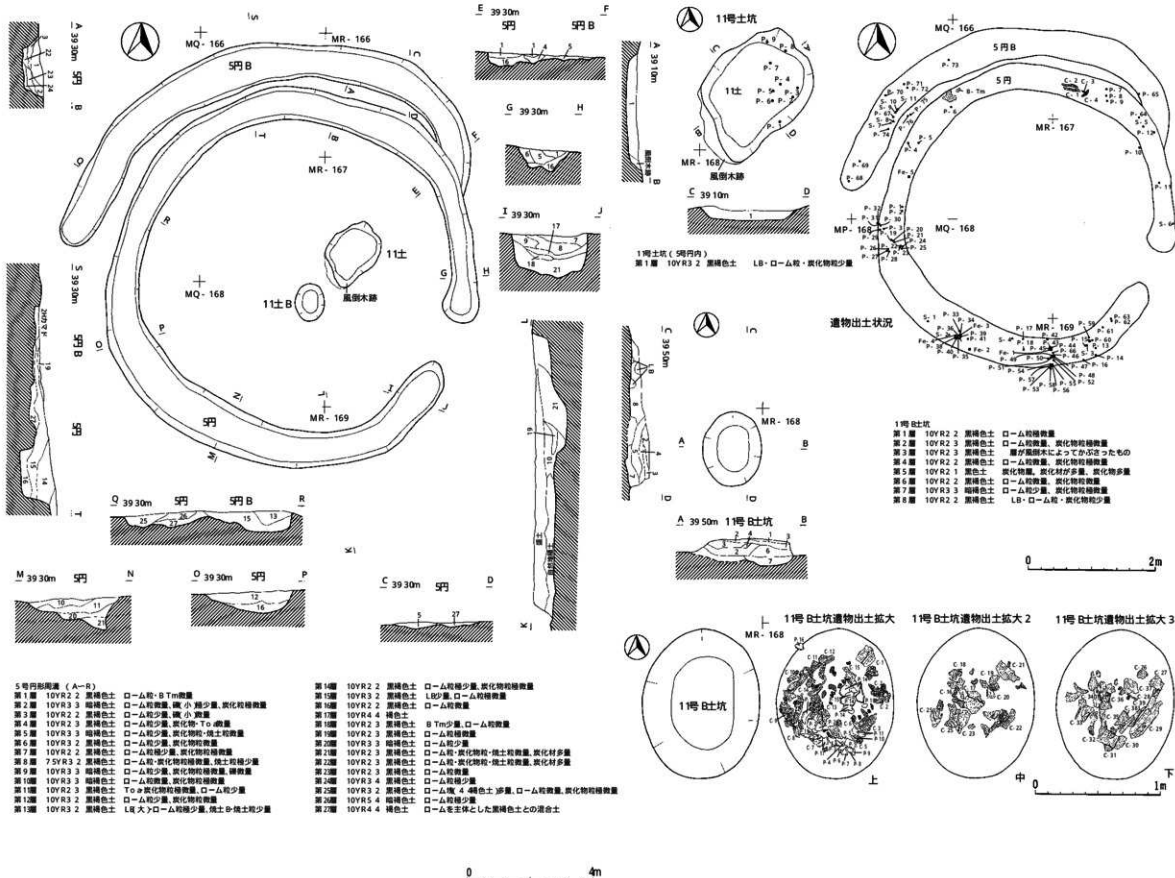
〔壁・底〕 壁面は、内、外周壁ともに両側に未広がりに立ち上がっているが、内周壁面の傾きは外周壁面よりも小さく直立状に近いところが多い。底面は、起伏があって、幅も出入りが目立っている。また、風倒木跡が内郭だけで3箇所確認されている。

〔堆積土〕 土層観察用ベルトを多く設けたことと注記を通し番号にしたため27層に分層された。5号B円形周溝を構築するための埋め戻しと木の根による攪乱を除くと自然堆積したものとみられる。B Tm火山灰は、1層と20層（5号円溝）で確認したが、分析は依頼しなかった。

〔遺物〕 周溝の堆積土及び盛土、旧表土を含む内郭から土師器、須恵器、鉄器、縄文土器、石器、礫などが出土した。

周溝内からは、土師器の坏4点（内黒1）、甕の類95点（口縁10、底部3、その他胴部）、須恵器の坏2点、長頸壺1点、大甕1点、鉄器3点、縄文土器10点が出土したが、図化できるものは少ない。鉄器は刀子と器種不明（工具）2点である。縄文土器は、前期（2）、後期（4）、晩期（4）のものである。

周溝内側の内郭では風倒木跡から甕形土師器胴部片、縄文土器片、磨製石斧片が出土した。

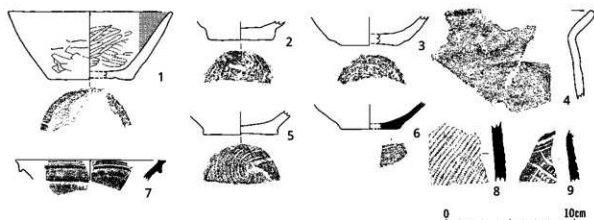


第12図 5号・5月Bの円形溝

- [小 結] 本円形周溝の年代は、時期的な特徴を示す数少ない遺物から捉えることは無理であるが、本遺構が、To a火山灰を堆積していた14号住居跡を掘り下げて構築していることと本円形周溝内にB Tm火山灰が確認されていることの2点から推測することができるものと現在のところは考えておきたい。

5号B円形周溝(第120~124図、写真24・25・64)

- [位置] MP-166 167, MQ-M5-166グリッドに位置している。
- [重複] 本遺構は、2号住居跡の南東隅付近を掘り下けている。また、外周壁北側と40号土坑が接触しているが、切り合い関係は判然と区別付け難い。さらに、本遺構の東端部は5号円形周溝と接着しているが明確な重複関係は認めなかった。
- [平面形・規模] 本遺構自体は、弧状あるいは弓状を呈しているが、5号円形周溝を拡張して新たな円形周溝を構築するために掘られた溝とみられ、古い5号周溝の北側に同心円を描くように造られている。その規模は、長さ約16m、周溝の幅0.7~1.3m、周溝の深さ0.05~0.27mを測る。本周溝と5号円形周溝とが合体して形成した平面形は、不整な楕円形である。東端部が5号円形周溝の外周壁と接着しているため開口部を割り出すことは躊躇するが、推定される開口部の幅は5.5m、主体部推定軸線S-82度-Eとみることもできる。その平面形の規模は、大体グリッド12個分位で、外径13.1~13.8m、内径10.5~11.4mを測る。
- [主体部] 主体部と決めつけられるような土坑は検出されなかった。
- [関連土坑] 関連がありそうな土坑は、5号円形周溝で記した2基であるが、ここでは省略する。
- [壁・底] 壁面は、全体に削平をうけたため低い造りである。内、外周壁ともに底面から開きながら立ち上がっている。底面は、周溝自体が浅いために全体が幅広な造りにみえる。周溝の一部には壁と底面とが区別できないような箇所もある。
- [堆積土] 5号円形周溝の堆積土と連続して実測した箇所もあるので、あえて5号B円形周溝の堆積土として分離しなかった。20層とした土層にはB Tm火山灰が確認されている。
- [遺物] 周溝内から土師器、須恵器、縄文土器、礫などが出土した。
土師器は、甕12点(口縁1、胴部11)、手捏土器1点である。須恵器は、長頸壺1点のみで、篋記号が認められている。縄文土器は、後期の土器片1点である。2号住居跡出土の底部穿孔の坯は、本遺構から流出した可能性もある。
- [小 結] 本円形周溝は、5号円形周溝を拡張して新たな円形周溝を構築するために掘られたものとみられる。時間的には、当然5号円形周溝よりは新しいはずであるが、切り合い関係は明瞭ではない。しかし、本遺構自体は、分析結果ではTo a火山灰とは判定されなかった火山灰が堆積した2号住居跡を掘り下げて構築されている。また、周溝の堆積土の中にはB Tm火山灰とみられるものが確認されている。このような状況から本円形周溝の上限は、5号円形周溝及び2号住居跡の廃棄時期よりは新しいが、B Tm火山灰の降下年代よりは古い時期が求められると今のところは考えておきたい。



第 12 図 5号・5号B円形周溝出土遺物 1)

5号円形周溝出土遺物 1)

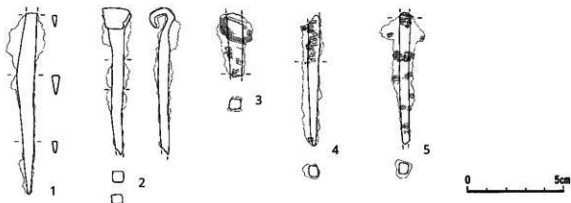
図版番号 121

図版番号	種別	器種	層位	計測値 (cm)		外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
				口径	底径					
121-1	土師器	鉢	溝埋積土	(132)	55 68	巻上げヘラナデ	ヘラナデミガキ内底	(ナデ穴メツ)		P.34, 底部穿孔
2	土師器	鉢	溝埋積土	-	18 52	ナデ	ナデ	(木炭屑?)		P.35
3	土師器	鉢	溝土内	-	26 (45)	口ク口	口ク口	回転糸切り		
4	土師器	壺	溝埋積土 (140)	-	84 -	ヘラナデ	1編みのケメ	-		P.X
5	土師器	鉢	溝埋積土	-	18 60	口ク口	口ク口	回転糸切り		火山灰の下
6	埴器類	鉢	溝埋積土	-	20 (48)	口ク口	口ク口	回転糸切り		P.18, 赤褐色
7	埴器類	長頸壺	埋込層	72	-	-	口ク口	-		
8	埴器類	大甕	埋込層	-	-	縄目状平行0巻	(当て具不詳)ナデ	-		

5号円形周溝出土遺物 2)

図版番号 121

図版番号	種別	器種	層位	計測値 (cm)		外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
				口径	底径					
121-1	埴器類	長頸壺	溝埋積土	-	-	口ク口	口ク口	-		P.10, 掘記号

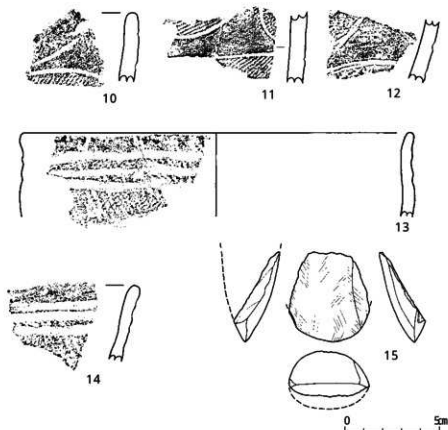


第 12 図 5号・5号B円形周溝出土遺物 2)

5号・5号円形周溝出土遺物 2)

図版番号 122

図版番号	分類	出土遺構	層位	計測値					備考
				長さ (cm)	幅 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	口径 (cm)	
122-1	刀子	5号円溝	溝埋積土	9.8	10	0.4	7.1	F.1整理 1	
2	鉄製品 (工具?)	5号円溝	埋込層	7.9	15	0.6	9.7	整理 2, 鉄製品 6・7円溝出土	
3	鉄製品	5号円溝	溝埋積土	3.4	0.8	0.6	5.9	F.2整理 3・4・5同一個体?	
4	鉄製品	5号円溝	溝埋積土	7.0	0.6	0.8	7.8	F.3整理 4・3・5同一個体?	
5	鉄製品	5号円溝	溝埋積土	7.0	0.5	0.6	9.9	F.4整理 5・3・4同一個体?	



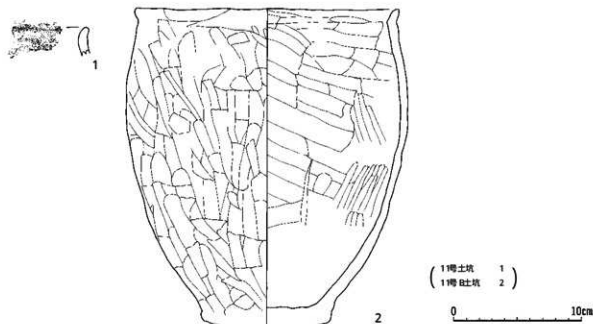
第12図 5号・5号B形周溝出土遺物(3)

5号・5号B形周溝出土遺物(3)

図版番号 123

図版番号	種別	器種	部位	部位	文様など	時期分類	備考
10-11	縄文	深鉢	遺存粘土	口縁部	LR関係・沈線・磨消縄文・波状口縁	群	
11	縄文	深鉢	遺土内	胴部	L縄文・沈線・磨消縄文	群	
12	縄文	深鉢	遺存粘土	胴部	L縄文・沈線・磨消縄文	群	二次焼成
13	縄文	深鉢	遺存粘土	口縁部	(RL) 縄文・平行沈線文	群	P・2% 銅接合
14	縄文	深鉢	遺存粘土	口縁部	(RL) 縄文・平行沈線文 (P・2%同一器体か)	群	二次焼成

図版番号	分類	出土遺構	部位	計測値				材質	備考
				長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g		
10-11	磨製石片	5号円溝	遺土内胴部	48	43	24	269	輝緑黒灰岩	S-X, 刃部片, 整理 7



第124図 1号・11号B土坑出土遺物

5号溝内11号土坑出土遺物

図面番号 124

図面 番号	種類	器種	層位	計測値 (cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
				口径	器高	底径					
114	土師器	甕	堆積土	(14.0)	2.4	-	ヨコナデヘラナデ	ヨコナデナデ	-	-	1号土坑

5号溝内11号土坑出土遺物

図面番号 124

図面 番号	種類	器種	層位	計測値 (cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
				口径	器高	底径					
114	土師器	甕	堆積土	21.0	25.5	10.2	ヨコナデケズリ	ヨコナデナデナデツク	(ケズリ)アメツ	-	内面黒色結晶?

6号円形周溝 (第125～128図、写真27・66)

【位置】 ML～MN - 165～168グリッドを中心に位置している。周囲には5、15号住居跡、2、7、9号円形周溝、2号溝状ピットが構築されている。

【重複】 本円形周溝は、15号住居跡と2号溝状ピットを掘り下げて造られたものである。

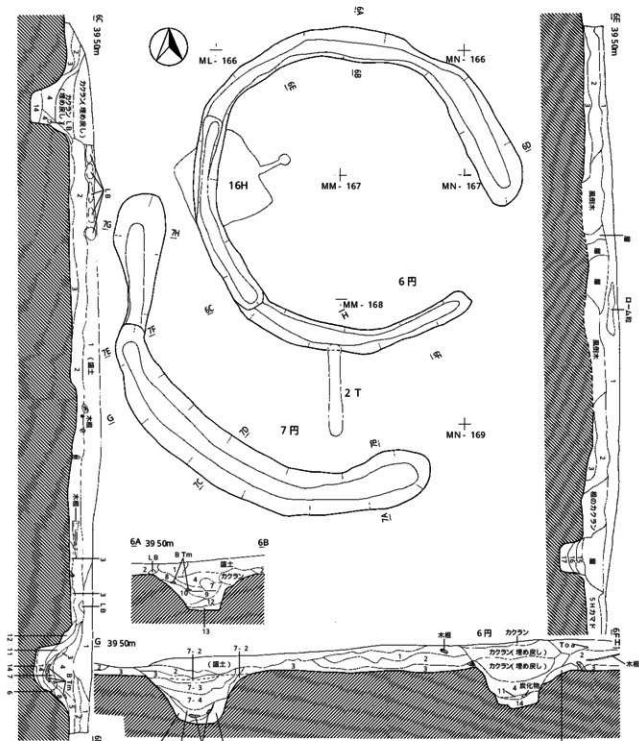
【平面形・規模】 円形を呈するが、南東側に開口部がある。開口部の幅は3.0mを測る。主体部推定軸線は、S - 64度 - Eである。遺構の大きさは、9個のグリッドに収まる位である。外径10.2～10.5m、内径8.0～9.0m、周溝の幅0.6～1.3m、周溝の深さ0.39～0.68mを測る。

【主体部】 盛土は確認されたが、主体部とみられる施設は見出せなかった。

【関連土坑】 内郭の内外から土坑などは確認されなかった。

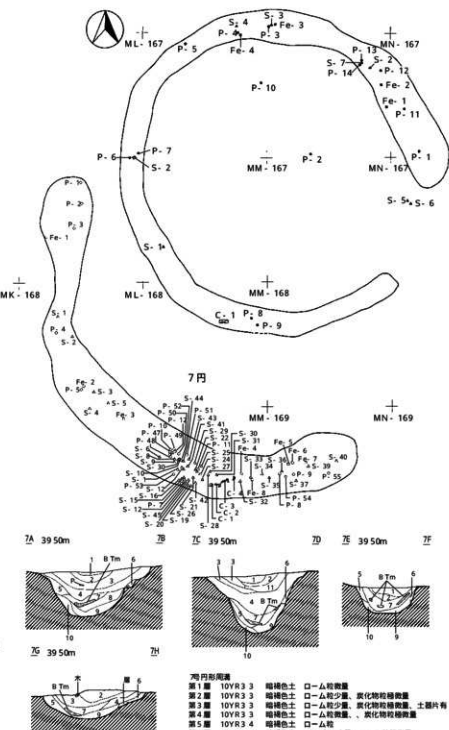
【壁・底】 壁面は、内周壁、外周壁ともに底面から外傾して立ち上がっているが、外周壁は内周壁の傾斜よりも緩やかな箇所が多い。底面は、掘り方のロームブロックを主体とした暗褐色土を均して整地したようにみえるが凹凸もある。

【堆積土】 盛土、旧表土を含めて17層に分層された。周溝内の堆積土は、北側約2分の1と南側では異なる様相を示している。北側は自然堆積したものと認められるが、南側については底面に近い下半部は自然堆積、その上半部の多くは人為的堆積で、恐らく7号円形周溝を構築する際に埋め戻しが行われたものとみられる。なお、11層でB Tm火山灰を確認したが、分析試料には含まなかった。



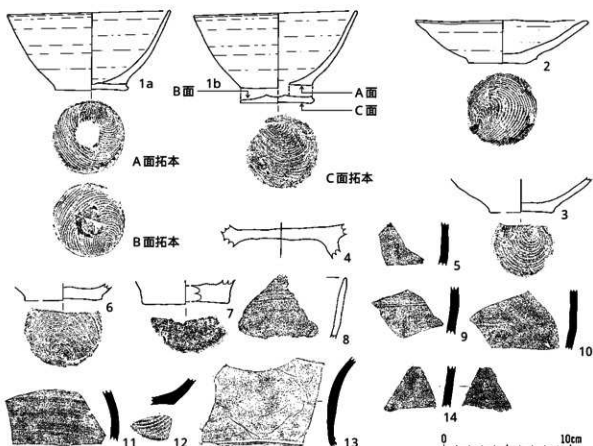
- 6号円形周溝
- 第1層 10YR3 4 暗褐色土 堆土1.8・口-ム粒少量、炭化物粒・粘土粒少量
 - 第2層 10YR2 2 暗褐色土 ロ-ム粒少量、炭化物粒少量
 - 第3層 10YR3 3 暗褐色土 口-ム粒少量
 - 第4層 10YR3 3 暗褐色土 口-ム粒少量、炭化物粒少量
 - 第5層 10YR3 3 暗褐色土 B Tm粒少量、口-ム粒少量
 - 第6層 10YR2 2 黄褐色土 ロ-ム粒少量
 - 第7層 10YR17 1 黄褐色土 B Tm粒少量、ロ-ム粒少量

- 第8層 10YR2 2 黄褐色土 ロ-ム粒少量
- 第9層 10YR3 4 暗褐色土 口-ム粒少量
- 第10層 10YR2 3 黄褐色土 B Tm少量、ロ-ム粒少量、炭化物粒少量
- 第11層 10YR3 3 暗褐色土 口-ム粒少量、炭化物粒少量
- 第12層 10YR3 3 暗褐色土 口-ム粒少量
- 第13層 10YR3 3 暗褐色土 口-ム粒少量、炭化物粒少量
- 第14層 10YR3 3 暗褐色土 口-ム粒少量、炭化物粒少量
- 第15層 10YR3 3 暗褐色土 口-ム粒少量、炭化物粒少量
- 第16層 10YR3 3 暗褐色土 口-ム粒少量、炭化物粒少量
- 第17層 10YR3 3 暗褐色土 口-ム粒少量、炭化物粒少量



7号円形周溝

- 第1層 10YR3 3 暗褐色土 口-ム粒少量
- 第2層 10YR3 3 暗褐色土 口-ム粒少量、炭化物粒少量
- 第3層 10YR3 3 暗褐色土 口-ム粒少量、炭化物粒少量、土層片有
- 第4層 10YR3 3 暗褐色土 口-ム粒少量、炭化物粒少量
- 第5層 10YR3 4 暗褐色土 口-ム粒
- 第6層 10YR3 4 暗褐色土 (土)少量、口-ム粒、炭化物粒少量
- 第7層 10YR17 1 黄褐色土 B Tm少量、ロ-ム粒、炭化物粒少量
- 第8層 10YR3 4 暗褐色土 口-ム粒少量、炭化物粒少量
- 第9層 10YR4 4 暗褐色土 口-ム粒少量
- 第10層 10YR4 4 暗褐色土 口-ム粒少量、炭化物粒少量
- 第11層 10YR4 4 暗褐色土 口-ム粒少量
- 第12層 10YR3 3 暗褐色土 口-ム粒少量



第12図 6号円形周溝出土遺物(1)

6号円形周溝出土遺物(1)

図録番号 126

図録 番号	種類	器種	部位	計測値 (cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
				口径	器高	底径					
126-1	土師器	杯	溝・底	132	65	60	ロクロ	ロクロ	回転糸切り面	-	P 18
2	土師器	皿	溝・底	140	35	55	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	-	P 6, 1 2次
3	土師器	杯	溝・底	-	27	52	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	-	P 11
4	土師器	台付甕	溝・底	-	32	(92)	ヘラナデ	ナデ	貼り層付	-	P 2
5	須恵器	長頸壺	溝・底	-	-	-	ロクロ	ヘラケズリ	ロクロ	-	P X
6	土師器	杯	溝・底	-	14	62	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	-	-
7	土師器	壺	溝・底	-	19	(70)	(ナデ)	ナデツケ	ヘラナデ	-	上付蓋
8	土師器	杯	溝・底	-	44	-	ロクロ	ロクロ	-	-	P 7
9	須恵器	長頸壺	盛土内	-	-	-	ロクロ	ヘラケズリ	ロクロ	-	P X
10	須恵器	長頸壺	盛土内	-	50	-	(ロクロ)	ヘラケズリ	ロクロ	-	P 3
11	須恵器	長頸壺	溝・底	-	-	-	ロクロ	ロクロ	-	-	P X
12	須恵器	広口甕	溝・底	-	22	(64)	ロクロ	ロクロ	(静止糸切り)	-	-
13	須恵器	長頸壺	溝・底	-	-	-	ロクロ	ロクロ	-	-	分析 12
14	須恵器	長頸壺	盛土内	-	-	-	ロクロ	ロクロ	-	-	分析 19

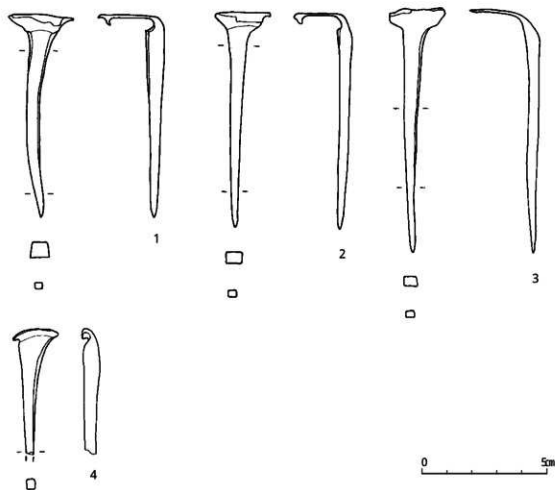
〔遺物〕 溝内堆積土、盛土、旧表土から土師器、須恵器、鉄器、縄文土器、石器、火熱を受けた礫などが出土した。全般に図化できる遺物は少ない。

溝内からは坏形土師器(略外形)1点と坏の破片8点(口縁6、底部2) 裏の類9点(底部2、外、胴部) 鉢2点、須恵器の長頸壺4点、鉄器3点、縄文土器34点、石器1点、礫3点などが出土している。略外形の坏は、溝底面から多少浮いた位置にまとまっていた。須恵器の1点は胎土分析を依頼したところ(分析 12)、岩手・瀬谷子産と推定された。この須恵器と同じ個体は、5号住居の古いカマドからも出土している。鉄器は、3点とも同じような形

態であるが器種は不明（工具？）である。

周溝の内側、内郭の盛土、旧表土からは、土師器、須恵器、縄文土器、小礫などが出ている。

土師器は、礎が26点（底部2、外胴部）のみである。須恵器は、長頸壺1点のみである。縄文土器は、39点を数えるが細片が多い。長頸壺は、胎土分析（19）を依頼したが産地は不明と判定された。

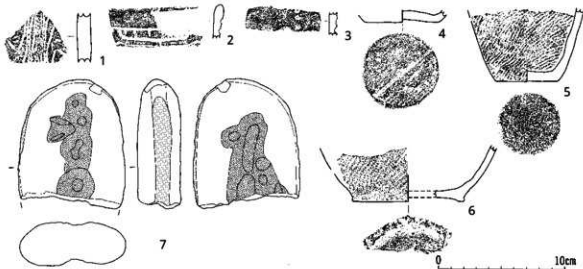


第12図 6号円形周溝出土遺物（2）

6号円形周溝出土遺物（2）

図録番号 127

図録 番号	分類	出土遺構	層位	計測値				備 考
				長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	
101-1	鉄製(工具?)	6号円溝	溝底積土	8.5	2.8	0.3-0.7	19.7	F. 2 数棟 1 同上
2	鉄製(工具?)	6号円溝	溝底積土	9.0	2.3	0.3-0.5	16.0	F. 3 数棟 4 同上
3	鉄製(工具?)	6号円溝	溝底積土	10.2	2.3	0.3-0.4	13.2	F. 4 数棟 4 同上
4	鉄製(工具?)	6号円溝	溝底積土	5.2	1.9	0.5	8.0	F. 1 数棟 6, B. 7mの上位



第128図 6号円形周溝出土遺物(3)

6号円形周溝出土遺物(3)

図録番号 128

図録番号	種別	器種	部位	部位	文様など	時期分類	備考
121-1	縄文	深鉢	溝内積土	胴部	単軸線糸等第1A段 木目状照糸文)	群	円筒下層式
2	縄文	深鉢	溝内積土	口縁	沈線文	群	十層内式
3	縄文	深鉢	溝内積土	(胴部)	円形連続刺突文	群	十層内式
4	縄文	深鉢	盛土内	底部	笠葉痕	群	十層内式、直径60
5	縄文	鉢	盛土層	底部	L線文	(群)	直径48、再加工?
6	縄文	鉢	溝内積土	底部	(LRR) 縄文	(群)	直径100、上げ底

図録番号	分類	出土遺構	部位	計測値				材質	備考
				長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g		
121-7	融結磁器(くびみ石)	6号円溝	溝内積土	10.4	8.6	3.5	395.0	安山岩	S-4凹面、重量 14

【小 結】 本円形周溝は、その構築の際にTo a火山灰が堆積していた15号住居跡を縦断している。また、本周溝内にはB Tm火山灰が堆積していたことも確認されている。火山灰の降下年代を重視する限り本遺構の上限は915年から947年までの間と想定することができる。

7号円形周溝（第125・129～128図、写真27・28・66・67）

〔位置〕 MK - 167～169, ML・MM - 169グリッドに位置している。6号円形周溝の南西側に近接している。その他に周辺にある遺構は、5、15号住居跡、2号溝状ピットである。

〔重複〕 重複した遺構は、認められなかった。

〔平面形・規模〕 弧状を呈している。6号円形周溝をベースとしてそれを拡張するために新たに掘り下げられた周溝とみられる。7号周溝自体の大きさは、縦横3個づつのグリッドに収まる位いである。溝の長さは16.5m、周溝の幅0.7～1.7m、周溝の深さ0.31～1.2mを測る。

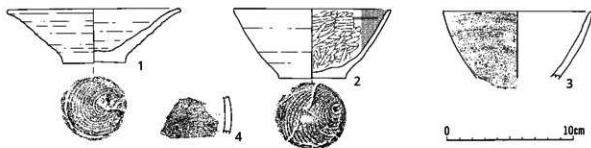
本周溝と6号円形周溝が合体して形成された平面形は、楕円形で南東側に開口部がある。推測される開口部の幅は、8.4mである。この時期の主体部推定軸線は、S - 65度 - Eとみられる。これは6号円形周溝の主体部推定軸線とほぼ同じ角度である。7号全体の規模は、外径13.0～15.5m、内径10.5～13.0mを測る。本遺跡の円形周溝では最大級である。

〔主体部〕 主体部らしい土坑は検出されなかった。（余談になるが、図面から割り出した主体部の位置と最後まで残して抜根した杉の大木とがほぼ同位置であった。）

〔壁・底〕 壁面は、内、外周壁ともに外傾して底面から立ち上がっている。壁は低く浅い箇所もあるが、概して高く幅広の造りである。底面は、起伏が激しく、幅狭い造りのところもある。底面の掘り方の土は、踏み均されたようである。

〔堆積土〕 周溝内は11層に区分された。溝の確認面以下は、盛土などが自然に流れ込み堆積したものとみられる。7層でB T m火山灰が確認された。火山灰の分析結果も同様の判定が得られている。

〔遺物〕 周溝内からだけ出土した。須恵器は皆無で、土師器、鉄器、縄文土器、礫が認められている。土師器は、完形皿形1点、内黒の坏のほか、坏の破片9点（口縁4、底部4、胴部1）襍は11点（口縁6、底部1、胴部4）である。鉄器は2片9個体とみられるが、今のところ器種、用途などは不明である。縄文土器は、後期と晩期の破片で8点ある。礫は、カマド

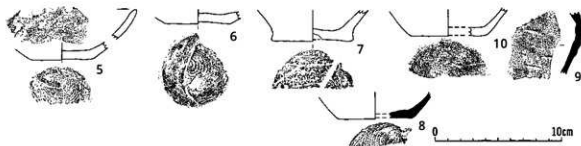


第129図 7号円形周溝出土遺物（1）

7号円形周溝出土遺物（1）

図録番号129

図録番号	種別	器種	層位	計測値 (cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
				口径	器高	底径					
129	土師器	皿	溝底	14.0	4.4	5.0	口クワ	口クワ	回転糸切付		P 53
1	土師器	坏	溝底	12.7	5.6	5.4	口クワ	口クワ	ミガキ・内黒	回転糸切付	P 47～52, 1 6枚 胎土破片
1	土師器	坏	遺構堆積土 (130)	5.4	-	-	口クワ	口クワ	-	-	P A, B 4枚
4	土師器	坏	遺構堆積土	-	3.0	-	口クワ	口クワ	ミガキ・内黒	-	P 54 片

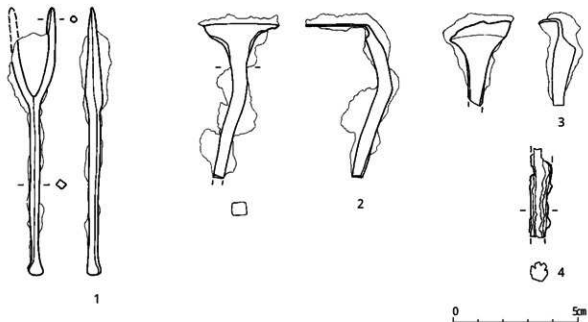


第130図 7号円形周溝出土遺物(2)

7号円形周溝出土遺物(2)

図録番号 130

図録 番号	種別	器種	層位	計測値 (cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
				口径	器高	底径					
135	土師器	坏	溝埴積土 (134)	-	(5.4)	ロクロ	ロクロ	部転糸切り		P 10, 12 赤変	
6	土師器	坏	溝埴積土	0.8	5.8	ロクロ	ロクロ	部転糸切り		底面のみ	
7	土師器	登	溝埴積土	3.0	6.4	ヘラケズリ	ナデツケ	本底面		P 9	
8	須恵器	坏	溝埴積土	2.3	(5.4)	ロクロ	ロクロ	部転糸切り		P 11	
9	須恵器	長頸甕	溝埴積土	6.0	-	ロクロ	ヘラケズリ	ロクロ	-	-	P X, 小型
10	土師器	坏	溝埴積土	-	(5.8)	ロクロ	ロクロ	マメツ			

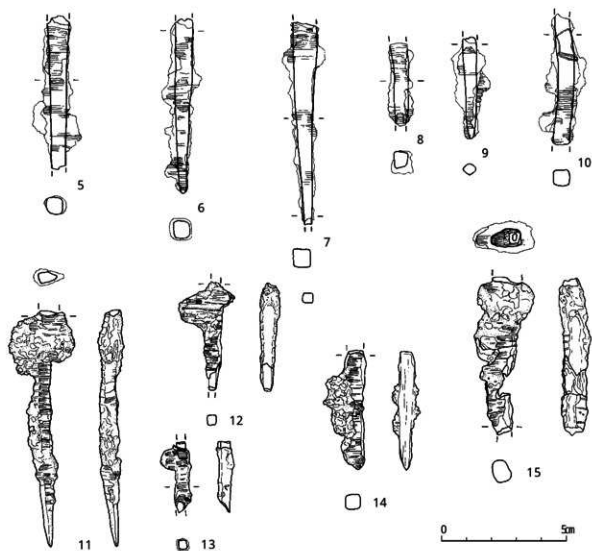


第131図 7号円形周溝出土遺物(3)

7号円形周溝出土遺物(3)

図録番号 131

図録 番号	分類	出土遺構	層位	計測値				備考
				長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	
131-1	鉄製品	7号円溝	溝埴積土	10.9	1.9	0.7	7.2	F-2整理 11, 14上, 前面角形・鋭い棒状・先端
2	鉄製品(工具?)	7号円溝	溝埴積土	6.3	3.1	0.6	15.9	F-3整理 12, 14上, 類似品 5号円溝出土
3	鉄製品(工具?)	7号円溝	溝埴積土	2.5	3.5	0.4	10.2	F-4整理 13, 14上, 類似品 5号円溝出土
4	鉄製品	7号円溝	溝埴積土	3.6	0.9	1.0	4.1	F-1整理 10, B-Tmの上位, 前面角形の鋭い棒状



第 13 図 7号円形周溝出土遺物(4)

7号円形周溝出土遺物(4)

図録番号 132

図録 番号	分 類	出土遺構	層位	計 測 値				備 考
				長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	
11-15	鉄製品	7号円溝	溝底積土	6.2	0.9	0.8	8.9	F. 5整理 14, 同上。一端先結れ-木目状の付着物
6	鉄製品	7号円溝	溝底積土	7.0	0.7	0.9	7.8	F. 5整理 15, 同上。同上
7	鉄製品	7号円溝	溝底積土	8.2	1.0	0.4-0.7	11.2	F. 6整理 16, 同上。刀子の素材? --- 一端先結れ
8	鉄製品	7号円溝	溝底積土	3.5	0.7	0.6	2.9	F. 6整理 17, 同上。16cと同一個体?
9	鉄製品	7号円溝	溝底積土	4.1	0.6	0.4	3.1	F. 7整理 18, 同上。糸状のもの? 付着。18b-2個体似)
10	鉄製品	7号円溝	溝底積土	5.2	0.7	0.7	6.5	F. 7整理 19, 同上。糸状のものは木目か?。巻き付けか
11	鉄製品	7号円溝	溝底積土	9.5	0.8	0.5	9.3	F. 8整理 20, B. Tmの下位。先結れ部分に糸巻く?
12	鉄製品	7号円溝	溝底積土	4.4	0.4	0.4	3.4	F. 8整理 21, 同上。先端部折断。20cと同一個体
13	鉄製品	7号円溝	溝底積土	2.8	0.3	0.3	1.2	F. 8整理 22, 同上。24cと結着していた?
14	鉄製品	7号円溝	溝底積土	4.8	0.6	0.6	4.8	F. 8整理 23, 同上。22b, 24cと同一個体
15	鉄製品	7号円溝	溝底積土	6.3	1.2	0.9	11.3	F. 8整理 24, 同上。2個体結着。22, 23cと接合

の芯材として使われたとみられるもの1点である。

- [小 結] 7号円形周溝は、6号円形周溝を拡張して、より大きな円形周溝を造成するために構築された遺構とみられる。このように推測すれば、時間的には少なくとも6号円形周溝が完成した後に造成を開始したものと考えられる。6号円形周溝の上限は、To a火山灰の降下年代から推測すると西暦915年以後と考えられる。そして本周溝の堆積土のなかにB Tm火山灰が自然に堆積していたことが確認されている。降下火山灰の年代から推定する限り本円形周溝の上限は915年から947年までの間と見做すことができよう。

8号円形周溝 (第133・134図、写真29・68)

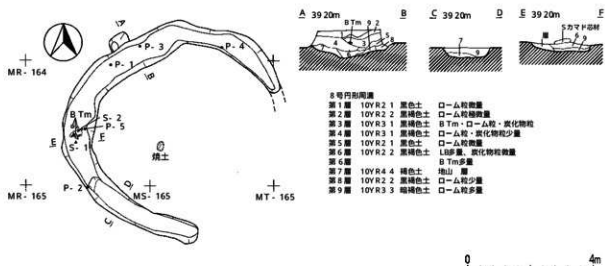
[位置] MR・MS・163-165グリッドに位置している。本遺構の南東と南西には3、5号円形周溝などが配置されているが、北側は調査区域外(緑地予定地)になっている。

[重複] 重複した遺構は認められなかった。

[平面形・規模] 開口部の幅が広いため円形と呼ぶよりも馬蹄形と称しておきたい。開口部の幅は50mで、内郭の中心と開口部の中心を結ぶ主体部推定軸線は、S-61度-Eである。およその大きさは、グリッド4個に収まる程度で、ここでは小型の円形周溝である。外径68-73m、内径55-59m、周溝の幅0.55-1.1m、周溝の深さ0.08-0.14mを測る。

[主体部][関連土坑] 主体部(土坑)は検出されなかった。最寄りの土坑は4号焼成ピットである。

[壁・底] 壁面は、全体に低い構造であるが、内、外周壁ともに底面から外傾して立ち上がっている。底面は、確認面からの深さがいないために木の根による攪乱がみられる。掘り方は全般的に安定していない。



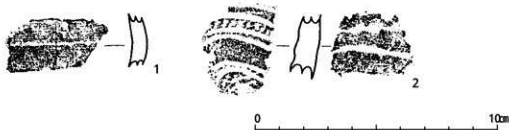
第133図 8号円形周溝

〔堆積土〕 確認面から掘り方までは根による攪乱を除くと自然堆積したものとみられる。9層に区分された。3層にはB Tm火山灰が認められた。蛍光X線分析の結果も同じ判定である。

〔遺物〕 周溝自体が浅いためか出土した遺物は極めて少ない。

土師器の甕形土器片6点(口縁1、胴部5) カマドの芯材として用いられたような加熱されて赤変した礫1点、その他縄文後期の土器片2点だけである。

〔小 結〕 出土遺物には、年代を判断できるようなものは含まれていないが、周溝内に堆積していたB Tm火山灰の降下年代からその上限を推定することができるものと考えられる。



第 134図 8号円形周溝出土遺物

8号円形周溝出土遺物

図録番号 134

図録 番号	種別	器種	層位	計測値 (cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
				口径	器底	底径					
134	土師器	甕	表土	-	24	-	ヨコナデ	ヨコナデ	-		PX

図録番号 134

図録 番号	種別	器種	層位	部位	文様など	分類	備考

9号円形周溝(第135・136図、写真29・30・68)

〔位置〕 MM-MO-164-166グリッドに位置している。周辺には2、6号住居跡、1、2、5、6号円形周溝が配置されている。

〔重複〕 重複は認められないが、2号住居跡、1、2、6号円形周溝とは非常に近接している。

〔平面形・規模〕 不整な円形を呈している。開口部は南東部に設けられ、その幅は2.0mである。内郭の中心と開口部の中心を結んだ主体部推定軸線は、S-65度-Eである。

おおよその規模は、グリッド6個分に収まる位である。外径9.1-10.5m、内径6.8-8.0m、周溝の幅0.6-1.6m、周溝の深さ0.3-0.56mを測る。

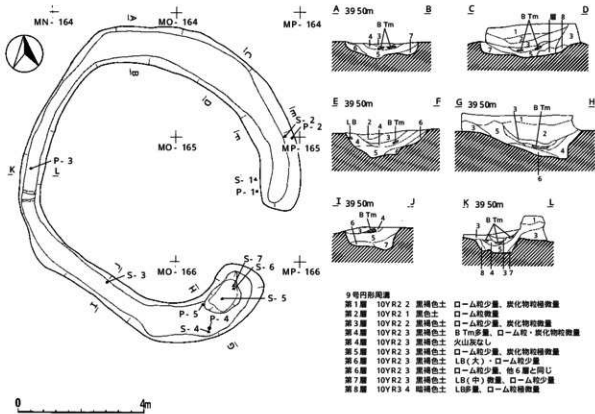
〔主体部〕〔関連土坑〕 表土は残存していたが主体部及び関連土坑などは検出されなかった。

〔壁・底〕 内、外両壁面ともに底面から外側に開きながら立ち上がっている。底面は、凹凸が相当みられる。また、底面の幅は、出入りが激しく一定していない。

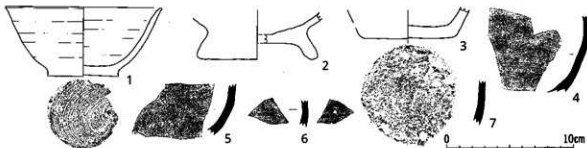
〔堆積土〕 8層に区分された。自然堆積したものとみられる。4層の黒褐色土中にB Tm火山灰が確認された。この火山灰を分析した結果もB Tm火山灰と判定されている。

〔遺物〕 周溝内の堆積土及び表土から土師器、須恵器、縄文土器、礫などが出土した。

周溝内から土師器の坏22点(口縁-胴部21、底部1、うち内黒3)、高坏1点、甕20点、(底部1、外は胴部)、須恵器の坏1点、同長頸壺2点、前期・後期・晩期の縄文土器4点自



第135図 9号円形周溝



第136図 9号円形周溝出土遺物

9号円形周溝出土遺物

図録番号 136

図録番号	種別	器種	層位	計測値 (cm)		外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
				口径	器高					
181	土器類	鉢	溝槽積土	(12.6)	5.6	5.8	□ク口	□ク口	磨転糸結び	P.X. 1 2次
2	土器類	高坪	溝槽積土	-	3.3	(9.7)	□ク口	□ク口	-	P.X. 1の2次同一個体
3	土器類	椀	溝底	-	2.8	7.8	ヘタケズリ	コヒオサエ	(ヘラナデ)	P.L. 磨化進行
4	須恵系	広口鉢	溝槽積土	-	7.0	-	□ク口	□ク口	-	羽 北律造
5	須恵系	香炉鉢	溝槽積土	-	4.5	-	□ク口	□ク口	-	自然焼
6	須恵系	香炉鉢	内割磁土	-	-	-	□ク口	□ク口	-	分析 13
7	須恵系	鉢	溝槽積土	-	-	-	□ク口	□ク口	-	分析 9

然礫 3 個、加熱された礫 4 個などが出土した。須恵器の坏は、胎土分析の結果（分析 9）五所川原窯群産と推定された。

内郭の表土からは、須恵器の長頸壺 1 点、縄文土器 4 点（後期外）が発見されただけである。須恵器は、胎土分析の結果（分析 13）五所川原窯群産と推定された。

[小 結] 年代の手掛かりになる出土遺物として、五所川原窯群産の須恵器がある。また、降下火山灰の年代から求めるとすれば本遺構の周溝内に自然堆積していた B Tm 火山灰がある。これらの自然科学的データから求められるその上限は、10 世紀初頭～中葉と考えられる。

10号円形周溝（第 137・138 図、写真 30・68）

[位置] MM-MO - 160-162 グリッドに位置している。今年度の調査区域では最も北端に位置する円形周溝である。周辺には 6、17 号住居跡、1 号円形周溝が構築されている。

[重複] 本遺構は、T o a 火山灰が床面上に堆積していた 6 号住居跡の北西壁を掘り下げている。その新旧関係は明白である。

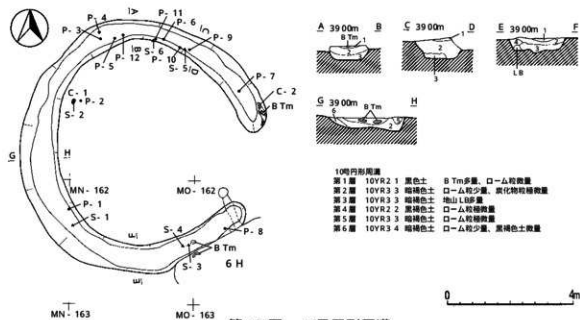
[平面形・規模] 円形を呈しているが、南東部には周溝が途切れた開口部がある。開口部の幅は 3.0 m、内郭の中心と開口部の中心を結ぶ主体部推定軸線は、S - 74 度 - E である。

規模は、本遺跡では中型である。外径 7.9-8.3 m、内径 6.2-6.5 m、周溝の幅 0.7-1.5 m、周溝の深さ 0.13-0.37 m を測る。

[主体部][関連土坑] 表土は残っていたが主体部（土坑）の形跡は確認できなかった。

[壁・底] 両壁面は、全体に低い造りである。内、外周壁ともに底面から外側に開きながら立ち上がっている。木の根による攪乱は、壁、底面とも随所に見られる。底面は、掘り方を均して整地したような箇所もある。

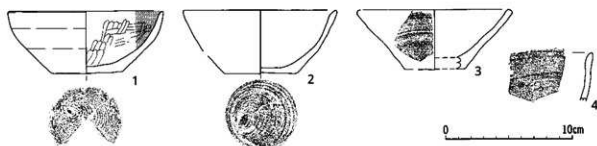
[堆積土] 6 層に区分された。これらは自然堆積したものとみられる。1 層中には B Tm 火山灰が確認された。蛍光 X 線分析の判定も B Tm 火山灰と報告されている。



第 137 図 10号円形周溝

[遺物] 遺物は、周溝内からだけ出土した。土師器、須恵器、縄文土器、礫などである。土師器の坏は全て口クロ成形で8点中1点が内黒である。土師器の甕は、胴部片のみ12点である。須恵器は坏1点のみであるが、1号円形周溝 P 17、分析 9 と遺構外 MN 162 から採集したものが接合して「古」の字に似ている簡記号が認められている。縄文土器は、3点とも前期、円筒下層式土器とみれる。礫は4個のうち1個はカマドの芯材として使用された可能性がある。

[小結] 本円形周溝の年代、特に上限は、二枚の火山灰の降下年代から推定されるものと考えてよからう。



第138図 10号円形周溝出土遺物

10号円形周溝出土遺物

図版番号 138

図版番号	種別	器種	層位	計測値 (cm)		外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
				口径	底径					
138-1	土師器	坏	遺堆積土 (12.6)	5.6	5.8	口クロ	口クロ ミガキ・内黒	面転垂切り		P.5. 2 3次
2	土師器	坏	遺堆積土 (13.4)	5.0	5.6	口クロ	口クロ	面転垂切り		P.9. 5 6次
3	土師器	坏	遺堆積土 (13.6)	4.6	(4.2)	口クロ	口クロ	面転垂切り		P.3. 4. 7 次
4	土師器	坏	遺堆積土 (12.4)	3.6	-	口クロ	口クロ	-		P.2. 7 次

3 土坑

ここでは現場で 号土坑と名付けた遺構の中で2、3、5～8、10、27、28、40～48、50～56、58号とした土坑31基について記載する。4号、4号B、11号、11号B土坑については円形周溝の項において記載してある。また、25、26、29～39号及び49号土坑は欠番である。

2号土坑 (第139・140図、写真31・68)

[位置] MZ・NA・165グリッドに位置している。本年度の調査区域では最も東寄りにある遺構の一つである

[形状・規模] 本土坑は、風倒木跡と重複しているため原形が不明な箇所もある。平面形は、隅丸長方形を呈して、長軸方向は南東・北西にある。開口部の径は185・165cm、底部の径は155・140cm、確認面からの深さは25cmを測る。

[壁・底] 壁は、風倒木による影響を受けて残存部分は少なく、判然としないところが多い。底面は、地山ローム層を利用しているが凹凸が顕著にみられる。

[堆積土] 風倒木のため堆積土と壁、底面とは容易に区分しにくい、6層に分けられた。To 火山灰として採取した試料は、蛍光X線分析の結果も予想したとおりであった。

[遺物] 土師器と縄文土器が出土した。

土師器は、坏と甕の破片が76点である。これらの土師器は、加熱されて弾けて縦割れしたものが多く、坏は、2点のうち1点がロク口製で内黒の類である。縄文土器は、6点共後期の土器である。

本遺構は、火山灰の堆積状況からT o a火山灰が降下する以前に廃棄されていたものと考えられる。

3号土坑(第139・140図、写真31・68)

[位置] MX・MY - 166 167グリッドに位置している。周囲には1号平安住居跡、1～3号焼土状遺構が構築されている。

[形状・規模] 平面は隅丸方形を呈する。開口部の径は155 155cm前後、底部の径は150 120cmである。開口部からの深さは53cmである。

[壁・底] 壁は、4辺とも直立状をなしている。底面は、地山の傾斜と平行している。壁、底面とも加熱された形跡はない。

[堆積土] 6層に区分された。自然堆積したものとみられる。4層中には焼土が認められたが投棄された可能性が高い。

[遺物] 土師器の坏と甕が80点と須恵器の坏が3点出土した。これらの土器は、破損後に投棄されたものとみられる。

出土遺物と火山灰が堆積していないことから時期が推定できるものと考えられる。

4号土坑(図21・22)

本号と4号B土坑は、1号円形周溝の項に記載してある。

5号土坑(第139・140図、写真31・68)

[位置] MJ・MK - 165 166グリッドに位置している。付近には15、16号住居跡、2、6号円形周溝が配置されている。

[形状・規模] 楕円形で、長軸方向は南東・北西にある。開口部の径は140 110cm、底部の径は125 90cm、底部の焼土までの深さは10cmである。

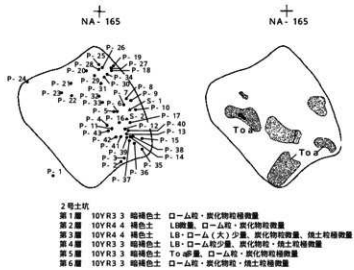
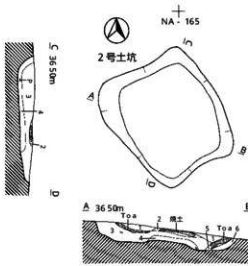
[壁・底] 壁、底ともに地山ローム層を掘り下げて造られているが、壁は相当削平されている。断面は皿状で、底面は焼土化している。焼土面の直上には炭化材が残存していた。

[堆積土] 焼土を除いて4層に区分された。焼土面の上部から炭化材と土師器が検出された。

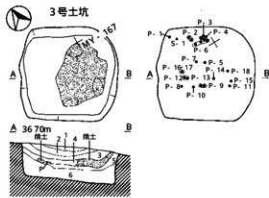
[遺物] 炭化材と土師器の甕5個体19点が確認されているが、甕形土器の一部P15は15号住居跡出土の土器と接合した(実測図は15号住居に掲載した)。屋外炉のような遺構とみられる。15号住居跡には、T o a火山灰が堆積している。関連が強い土坑である。

6号土坑(第139図、写真31)

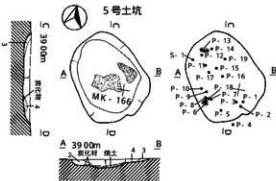
[位置] MS - 169グリッドに位置している。4号円形周溝の南側に寄り添うような位置を占めている。



- 2号土坑
- | | | | |
|-----|---------|------|----------------------------|
| 第1層 | 10YR3 3 | 暗褐色土 | □-△形、炭化物粒極微量 |
| 第2層 | 10YR4 4 | 褐色土 | L層、□-△形、炭化物粒微量 |
| 第3層 | 10YR4 4 | 褐色土 | LB、□-△形(大)少量、炭化物粒微量、焼土粒極微量 |
| 第4層 | 10YR3 3 | 暗褐色土 | LB、□-△形少量、炭化物粒、焼土粒極微量 |
| 第5層 | 10YR3 3 | 暗褐色土 | To 砂層、□-△形、炭化物粒極微量 |
| 第6層 | 10YR3 3 | 暗褐色土 | □-△形、炭化物粒、焼土粒微量 |



- 3号土坑
- | | | | |
|-----|---------|------|---------------------|
| 第1層 | 10YR3 3 | 暗褐色土 | □-△形、焼土粒微量 |
| 第2層 | 10YR2 3 | 黒褐色土 | □-△形、炭化物粒、焼土粒極微量 |
| 第3層 | 10YR2 2 | 黒褐色土 | □-△形、炭化物粒、焼土粒極微量 |
| 第4層 | 10YR2 2 | 黒褐色土 | □-△形微量、炭化物粒少量、焼土粒多量 |
| 第5層 | 10YR3 3 | 暗褐色土 | □-△形、炭化物粒極微量、焼土粒極微量 |
| 第6層 | 10YR2 3 | 黒褐色土 | □-△形、炭化物粒、焼土粒微量 |



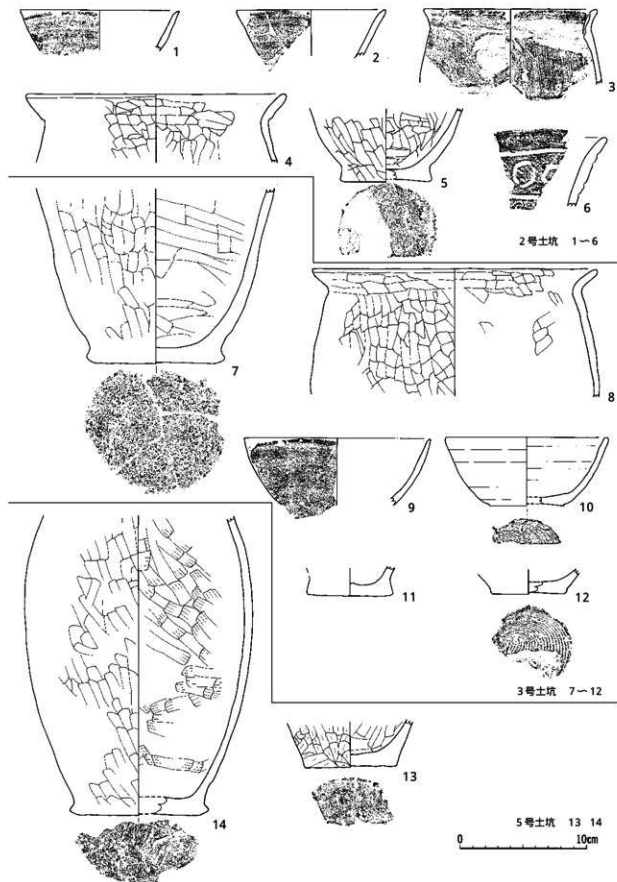
- 5号土坑
- | | | | |
|-----|---------|------|-----------------------|
| 第1層 | 10YR2 3 | 黒褐色土 | □-△形、炭化物少量、焼土粒微量、焼土多量 |
| 第2層 | 10YR2 2 | 黒褐色土 | □-△形微量、炭化財少量 |
| 第3層 | 10YR3 4 | 暗褐色土 | 層LB、□-△形少量 |
| 第4層 | 10YR3 4 | 暗褐色土 | □-△形、炭化物微量 |



- 6号土坑
- | | | | |
|-----|---------|------|-------------------|
| 第1層 | 10YR4 4 | 褐色土 | LB(大)少量、□-△形少量 |
| 第2層 | 10YR5 6 | 黄褐色土 | □-△形(大)少量、炭化物粒極微量 |
| 第3層 | 10YR5 6 | 黄褐色土 | 地山LB少量 |
| 第4層 | 10YR4 6 | 褐色土 | □-△形少量 |
| 第5層 | 10YR5 6 | 黄褐色土 | □-△形微量、炭化物粒極微量 |
| 第6層 | 10YR4 6 | 褐色土 | □-△形微量 |

0 2m

第139図 平安時代土坑(1)



第 14 図 平安時代土坑出土遺物 (1)

2号土坑出土遺物

図録番号 140

図録番号	種別	器種	層位	計測値 (cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
				口径	器高	底径					
140-1	土師器	杯	堆積土 (12.8)	3.3	-	ロクロ	ロクロ	-	-	-	二次焼成
2	土師器	杯	堆積土 (12.0)	3.7	-	ロクロ	ロクロ 三ガキ・内蓋	-	-	-	二次焼成
3	土師器	甕	堆積土 (14.0)	5.9	-	ヨコナデ ヘラケズリ	ヨコナデ ヘラケズリ	-	-	-	二次焼成
4	土師器	甕	堆積土 (21.0)	5.5	-	ヨコナデ ヘラケズリ	ヨコナデ ヘラケズリ	-	-	-	二次焼成
5	土師器	甕	堆積土	-	5.9 (7.4)	ヘラケズリ	ケズリ・ナデ	(ヘラナデ)穴メツ	-	-	二次焼成

2号土坑出土遺物

図録番号 140

図録番号	種別	器種	層位	部位	文様など	分類	備考
140-6	縄文	深鉢	堆積土	口縁	平行・円形穴線文 (1縄文地磨消し)	(群)	二次焼成

3号土坑出土遺物

図録番号 140

図録番号	種別	器種	層位	計測値 (cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
				口径	器高	底径					
140-7	土師器	甕	堆積土	-	14.1	11.2	ヘラナデ	ヘラナデ・ナデツケ	(ナデ)穴メツ	P 12, 13	二次焼成
8	土師器	甕	堆積土 (23.0)	10.2	-	ヨコナデ ヘラナデ	ヨコナデ ナデ	-	-	-	-
9	土師器	杯	堆積土 (15.0)	5.4	-	ロクロ	ロクロ	-	-	-	2 次
10	土師器	杯	堆積土 (13.0)	5.5 (6.0)	-	ロクロ	ロクロ	回転糸付?	-	-	2 次
11	土師器	小甕	堆積土	-	2.4	7.4 (ヘラケズリ)	ヘラナデツケ	ヘラナデ	-	-	-
12	土師器	杯	堆積土	-	2.0 (6.4)	ロクロ	ロクロ	回転糸付?	-	-	-

5号土坑出土遺物

図録番号 140

図録番号	種別	器種	層位	計測値 (cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
				口径	器高	底径					
140-13	土師器	甕	堆積土	-	3.8 (8.0)	ヘラナデ	ヘラナデ	-	-	-	P 8, 10, 赤色
14	土師器	甕	堆積土	-	24.1 (11.2)	(ヘラケズリ)ヘラナデ	ヘラナデ ナデ	ヘラナデ ナデツケ	-	-	P 7, 9, 18, 19
12-2	土師器	甕	堆積土 (19.2)	22.6	-	ヨコナデ ヘラケズリ	ヨコナデ ハケメ	-	-	-	P 7-8, 15H 2接合

〔形状・規模〕 隅丸長方形で、長軸方向は東・西にある。開口部と底部の径がほとんど差がない構造で、長径 115cm、短径 75cm、深さ 37cmを測る。

〔壁・底〕 壁は、4辺とも直立に近く、底面は平坦である。地山ローム層を掘り下げて構築したものである。

〔堆積土〕 6層に区分された。褐色土と黄褐色土が基調をなしている。人為的に埋め戻されたものとみられる。

〔遺物〕 認められなかった。位置関係から4号円形周溝と関連がある土坑ではないかと考えられる。

7号土坑 (第141・142図、写真32・69)

〔位置〕 MU - 170グリッドに位置している。周囲には4号住居跡、4号円形周溝が構築されている。

〔形状・規模〕 平面形は、ほぼ円形である。開口部の径 90 85cm、底部の径 70 65cm、確認面からの深さ 50cmを測る。

〔壁・底〕 地山ローム層を利用したものである。開口部に近い壁は若干崩れて底面よりも外側に開いている。底面は平坦で壁よりも堅い。

〔堆積土〕 5層に分層された。自然堆積したものとみられる。3層中にToa火山灰を確認した。火山灰の分析でも同じ判定が出ている。

〔遺物〕 土師器の裏が2点出土した。火山灰の降下年代から廃棄時期が判断できるであろう。

8号土坑（第141・142図、写真32・68・69）

〔位置〕 MP - 169グリッドに位置している。5号円形周溝の南側に位置している。

〔形状・規模〕 楕円形で長軸方向はN - 45度 - Eを指している。開口部の径は132 90cm、底部の径110 60cm、確認面からの深さは50cmを測る。

〔壁・底〕 地山ローム層（基本層序の層以下）を掘り込んで造られている。壁は北西側がフラスコ状で、反対側は階段状を示している。底面は階段状に2面に分かれている。

〔堆積土〕 3層に分けられた。全体に焼土が混じっている。1層にはB Tm火山灰が確認された。

〔遺物〕 白砂式製塩土器、土師器、須恵器が出土した。

製塩土器は、162点をかぞえ一部接合した。内訳は、口縁5、底部22（5個体）、胴部135である。土師器は、坏2点、甕65点（口縁10、底部2、その他胴部）で、須恵器は長頸壺1点である。付近に所在する住居と関連がありそうな土坑ではないかと考えられる。

10号土坑（第141・142図、写真32・69）

〔位置〕 MS・MT - 173グリッドに位置している。風倒木の影響をうけて相当破損している。

〔形状・規模〕 形状、規模ともに推測によるところが多い。平面形は、円形とみられる。開口部の径は150cm、底部の径は120cm前後、確認面からの深さ65cmと推定される。

〔壁・底〕 残存していた箇所から推定すると、断面はフラスコ状を呈するものとみられる。

〔堆積土〕 8層に分層された。4層中にTo a火山灰が確認されている。

〔遺物〕 土師器の甕2点（口縁、底部各1）と後期の縄文土器1点が出土した。

To a火山灰が降下する以前に廃棄された土坑とみられる。

11号土坑（図116・120、写真26）

11号B土坑とともに5号円形周溝の項で記載してある。

27号土坑（第141図、写真32）

〔位置〕 LK・LL - 164グリッドに位置している。調査区域のほぼ中央付近に立地している。

〔形状・規模〕 隅丸長方形を呈して、長軸は南東 - 北西の方位を指している。開口部の径は190 110cm、底部の径は170 90cm、確認面からの深さ40～25cmを測る。

〔壁・底〕 壁は、本来直立状を呈していたようであるが、相当削平されている。底面は、凹凸がある。

〔堆積土〕 3層に区分された。黒褐色土に炭化物の混入が目立っている。

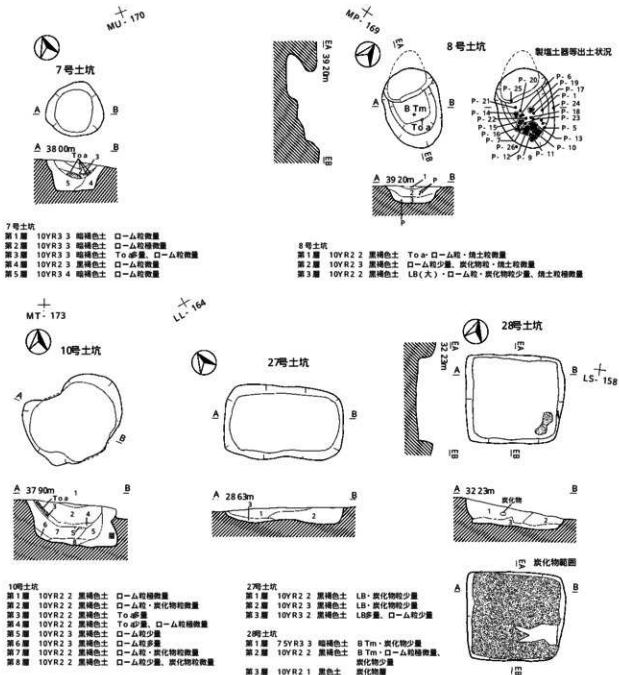
〔遺物〕 土器などは出土しなかった。

28号土坑（第141図、写真33）

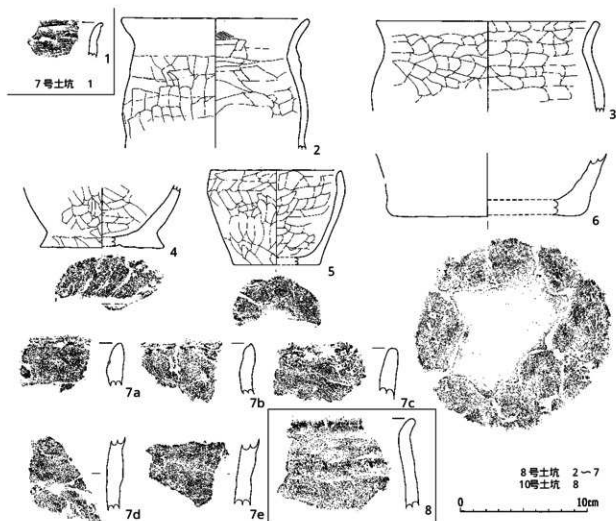
〔位置〕 LR - 158グリッドに位置している。

〔形状・規模〕 隅丸方形を呈している。開口部の径は160 140cm、底部の径は140 130cm、開口部からの深さは35cmである。

〔壁・底〕 壁は、上端と下端の差が少ない造りである。底面は、平坦に近く堅緻である。壁と底面には加熱されて赤変した箇所もみられる。



第14図 平安時代土坑(2)



第 14 図 平安時代土坑出土遺物 (2)

7号土坑出土遺物

図録番号 142

図録 番号	種 別	器 種	層 位	計測値 (cm)			外 面 調 整	内 面 調 整	底 面 調 整	分 類	備 考
				口径	器高	底径					
141	土師器	甕	堆積土	(20.8)	30	-	巻上げナデ	ヨコナデ	-		二次焼成、赤変

8号土坑出土遺物

図録番号 142

図録 番号	種 別	器 種	層 位	計測値 (cm)			外 面 調 整	内 面 調 整	底 面 調 整	分 類	備 考
				口径	器高	底径					
142	土師器	甕	堆積土	(15.2)	10.4	-	ナデ 巻上げヘラナデ	ヨコナデ ナデ	-		3 炊
3	土師器	甕	堆積土	(18.0)	7.3	-	ヨコナデ ヘラケズリ	ヨコナデ ヘラナデ	-		二次焼成
4	土師器	甕	堆積土	-	5.1	(10.0)	(ヘラケズリ)	ヘラナデ	木炭積		P 24、2c 同一器体か
5	土師器	甕	堆積土	(9.2)	8.0	7.0	ヨコナデ ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヘラケズリ		3 炊
6	土師器	甕	堆積土	28-	25-	14-	ヨコナデ 輪縁ホ・オサエ	ナデ ナデ	ナデ(紅彩縁飾)		器厚 0.7~2.2m
7				30	30	15					

10号土坑出土遺物

図録番号 142

図録 番号	種 別	器 種	層 位	計測値 (cm)			外 面 調 整	内 面 調 整	底 面 調 整	分 類	備 考
				口径	器高	底径					
143	土師器	甕	堆積土	(17.6)	11.0	-	ヨコナデ ヘラナデ	ヨコナデ ケズリ・ナデ	-		

【堆積土】 3層に分層された。1、2層には火山灰が認められたが、分析の依頼はしなかった。底面上に堆積した3層には多量の炭化物が含まれている。

【遺物】 土器などの出土はなかった。多量の炭化物、壁、底面の赤変化、火山灰の堆積などから平安時代の焼成ピットとみられる。

29～39号土坑

欠番である。

40号土坑（第143図、写真33）

〔位置〕 MR - 165 166グリッドに位置している。周辺には2号住居跡、3、5、8号円形周溝が構築されている。

〔形状・規模〕 長軸が南東 - 北西にある不整な楕円形を呈している。開口部の径は165 80cm、底部の径は120 45cm、深さは20cmを測る。

〔壁・底〕 壁の上部は削平されて本来の形状を残していない。底面は、安定した掘り方とは認めがたい。

〔堆積土〕 黒褐色土が1層だけ認められた。

〔遺物〕 出土しなかった。5号B円形周溝と関連がある土坑かもしれない。

41号土坑（第143・144図、写真33）

〔位置〕 LK - 164グリッドに位置している。周囲には27、42号土坑が構築されている。

〔形状・規模〕 平面形は楕円形で、その長軸方向は東 - 南にある。開口部の上端と底部の下端がほぼ同じ規模の土坑である。開口部の径は95 75cm、底部の径は80 60cm、確認面からの深さは30cmである。

〔壁・底〕 壁は、底面から幾分開き気味に立ち上がり、底部は平坦である。

〔堆積土〕 5層に区分された。全体的に黒褐色土に炭化物が混合している。

〔遺物〕 土師器の底部が1点出土した。

42号土坑（第143図、写真33）

〔位置〕 LI - 165グリッドに位置している。周辺の遺構は土坑のみで、27、41、43号が分布している。

〔形状・規模〕 多少崩れているが隅丸方形である。開口部の径は130cm前後、底部の径は120cm前後、深さ25cmほどを測る。

〔壁・底〕 残存している壁から推定すると直立に近いものとみられる。底面は平坦である。

〔堆積土〕 2層に分層された。黒色土に炭化材、炭化物の粉末が混じり、炭化材の多くは底面に接した2層中に残っていた。

〔遺物〕 炭化材以外に出土した遺物はなかった。焼成ビットとみられる。

43号土坑（第143図、写真33）

〔位置〕 LI - 166グリッドに位置している。最寄りの遺構は42号土坑である。

〔形状・規模〕 相当削平されているが隅丸長方形とみられ、南西 - 北東方向に長軸がある。開口部の径は125 80cm、底部の径は110 70cm、確認面からの深さは10cmを測る。

〔壁・底〕 地山ローム層を掘り下げて壁と底にしているが、削平のため本来の形状は明確ではない。

〔堆積土〕 3層に区分された。2層には大きな炭化材が多く混じる。

[遺物] 炭化材以外に出土した遺物はなかった。焼成ビットのひとつとみられる。

4号土坑(第143・144図、写真34・69)

[位置] LE - 168グリッドに位置している。周辺には45号土坑が配置されている。

[形状・規模] ほぼ円形である。開口部の径160 140cm、底部の径130 110cm、深さ40cmを測る。

[壁・底] 底面から壁にかけての断面は丸底状を呈している。

[堆積土] 3層に分けられた。1層下部でTo a火山灰が確認された。2層中から土師器、須恵器、焼土、炭化物が出土した。

[遺物] 土師器の坏で復元できたもの4個体、その他17点11個体(うち内黒6点4個体、口縁2、底部4、高坏1)、甕33点10個体(ロクロ口縁2、非ロクロ口縁2、底部2、胴部27)、須恵器は坏のみ1点である。本土坑は、To a火山灰降下以前に構築されたものとみられる。

45号土坑(第143・144図、写真34)

[位置] LE - 165グリッドに位置している。最寄りの遺構は44号土坑である。

[形状・規模] 開口部は、若干崩落しているが、底部とともに円形である。開口部の径は100 70 cm、底部の径75 70cm、確認面からの深さ52cmを測る。

[壁・底] 壁は、木の根によって崩れた部分もあるが、本来は円筒状の断面であろう。残存している壁と底面は、堅緻である。

[堆積土] 3層に区分された。黒褐色土が主体である。1層にはB Tm火山灰がブロック状にみられた。

[遺物] 2層から土師器の甕(口縁)が1点出土した。

46号土坑(第143・144図、写真34)

[位置] LE - 162・163グリッドに位置している。周辺には47号土坑が配置されている。

[形状・規模] 開口部は相当削平されているようだが、隅丸長方形とみられる。推定を含めた規模は、開口部の径100 (60) cm、底部の径86 (50) cm、深さ5 cmである。

[壁・底] 本来の構造は、壁が削平されているため不明に近い。現状では壁の立ち上がりはなだらかで、底面は起伏があり不安定である。

[堆積土] 5層に分けられた。4層が焼土化していて炭化材が認められた。

[遺物] 土師器の坏が1点認められた。

47号土坑(第145・146図、写真34・69)

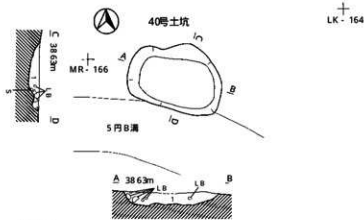
[位置] LF - 162・163グリッドに位置している。周辺には46号土坑が配置されている。

[形状・規模] 平面形は、隅丸長方形を呈する。開口部の径は115 65cm、底部の径は95 55cm、深さ20cmの規模を測る。長軸方向は東・西にある。相当に削平された土坑の一つである。

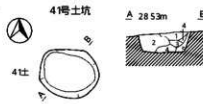
[壁・底] 壁は、崩落した箇所もある。底面は、若干起伏している。

[堆積土] 5層に区分された。4層には焼土が認められる。

[遺物] 土器の類は、ロクロ成形の甕(口縁)が1点認められた。



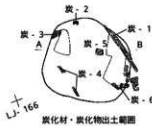
40号土坑
第1層 10YR2 2 黒褐色土 LB(大)少量、ロ-ム粒少量



41号土坑
第1層 10YR3 2 黒褐色土 ロ-ム粒微量、炭化物粒(小)少量
第2層 10YR2 3 黒褐色土 LB(中)、炭化物粒少量
第3層 10YR2 2 黒褐色土 ロ-ム粒微量、炭化物粒(中)少量
第4層 10YR2 3 黒褐色土 LB(大)少量、炭化物粒(小)少量
第5層 10YR3 3 暗褐色土 ロ-ム粒、炭化物粒(小)、焼土粒少量



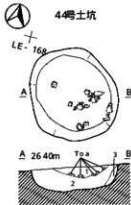
42号土坑
第1層 10YR2 1 黒色土 ロ-ム粒、炭化物粒(小)少量
第2層 10YR17 1 黒色土 炭化物層



炭化材・炭化物出土範囲

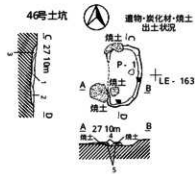
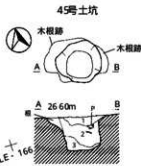


43号土坑
第1層 10YR2 2 黒褐色土 炭化物粒(小)、焼土粒少量
第2層 10YR17 1 黒色土 炭化物層、ロ-ム粒少量
第3層 10YR2 3 黒褐色土 炭化物粒(小)、焼土B(中)少量



44号土坑
第1層 10YR2 3 黒褐色土 To-a、ロ-ム粒少量、炭化物粒(小)微量
第2層 10YR2 2 黒褐色土 ロ-ム粒、炭化物粒、焼土B(中)少量
第3層 10YR3 2 黒褐色土 炭化物粒(中)少量、焼土B(中)微量

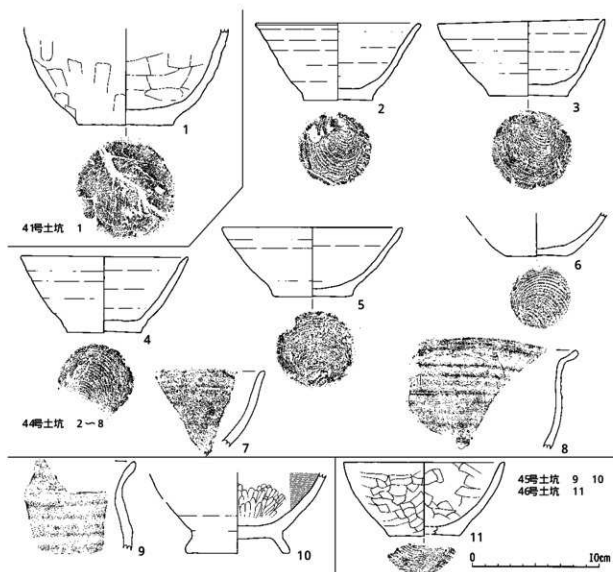
45号土坑
第1層 10YR2 2 黒褐色土 B Tm(小)、炭化物粒、焼土粒少量
第2層 10YR2 1 黒色土 LB、焼土粒少量
第3層 10YR2 1 黒色土 LB少量



46号土坑
第1層 10YR2 1 黒色土 炭化物粒微量
第2層 10YR2 2 黒褐色土 炭化物粒微量
第3層 10YR2 3 黒褐色土 焼土粒微量
第4層 5 YR3 6 暗赤褐色土
第5層 7.5YR3 3 暗褐色土

0 2m

第143図 平安時代土坑(3)



第 144 図 平安時代土坑出土遺物 (3)

41号土坑出土遺物

図録番号 144

図録番号	種別	器種	層位	計測値 (cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
				口径	器高	底径					
141	土師器	甕	堆積土	-	78	78	(ヘラケズリ) マメツ	(ナデ) マメツ	木炭焼		P 2

44号土坑出土遺物

図録番号 144

図録番号	種別	器種	層位	計測値 (cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
				口径	器高	底径					
141	土師器	坏	堆積土	(134)	6.2	5.6	口ク口	口ク口	回転糸切付		P 4, 5, 9, 3 枚
3	土師器	坏	堆積土	132	6.2	6.4	口ク口	口ク口	回転糸切付		P 3, 1 2枚
4	土師器	坏	堆積土	(135)	6.2	6.4	口ク口	口ク口	回転糸切付		P 7, 2 3枚
5	土師器	坏	堆積土	(146)	5.6	6.4	口ク口	口ク口	回転糸切付		P 19, 3 枚
6	土師器	坏	堆積土	-	3.5	5.0	口ク口	口ク口	口ク口 三方平・内底		P 15, 内底藍色
7	土師器	坏	堆積土	(154)	4.8	-	口ク口	口ク口	-		
8	土師器	甕	堆積土	(164)	8.2	-	口ク口	口ク口	-		P 18, 3 枚

45号土坑出土遺物

図録番号 144

図録番号	種別	器種	層位	計測値 (cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
				口径	器高	底径					
141	土師器	甕	堆積土	(160)	6.5	-	(輪槽) 口ク口	口ク口	-		
14	土師器	高坏	堆積土	-	6.8	8.4	口ク口	口ク口	口ク口 三方平・内底	口ク口	P X

46号土坑出土遺物

図録番号 144

図録番号	種別	器種	層位	計測値 (cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
				口径	器高	底径					
141	土師器	坏	堆積土	(130)	5.4	(6.3)	ヨコナデ	ヨコナデ	回転糸切付		P 1 全体摩滅

48号土坑(第145・146図、写真35・69)

[位置] K I・K J - 143グリッドに位置している。近くには22号住居跡、7・8号焼土遺構が構築されている

[形状・規模] 楕円形を呈して、東-西方向に長軸がある。開口部の径170 95cm、底部の径140 65cm、確認面から底部までの深さ30cmの規模がある。

[壁・底] 壁の立ち上がりは緩やかであるが、崩落によって変形したものとみられる。底面は、波状をなしている。

[堆積土] 2層に分けられた。黒褐色土が基調をなして、焼土と炭化物が混入している。

[遺物] 土師器と須恵器が各1点出土した。土師器は口クロ成形の甕(口縁)である。須恵器は、大甕である。

49号土坑(第145・146図、写真35 69)

[位置] K E - 141・142グリッドに位置している。付近には1号柱穴状ピット群が配置されている。

[形・規模] 隅丸長方形を呈して、長軸方向は北東-南西を向いている。相当削平された土坑とみられる。開口部の径は130 60cm、底部に径は120 45cm、深さは8cmを測る。

[壁・底] 壁は、痕跡だけが辛うじて残ったような状態で、底面は起伏がみられる。

[堆積土] 2層に分けられた。1層には炭化材と焼土が認められる。

[遺物] 土師器の坏と甕が13点出土したが図化できるようなものは含まれていない。

50号土坑(第145図、写真35)

[位置] M P - 181グリッドに位置している。最寄りの遺構は11号住居跡である。

[形状・規模] 不整な楕円形を呈して、東-西方向に長軸がある。削平された土坑とみられる。長径115cm前後、短径90cm前後、深さ20cmを測る。

[壁・底] 壁、底面ともに掘り方が漠然としている。遺構を構築するために掘り下げたのか地山の粘土を採るために掘った穴なのか判然としない。

[堆積土] 2層に区分された。ともに粘質土が基調でブロック状に混入している。

[遺物] 土器、炭化物などは出なかった。

51号土坑(第145図、写真35)

[位置] K U - 157グリッドに位置している。周辺には16号焼成ピット、56号土坑が配置されている。

[形状・規模] 開口部が相当削平された土坑である。東西方向に長軸がある隅丸長方形を呈している。長径110cm、短径70cm前後、深さ5cmを測る。

[壁・底] 本来の形状は判然としない。壁は低く底面は地山の傾斜と平行している。

[堆積土] 黒色土のみ1層だけ認められた。

[遺物] 遺物は何も出土しなかった。

52号土坑（第145図、写真35）

- [位置] グリッドはLF-160に位置している。周辺には18、19、23号住居跡が構築されている。
- [形状・規模] 本土坑も相当削平されたものとみられる。東西に長軸がある楕円形を呈している。長径90cm前後、短径70cm、記録された深さは12cmを測る。
- [壁・底] 残存している壁は低く、底面は凹レンズ状をなしている。
- [堆積土] 2層に分けられた。黒色土を基調としている。
- [遺物] 出土しなかった。

53号土坑（第145図、写真36）

- [位置] LG-154グリッドに位置している。周囲にある54号土坑、18号住居跡とは10mほどの距離がある。
- [形状・規模] 隅丸長方形に近い形状で、南北方向に長軸がある。規模は、長径140cm、短径80cm、確認面からの深さ25cmを測る。
- [壁・底] 壁の高さは、標高に比例している。また北側の壁は直立に近い状態であるが南側はなだらかな立ち上がりを示している。底面は、起伏している。
- [堆積土] 4層に分けられた。黒褐色土が主流で、1、2層には炭化物の混入が認められた。
- [遺物] 出土した遺物は、礫形土師器の胴部片が2点である。

54号土坑（第145図、写真36）

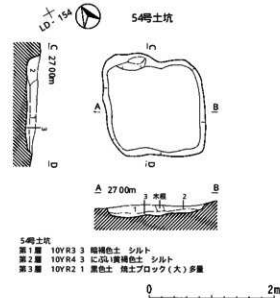
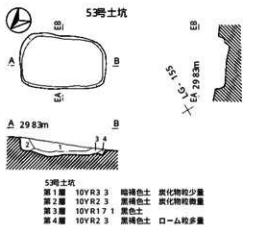
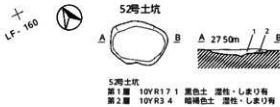
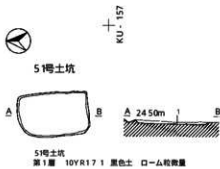
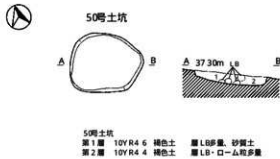
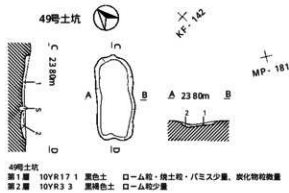
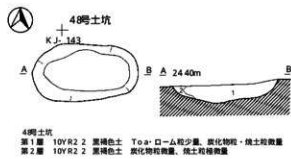
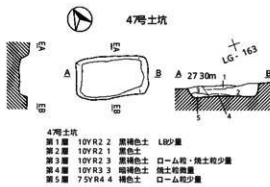
- [位置] LD-154グリッドに位置している。周辺には53号土坑、19号住居跡が配置されている。
- [形状・規模] 隅丸方形を呈している。開口部の径は150cm前後、底部の径は149cm前後、深さは20～10cmを測る。
- [壁・底] 地山ローム層を掘り下げて造られている。標高の高い北側の壁は高く、直立に近いが、反対側は低く、なだらかな立ち上がりを示している。底面は、ゆるく起伏している。
- [堆積土] 3層に区分された。底面に接している3層には多量の炭化材が認められた。
- [遺物] 炭化物以外に遺物は出土しなかった。

55号土坑（第147図、写真36）

- [位置] LK-158グリッドに位置している。最寄りの遺構は、17号焼成ピットである。
- [形状・規模] 隅丸長方形を呈して、長軸方向は、南北である。開口部の径155 95cm、底部に径145 85cm、確認面からの深さ15cmほどを測る。
- [壁・底] 壁は、4面とも底面から直立したような状態に構築されている。底面は、平坦で堅い造りである。壁と底面の一部には加熱によって赤変、酸化した箇所が認められる。
- [堆積土] 黒色土と炭化材、炭化物が混合したものが堆積していた。
- [遺物] 炭化材、炭化物以外のものは出土しなかった。焼成ピットとみられる。

56号土坑（第147図、写真36）

- [位置] KV・KW-156 157グリッドに位置している。周囲には16号焼成ピットと51号土坑が



第145図 平安時代土坑(4)



第 146 図 平安時代土坑出土遺物(4)

47号土坑出土遺物

図面番号 146

図面番号	種別	器種	層位	計測値 (cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
				口径	器高	底径					
146-1	土師器	甕	埴土	-	40	-	ロク口	ロク口	-	-	二次焼成

48号土坑出土遺物

図面番号 146

図面番号	種別	器種	層位	計測値 (cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
				口径	器高	底径					
146-2	土師器	甕	埴土 (160)	60	-	-	ロク口	ロク口	-	-	二次焼成
3	土師器	甕	埴土 (220)	40	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	-	-	二次焼成
4	漆器	大甕	埴土	-	33	-	縞目状平・交差印色	ナデ	-	-	

49号土坑出土遺物

図面番号 146

図面番号	種別	器種	層位	計測値 (cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
				口径	器高	底径					
146-5	土師器	杯	埴土 (128)	40	-	-	ロク口	ロク口	-	-	二次焼成

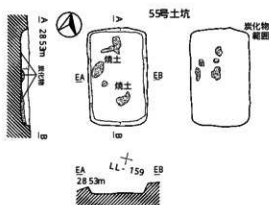
配置されている。

〔形状・規模〕 楕円形を呈して、東西方向に長軸がある。開口部の径は 185 90cm、底部の径は 60 40cm、確認面からの深さは 30cmを測る。

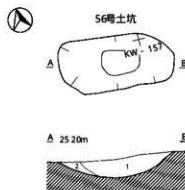
〔壁・底〕 地山ローム層を掘り下げて造られたものであるが、壁と底面を分離しがたい土坑である。

〔堆積土〕 2層に分層された。黒褐色土が基調となっている。

〔遺物〕 人工的なものは確認されなかった。



55号土坑
第1層 10YR17 1 黒色土 炭化物、しまりや中有



56号土坑
第1層 10YR17 1 黒色土 ローム粒少量
第2層 10YR2 2 黒褐色土 ローム粒少量



58号土坑
第1層 10YR2 1 黒色土 ローム粒・埴土粒少量
第2層 10YR3 3 黒褐色土 LBC少量、ローム粒少量、炭化物粒少量、埴土粒少量
第3層 10YR2 2 黒褐色土 LB少量、ローム粒少量、炭化物粒少量

0 2m

第 147 図 平安時代土坑(5)

58号土坑（第147図）

- [位置] J U - 137グリッドに位置している。最西端の土坑で、24号住居跡のカマド付近を掘り下げて構築されている。本土坑が24号住居跡よりも新しい。
- [形状・規模] 楕円形を呈している。開口部の径は85 70cm、確認面からの深さ35cmを測る。
- [壁・底] 壁、底面ともに24号住居の床面から掘り下げて造られている。その断面は鍋底状である。
- [堆積土] 3層に分けられた。
- [遺物] 認められなかった。

第59号土坑（第148図、写真37）

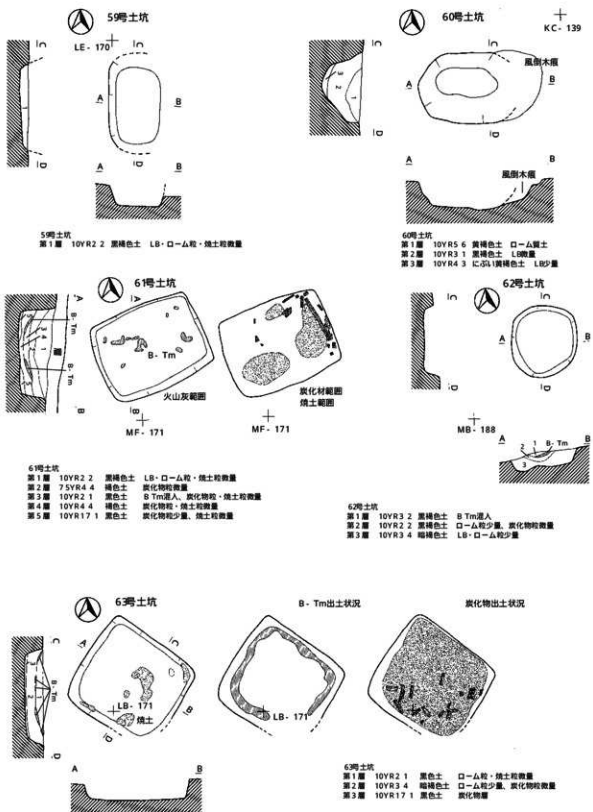
- [位置] L E - 170グリッドに位置している。
- [重複] 遺構との重複は認められなかった。
- [平面形・規模] 上面の一部が削平されており、長軸（1 m 3 0cm）短軸（85cm）で平面形は楕円形と思われる。
- [壁・底面] 残存する壁面および底面の一部が赤褐色に焼けており、底面は平坦で残存する深さは30cmである。
- [堆積土] 焼土粒を含む黒褐色土が堆積している。
- [出土遺物] 遺物は、出土しなかった。
- [時期] 遺物は出土しなかったが、壁面及び底面が熱により赤褐色に焼けていることから9世紀末葉に構築された焼成遺構と考えられる。

第60号土坑（第148図、写真37）

- [位置] K B - 139グリッドに位置している。
- [重複] 遺構との重複は認められないが、東部分は風倒木跡を切って構築されている。
- [平面形・規模] 長軸（1 m 80cm）短軸1 m 15cmの楕円形である。
- [壁・底面] 壁面および底面は起伏があり、摺鉢状にくぼむ。深さは62cmでやや急に立ち上がる。
- [堆積土] 3層に分層され、1層にローム質土が堆積し、人為堆積と考えられる。
- [出土遺物] 遺物は、出土しなかった。

第61号土坑（第148図、写真37）

- [位置] M E・M F - 170グリッドに位置している。
- [重複] 重複は認められなかった。
- [平面形・規模] 長軸1 m 80cm、短軸1 m 40cmで平面形は長方形である。
- [壁・底面] 壁面および底面が赤褐色に焼けている部分のみられ、底面は平坦で深さは50cmである。
- [堆積土] 5層に分層され、4層に苫小牧火山灰が堆積している。
- [出土遺物] 遺物は、出土しなかった。
- [時期] 遺物は出土しなかったが、壁面及び底面が熱により赤褐色に焼けていることから9世紀末葉に構築された焼成遺構と考えられる。



0 2m

第148図 平安時代土坑(6)

第62号土坑（第148図、写真37）

- 〔位置〕 MB - 187グリッドに位置している。
- 〔重複〕 重複は認められなかった。
- 〔平面形・規模〕 長径1m15cm、短径1m5cmのほぼ円形である。
- 〔壁・底面〕 壁面および底面にやや起伏がみられ、深さは30cmである。
- 〔堆積土〕 3層に分層され、1層と2層に苦小牧火山灰を含んでいる。
- 〔出土遺物〕 遺物は、出土しなかった。
- 〔時期〕 火山灰の堆積状況から10世紀初頭に構築されたと考えられる。

第63号土坑（第148図、写真37）

- 〔位置〕 LA・LB - 170・171グリッドに位置している。
- 〔重複〕 重複は認められなかった。
- 〔平面形・規模〕 長軸1m70cm、短軸1m60cmのほぼ方形である。
- 〔壁・底面〕 壁面および底面が赤褐色に焼けている部分があり、底面にやや起伏がみられ、深さは60cmである。
- 〔堆積土〕 3層に分層され、1層と2層の間に苦小牧火山灰、3層が炭化材の層である。
- 〔出土遺物〕 遺物は、土師器の破片と羽口？が出土した。（図化できるものは含まれていない）。
- 〔時期〕 火山灰の堆積状況と壁面及び底面が熱により赤褐色に焼けていることから9世紀末葉に構築された焼成遺構と考えられる。

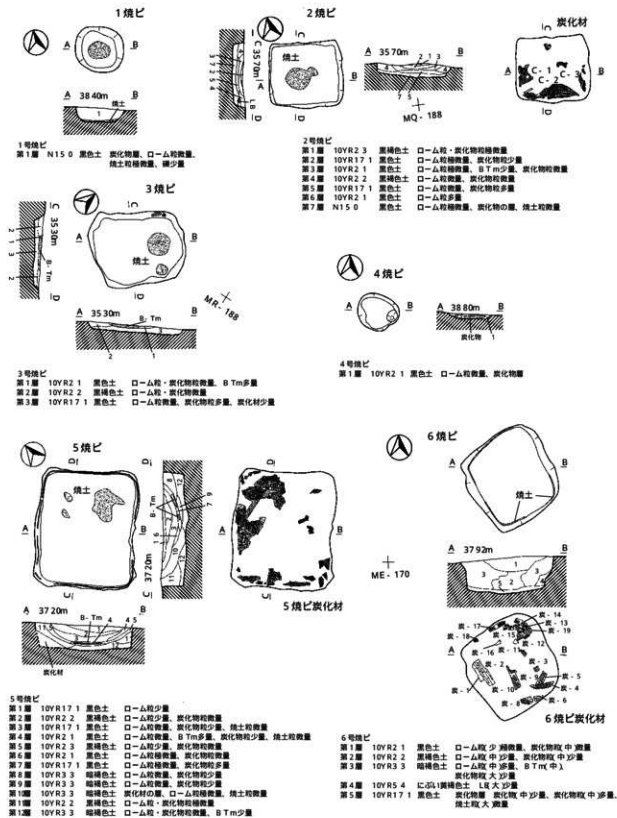
4 焼成ピット

広義の土坑の範疇に収まるピットで17基検出した。堆積土の中に木炭のような炭化材を伴い、壁面や底面の一部が焼土化した方形の土坑を焼成ピットとした。現場で遺構の種類を確認する段階から焼土と炭化材を伴うピットだと判断できた遺構は焼成ピット（略称、焼ピ）として一括した。

この項目では、現場で炭窯と称した遺構を焼成ピットに含めて計18基について記載したい。

1号焼成ピット（第149図、写真38）

- 〔位置〕 MT - 174グリッドに位置している。周辺には4号住居跡、4号円形周溝などが構築されている。
- 〔形状・規模〕 隅丸方形と称するよりも円形に近い形状を呈する。開口部の径8075cm、底部の径6555cm、開口部からの深さ20cmを測る。
- 〔壁・底〕 壁、底ともに地山ローム層を掘り下げて構築されている。壁の上部は、削平されている。底面は、加熱された形跡がある。
- 〔堆積土〕 2層に分けられた。1層は、黒色土と炭化物の混合したものである。
- 〔遺物〕 礫が1点記録されている。



第 149 図 焼成ピット(1)

2号焼成ピット(第149図、写真38)

[位置] 調査区域の南東端に近いMP-187グリッドに位置している。近くに3号焼成ピットがある。

[形状・規模] 隅丸方形である。開口部の径と底部の径はほぼ同じである。東西の径は115cm、南北の径は100cm、深さは25cmを測る。

[壁・底] 壁は、4面とも直立状に近い。底面は平坦で堅い造りである。また、底面は熱を受けて赤変している箇所も認められる。

[堆積土] 7層に分層された。濃淡の差はあるが堆積土全体に炭化物が混入している。3層には、BTm火山灰が確認された。分析結果も同じと判定された。底面に近い7層には多くの大きな炭化材が認められた。自然堆積したものとみられる。

[遺物] 炭化材、火山灰以外に認められなかった。

3号焼成ピット(第149図、写真38)

[位置] MQ-187-188グリッドに位置している。最寄りの遺構は、2号焼成ピットである。

[形状・規模] 不整な隅丸長方形で、長軸方向は南西-北東を指している。開口部の径150-115cm、底部の径140-100cm、深さ14cmを測る。

[壁・底] 壁は、崩落のため本来の姿は失っている。底部は、ほぼ原形をとどめて平坦である。

[堆積土] 3層に区分された。自然堆積したものとみられる。1層ではBTm火山灰が確認された。底面に接した3層からは多量の粉末状炭化物と炭化材が検出された。

[遺物] 土器などは認められなかった。

4号焼成ピット(第149図、写真38)

[位置] MR-165グリッドに位置している。周辺から2号住居跡、3、5、8号円形周溝が検出されている。

[形状・規模] 不整な楕円形を呈して、長軸方向は南東-北西を指している。小型の焼成ピットである。開口部の径70-57cm、底部の径60-50cm、深さは10cmほどである。

[壁・底] 壁は、相当削平されたようで立ち上がりはなだらかである。底部の南東隅には深さ7cmの小ピットがある。

[堆積土] 炭化物を含んだ黒色土のみである。

[遺物] 人工的な遺物は出土しなかった。

5号焼成ピット(第149図、写真39)

[位置] MM-186グリッドに位置している。調査区域の南端に近い遺構の一つである。

[形状・規模] 隅丸長方形を呈して、長軸方向は南西-北東を指している。遺存状況は良好な遺構である。開口部の径188-160cm、底部の径165-142cm、深さ44cmを測る。

[壁・底] 壁、底ともに地山ローム層を掘り下げて造られたものである。壁は4面とも直立に近く加熱されて変色している。底面は、斑点状に赤く焼けている。底部は平坦で、底部にある炭化材は壁際にあるものが大きい。

[堆積土] 12層に区分された。自然堆積したものとみられる。炭化材の直上でBTm火山灰が確認さ

れた。

[遺物] 炭化材、火山灰以外に遺物は出土しなかった。

6号焼成ピット(第149図、写真39)

[位置] ME - 169グリッドに位置している。7号焼成ピットとは8mほど離れている。

[形状・規模] 開口部が若干崩れているが隅丸方形を呈している。開口部の径140 137cm、底部の径130 110cm、確認面からの深さ57cmを測る。

[壁・底] 壁の上半部は崩落のため外側に若干開き気味の箇所もみられるが、下半部は直立状に近い。加熱のため赤く変色した壁も多い。底面は、幾分弛みが認められる。

[堆積土] 5層に分層された。3層中にB Tm火山灰が確認された。自然堆積したものとみられる。

[遺物] 土器などは出土しなかった。炭化材は、45 10cmほどの大きさのものが含まれている。

7号焼成ピット(第150図、写真39)

[位置] MD - 169グリッドに位置している。6号焼成ピットよりも標高が若干低い位置に構築されている。

[形状・規模] 隅丸長方形を呈して、長軸方向は東西に向いている。開口部の径152 110cm、底部の径130 90cm、深さ20cmを測る。

[壁・底] 壁は全体的に崩れ落ちて本来の形状を失っているが、加熱によって赤変した箇所は残存している。

[堆積土] 4層に区分された。自然堆積したものとみられる。1、2層中にB Tm火山灰が認められ、蛍光X線分析の判定も同じであった。

[遺物] 炭化材、火山灰以外に人工的な遺物は認められなかった。

8号焼成ピット(第150図、写真39)

[位置] LX - 168グリッドに位置している。7号焼成ピットとは20mほど離れた位置にある。

[形状・規模] 隅丸方形を呈している。規模は、開口部の径145 145cm、底部の径140 135cm、深さ20cmを測る。

[壁・底] 壁は、直立状に造られて、焼けて赤色に変化した箇所もみられる。底面は平坦であるが熱による変化は顕著にはみられない。

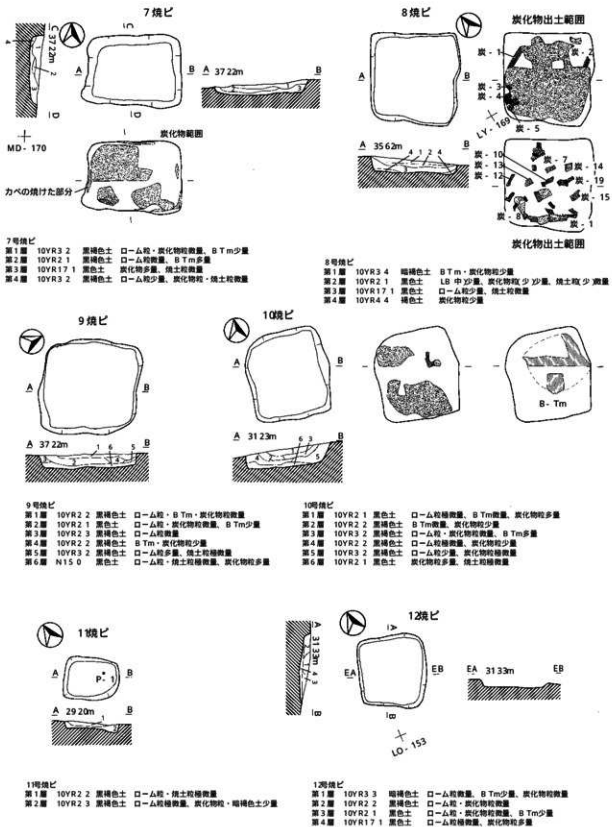
[堆積土] 4層に区分された。自然堆積したものとみられる。1層中にB Tm火山灰が認められた。炭化材は相当大きいもので、炭化材はピット全体に混在している。

[遺物] 炭化材、火山灰以外に遺物はみられなかった。

9号焼成ピット(第150・152図、写真39・69)

[位置] MD - 163グリッドに位置している。西に傾斜した斜面の標高36mに立地している。

[形状・規模] 隅丸方形を呈して、ピットの四隅は各方位とほぼ一致している。開口部の径は、底部の径とほぼ同じである。規模は、開口部の径155 155cm、底部の径145 140cm、確認面からの深さは20cmを測る。



第15図 焼成ピット(2)

[壁・底] 壁、底ともに地山ローム層を掘り下げて構築されたものである。壁は、崩落した箇所も少なく残存状態は良好である。底面は、堅固であるが多少起伏している。

[堆積土] 6層に分層された。自然堆積したものとみられる。堆積土の上位からB Tm火山灰が確認された。蛍光X線分析の結果もB Tmと判定された。

[遺物] 確認面から須恵器大甕の胴部片が出土した。

10号焼成ピット(第150図、写真40)

[位置] 調査区域のほぼ中央北端に設けられたLQ-156グリッドに位置している。

[形状・規模] 隅丸方形を呈して、ピットの各辺は方位とほぼ一致している。規模は、開口部の径140 130cm、底部の径130 110cm、深さ30cmを測る。

[壁・底] 地山ローム層を利用した壁は各辺とも崩落している。底面は、地山の傾斜と平行している。

[堆積土] 6層に分層された。自然堆積したものとみられる。堆積土の上部でB Tm火山灰が確認された。

[遺物] 土器などの遺物は認められなかった。

11号焼成ピット(第150図、写真40)

[位置] KZ-147グリッドに位置している。最寄りの遺構は15号焼成ピットである。

[形状・規模] ピットの規模は小型であるが長方形を呈して、長軸は東西方向を指している。開口部の径90 77cm、底部の径78 55cm、深さは15cmを測る。

[壁・底] 壁は、多少崩れたのか外側に開き気味である。底面は、湾曲気味である。

[堆積土] 黒褐色土が2層に分けられた。

[遺物] 確認面以下からは出土しなかった。

12号焼成ピット(第150図、写真40)

[位置] 調査区域の中央北端にあるLN・LO-152グリッドに位置している。

[形状・規模] 隅丸方形に近い形状を呈している。規模は、開口部の径120 110cm、底部の径110 100cm確認面からの深さ13cmを測る。

[壁・底] 壁は、標高の高い北側は明確に残存しているが、南側は判然としない。底面は、幾分起伏が認められる。

[堆積土] 4層に区分された。確認面に近い1、3層でB Tm火山灰が確認された。

[遺物] 土器などは出土しなかった。

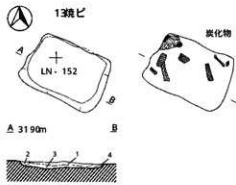
13号焼成ピット(第151・153図、写真40・69)

[位置] LM・LN-151・152グリッドに位置している。

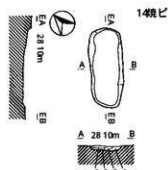
[重複] 1号縄文住居跡を掘り下げて構築されたものとみられる。

[形状・規模] 相当削平されているが隅丸長方形を呈して、長軸方向はほぼ南東-北西を示している。開口部の径は135 90cm、底部の径は115 80cm、確認面からの深さ10-4cmを測る。

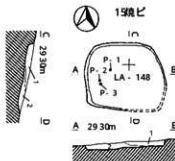
[壁・底] 壁は、削平されて本来の構造は明確に把握できないが、壁の一部には加熱されて還元、赤



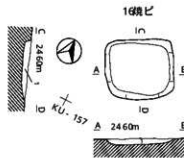
- 13号ピット
 第1層 10YR2 3 黒褐色土 B 7m特微量、ローム粒微量、炭化物粒少量
 第2層 10YR2 2 黒褐色土 ローム粒少量、炭化物粒・焼土粒微量
 第3層 10YR2 1 黒色土 炭化物粒、ローム粒微量
 第4層 10YR3 1 黒褐色土 ローム粒・炭化物粒少量、焼土粒微量



- 14号ピット
 第1層 10YR17 1 黒色土 炭化物微量
 第2層 75YR4 4 褐色土
 第3層 10YR17 1 黒色土 焼土粒
 第4層 10YR17 1 黒色土 L6微量



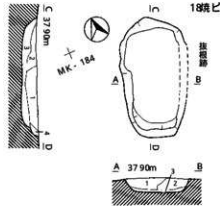
- 15号ピット
 第1層 10YR17 1 黒色土 ローム粒微量、炭化物粒・焼土粒微量
 第2層 10YR2 2 黒褐色土 ローム粒・焼土粒微量、炭化物粒少量



- 16号ピット
 第1層 10YR17 1 黒色土 ローム粒微量、炭化物粒多量



- 17号ピット
 第1層 10YR2 2 黒褐色土 L6(少)・炭化物粒・ローム粒少量
 第2層 10YR17 1 黒色土 ローム粒・焼土粒少量、炭化物粒(中)多量
 第3層 10YR17 1 黒色土 炭化物粒少量、焼土粒少量



- 18号ピット
 第1層 10YR2 3 黒褐色土 ローム粒多量、炭化物粒少量
 第2層 10YR2 3 黒褐色土 ローム粒少量、炭化物粒多量
 第3層 10YR2 3 黒褐色土 ローム粒微量、炭化物粒多量、焼土粒少量
 第4層 10YR3 3 黒褐色土 ローム粒・焼土粒微量、炭化物粒少量

0 2m

第15図 焼成ピット(3)

変した箇所も認められる。底面は、起伏しているが、赤変した様子はみられない。

[堆積土] 4層に区分された。黒褐色土を基調として全体に炭化物を含む。1層ではB Tm火山灰が確認された。

[遺物] 襦形土師器の胴部細片と縄文土器片(前期末葉〜中期初頭)が各1点出土した。

14号焼成ピット(第151図、写真41)

[位置] LF・LG-158グリッドに位置している。最寄りの遺構は、18・19号住居跡である。

[形状・規模] 平面形は、隅丸長方形である。規模は、開口部の径125・53cm、底部の径120・40cm、確認面からの深さcmを測る。

[壁・底] 壁は削平されているためか、だらだらした立ち上がりを示している。底面は、地山の傾斜と平行して斜行気味である。

[堆積土] 4層に区分された。黒色土が基調をなしている。焼土は認められたが、目立つような炭化材は少ない。

[遺物] 土器などは出土しなかった。

15号焼成ピット(第151・152図、写真41・69)

[位置] KZ・LA-147・148グリッドに位置している。近くには11号焼成ピットが構築されている。

[形状・規模] 各辺が丸みをもつ隅丸方形である。規模は、開口部の径130・110cm、底部の径120・100cm、確認面からの深さ10cmを測る。

[壁・底] 壁は、相当削平されている。標高の高い北側の壁は残存しているが、南側は底面まで掘り下げられている。

[堆積土] 2層に区分された。

[遺物] 確認面から須恵器大襦胴部片が2点出土した。

16号焼成ピット(第151図、写真41)

[位置] KU-156グリッドに位置している。付近には51、56号土坑が配置されている。

[形状・規模] 隅丸方形を呈する。規模は、開口部の径110・95cm、底部の径95・85cm、確認面からの深さ8cmを測る。

[壁・底] 壁は、相当削平されたものとみられる。地山が高い北側の壁は立ち上がりを確認できるが南側の壁は削り取られて斜行している。底面は、弓なりに湾曲している。

[堆積土] 炭化物を多量に含んだ黒色土のみが堆積していた。

[遺物] 確認面以下から出土した遺物はなかった。

17号焼成ピット(第151図、写真42)

[位置] LK-158グリッドに位置している。近くには55号土坑が配置されている。

[形状・規模] 平面形は、隅丸長方形である。規模は、開口部の径130・85cm、底部の径105・65cm、確認面からの深さ20cmを測る。

[壁・底] 壁の残存状況は比較的良い。壁と底面の一部に加熱されて赤変した箇所も認められる。底

面は、堅く平坦である。

〔堆積土〕 3層に区別された。自然堆積したものとみられる。

〔遺物〕 出土しなかった。

18号焼成ピット(第151図、写真42)

〔位置〕 MK-184グリッドに位置している。5号焼成ピットとは10mほど離れている。

〔形状・規模〕 現地では炭窯と称した遺構である。東壁が風倒木跡と重複しているため本来の形状は判然としながい隔丸長方形とみられる。長軸方向は、N-20度-Eである。規模は、開口部の径190(110)cm、底部の径160(80)cm、確認面からの深さ25cmを測る。

〔壁・底〕 壁は、崩落したのが直線状ではなく出入りのある掘り方である。底面は、平坦ではなく弓なりに反っている。いずれも地山ローム層を掘り下げて造られたものである。

〔堆積土〕 ピット内は4層に区別された。自然堆積したものとみられる。全体に炭化物が混入している。3層中でB T m火山灰が確認されている。

〔遺物〕 土器などは出土しなかった。



9号焼成ピット 1
13号 # 2-3
15号 # 4-6

第152図 焼成ピット出土遺物

9号焼成ピット出土遺物

図録番号 152

図録番号	種別	器種	層位	計測値 (cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
				口径	器高	底径					
151	漆器類	大甕	堆積土	-	95	-	横目状平行叩き	当て具履 ナデ	-		

17号焼成ピット出土遺物

図録番号 152

図録番号	種別	器種	層位	部位	文様など		分類	備考
					形状	内容		
152	縄文	漆鉢	備	器部	断糸圧痕、焼記等、RLP縄文(新録あり)		群	PX、写420

17号焼成ピット出土遺物

図録番号 152

図録番号	種別	器種	層位	計測値 (cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
				口径	器高	底径					
153	土器類	甕	備	-	35	-	ヘラケズリ ナデ	ナデ	-	PX	

19号焼成ピット出土遺物

図録番号 152

図録番号	種別	器種	層位	計測値 (cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
				口径	器高	底径					
154	土器類	甕	堆積土	-	24	(114)	ヘラナデ	ヘラナデ	(ナデ)ア Metz		P、34枚
1	漆器類	大甕	堆積土	-	35	-	平行、交差叩き	交差叩き履	-		4号同一層位
15	漆器類	大甕	堆積土	-	60	-	平行叩き	当て具履 ナデ	-		動土塚州墳に類似

5 焼土状遺構

この遺構は、焼土と多くの炭化材、炭化物を伴う焼成ピット（土坑）とは分離して取扱ったものである。現地性の焼土は認められるが炭化物の量は僅かで、屋外炉、地床炉のような遺構を一括した。

1号焼土状遺構（第153図、写真42）

〔位置〕 MW - 168グリッドに位置している。周辺には1号住居跡、2、3号焼土状遺構、3号土坑が配置されている。

〔形状・規模〕 黒褐色土が加熱されてできた焼土が楕円形を呈している。焼土の径は65 50cm、その厚さは5cmである。焼土の周囲の状況は削平のため不明である。

〔堆積土〕 焼土を含めて3層に区分された。

〔遺物〕 確認面以下からは出土しなかった。

2号焼土状遺構（第153図、写真42）

〔位置〕 MX・MY - 168グリッドに位置している。付近には1、3号焼土状遺構が構築されている。

〔形状・規模〕 地山ローム層（層）を楕円形に掘り下げ、焼土は掘り下げた凹地の南側に形成されている。凹地の径は、210 160cmで、その長軸方向は南西 - 北東である。焼土の径は90 70cm、確認面から焼土面までの深さは10cm、焼土の厚さは6cmほどである。

〔堆積土〕 4層に分層された。2層が最も強く酸化焼成されている。

〔遺物〕 自然礫が1点認められた。

3号焼土状遺構（第153図、写真42・69）

〔位置〕 MY - 167・168グリッドに位置している。周辺には2号焼土状遺構、3号土坑が配置されている。

〔形状・規模〕 黒褐色土を15cmほど楕円形に掘り下げて、焼土面は地山ローム層に形成された遺構である。凹地の径は198 140cm、確認面から焼土面までの深さは15cmを測り、焼土の径は75 65cm、その厚さは5cmである。

〔堆積土〕 2層に分層された。

〔遺物〕 焼土よりも上位に堆積していた1層から甕形土師器9点2個体が出土した。

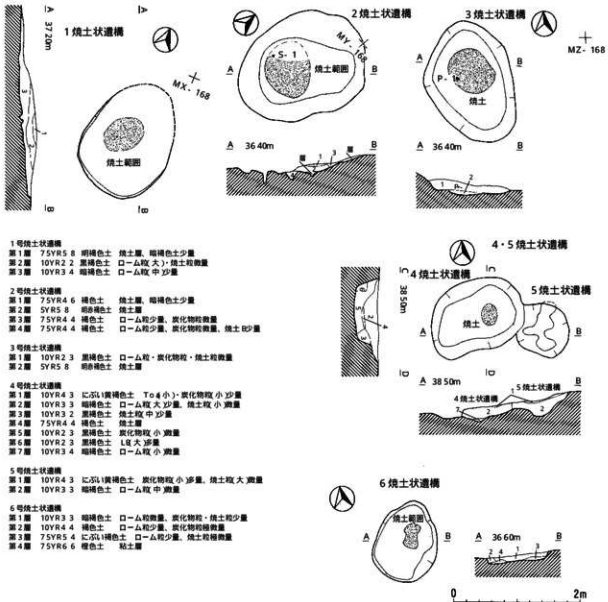
4号焼土状遺構（第153図、写真43）

〔位置〕 MG - 168グリッドに位置している。5号焼土状遺構と重複している。本遺構が新しい。

〔形状・規模〕 黒褐色土を不整な楕円形状に掘り下げた遺構である。開口部の径155 125cm、底部の径133 75cm、確認面から焼土面までの深さは20cmである。焼土の径は30cm前後を測り、底面の東側には深さ8cm前後の小ピットが2個確認された。

〔堆積土〕 焼土を含めて7層に分層された。1層中にTo₂火山灰が認められた。

〔遺物〕 出土しなかった。



第153図 焼土状遺構(1)

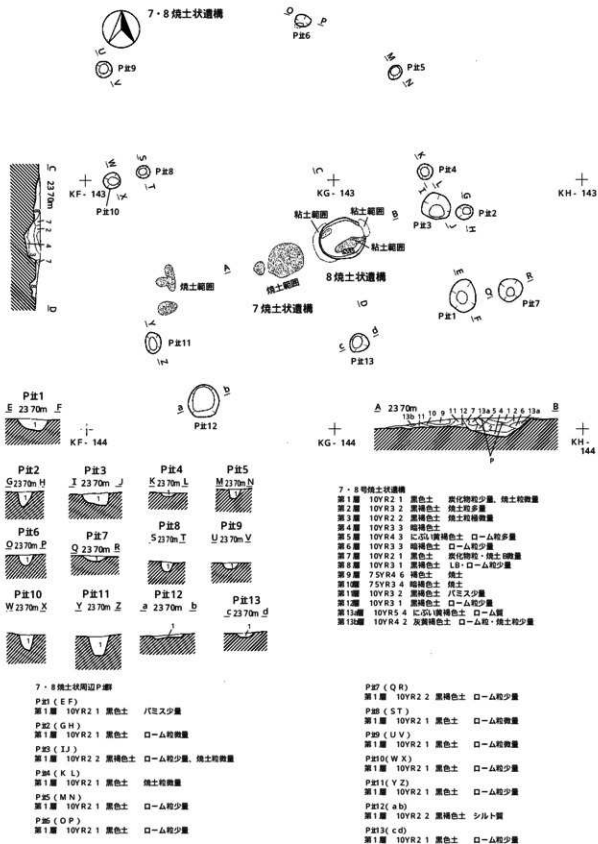
5号焼土状遺構(第153図、写真43)

【位置】 MG - 168グリッドに位置している。4号焼土状遺構と重複して、本遺構が古い。4号焼土状遺構にはToa灰が認められている。

【形状・規模】 平面は、ほぼ円形で、規模は径80cm、深さ25cmである。確認面の上位が削平去れていたため掘り下げてから焼土が形成されたのが判然としなない。

【堆積土】 2層に区分された。焼土と炭化物は3層に含まれていた。

【遺物】 確認されなかった。



第154図 焼土状遺構(2)・柱穴状ピット群

6号焼土状遺構(第154図、写真43)

[位置] MB - 167 168グリッドに位置している。北側に隣接して13号土坑がある。

[形状・規模] 楕円形を呈して、その長軸方向は南西 - 北東をさしている。開口部の径は130 100 cm、開口部から10cm下位に40 20cmの焼土面が形成されている。

[堆積土] 焼土は、現地性のもので、4層に区分された。

[遺物] 出土しなかった。

7・8号焼土状遺構(第154図、写真43・44・69・70)

[位置] KF・KG - 143グリッドに位置している。本遺構の周囲には1号柱穴状ピット群が検出されている。

[形状・規模] 7号、8号としたが、両者が同一の遺構である可能もある。削平をうけて連続していたのか否か判然としない。ここでは便宜上2基に分けて記載する。

【7号】8号焼土状遺構と同一の遺構でないとするれば、表土が加熱されて円形状に焼土化しただけの遺構である。焼土は、凸レンズ状に形成されて、その規模は径60 50cm、焼土の厚さ13cmを測る。

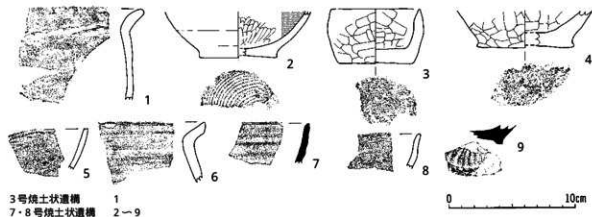
【8号】80 70cmの楕円形を呈している。表土を幾分掘り下げて黄褐色粘質土を敷き固めて炉壁としたものとみられるが、炉底面は地山のローム層を利用したものではない。

[堆積土] 7号と8号を合算すると14層に分けられた。

[遺物] 出土した遺物は、土師器、須恵器、鉄製品、土製品である。

土師器は、坏と甕で、坏は8点(口縁5うち内黒2、底部3) 甕は、37点(口縁2、底部3、その他胴部)である。

須恵器は、坏と長頸壺で、坏は3点(口縁) 長頸壺は細片が多いが1点は底部に放射状調整痕が認められる。鉄製品は、錆化のため木質部(樹皮?)が若干残存した刀子である。土製品は、ミニチュアの土製支脚?である。



第154図 焼土状遺構出土遺物(1)

第 7 章 検出遺構と出土遺物

3号焼土状遺構出土遺物

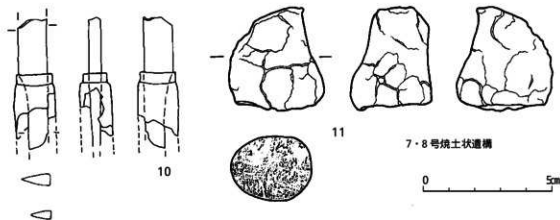
図面番号 155

図面 番号	種 別	器 種	層 位	計測値 (cm)			外 面 調 整	内 面 調 整	底 面 調 整	分 類	備 考
				口径	器高	底径					
151	土師器	甕	積土上	(220)	74	-	ヨコナデ ヘラナズリ	ヨコナデ ヘラナズ	-	-	二次焼成

7・8号焼土状遺構出土遺物

図面番号 155

図面 番号	種 別	器 種	層 位	計測値 (cm)			外 面 調 整	内 面 調 整	底 面 調 整	分 類	備 考
				口径	器高	底径					
152	土師器	杯	堆積土	-	38	62	ロクロ	ロクロ ミガキ・内裏	指輪系切り	-	1次
3	土師器	手捏	堆積土 (68)	46	(66)	-	ヘラナズ ナデ	ユビナズ	ヘラナズ	-	2次、赤変
4	土師器	甕	堆積土	-	38	(108)	ヘラナズ	ヘラナズ	(ヘラナズ 穴メツ)	-	二次焼成
5	土師器	杯	堆積土 (130)	36	-	-	ロクロ	ロクロ	-	-	-
6	土師器	甕	堆積土 (220)	46	-	-	ロクロ	ロクロ	-	-	二次焼成
7	須恵器	杯	堆積土 (136)	30	-	-	ロクロ	ロクロ	-	-	二次焼成
8	土師器	杯	堆積土 (132)	30	-	-	ロクロ	ロクロ ミガキ・内裏	-	-	-
9	須恵器	長筒甕	堆積土	-	20	(70)	(ロクロ ヘラナズリ)	(ロクロ)	ロクロ 菊足破ズリ	-	破片多数



第 156 図 焼土状遺構出土遺物 (2)

7・8号焼土状遺構出土遺物

図面番号 156

図面 番号	分 類	出 土 遺 構	層 位	計 測 値				備 考
				長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	
156-1	鉄製(刀子)	7・8号焼土	2層	52	12	04	115	F.X, 整理 34

7号焼土状遺構出土遺物

図面番号 156

図面 番号	分 類	出 土 遺 構	層 位	計 測 値				備 考
				長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	
156-11	瓦土製(瓦)	7号焼土	2層	41	35	28	423	C.X, 整理 8

6 柱穴状ビット群

掘立柱建物跡の柱穴のような小ビットが22号住居跡の西側に位置する7、8号焼土状遺構の周囲から13個検出された。これらのビットを一括して1号柱穴状ビット群として取り上げることにする。

1号柱穴状ビット群（第154図、写真44）

〔位置〕 KF・KG - 142・143グリッドに位置している。

〔形状・規模〕 約6m四方の範囲から円形あるいは楕円形を呈した柱穴状ビットが7、8号焼土状遺構を囲むように13個確認された。これらのビットの規模は、径が23～55cm、深さは5～30cmを測る。ビットの配置は、規則性があるとは認めがたい。柱間寸法は、1.5m、2.4m、3.8mなどが認められる。

〔堆積土〕 ビットの確認面以下には、黒色土あるいは黒褐色土が1層のみ堆積していた。

〔遺物〕 遺物はビット内からは出土しなかった。

〔小結〕 P1、P2、P5、P10～P13をつなぎ合わせると掘立柱建物跡とみなすことも可能である。この建物と7、8号焼土状遺構が同時に存在したものが否か肯定する材料も否定する材料も見当たらない。仮に単独の建物跡としても柱穴の配置に過不足がみられる。過去の調査でこのような出土例がないか検索してみたい。青森市野木遺跡（県264集：1999）に類似例あるようだが。

7 道路状遺構

本年度の調査区域では2条検出された。地表面が細長く帯状に踏み固められたような遺構を道路状としてまとめた。平成8年度の調査では10条ほど確認されている。

1号道路状遺構（第157図、写真44）

〔位置〕 MU - 187～MW - 186グリッドに位置している。本年度の調査区域では南東端にある遺構で、平成8年度に調査された第260号道路状遺構と連続していた可能性が高い位置にある。4号溝状遺構と2号道路状遺構と平行している。

〔形状・規模〕 細長い帯状を呈している。植林された杉の木の根によって相当攪乱を受けた箇所もある。道路状に硬化した面の長さは11m、幅は0.6～0.85m、硬化面の厚さ0.02～0.08m、硬化面の断面は凸レンズ状である。また、長軸方向は、N - 45度 - Eである。比高差は、MU - 187グリッド側が0.2mほど高い。

〔堆積土〕 2層に区分された。堆積土の硬化面は、地山ローム層が道幅分だけ窪んだ凹地にだけ認められる。

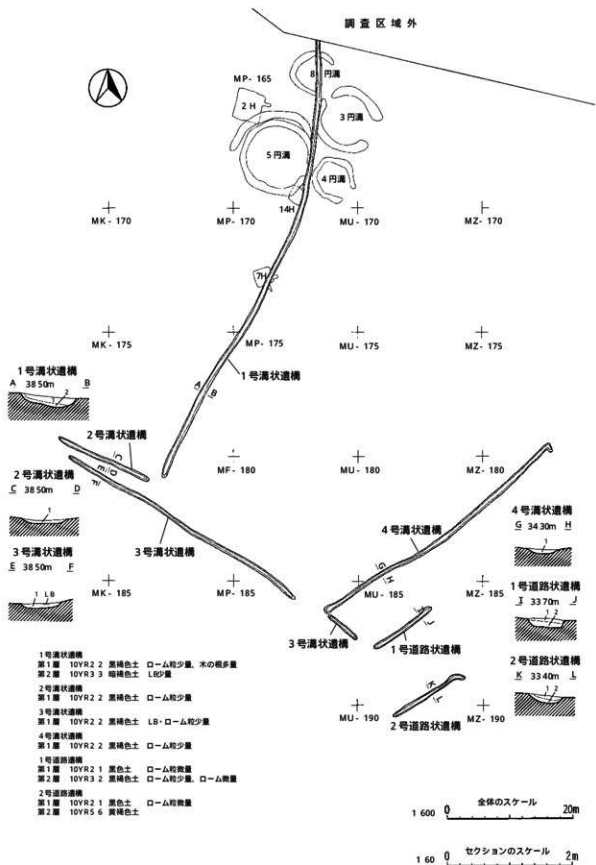
〔遺物〕 火山灰、土器などは認められなかった。

2号道路状遺構（第157図、写真44）

〔位置〕 MV - 190～MY - 188グリッドに位置している。調査区域の最南東側にある遺構である。

1号道路状遺構とは10mほどの間隔を置いて平行している。

〔形状・規模〕 細長い帯状を呈している。部分的に直線状でない箇所も認められる。道路状に硬化し



第 15 図 道路状遺構・溝状遺構(1)

た面の長さは13m、幅は0.55～0.70m、硬化面の厚さ0.03～0.08m、硬化面の断面は凸レンズ状である。長軸方向は、N - 64度 - Eである。比高差は、MV - 190グリッド側が0.2mほど高い。

〔堆積土〕 2層に分けられた。1層は黒色土、2層目は地山ローム層が硬化したものとみられる。

〔遺物〕 降下火山灰、土器などはみられなかった。

8 溝状遺構

溝跡と呼称してもよい遺構であるが、これまでの報告書で採用された名称を踏襲した。溝状遺構は、長短8条検出した。平成8年度の調査でも出土例が報告されている。

1号溝状遺構（第157図、写真44）

〔位置〕 遺構の北端はMS - 162グリッド、また、南端はMM - 180グリッドに位置している。さらに遺構の北端は、調査区域外の緑地の中に続いている。

遺構はMS - 162～168、MR - 169～171、MQ - 172 173、MP - 174 175、MO - 175 176、MN - 177 178、MM - 179 180グリッドを縦断している。

〔重複〕 14、7号住居跡、8、3、5号円形周溝を浅く掘削している。その新旧関係は明白であるなお、本遺構は重複している遺構の平面図からは削除してある。

〔形状・規模〕 巨視的には細長い紐状を呈して、多少蛇行している。確認した長さは、77.5m、溝幅0.85m前後、溝の深さ0.05～0.15m、長軸方向は、N - 20度 - E前後、また、遺構の振幅は2.6mほどである。溝の比高差は0.5mで北端が高い。

〔堆積土〕 2層に分層した。

〔遺物〕 縄文土器、土師器の細片が若干出土したが図化できるようなものはない。

2号溝状遺構（第157図、写真44）

〔位置〕 MI - 179、MJ - ML - 180グリッドに位置している。1号溝状遺構とは「かぎかっこ」状に近接している。また、3号溝状遺構とは並列状に配置されている。

〔重複〕 なし。

〔形状・規模〕 直線状を呈する。確認した長さは16m、溝幅は0.7m前後、溝の深さ0.1～0.25mを測る。また、長軸方向は、N - 66度 - Wである。溝のレベルは、南東端側が高く、比高差は0.2mである。

〔堆積土〕 確認面以下は黒褐色土のみが堆積していた。掘り込み面は、現地表面とみられるが、表土はほとんど削平されていた。

〔遺物〕 認められなかった。

3号溝状遺構（第157図、写真44）

〔位置〕 MI - 180～MT - 187グリッドに位置しているが、MR - 185～MS - 186グリッド付近で約5m途切れている。本遺構の北東側には1、2、4号溝状遺構が並列あるいは直交するような形状に配置されている。

[重複] なし。

[形状・規模] 細長い紐状を呈する。溝の長さは53.3m、溝幅0.65m、溝の深さ0.04～0.15mを測る。また、長軸方向は、N - 58度 - Wである。溝のレベルは北西端が高く、両端の比高差は2.14mである。

[堆積土] 溝自体は、地表面から地山ローム層上面まで掘り下げて構築したものとみられるが、堆積土は確認面以下では黒褐色土のみが認められた。

[遺物] 出土しなかった。

4号溝状遺構 (第157図、写真44)

[位置] MS - 186グリッドに南西端が、またNB - 179グリッドに北東端が位置している。溝の南西端は、3号溝状遺構と直交する形で構築されている。また、北東端は、平成8年度の調査で検出された第259号溝状遺構と連続する可能性が高いようである。

[重複] なし。

[形状・規模] 細長く、直線状である。確認した長さは45m、溝幅0.5m前後、溝の深さ0.1m前後を測る。また、長軸方向は、N - 60度 - Eである。溝のレベルは、南西端が高く、その比高差は2.1mほどあるので、雨水などは南西から北東へ向けて流れるものとみられる。

[堆積土] 1層だけである。

[遺物] 縄文土器と土師器の細片が認められた。

5号溝状遺構 (第158図、写真45)

[位置] LB - 149、LG - LK - 150グリッドに位置している。

[規模] 幅30～40cm、深さ20～30cmでほぼ東西にのびている。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層される。

[出土遺物] 遺物は、出土しなかった。

6号溝状遺構 (第159図、写真45)

[位置] KU - 150グリッドに位置している。

[重複] 25号竪穴住居跡と重複し、本溝状遺構が25号竪穴住居跡より新しい。

[規模] 幅40～60cm、深さ50cm前後で北から南にのびている。底面はやや起伏がみられる。

[堆積土] 3層に分層される。

[出土遺物] 遺物は、出土しなかった。

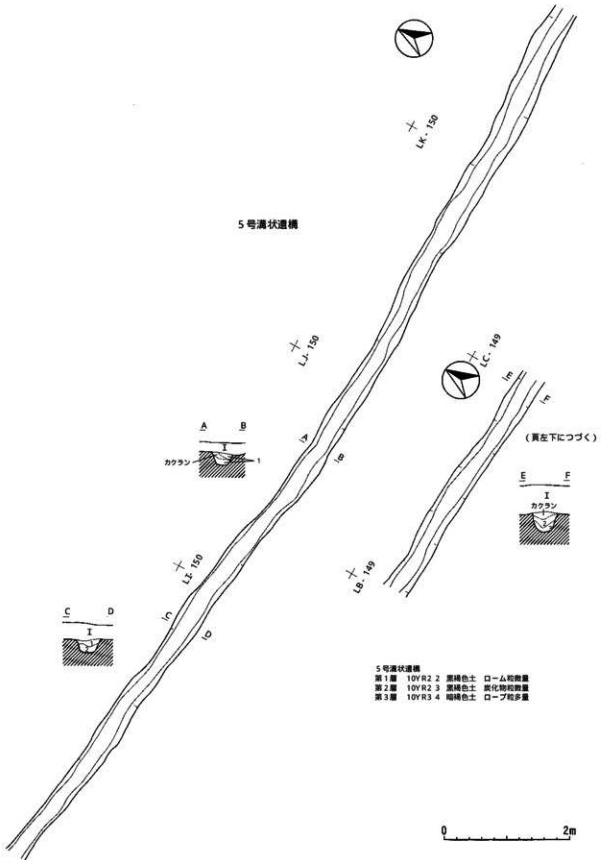
7号溝状遺構 (第159図、写真45)

[位置] KM - KP - 150グリッドに位置している。

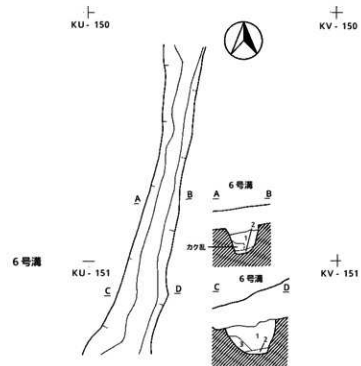
[規模] 幅30～40cm、深さ10～20cmで、東西にのびる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 黒色土の層が堆積している。

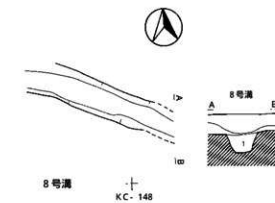
[出土遺物] 遺物は、出土しなかった。



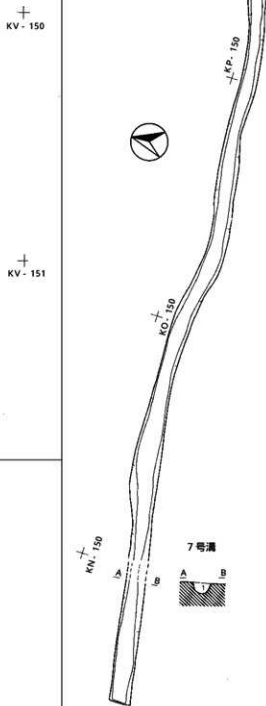
第158図 溝状遺構(2)



6号溝状遺構
 第1層 10VR2 3 黒褐色土 □-△粒少量
 第2層 10VR3 4 暗褐色土 □-△粒少量
 第3層 10VR3 4 暗褐色土 □-△粒少量、炭化物少量



8号溝状遺構
 第1層 10VR17 1 黒色土 □-△粒・焼土粒少量



7号溝状遺構
 第1層 10VR2 1 黒色土 □-△粒少量

0 2m

第159図 溝状遺構(3)

8号溝状遺構(第159図、写真46)

[位置] LB-147グリッドに位置している。

[規模] 幅約50cm、深さ約30cmでほぼ西北にのびるとされる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 黒色土の層が堆積している。

[出土遺物] 遺物は、出土しなかった。

9 その他の遺構

(1) 竪穴遺構

第1号竪穴遺構(旧第1号住居跡)(第160・161図、写真46・62)

[位置] LA・LB-161グリッドに位置している。

[重複] 重複は認められなかった。

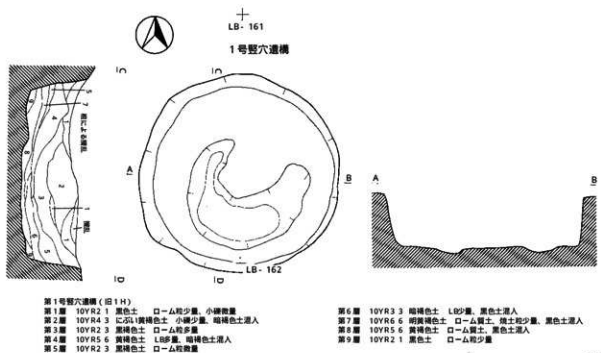
[平面形・規模] 径3m20cmのほぼ円形である。

[壁・底面] 壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は起伏があり深さは70cmで、中央付近にC字状の落ち込み(10cm程度)がみられる。

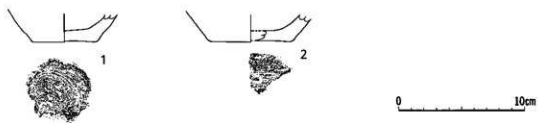
[堆積土] 9層に分層され、5層までは近世の堆積(攪乱)と考えられる。

[出土遺物] 底面直上から土師器の口口・小型甕底部が、また、堆積土から甕の底部破片が出土している。

[時期]



第160図 竪穴遺構



第 16 図 竪穴遺構出土遺物

第 1 号竪穴遺構出土遺物

図録番号 161

図録 番号	種 別	器 種	層 位	計 測 値 (cm)			外 面 調 整	内 面 調 整	底 面 調 整	分 類	備 考
				口 径	口 縁 高	底 径					
51-1	土師器	小鉢	底面直上	-	23	54	口ク口	口ク口	(煎転金切り)		P. 1
2	土師器	甕	埴輪土	-	24	66	ヘラケズリ	ヨコナデ	ケズリ ナデ		P. 5

第3節 遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物は、縄文土器、土師器、須恵器、石器のほか土製品、石製品、鉄滓が認められている。それらの遺物は、時代的に分けると縄文時代と平安時代に大別される。これまで行われた試掘調査と発掘調査で出土した遺構外の遺物は既に報告されている（県239集：1998）。

1 縄文時代の遺物

(1) 土器

出土量が僅少であることから時代的に大きく分けた。平安時代の遺構からも若干出土している。

群（第162図1、写真70）

縄文時代早期の土器であろう。外面には格子状の沈線文が施文され、内面にも沈線文が認められる。ムシリ式に含まれるとすれば、これまでも本遺跡から出土例がある（県239集：1998）。また、物見台式土器も発見されている。

群（第162図2・3、写真70）

縄文時代前期末葉から中期初頭の土器で、円筒下層d式～円筒上層a式に相当する。縄文時代の竪穴式住居跡から出土している土器と時代的に一致している。

群（第162図4、写真70）

縄文時代中期の土器とみられるが、底部片のため型式名は特定できていない。

群（第162図5・8、写真70）

5～7は縄文時代後期の十腰内、式に相当する土器である。これまでの調査でも遺構外から出土例が認められている。8は、後期から晩期のものとみられる。

群（第162図9、写真70）

縄文時代晩期～弥生時代？の可能性がみられる土器である。

(2) 石器・石製品（第163図1～6、写真70）

縄文時代の石器と石製品は、石匙、不定形石器、磨製石斧、半円状扁平打製石器、石製円版が認められる。これらの概要は、観察表に記載した。また、平安時代の遺構堆積土からは、石鏃、石匙、不定形石器、磨製石斧、半円状扁平打製石器、敲磨器類が出ている。

(3) 土製品

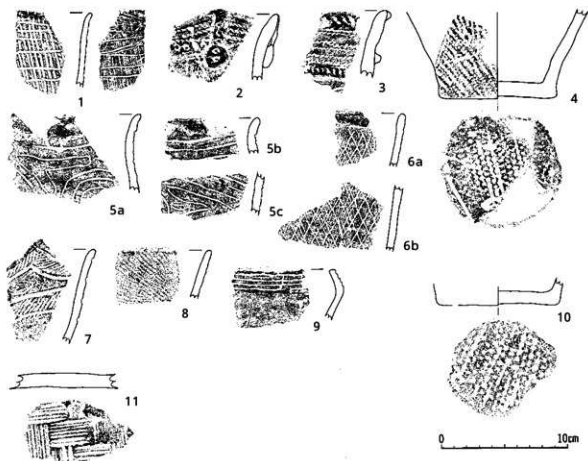
土製品は、遺構外からは出土していないが、平安時代の遺構堆積土から土偶が2点出土している。2点は別個体で、縄文時代中期末葉から後期初頭ころのものとみられる。

2 平安時代の遺物

遺構外から出土した平安時代の遺物は、土師器、須恵器、土製品、石製品、鉄滓である。

(1) 土師器（第164・165図、写真70）

土師器の器種は、坏、高坏、甕、壺が確認されている。図示した土器は、24点である。器形の全容

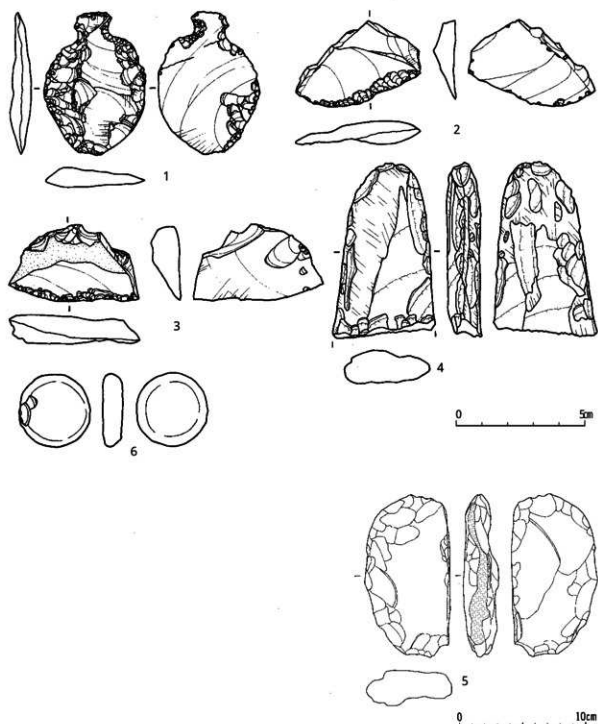


第 16 図 遺構外出土遺物 1)

遺構外出土遺物

図版番号 162

図版番号	出土状況	種別	種類	部位	部位	文様など	分期	備考
101	NA 165	織文	(深鉢)	表採	口一割	外面 格子状沈線文、内面 沈線文	群	
2	NR 164	織文	深鉢	なし	口縁	隆帯刺突、栴象 (LR) 平行圧痕、多軸線魚体	群	
3	MQ 166	織文	深鉢	なし	口縁	隆帯刺突、栴象 (RL) 平行圧痕	群	
4	MD 190	織文	深鉢	表取跡	底部	RL織文、網代底	群	
5	ML 169	織文	壺	表採	口縁	沈線文	群	
6	M 165	織文	深鉢	表採	口縁	縦目状栴象文 (R, L?)	群	
7	MW 165	織文	深鉢	表採	口縁	(波状) 雲河織文 (L)	群	
8	MO 175	織文	深鉢	裏	口縁	織文 (RL)	群	
9	MI 169	織文	(台付)	表採	口縁	平行沈線文 (工字文?)	群	
10	MZ 169	織文	深鉢	表採	底部	網代底・ヘラナデ		
11	MK 165	織文	深鉢	表採	底部	アンペラ圧痕		



第16図 遺構外出土遺物(2)

遺構外出土遺物

図版番号 163

図版 番号	分類	出土区	層位	計測値				石質	備考
				長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g		
131-1	石匙	MH 164	表土	5.6	4.0	0.9	15.3	珪酸質岩	整理 3
2	不定形石器	M1 164	表土	3.4	4.5	0.9	10.0	珪酸質岩	整理 4
3	不定形石器	MX 156	表層	3.1	5.2	1.1	16.6	珪酸質岩	整理 5
4	磨製石斧	MB 165	築城跡	6.9	4.1	1.4	56.2	砂板岩	基部片、整理 8
5	半円状扁平打製石器	MO 173	表土	13.0	6.9	2.9	380.2	緑色凝灰岩	整理 9
6	石製円筒	M1 169	表土	2.9	2.8	0.8	8.1	流紋岩質凝灰岩	整理 13

をとどめたものは少ない。

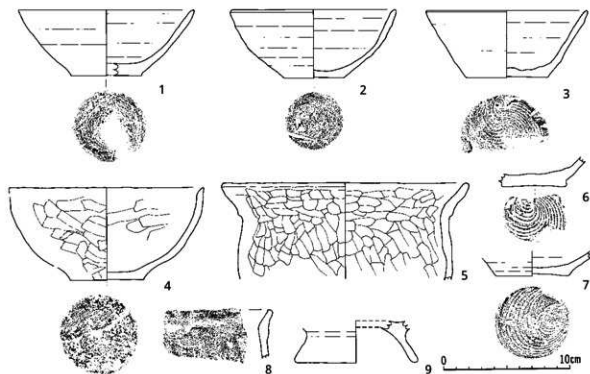
【環】ロクロで成形し、底部の切り離しが回転系切りが主流であるが、巻き上げ成形後、ヘラナデ・ミガキ・内面黒色処理した類も認められる（MR 169、5円満付近）。

【高環】ロクロ成形後、内面黒色処理した類もみられる。

【甕】巻き上げ成形後、ヘラケズリ・ナデ・ヘラナデを多用した類が主流である。

(2) 須臾器 (第 165・166図、写真 70・71)

須臾器の器種は、坏、長頸壺、甕が確認されている。図示した遺構外の須臾器は、23点である。遺構外出土の須臾器であっても遺構内のものと同一個体で接合する例も認められている。出土須臾器の産地を推定するため胎土分析を依頼した。その結果、産地は本県五所川原窯群、岩手県瀬谷子窯群及び産地不明に推定された。長頸壺の産地に胆沢城周辺にある瀬谷子窯群が加えられたことは大きな収穫である。本県では、これまで瀬谷子産の須臾器は八戸市の熊野堂遺跡と楡引遺跡で出土例が知られている（県 263集：1999）。



第 164図 遺構外出土遺物 (3)

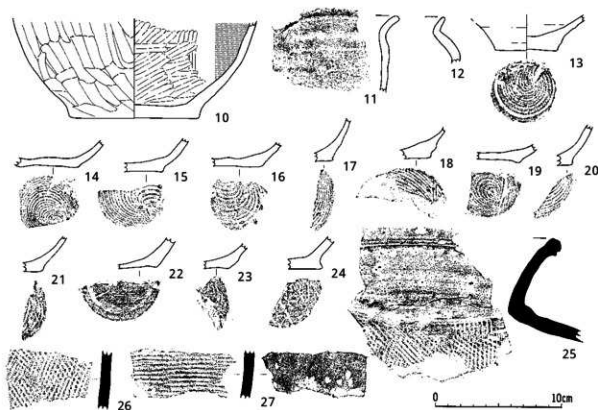
遺構外出土遺物 (3)
図版番号 164

図版番号	出土区	種別	器種	層位	計測値 (cm)			外面調整	内面調整	底部調整	分類	備考
					口径	器高	底径					
164	MS 163	土師器	坏	表探	14.2	5.2	5.6	ロクロ	ロクロ	(回転系切り)		1次
2	MI 160	土師器	坏	表探	(134)	5.6	4.6	(ロクロ) 穴メツ	(ロクロ) 割線歩	(ロクロ) 穴メツ		3次
3	-	土師器	坏	表探	(130)	5.4	6.6	ロクロ	ロクロ	回転系切り		2次
4	-	土師器	坏	表探	(160)	7.3	6.6	ヘラ玉ガキ ナデ	ナデ	ヘラナデ		非ロクロ成形
5	-	土師器	壺	表探	20.0	7.6	-	ヨコナデ ヘラナデ	ヨコナデ ヘラナデ	-		-
6	MO 161	土師器	坏	表探	-	2.3	5.2	ロクロ	ロクロ	回転系切り		赤瓦、硬化
7	MO 161	土師器	坏	表探	-	1.7	5.8	(工具)ロクロ	ロクロ	回転系切り		大瓦
8	MR 160	土師器	小壺	表探	(124)	4.2	-	ヨコナデ ヘラナデ	ヨコナデ ヨコナデ	-		3.47次
9	MR 160	土師器	高坏	表探	-	3.2	(10.2)	ロクロ	ロクロ	ミガキ・内裏		5円満付近

【坏】外面、内面ともロクロ成形され、底部の切り離しが回転糸切りされたものが主流であるが、静止糸切りもある。遺構内出土の坏には火焼痕の認められるものもある。

【長頸壺】ロクロで成形されているが、体部下半にヘラケズリが加えられた類もみられる。頸部には凸帯（隆帯）を有する類と認められない類とがある。遺構内出土の長頸壺の底部には、菊花状ケズリのある類とヘラケズリのままの類とが認められている。

【甕】器形の大小はあるが口頸部はロクロで成形されている。体部外面には鑊目状工具による平行、

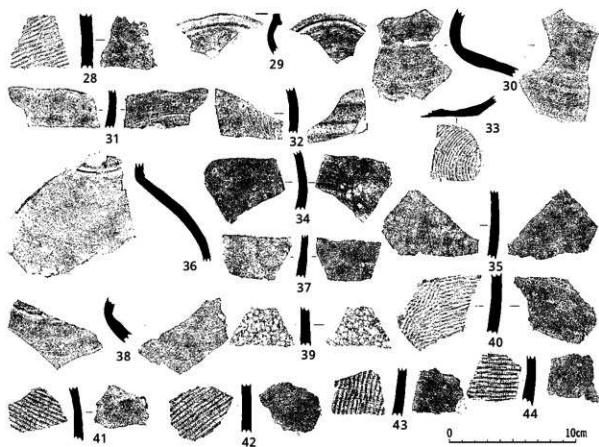


第165図 遺構外出土遺物(4)

遺構外出土遺物(4)
図録番号 165

図録番号	出土区	種別	器種	層位	計測値 (cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
					口径	器高	底径					
165 98	-	土師器	壺	表採	-	80	104	ヘラケズリ・ヘラナデ	ナデ・ミガキ・内底	マメツ・不明	-	炭化物付着
11	MS 165	土師器	小瓶	表採	(13.2)	6.8	-	ヨコナデ・ヘラナデ	ヨコナデ・ヨコナデ	-	-	3 枚
12	MH 160	土師器	小瓶	表採	(2.8)	4.0	-	ロクロ	ロクロ(内底)	-	-	9 枚(断面?)
13	MQ 169	土師器	杯	表採	-	3.0	5.4	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	-	灯明か
14	M 1162	土師器	杯	表採	-	2.0	5.1	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	-	全体風化
15	M J 163	土師器	杯	表採	-	1.5	5.4	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	-	二次焼成
16	M 1162	土師器	杯	表採	-	2.0	(5.2)	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	-	全体マメツ
17	M Z 169	土師器	杯	表採	-	3.4	(6.8)	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	-	二次焼成
18	M J 159	土師器	杯	表採	-	2.4	(6.6)	ロクロ	ロクロ	(回転糸切り)	-	大型
19	M 1167	土師器	杯	表採	-	1.4	(5.4)	ロクロ	ロクロ	ロクロ・ケズリ	-	-
20	KH 140	土師器	瓶	表採	-	2.8	(6.6)	ロクロ	ロクロ	(回転糸切り)	-	-
21	MM 165	土師器	杯	表採	-	2.6	(7.0)	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	-	二次焼成
22	MS 169	土師器	杯	表採	-	2.4	6.2	鑊目・ヘラナデ	ヘラナデ・ミガキ・内底	ヘラナデ	-	砂付(断面)
23	M 1162	土師器	杯	表採	-	2.0	(6.2)	(ロクロ)	(ロクロ)	ロクロ	-	底面調整
24	MM 169	土師器	壺	表採	-	2.3	(6.8)	ヘラケズリ	ナデケツ	本底	-	2 枚
25	ML 165	須恵器	大甕	表採	(48.0)	80	-	ロクロ 鑊目状叩き	ロクロ 当て具履・ナデ	-	-	-
26	MO 164	須恵器	大甕	表採	-	5.0	-	鑊目状平行・凹面叩き	当て具履・ナデ	-	-	機台履付
27	-	須恵器	大甕	表採	-	3.8	-	鑊目状平行叩き	当て具履・ナデ	-	-	内底ジグ

交差状の叩き痕、内面には当て具痕とそれをナデた痕を残した類が主流である。



第 16 図 遺構外出土遺物 5)

遺構外出土遺物 5)

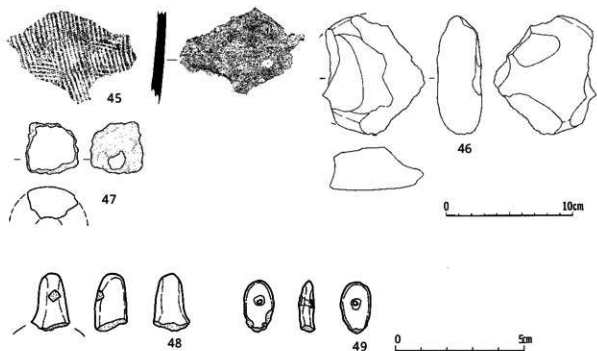
図面番号	出土区	種別	器種	層位	計測値 (cm)		外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
					口径	器高					
16-28	MO 163	須臾器	大甕	表採	-	45	-	縦目状平行叩き	当て具痕 ナデ	-	-
29	MO 164	須臾器	長頸壺	表採	(76)	36	-	ロクロ	ロクロ	-	口縁部のみ
30	MH 165	須臾器	長頸壺	表採	-	70	-	ロクロ	ロクロ	-	凸部無し
31	MI 166	須臾器	長頸壺	表採	-	31	-	ロクロ	ロクロ	-	胴上半
32	MH 169	須臾器	長頸壺	表採	-	40	-	ロクロ ヘラズリ・ナデ	ロクロ	-	胴下半
33	MQ 169	須臾器	杯	表採	15	64	-	ロクロ	ロクロ	-	胴止糸切り
34	MM 165	須臾器	長頸壺	表採	-	-	-	ロクロ	ロクロ	-	分析 39
35	MM 168	須臾器	長頸壺	表採	-	-	-	ロクロ	ロクロ	-	分析 40
36	MH 160	須臾器	長頸壺	表採	-	-	-	ロクロ	ロクロ	-	分析 24
37	ML 169	須臾器	長頸壺	表採	-	-	-	ロクロ	ロクロ	-	分析 42
38	MI 167	須臾器	長頸壺	表採	-	-	-	ロクロ	ロクロ	-	分析 41
39	M 1167	須臾器	大甕	表採	-	-	-	(ハジケ・不揃)	(ハジケ・不揃)	-	分析 43
40	LL 165	須臾器	大甕	表採	-	-	-	縦目状平行・交差叩き	ナデ	-	分析 44
41	MO 169	須臾器	大甕	表採	-	-	-	縦目状平行・交差叩き	ナデ	-	分析 45
42	MP 162	須臾器	大甕	表採	-	-	-	縦目状平行叩き	ナデ	-	分析 46
43	MP 162	須臾器	大甕	表採	-	-	-	縦目状平行叩き	ナデ	-	分析 47
44	MO 168	須臾器	大甕	表採	-	-	-	縦目状平行叩き	ナデ	-	分析 48

(3) その他の遺物(第16図、写真71)

土器以外の遺物では、土製品、石製品と鉄滓が確認されている。

土製品は、鞆羽口、土鈴(把手)有孔土製品が各1点認められているが、有孔土製品は時代を決める根拠はうすい。

石製品は、砥石の原石(未使用品)とみられる。鉄滓は、写真だけで実測図は省略した。鉄分は多く、桃形鉄滓を破砕したものである。



第16図 遺構外出土遺物(6)

遺構外出土遺物(6)

図録番号 167

図録 番号	出土区	種別	器種	層位	計測値(cm)			外面調整	内面調整	底面調整	分類	備考
					口径	器高	底径					
10-4 MF 164	須磨野	大甕	表採									分析 49

遺構外出土遺物(6)

図録番号 167

図録 番号	分類	出土区	層位	計測値				石質	備考
				長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g		
10-4	砥石	KM-140	掘根跡	9.5	8.3	3.6	296.7	石高安山岩	未使用、破損、整理 25

遺構外出土遺物(6)

図録番号 167

図録 番号	分類	出土区	層位	計測値				備考
				長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	
10-4	鞆羽口	MN-160	表土	4.2	4.2	2.5	31.0	C-X, 整理 12
4	土鈴(把手?)	周濠周辺	表採	2.3	1.5	1.3	3.4	C-X, 整理 10
4	有孔土製品	周濠周辺	表採	2.1	1.2	0.6	1.2	C-X, 整理 11
	鉄滓	MJ-164	表土	8.0	5.3	2.8	170.0	写真のみ、F-39

第 章 自然科学的分析

第 1 節 新町野遺跡出土火山灰の蛍光 X 線分析

奈良教育大学教授 三 辻 利 一

新町野遺跡から出土した火山灰の蛍光 X 線分析の結果について報告する。

表 に分析データを示す。全分析値は岩石標準試料、J G - 1 による標準化値で表示されている。

この分析データに基づいて作成した K - C a 分布図と R b - S 分布図を図 、 に示す。K、R b 量が多く、C a S 量が少ない 1 群と、それと対照的な化学特性をもつ別群の 2 群に分かれることがわかる。前者を A 群、後者を B 群とする。A 群に分類されたすべての試料は白頭山領域に、また、B 群に分類されたほとんどの試料は十和田 a 領域に分布することがわかる。両領域はこれまでに分析されている約 300 点の試料の分析データに基づいて描かれたものであり、平均値を中心にして、両軸沿いに 2 (標準偏差) をとってある。

A 群の試料はよくもたまって分布しているから問題はないとしても、B 群の中には 8、24 のように B 群の集団を少しずれて分布するものがある。これらの試料の性格をみるためには、N a F 因子についても調べておく方がよい。

図 には N a 因子を比較してある。A 群と B 群 (ただし、8、24 を除く) の各集団はよくもたまって分布しており、これらの試料はそれぞれ、同じ性格の試料とお判断される。8、24 の 2 点は B 群の集団からずれて分布している。特に、8 の試料には N a 量がすくないことが注目される。この含有量は風化が進んだ粘土並みである。このように、N a 因子は風化の程度を示す因子と考えられており、24 は火山灰試料とは言い難い。8 も B 群の主成分試料に比べて、風化が進んだ試料と考えられる。

白頭山火山灰に比較して、十和田 a 火山灰には N a 量が少ない傾向があり、A 群、B 群の集団はこの傾向に対応していることがわかる。

図 には F e 因子を比較してある。やはり、A 群と B 群 (8、24 を除く) の集団はそれぞれ、よくもたまって分布することがわかる。十和田 a 火山灰に比べて白頭山火山灰の方に F e 量が多いという一般的傾向ともよく対応している。しかし、B 群の中の 8、24 は B 群の主成分から離れて分布しており F e 量が多い。火山灰が風化され、周囲の土壌による汚染が進むと、F e 量が多くなるという一般的傾向がある。8、24 はこの傾向に対応する。8、24 は仮に、十和田 a 火山灰に由来する試料であっても、かなり風化を受けた試料であり、ここで鍵層に使える試料から外しておいた方がよい。

以上の結果、白頭山火山灰と判定されたのは 1、2、4、5、6、7、9、10、11、17、18、19、20、21、22、25、26、29、31、32、33 の 21 点であり、十和田 a 火山灰と判定されたのは 3、12、13、14、15、16、23、27、28、30 の 10 点である。

表 出土火山灰分析値

	遺構名	出土層位	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	判定
1	10円溝	周溝確認面	109	0314	253	108	0068	109	白頭山火山灰
2	3円溝	周溝堆積土	107	0292	251	115	0088	115	白頭山火山灰
3	4 H	カマド付近	0371	108	142	0320	106	0731	十和田火山灰
4	4円溝	周溝堆積土	106	0286	253	118	0077	112	白頭山火山灰
5	10焼ビ	堆積土	111	0310	251	113	0077	117	白頭山火山灰
6	7円溝	周溝堆積土	110	0311	248	111	0073	113	白頭山火山灰
7	8円溝	"	101	0321	266	0983	0117	104	白頭山火山灰
8	2 H	堆積土	0382	0870	208	0298	0864	0530	
9	7焼ビ	"	107	0298	250	115	0080	112	白頭山火山灰
10	11 H	"	109	0340	257	0986	0072	108	白頭山火山灰
11	9円溝	周溝堆積土	0999	0265	258	115	0113	103	白頭山火山灰
12	13 H	堆積土	0346	111	144	0250	107	0736	十和田火山灰
13	10 H	"	0375	108	150	0235	107	0671	十和田火山灰
14	7 H	"	0362	111	136	0240	113	0768	十和田火山灰
15	7土坑	"	0338	113	143	0205	109	0726	十和田火山灰
16	1 H	"	0367	109	149	0230	106	0651	十和田火山灰
17	2焼ビ	"	106	0321	254	103	0078	103	白頭山火山灰
18	9焼ビ	"	105	0295	254	110	0084	106	白頭山火山灰
19	5焼ビ	"	102	0299	251	113	0124	103	白頭山火山灰
20	10 H	"	108	0305	251	109	0062	109	白頭山火山灰
21	8焼ビ	"	0973	0269	261	112	0131	0984	白頭山火山灰
22	9円溝	周溝堆積土	106	0305	253	111	0067	107	白頭山火山灰
23	13 H	堆積土	0349	111	144	0251	107	0725	十和田火山灰
24	2 J H	"	0232	0574	215	0224	0832	0270	粘土
25	1円溝	周溝堆積土	107	0285	244	122	0066	109	白頭山火山灰
26	4 H	堆積土上)	105	0307	244	115	0095	106	白頭山火山灰
27	4 H	"下	0341	107	143	0236	107	0711	十和田火山灰
28	2土坑	堆積土	0373	110	146	0255	110	0663	十和田火山灰
29	10円溝	周溝堆積土	107	0310	254	108	0068	107	白頭山火山灰
30	2土坑	堆積土	0358	111	145	0242	108	0701	十和田火山灰
31	1 H	"	102	0292	251	113	0114	102	白頭山火山灰
32	13 H	"	104	0299	250	113	0099	103	白頭山火山灰
33	6焼ビ	"	107	0319	255	103	0087	107	白頭山火山灰

(注) 分析番号 10 7190～7222

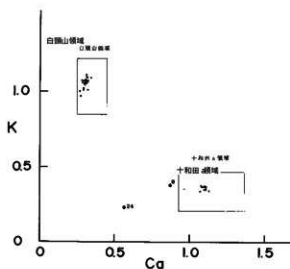


図 K - Ca分布図

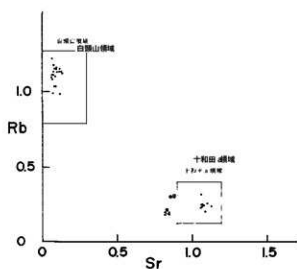


図 Rb - Sr分布図

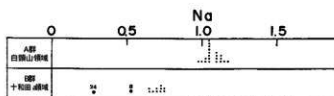


図 Na因子の比較

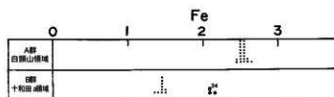


図 Fe因子の比較

第 168図 新町野遺跡出土火山灰の蛍光 X線分析

第2節 新町野遺跡出土須恵器の蛍光X線分析

奈良教育大学教授 三 辻 利 一

1) はじめに

五所川原市に在る窯跡から出土する須恵器の胎土は類似した化学特性をもっており、それ故に、五所川原窯群として一括できる。本邦最北端の須恵器窯群である。これまでの研究から、この窯群の製品は津軽半島はもちろんのこと、北半島も含めて青森県全域の遺跡から出土しているが、北海道全域の遺跡からも出土している。この窯の製品は南下して岩手県や秋田県の遺跡からも出土するかどうかは今後の研究にかかる。

現段階では、五所川原窯群の製品が青森県内の遺跡に土のように分布しているか、また、それに混ざって出土する搬入須恵器の産地は何処かを追跡しつつ、分析作業が続けられている。

本報告では青森市新町野遺跡から出土した須恵器（大甕、坏、長頸壺）の蛍光X線分析の結果について報告する。

2) 分析結果

分析データは表1にまとめられている。全分析値は岩石標準試料、JG-1による標準化値で示されている。分析した器種は大甕、坏、長頸壺の3種類である。器種ごとに分けて分析結果を説明する。

はじめに、大甕の両分布図を図1に示す。この図には、五所川原領域、瀬谷子領域を描いてあるが、五所川原窯群、瀬谷子窯群から出土した須恵器片をそれぞれ、50-100点、任意に選択し分析した結果に基づいて作成されたものである。いずれも、平均点から2（標準偏差）をとってある。瀬谷子窯群は胆沢城周辺にある大規模窯群である。青森県内では八戸市周辺の遺跡からしばしば出土するので、外部地域から青森県内へ須恵器を供給する有力な大規模窯群の一つとして選択された訳である。図1をみると、6、45の2点を除いて他の資料は集中して分布しており、同一窯の製品であることを示している。しかも、両図とも五所川原領域に分布していることがわかる。ここで、 K, Ca, Rb, Sr 因子を使い、これらの大甕資料が五所川原窯群に帰属し得るかどうかを調べてみた。このために必要な因子が五所川原窯群の重心からマハラノビスの汎距離の二乗値〔 $D^2(五所)$ 〕である。計算結果は表1に示されている。5%危険率をかけたホテリングのT検定の結果によると、五所川原窯群への帰属条件は $D^2(五所) < 1$ である。この帰属条件を満足するのは1、2、3、4、5、7、43、44、46、47、48、49の12点である。図1からも予想されるように、6、45の2点は帰属条件を満足せず、五所川原窯群の製品ではないことを示した。

五所川原窯群の製品には黒茶色の胎土をもつものが多い。これは F_{eO} が多いためである。五所川原窯群の製品の分析値をみると、ほとんどのものが、 F_{eO} の含有量が30以上である。したがって、 F_{eO} 量が30以上であることも五所川原窯群の製品であるための条件の一つとなる。図2に F_{eO} 因子を比較してあるが、12点の試料はN因子でもよくまとまっていることがわかる。

このように、12点の試料は K, Ca, Rb, Sr, Fe, N 因子でよくまとまっており、同一窯の製品と推定される。五所川原窯群の特定の窯で製作された大甕である。将来、どの窯であるか特定できる可能性をもつ。

次に、坏の両分布図を図4に示す。8、9は両図で五所川原領域に分布するが、計算結果でも五所川原窯群へ帰属することが表1からわかる。したがって、8、9は五所川原窯群の製品と推定される。勿論、図2からF因子でも五所川原窯群に帰属し得る。10は図4では五所川原領域の境界に分布しているが計算結果でもD²(五所)の値は107で微妙なところにいる。ここでは(?)をつけて五所川原産としておいた。ただし、8、9は測定された6元素で類似しており、同一窯の製品と推定されるが10は別窯の製品であろう。N因子でも8、9とは少し離れて分布することが図3からわかる。さらに、図1、2を比較すると8、9は、12点の大塚と比べて、五所川原領域の別部分に分布しており、坏と大塚は五所川原窯群内の別窯の製品とみられる。

最後に、長頸壺の両分布図を図5に示す。大部分の資料が両分布図で五所川原領域に分布することがわかる。まず、4因子による計算結果をみてみよう。五所川原窯群への帰属条件を満足するのは11、13、14、18、20、22、24、26、27、28、29、30、32、35、36、37、39の17点である。これらはすべて、F因子でも五所川原窯群への帰属条件を満足し、五所川原窯群の製品と推定される。ただ、図1、5を比較すると、大部分の長頸壺の五所川原領域内での分布位置が大塚とは異なっており、五所川原窯群内の別窯の製品と推定される。

さて、ここで産地不明となった須恵器について考えてみよう。計算結果、瀬谷子群への帰属条件を満足した長頸壺は12、16、34の3点である。このうち、16、34は全因子で類似しており、同一窯の製品とみられる。瀬谷子群産の可能性のあるものはこれら3点だけで、大塚、坏を含めて他に瀬谷子群産の可能性をもつものはない。

産地不明の長頸壺の両分布図を図6に示す。15、17、21、25の4点を除く他の8点の長頸壺は両分布図でまとまって分布していることがわかる。いずれも、Nの含有量が比較的多く、0.3程度の分析値をもつ。これらの多くは同一産地の製品とみられるが、目下のところ、産地は特定されていない。しかし、K、R量比較的多いところから、日本海沿岸地域の製品とみられる。15、21も日本海沿岸の製品であるが、25と45の大塚は東北地方太平洋側の製品と推定される。

表1 出土須恵器の分析値

器種	出土位置	図版番号	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	D(五所)	D(瀬谷子)	推定産地	
1	大 甕	6H床直P-1	42-4	0303	0353	337	0378	0379	0233	25	72.3	五所川原
2	大 甕	1円溝堆積土	113-7	0317	0352	339	0379	0370	0231	29	74.7	五所川原
3	大 甕	5H床直P-54	38-17	0317	0351	348	0362	0382	0227	46	64.6	五所川原
4	大 甕	3H床直P-X	31-17	0303	0337	347	0349	0363	0227	48	67.5	五所川原
5	大 甕	2H床直P-2	25-10	0317	0364	351	0352	0375	0218	59	76.0	五所川原
6	大 甕	21H床直P-29	97-9	0437	0420	182	0487	0529	0418	127	49.2	不明
7	大 甕	17H床直P-10	81-14	0309	0324	341	0375	0374	0218	29	56.0	五所川原
8	坏	3H床直P-X	31-16	0342	0247	361	0410	0341	0172	53	34.4	五所川原
9	坏	9円溝堆積土	136-7	0348	0235	413	0410	0320	0151	66	38.3	五所川原
10	坏	2HカマドP-17	25-4	0490	0265	342	0609	0493	0263	107	25.7	五所川原(?)
11	長頸壺	2円溝堆積土P-1	114-5	0438	0276	398	0518	0373	0228	37	39.2	五所川原
12	長頸壺	6円溝堆積土P-X	126-13	0337	0158	210	0359	0392	0191	63.3	4.6	瀬谷子
13	長頸壺	9円溝壺土P-X	136-6	0457	0269	396	0519	0370	0236	72	36.5	五所川原
14	長頸壺	2H床直P-3		0385	0288	480	0435	0325	0187	66	61.2	五所川原
15	長頸壺	8HカマドP-13	50-11	0473	0382	256	0658	0550	0329	161	77.0	不明
16	長頸壺	5H堆積土P-X	38-19	0395	0276	205	0414	0542	0413	72.8	5.2	瀬谷子
17	長頸壺	9H付近土手	53-1	0313	0373	243	0340	0483	0315	24.2	28.6	不明
18	長頸壺	4円溝堆積土P-X	119-3	0391	0300	483	0443	0328	0194	69	67.0	五所川原
19	長頸壺	6円溝壺土P-X	126-14	0397	0347	216	0448	0477	0346	110	26.3	不明
20	長頸壺	5H堆積土P-1	38-18	0387	0296	476	0433	0327	0196	71	64.3	五所川原
21	長頸壺	9H付近土手	53-2	0451	0336	279	0590	0492	0298	44	45.3	不明
22	長頸壺	1円溝壺土P-X	113-8	0308	0346	397	0372	0347	0190	39	85.9	五所川原
23	長頸壺	ML-165		0421	0300	212	0495	0450	0321	64	21.6	不明
24	長頸壺	MH-160	166-36	0352	0271	394	0411	0343	0182	43	43.1	五所川原
25	長頸壺	MO-171		0283	0253	365	0284	0330	0206	26.1	43.5	不明
26	長頸壺	MO-165		0456	0267	392	0522	0373	0236	65	34.9	五所川原
27	長頸壺	MN-164		0455	0270	396	0534	0369	0235	53	39.6	五所川原
28	長頸壺	MM-165		0449	0274	399	0521	0374	0236	51	37.7	五所川原
29	長頸壺	MO-163		0467	0270	396	0530	0365	0242	82	40.2	五所川原
30	長頸壺	MM-162		0307	0335	395	0367	0348	0182	35	77.2	五所川原
31	長頸壺	MM-169		0429	0299	209	0500	0458	0322	82	19.9	不明
32	長頸壺	MI-167		0368	0282	334	0444	0386	0204	26	31.6	五所川原
33	長頸壺	MP-167		0422	0313	209	0496	0467	0330	75	22.2	不明
34	長頸壺	MR-168		0394	0252	211	0431	0530	0382	67.6	4.7	瀬谷子
35	長頸壺	MO-164		0444	0276	400	0510	0372	0235	54	38.0	五所川原
36	長頸壺	LG-164		0429	0269	294	0512	0424	0228	52	19.9	五所川原
37	長頸壺	MM-165		0397	0319	324	0461	0413	0262	28	37.3	五所川原
38	長頸壺	MI-167		0404	0280	212	0469	0440	0295	106	15.0	不明

器種	出土位置	図版番号	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	D(五所)	D(瀧谷)	推定産地	
39	長頸壺	MM-165	166-34	0.471	0.270	3.95	0.537	0.379	0.240	74	35.8	五所川原
40	長頸壺	MM-168	166-35	0.408	0.304	2.19	0.482	0.457	0.337	76	20.1	不明
41	長頸壺	MI-167	166-38	0.405	0.368	2.21	0.446	0.475	0.358	103	35.3	不明
42	長頸壺	ML-169	166-37	0.393	0.378	2.18	0.440	0.496	0.344	122	33.0	不明
43	大甕	MI-167	166-39	0.347	0.390	3.51	0.409	0.419	0.248	34	71.7	五所川原
44	大甕	LL-165	166-40	0.322	0.346	3.46	0.373	0.389	0.216	39	58.4	五所川原
45	大甕	MO-169	166-41	0.225	0.450	2.05	0.249	0.553	0.226	54.4	41.1	不明
46	大甕	MP-162	166-42	0.317	0.324	3.47	0.373	0.374	0.207	36	54.6	五所川原
47	大甕	MP-162	166-43	0.316	0.339	3.47	0.372	0.378	0.228	33	61.0	五所川原
48	大甕	MO-168	166-44	0.317	0.334	3.42	0.375	0.371	0.221	30	62.2	五所川原
49	大甕	MF-164	167-45	0.317	0.332	3.43	0.372	0.383	0.227	39	54.2	五所川原

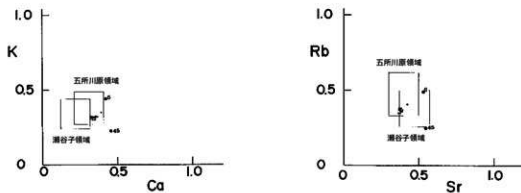


図1 大甕の両分布図

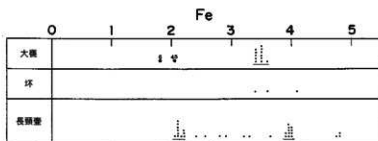


図2 Fe因子の比較

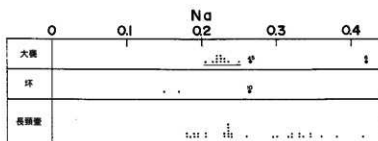


図3 Na因子の比較

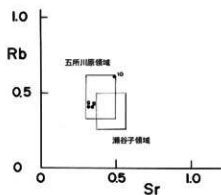


図4 坏の両分布図

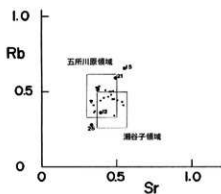
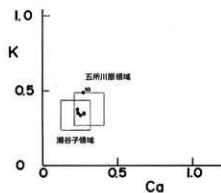


図5 長頸壺の両分布図

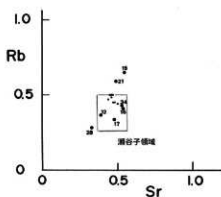
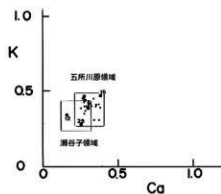
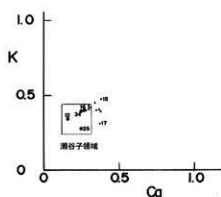


図6 産地不明の長頸壺の両分布図



第17図 新町野遺跡出土須恵器の蛍光X線分析(2)

第 3 節 放射性炭素年代測定結果について

八戸工業大学教授 村 中 健

1999年1月29日に受領した、炭化物試料のうち、新町野遺跡出土の4点について、放射性炭素年代測定の結果を報告します。依頼試料は前処理および化学処理してベンゼンを合成し、これにシンチレーターを加え20m lバイアルを作り、測定試料としました。標準試料はNIST藤酸標準体4990Cを化学処理して作成し、また、バックグラウンド試料は市販の化学用大理石から処理作成したものを用いています。

測定装置は、アロカ社製の低バックグラウンド液体シンチレーションカウンターシステムLSC LBであり、測定試料について50分間ずつ、10リビート、4サイクル合計2000分間の測定をおこないました。

年代の算出には¹⁴C半減期としてLibbyの半減期5568年を用い、また、結果は1950年からの年数をBP年代として表記しています。付記した誤差は、計数値の1に相当する年数です。

なお、最近は上述の¹⁴C年代に対して¹³Cの測定から同位体効果の補正をおこない¹⁾、さらに、年輪試料をもとにして作成したキャリブレーションカーブを用いて²⁾、暦年補正もおこなわれておりますので、今回の試料についてはこれらの補正をおこなった結果も付記しました。

1) 磯貝啓介、金子健司：日本分析センター広報、No3 1997 pp101-107.

2) Stuiver M and Pearson G W Radiocarbon 35 1 1993 pp 1-23

記

H I T 1 9 2 : 青森市新町野遺跡出土木炭試料5号円形薄炭化材入りビット C 25
B P 年代 (従来の年代算出方法 ; 同位体効果補正なし)
: 590 60年

参考 (同位体効果補正および暦年代校正結果)
13C値 : - 26.9

同位体効果補正 BP年代 : 572 60年
暦年代校正結果 : 1309 (1400) 1425 ca AD 年

H I T 1 9 3 : 青森市新町野遺跡出土木炭試料
B P 年代 (従来の年代算出方法 ; 同位体効果補正なし)
: 570 60年

参考 (同位体効果補正および暦年代校正結果)
13C値 : - 25.4

同位体効果補正 BP年代 : 573 60年
暦年代校正結果 : 1308 (1400) 1425 ca AD 年

H I T 1 9 4 : 青森市新町野遺跡出土木炭試料
B P 年代 (従来の年代算出方法 ; 同位体効果補正なし)
: 630 60年

参考 (同位体効果補正および暦年代校正結果)
13C値 : - 25.2

同位体効果補正 BP年代 : 640 60年
暦年代校正結果 : 1297 (1310, 1360, 1380) 1401 ca AD 年

H I T 1 9 5 : 青森市新町野遺跡出土木炭試料
B P 年代 (従来の年代算出方法 ; 同位体効果補正なし)
: 620 60年

参考 (同位体効果補正および暦年代校正結果)
13C値 : 27.3

同位体効果補正 BP年代 : 592 60年
暦年代校正結果 : 1304 (1400) 1415 ca AD 年

* 暦年代校正結果において () 内の数値は同位体効果補正 BP年代の中心値を校正した値であり、() 外の数値は校正後の誤差範囲を示す。

第 章 調査の成果とまとめ

本年度の発掘調査で検出した遺構は、竪穴式住居跡27軒、円形周溝11基、土坑5基、焼成ピット18基、焼土状遺構7基、溝状ピット14基、柱穴状ピット1群、道路状遺構2条、溝状遺構8条である。これらの遺構は、時代別にわけると縄文時代と平安時代である。縄文時代の遺構は、竪穴式住居跡2軒、土坑15基、溝状ピット14基である。これら以外の遺構の多くは平安時代のもので推定される。

調査の成果をまとめるに当たり、2、3の項目に分けて若干の分析と考察を試みてみたい。

第1節 縄文時代の遺構について

本年度の調査で検出された縄文時代の遺構は、竪穴式住居跡2軒、土坑15基、溝状ピット14基である。これらの遺構を含めてこれまで本遺跡において調査された縄文時代の遺構を概観してみる。

竪穴式住居跡は、大型住居4軒を含めて9軒調査されている（市37集：1998、県239集、現地説明会資料：1998）。これらの時期は、前期後葉から中期初頭と推定されるので、三内丸山遺跡の時期とも一部併行していたものとみられる。

今回の調査で検出された15基の土坑は、フラスコ状の断面形を呈したものが多く、出土遺物が極めて少ないため時代的な決定は容易でないが円筒土器に伴うとみられるもの13基、晩期1基、時期不明1基とみられる。これまでに調査されたフラスコ状土坑は40基を数えるが、それらを時代的に分けると前期後葉～中期初頭のもの25基、後期初頭のもの9基、晩期のもの2基、時期不明4基である。竪穴式住居跡が検出されていない時代の土坑が含まれていることが注目される。

溝状ピット（土坑）は、遺跡全体で25基ほどが調査されている。その中の1基が竪穴式住居跡との切り合い関係から前期後葉～中期初頭よりは新しいことが分かり、これによって本遺跡で縄文集落が形成されていた時期と狩猟区域が形成されていた時期とに分かれていた可能性も推測される。

縄文時代の遺構は、前記のような時期が認められているが、出土した遺物には、試掘調査以来縄文時代早期の貝殻文系土器から前期、中期、後期、晩期までの土器が確認されている。

第2節 平安時代の竪穴式住居跡

本年度、当教育委員会が発掘した平安時代の竪穴式住居跡は2軒であるが、規模を計測できる住居跡は2軒である。

【平面形・規模】住居跡の平面形は、方形、長方形、台形状に分けたが、方形の住居跡は1軒（44%）、長方形10軒（40%）、台形状4軒（16%）である。住居跡の平面形は、規模の大小にかかわらず方形・長方形のものが主流であり、台形状は少数派である。方形の1軒のなかには80cm 70cmほどの小さな張り出しをもつ住居跡が2軒含まれている。また、竪穴式住居跡同士の重複は1軒も認められていない。

住居の規模は、最小2.2 1.8m（17H）から最大5.5 5.2m（5H）まで認められたが、第17図 1には2軒の規模について図で示した。縦軸、横軸とも2辺の平均値である。1辺が3m以下のもの9軒

(41%) 3～5 mのもの1軒(50%) 5 m以上のもの2軒(9%) の3グループに分けられ、3～5 mのグループが多いが、3 m以下のグループと大差は認められない。

【床面積】床面積は最小4.04㎡(17H)から最大28.33㎡(5H)まで認められたが、全体については第171図2に図示した。10㎡未満10軒(群 45%)、10～20㎡9軒(群 41%)、20㎡以上3軒(群 14%)に分類された。群の床面積が一般的な住居とすれば、群、群の住居は本遺跡では中型～大型住居とも考えられるが、青森市野木遺跡では30㎡以上の住居跡が30軒中3軒も検出されていること(道路部分)(県239集：1998)は注目される。

【壁・壁溝・柱穴配置】壁、壁溝、柱穴などの施設は、一般的には基本層序の第1層以下を掘り下げて構築されている。

壁の高さは、3～6.7m確認されている。遺構確認のため多少削平されることはあるが、19号住居跡は壁が全くない状態で、壁溝によってようやくプランが確認された例もある。

壁溝は、これまでの出土例から腰板を支える施設とみられている。壁溝が確認された住居跡は14軒(63%)である。ここでは壁溝の有無と住居の規模(床面積)との関係のみをみる。

壁溝配置	軒数(%)	床 面 積			備 考
		群(軒)	群(軒)	群(軒)	
一周	9(40%)	1	6	2	群 10㎡未満 群 10～20㎡ 群 20㎡以上
半周・2辺	4(18%)	1	2	1	
一部のみ	1(5%)	0	1	0	
なし	8(38%)	8	0	0	

第1表 壁溝の有無と住居規模

壁溝がほぼ一周する住居は、小型住居(群)もあるが、本遺跡では中型、大型住居(群)の割合が多い。壁溝が「なし」のものは、小型住居が独占している。壁溝が半周あるいは2辺にある住居は、壁溝が一周するものより軒数は少ないが小型住居から大型住居までそろっている。このような傾向がとらえられる。

柱穴の配置は、壁溝とともに竪穴式住居跡の上屋構造を解明するために重要な施設である。主柱穴の配置を推定できるビットが確認された住居跡は、4本柱と2本柱?を併せて僅か5軒である。これらの柱穴で柱痕、柱抜き取り痕を確認できたものはなく、配置と深さで主柱穴と判断したものである。4本柱の配置が確認された住居は床面積が広い大型住居に限られている。

【カマド】カマドと煙道部が構築された位置(方位)は、第172図にまとめてある。これによってカマドの主軸方位と煙道部の構造および住居の規模(床面積)の傾向をみてみたい。

カマドの主軸方位は、北東方向と南東方向に19基(76%)が集中しているが、北西、南西方向にも

カマドの方位	基数(%)	煙道部半地下式	煙道部地下式	累 計	備 考
北～東方向	10基(40%)	6基	4基(2基)	12基	()内の基数 は改築以前の カマドを示す
南～東方向	9基(36%)	5基(1基)	4基(2基)	12基	
北～西方向	4基(16%)	2基	2基(2基)	6基	
南～西方向	2基(8%)	0基	2基	2基	
計	25基	13基(1基)	12基(6基)	32基	

第2表 カマドの構造と方位

カマドの方位	煙道部半地下式の規模			煙道部地下式の規模			計	群計	群計	群計
	群	群	群	群	群	群				
北→東方向	3	3	0	4	0	0	10	7	3	0
南→東方向	0	3	2	3	1	0	9	3	4	2
北→西方向	0	2	0	1	0	1	4	1	2	1
南→西方向	0	0	0	1	1	0	2	1	1	0
計	3	8	2	9	2	1	25	12	10	3

6基（24%）分布している。カマドの方位は、北東方向と南東方向に2分化集中の傾向が認められる。

カマド煙道部の構造は、地下式（トンネル式）から半地下式に改造されたことはこれまで多くの調査例によって知られている。本遺跡では竪穴住居跡が廃絶された時点で煙道部が地下式であったカマドは12基（50%）、半地下式のカマドが11基（46%）、不明1基（4%）である。古い型式のカマドを改造しないまま使用していた住居がやや多い。25軒の住居跡で煙道部が改造された住居は7軒（28%）検出されている。地下式から地下式へ送り替えたものが4軒、地下式から半地下式へ送り替えたもの2軒、半地下式から地下式へ（削平のため明確ではないが）1軒認められている（24H）、7軒中新旧のカマドが同一箇所地下式から半地下式へ改造されたものは1例（3H）のみで、その他は8度から90度以上方向転換して壁面を変えている。改造以前のカマド煙道部は1例を除くと地下式であるが、この時期の住居跡をふくむ地下式カマドのみを有する住居跡がこの集落では古い住居跡と判断される。

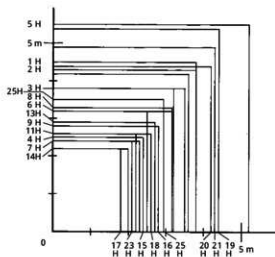
地下式煙道部をもつ住居の規模は、9軒（75%）が群（小型）で3軒（25%）が群（中・大型）である。半地下式煙道部をもつ住居の規模は、8軒（61%）が群（中型）で、群（小型）の3軒（23%）に比べて増加がみられ、さらに群（大型）も倍加している。カマドの煙道部が地下式から半地下式へ転換した時期に住居の規模がより大きくなった背景に何があったのであろう。扶養家族の増加、生産力の向上、耕作面積の増加なども考えられるが、この問題は今後の研究課題の一つに上げておきたい。

【堆積土中の火山灰】検出した竪穴式住居跡の堆積土中に降下火山灰が1～2枚確認されている。25軒中19軒で認められた。これらの火山灰のうち下位のものは十和田a火山灰（Toa）、上位のものは白頭山・苫小牧火山灰（Btm）あることは分析結果からも明らかにされている。2種類の火山灰は、いずれも10世紀前半に降下したものと推定されている。その研究によれば十和田a火山灰が915年、白頭山・苫小牧火山灰が947年とされている（早川・小山：1998）。

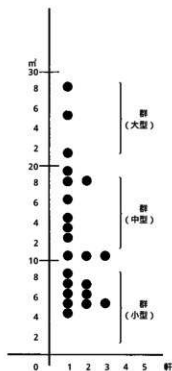
これらの火山灰が住居跡などの堆積土内で確認されることは、住居跡などの遺構の時期を決定する重要な手掛かりとなる。火山灰が堆積した遺構は降下以前に構築・廃棄されたものと推定される。また、火山灰が堆積していない住居跡は、火山灰が降下する以前に住居跡が廃棄されて遺構内が堆積土で埋まり切っていたか、火山灰が降下した後構築された住居跡と推定される。降下火山灰だけから単純に住居跡の年代を求めるるとすれば十和田a火山灰が堆積している住居跡は、10世紀初頭以前に構築、廃棄されたものと推定される。本遺跡では、1、2、4～8、10、13～17、20～22、25号住居跡の17軒で確認されている。17軒の住居跡に伴うカマド煙道部は、地下式、半地下式のいずれのものも含まれているが、このグループをさらに時期的に分けると地下式煙道部をもつ住居跡群（期）が古く、半地下式煙

道部を備えた住居跡群がそれに後続したもの(期)と考えられる。また、白頭山 - 苫小牧火山灰のみが確認された住居跡は、11、24号の2軒である。この2軒は、十和田a火山灰が降下以前から以後に構築されて、白頭山 - 苫小牧火山灰の降下以前に廃棄されたものと推定される(期)。火山灰が2枚とも未確認の住居跡は3、9、18、19、23号の5軒である。3号住居跡と9号住居跡は後世の攪乱を受けているものとみられ、火山灰による時期は不明である。カマド煙道部が地下式の23号住居跡は、十和田a火山灰が降下以前に埋まり切ったもの(期)とも推測される。また、カマド煙道部が半地下式構造の18、19号住居跡は、火山灰降下後に構築された可能性もあるが、住居に壁面がない(19H)ため、あるいは低い(29cm以下)ために火山灰の堆積を確認できなかったことも想定される。この2軒は、2枚の火山灰が降下した後に構築されたとすれば、本遺跡では最も新しい(期、10世紀後葉)竪穴住居跡と推定することができる。なお、この2軒は、十和田a火山灰降下後、白頭山 - 苫小牧火山灰降下以前に造営されたと推定される円形周溝群から120mほど西に位置している。

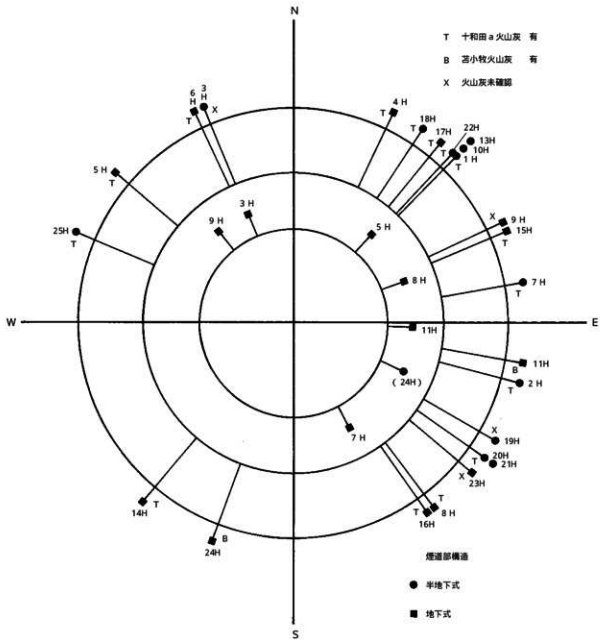
【竪穴式住居跡と円形周溝の重複】25軒の竪穴式住居跡のうち5軒が5基の円形周溝と重複して、これらの住居跡は、すべて円形周溝によって掘り下げられている。検出されたすべての円形周溝の堆積土には、白頭山 - 苫小牧火山灰が確認されている。円形周溝と重複した2、6、14、15、16号住居跡の堆積土中には十和田a火山灰が堆積していることから、少なくとも5基(2、5、5B、6、10号)の円形周溝は、十和田a火山灰が降下、堆積した後に造営されたものと推定される。換言すると、本遺跡から検出された多くの竪穴式住居跡は、円形周溝が造営される以前、10世紀初頭には廃絶していたものと推定される。そして、円形周溝は、丘陵頂部で竪穴式住居群集落が廃棄された後に造営されたものと考えられる。



第 171- 図 住居跡の規模



第 171- 図 床面積



第17図 カマド主軸方位

第 3 表 平安時代竪穴式住居跡一覧

住居 番号	平面形	(m ²) 床面積	壁溝	柱穴	カ マ ド			降 下 火山灰	備 考
					主軸方位	位 置	構 造		
1	方 形	18 15	一周	不明	N・45・E	北東壁 東隅寄り	半地下式	B - T m T o - a	張出し有り 北隅付近
2	長方形	16 84	一周	不明	N・105・E	南東壁 北東隅寄	半地下式	B - T m T o - a	2 H < 5 円 B
3	長方形	12 50	一周	不明	N・23・W N・23・W	北壁中央 北壁中央	半地下式 地下式	(未確認)	カマド新旧共 同一箇所
4	方 形	6 12	なし	不明	N・26・E	北東壁 東隅寄り	地下式	B - T m T o - a	
5	方 形	28 33	2 辺	4	N・50・W N・42・E	北西壁 北東壁	地下式 地下式	T o - a	カマド新旧共 地下式
6	長方形	8 66	なし	不明	N・25・W	北西壁 北隅寄り	地下式	B - T m T o - a	6 H < 10 円溝
7	方 形	6 37	なし	不明	N・80・E N・152・E	東壁 南壁	半地下式 地下式	T o - a	張出し有り 北西隅付近
8	方 形	10 88	一周	不明	N・143・E N・70・E	南東壁 北東壁	地下式 地下式	T o - a	
9	方 形	(6 86)	2 辺	不明	N・65・E N・40・W	東壁 南壁	地下式 地下式	(未確認)	
10	方 形	10 53	2 辺	不明	N・45・E	東壁中央 北東隅寄	地下式	B - T m T o - a	
11	長方形	5 39	なし	不明	N・100・E N・92・E	東壁 東壁	地下式 地下式	B - T m	
12	(方形)	7 48	() (なし)	() 不明	N・45・E	(東壁)	(不明)	(不明)	
13	長方形	8 13	なし	不明	N・45・E	北東壁 東隅寄り	半地下式	B - T m T o - a	
14	(方形)	(4 78)	なし	不明	N・140・W	南西壁 中央	地下式	B - T m T o - a	14H < 5 円溝
15	(台形)	5 85	なし	不明	N・67・E	北東壁 東隅寄り	地下式	T o - a	15H < 6 円溝
16	(台形)	7 48	なし	不明	N・145・E	南東壁 東隅寄り	地下式	T o - a	16H < 2 円溝
17	長方形	4 04	なし	不明	N・40・E	北東壁 北隅寄り	地下式	T o - a	

住居 番号	平面形	(㎡) 床面積	壁溝	柱穴	カ マ ド			降 下 火山灰	備 考
					主軸方位	位 置	構 造		
18	方 形	717		() 2辺 (2)	N・34・E	北東壁 東隅寄り	半地下式	(未確認)	円溝群から西へ約120m
19	長方形	2530		一周 4	N・120・E	南東壁 南隅寄り	半地下式	(未確認)	18Hの東隣壁面なし
20	方 形	2000		() 一周 (2)	N・125・E	南東壁 南隅寄り	半地下式	B・Tm T o - a	支脚は坏2個重ねたもの
21	長方形	2198		一周 不明	N・125・E	南東壁 南隅寄り	半地下式	B・Tm T o - a	
22	長方形	1463		() 2辺 (4)	N・44・E	東壁 北東隅寄	半地下式	T o - a	
23	(台形)	554		一周 不明	N・130・E	南東壁 東隅寄り	地下式	(未確認)	
24	長方形	1376		一部 不明	N・159・W N・114・E	南西壁 南東壁	地下式 (半地下式)	B・Tm	床面に焼土 2箇所
25	(台形)	101		一周 不明	N・68・W	東壁 北東隅寄	半地下式	B・Tm T o - a	

参考資料 1996～1997年本遺跡検出竪穴式住居跡

住居 番号	平面形	(㎡) 床面積	壁溝	柱穴	カ マ ド			降 下 火山灰	備 考
					主軸方位	位 置	構 造		
96年 250	方 形	150		一周 4	N・80・E	東壁 中央	半地下式	B・Tm T o - a	県239集:1998
96年 251	長方形	1467		一周 不明	N・78・E	東壁 南東隅寄	半地下式	B・Tm T o - a	県239集:1998
97年 2 a	方 形	(34 31)		2辺 不明	N・64・W	西壁 中央	(地下式)	B・Tm T o - a	市37集:1998 2 a < 2 b
97年 2 b	(方形)	(28 26)		一部 不明	N・122・E	東壁 中央	半地下式		市37集:1998 2 b > 2 a

第3節 焼成ビット・土坑・焼土状遺構

本書で焼成ビットとした一種の土坑は、これまでの報告書では焼成遺構と記載された遺構の範疇に含まれるものである。平面形は一辺が1mから2m以下(例外もあるが)で隅丸の方形あるいは長方形を呈し、炭化材、炭化物を伴い、壁面と底面が加熱されて赤変していることが特徴となっている。その用途については、土師器の焼成遺構あるいは炭焼き窯のような木炭を造る遺構ではないかと考えられている。

土師器焼成遺構は、遺構名は竪穴遺構と記載されているが青森市野木遺跡から貴重な1基が検出されている(市38集:1998)。

炭焼き窯ではないかと推定された例としては青森市朝日山(3遺跡の土坑(904号、905号、908号、914号、915号)を挙げることができる(県167集:1996)。その構築年代については平安時代以降であろうと推定されているが白頭山・苫小牧火山灰が確認されている土坑(908号)も含まれていることから、それらの全てが平安時代ではないにしても10世紀前半の土坑(炭窯)も含まれているものと考えられる。土坑から出土した炭化材は、樹種同定の結果マツ類、ホオノキ(モクレン科の落葉高木)と判定されている(県167集:1996)。これらの樹種は、製炭に適している樹木である。

今回の調査で焼成ピットとした土坑は18基である。これらの全てが炭焼き窯のような遺構ではないにしてもその可能性は十分にあるものと考えられる。また、土坑とした遺構の中にも焼成ピットが含まれているようである(28、42、43、54、55号など7基)。焼成ピットの築造、生産活動、廃棄の時期は、十和田a火山灰が堆積した遺構は認められないが白頭山・苫小牧火山灰が堆積していた焼成ピットは11基確認されていることから、焼成ピットは多くの住居跡が廃棄された後に構築、生産活動、廃棄が行われたものと推定される。焼成ピットとみられる遺構は、今回の調査区域以外からも13基ほど検出されているが、その総数は竪穴式住居跡の総数(58軒)よりも少ない。そして焼成ピットの多くが木炭を造る窯のような施設とすれば、その製品(木炭)は何の為に造られたのかを考えなければならない。短絡的には鍛冶用、製鉄用、精錬用などの燃料とか自家用の燃料などが考えられる。もし鉄関係の燃料とすれば、鉄を精錬したと思われる炉跡は、平成10年度に県埋蔵文化財調査センターが実施した調査区域から2基検出されている(現地説明会資料:1998)。焼成ピット 製品(木炭) 製鉄炉・精錬炉・鍛冶場のような関係があるかどうか、今後、検討の余地があるだろう。

土坑に分類した遺構は、総数3基であるが、円形周溝と関連があるものを除くと25基で、さらに焼成ピットとみられるものが7基あるので18基がいわゆる土坑である。この中には土師器焼成遺構は含まれていないが、土師器、須恵器などの遺物を伴い焼土を基盤とする遺構が多いことが特徴である。堆積土中の炭化材、炭化物の含有量も少なく、焼土状遺構と類似したものもある。住居内やカマドで不用になったものを焼却した「ゴミ穴」とも考えられるが焼土状遺構(屋外炉?)と明確に区別できる具体的な裏付けは得られなかった。

第4節 円形周溝について

今年度の発掘調査で11基の円形周溝が検出された。これらの円形周溝群は、標高38~39mほどの見晴らしのよい丘陵頂部に密集して造られている。確認された広さは、東西44m、南北36m、約1500㎡の限定された範囲である。しかも「さら地(新地)」に構築されたものではなく、廃棄された平安時代の竪穴式住居跡(集落跡)を再利用していることが特徴のひとつである。円形周溝は、遺構の外側(外郭)を円形状に溝を掘って、溝から出た土を溝の内側(内郭)に円墳状に盛り上げたものと想定される。本遺跡から発見された円形周溝の形態的特徴は、次のような点でこれまで県内各地から発掘、確認(未完掘)されてきた遺構の特徴と大差はないものとみられる。

周溝が完全に一周している例は1基も認められない。

周溝は、1、2箇所で途切れた円形状のものや途切れた箇所(開口部)が幅広い馬蹄形状を呈したものがあ

周溝が途切れている開口部は、ほぼ南東方向に設けられている。

円形周溝に別個の弧状を呈した溝を付け加えて、古い円形周溝を拡張して遺構自体を造り直したものがあ

る。周溝は、密集して造られているが周溝同士の切り合いはないこと。

周溝内の堆積土にはB・Tm火山灰が確認されていることなどの共通点が認められている。

このような遺構は、県内では昭和49年(1974)ころから発見され始めて、周溝遺構、環状遺構、方形周溝、馬蹄状遺構、円形周溝などと呼ばれてきた。このような遺構は、県内では今日まで30遺跡以上、330基ほどが調査、確認されている(第7表参照)。そして円形周溝の内郭に主体部(埋葬施設)が確認された遺構は終末期古墳に組み込まれてきたが、主体部を確認されなかった遺構については遺物の内容などから近年まで遺構の性格、年代などを十分に把握しきれなかった遺構であった。最近では、「平安時代の墳墓・円形周溝墓」として取扱うのが妥当と思われる(県186集:1996)、あるいは「墳丘墓」などの見解が提示されている(三沢市14集:1996)。

本節では、新町野遺跡から検出された円形周溝の特徴を分析しながら若干の考察を試みてみたい。

【円形周溝の形態・規模】

1 形態

検出された11基の円形周溝は、次の4形態に大別することができる。

- | | |
|---|----|
| 群: 周溝は円形状に巡っているが、1箇所だけ途切れて開口部が設けられてあるもの | 6基 |
| (1、4、5、6、9、10号円溝) | |
| 群: 開口部はあるが、その幅が広く、平面形が馬蹄形状を呈するもの | 1基 |
| (8号円溝) | |
| 群: 開口部以外に周溝が途切れているもの | 1基 |
| (3号円溝) | |
| 群: 群の円溝の周辺に新たに弧状の溝を付設して古い円溝を拡張したもの | 3基 |
| (2、5B、7号円溝) | |

開口部がなく、周溝が一周したものと主体部が明確に遺存したものは1例も認められていない。このような遺構はこれまでの出土例では7～8世紀代の終末期古墳に多いようである。

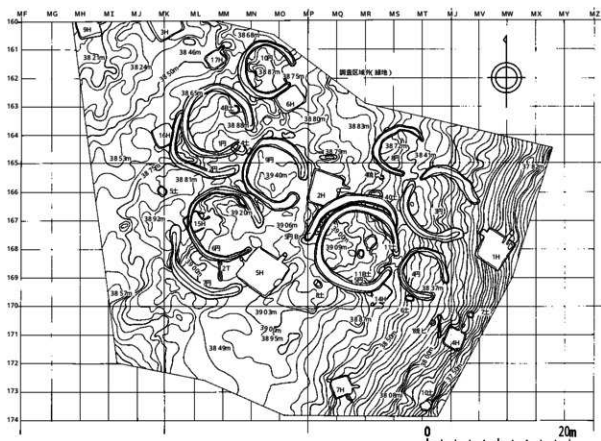
浪岡町野尻(2)・(3)遺跡では、本遺跡の群から群までの形態とは異なるタイプ(平面形が群の円形周溝を2個並列したようなタイプ)が検出されている(県186集:1996)。

2 規模

次ぎに規模について、周溝の外径(周溝の外側の最大径)を比較して円形周溝の大きさを分けてみる。

- | | |
|-----------------------|-------------|
| A類: 外径が15m以上のもの | 1例(群1基) |
| B類: 外径が13m以上、15m以下のもの | 2例(群2基) |
| C類: 外径が11m以上、13m以下のもの | 1例(群1基) |
| D類: 外径が9m以上、11m以下のもの | 4例(群3基、群1基) |
| E類: 外径が7m以上、9m以下のもの | 3例(群2基、群1基) |

本遺跡においては、形態が群で外径が7m以上、13m以下の規模をもつC～E類が多い。規模



第 17 図 円形周溝配置図

が 13m 以上、15.5m 以下の A・B 類 (大型のもの) は 群が占めている。大型のものは、古い円形周溝を拡張したものである。

野尻 2・3 遺跡では、外径が 6～8 m 前後が多いが、最小 3.7m、最大 24.5m の周溝も発見されている (注 前掲)。三沢市平畑 5) (3 遺跡では、群のものが各 1 例調査されているが、規模は、平畑 (5) 遺跡のものが D 類で平畑 (3) 遺跡のものが A 類である (三沢市 9・14 集: 1992・1996)。

3 周溝の深さ・幅・盛土

周溝の深さと幅は径の大きさを含めてであるが、盛土がある円墳状の円形周溝を想定した場合、その土量は盛土の高さに関係してくる。開口部を残して周溝を掘り、その土を周溝の内側 (内郭) に盛り上げて造られたものと考えれば、その計測値も見逃し難いので一応まとめてみた。

周溝の深さは、0.05m～1.2m の幅がみられる。平均的には 0.3m～0.6m 前後が多い。周溝が一般的に深い箇所は開口部の両側である。深さ 1.2m の周溝は、梯子などの道具がなければ自力では脱出できない。

周溝の幅は、0.05m～1.7m が計測されている。この幅は、築造当時よりも崩落によって広がった箇所もあるかもしれないが、周溝の内側に盛土が存在したとすれば、周溝を飛び越えて内郭に侵入するには容易でない幅である。

周溝内部の盛土は、崩落と削平によって旧表土と容易に区分し難い箇所もあったが、1、2、5、6、7号円形周溝で確認された。高さは0.1m～0.3mで、あまり目立たない高さであるが、平畑(5)(3遺跡では比較資料が報告されている。それによれば平畑(5)遺跡では0.46m、平畑(3)遺跡では0.54mであった(注 前掲)。

周溝の深さと幅は、盛土の高さと共に内郭の中に造られた施設を外部から保護する役目もあったものと考えられる。また、周溝と盛土は、墳墓・群集墳・集団墓地領域の存在を示す標識でもあったろう。

4 開口部の位置・規模

開口部は、円形周溝内に主体部が存在したとすれば、その場所への出入口と考えられている施設である。本遺跡では、円形周溝内に主体部が存在するだろうと予想した位置からそれらしい施設は検出されなかったが、開口部の位置(方位)と規模(幅)を測定するため次ぎのような便宜的な方法を採用した。開口部の位置(方位)は、開口部両端の中間点と周溝で囲まれた内郭のほぼ中心点を結んだ線を主体部推定軸線と仮定して測定した。開口部の規模(幅)は、主体部推定軸線を中心に求めた。

本遺跡における円形周溝の開口部は、S軸から何度、どの方位にずれているかによって表示したが、開口部は、S-37度-E(3号円溝)からS-82度-E(5号B円溝)までの振幅が認められた。これは概略、南東方向に位置していること示すものであるが、特にS-60度～74度-Eにその82%(9基)が集中している傾向が認められた(第173図 参照)。

野尻(2)・(3)遺跡では、開口部の方位を計測できた25基のうち2基以外は南東方向(S-37度～78度-E)が計測されている(注 前掲)。平畑(5)遺跡ではS-20度-E、平畑3遺跡ではS-10度-Eが求められている(注 前掲)。

開口部が設けられるようになるのは、7世紀後半～8世紀前半ころの終末期古墳からであろう。丹後平古墳群では、周溝が一周する例が多数を占める中に2基だけ開口部を有するものがある(八戸市44集:1991)。同じく終末期古墳に位置付けられている下田町阿光坊遺跡では古墳12基中4基ほどに開口部が認められ、その他は周溝が一周するタイプとなっている(下田町3集:1991)。しかし、これらの遺跡の周溝の開口部は南東方向ではなく、北東・北西方向を示しているが、この時期のころから開口部をもつ円形周溝が県内では始動したものとみられる。

前記の終末期古墳からほぼ1世紀が経過した8世紀～9世紀代の墳墓(円形周溝)は、八戸市殿見遺跡から検出されている。そこでは開口部の位置が分かる20基中南側にあるもの7基、南東側8基、南西側・北西側各1基、西側3基に分けられている(八戸市57集:1994)。殿見遺跡の墳墓(円形周溝)のころから開口部を南～南東側に造る例が増加し始めたようである。そして開口部を造る円形周溝が主流を占めるようになったのかも知れない。殿見遺跡よりも遅れて造られた野尻(2)・(3)遺跡では、形態が、変化、派生したものも造られるようになるが、開口部は南東方向にほぼ定着したものとみられる。

本遺跡の円形周溝の開口部は、南東方向に設置されているが、そのほかにも特徴が認められている。それは地形を十分考慮して造営されたものとみられるからである。地形的に開口部が設けられた南東側の標高は低く、周溝に囲まれた内郭・盛土などはやや高い位置にある。開口部に至るには開口部よりも低い位置から登らなければならない。そこは沢と湿地に近い傾斜地になっているので、円形周溝に近寄るためには低い位置から円形周溝を見上げることになる。このような地形を選ぶことによって低い盛土

の円形周溝であっても幾分高く見られるように工夫されたのではなかろうか（円形周溝全体図参照）。開口部の位置に関連することで、開口部の方位から主体部が存在しなくても頭位を推定できる可能性があるのではないかと考えられるが、これについては円形周溝と関連ありそうな土坑の項でふれる。

5 拡張された円形周溝

拡張された円形周溝は、形態分類したものの中の 群とした 3 基である。これらの円形周溝の外径は、13m～15.5m の規模をもって大型である。群の形態を呈した円形周溝は、本遺跡以外では野尻 (2) (3) 遺跡において C・D タイプに分類された 5 基が知られているが、殿見遺跡の 23 号墳と 24 号墳の重複はその可能性があるので 9 世紀代の円形周溝（墳墓）の時期から既に造営されていたことも考えられる。古い円形周溝に新に弧状の周溝を付加して、より大きな円形周溝を造成する「意図」については、既に論及されているところである（栗 186 集：1996）。それによると「追葬」を意図したものではないかと推察されている。そして「独立した単一の円形周溝が複数造られているなかで、何故に円形周溝を拡張する行為が発生したのか」を問題視されている。

本遺跡においても野尻 (2) (3) 遺跡と同様、周溝内に主体部が存在すべき位置からその痕跡を検出することはできなかったが、本遺跡では追葬を推定させるような土坑が僅か 1 基だけであるが発見されている。極めて少ない出土例であるが当地方においても当時追葬の慣習と土坑墓（土壙）が存在したことを予感させてくれる。被追葬者については、先の被葬者との系譜が浮上してくるであろうし、「追葬の発生」は、世代交替が円滑に継続されたことを具象したものではないかと今のところ理解しておきたい。

今日まで主体部が発見されている円形周溝・墳墓・古墳は 8 世紀代までのものに限られているようであるが、盛土が認められても主体部が検出されないことは、主体部を地山（盤盤）まで掘り下げて造らないという造営工程を一部省力化、簡略化したとも考えられる。遺物の内容も造営時期の違いによって簡素化していることなどと考え合わせてみることも必要であろう。

6 円形周溝関連土坑

県内における奈良～平安時代の墓制は、古墳、墳墓、円形周溝及び円形周溝や盛土を伴わない単なる土坑墓（土壙）とが存在することは一般的に知られている。特に集団墓地のような群集墳が墓域を形成している場合、例えば丹後平古墳群、阿光坊遺跡、殿見遺跡などでは円形周溝墓と土坑墓に分けられ、二つの埋葬形態から構成されている。それらの埋葬施設はほぼ同時期に造営されたようである。このような出土例があることから、ここでは円形周溝と関連ありそうな土坑に限定して取り上げてみる。

ここで取り上げる 4 号、4 号 B、11 号、11 号 B 土坑の 4 基は、いずれも周溝内郭あるいは周溝自体と重複した位置に造られたものである。

土坑 番号	位置・重複	形態	規模 (cm)		長軸方位	備考
			上端・下端 径	深さ		
4号	1号円溝の南東端を切る 4土 > 1円、4土 2円	不 整 隅丸長方形	上端 200 160	25	S - 60度・E	土師器坏 1 小罐 1
			下端 160 110			
4号B	1円溝内郭中心から北東 寄り、4B土 1円	円 形	上端 125 115 下端 105 95	20		(?)
11号	5円溝内郭中心から北東 寄り、1土 5円 < 5B	不 整 隅丸長方形	上端 200 150	20	S - 140度・E	土師器、縄文 土器片 9
			下端 170 110			
11号B	5円溝内郭中心付近 11B土 5円 < 5円B	楕 円 形	120 97	50	S - 0度	土師器甕 1 炭化材多量

第4表 円形周溝関連土坑

これらの土坑は、円形周溝の主体部が造られていた可能性がある位置からいずれも微妙にずれているようである。したがって主体部の土坑である可能性は極めて少ないと考えられる。平面形態は、4号B土坑を除くとそのほかの土坑は長方形を基調としている。掘り方の下端長軸は120～170cm、同じく短軸は97～110cm、深さは20～50cmである。このような形態と規模を窺見遺跡の土坑墓のそれと比較すると本遺跡の土坑は総体的に小規模であるが、その大きさは遺体の埋葬が可能な数値を示す土坑が認められる。土坑の長軸方向は、全体的にはばらついているが、4号土坑のそれは2号円形周溝の主体部推定軸線とほぼ一致している。供献用あるいは副葬品らしい遺物は4号土坑と11号B土坑から土師器の坏と甕が各1点ずつ出土している。11号B土坑は、甕形土師器と炭化材で土坑内には空間はない状態であるが4号土坑内には内面黒色処理をした坏形土師器が置かれているが埋葬可能なスペースが認められている。また、土坑の長軸方位は2号円形周溝の主体部推定軸線と重なり、しかも供献用・副葬品らしき遺物の位置は、主体部の頭位とも判断し得る位置にあることなどから、本遺跡に土坑墓が造られていたとすれば4号土坑ではなからうかと考えられる。土坑墓とすれば追葬などを含む副次的な施設とみなしてよからう。11号B土坑は、円形周溝に伴うものではなくそれよりも一段階古い(平安時代の)竪穴式住居跡群に伴う遺構ではないかと考えられる。

7 円形周溝から出土した遺物

円形周溝から出土した主な遺物は土器と鉄器である。土器は、口径、器高、底径を推測できて図上復元が可能なものとした。鉄器は、器種不明、破損品を含む全点数とした。

土器は、土師器の坏8点、有台坏1点、皿2点、須恵器の坏1点、計12点である。

鉄器は、刀子1点、工具?6点、棒状2点、器種不明6点、計15点である。

【出土状況】主な遺物が円形周溝の何処の位置から出土しているのか点検してみる。

まず、主な遺物で盛土・内郭から出土したものは皆無であるから、主な遺物はすべて周溝内から出土している。周溝内の遺物は、掘り方(底面)から若干浮いているものが多い。遺物の出土位置は、円形周溝の主体部推定軸線を中心として2分割して南半部と北半部分ける。2分割した部分をそれぞれ3分割して、全体を6分割したブロックを造り、そのブロック毎の出土頻度で傾向をみる。

11基の円形周溝で「主な遺物」が全く出土しない遺構が2基(5円B、8号)ある。

円形周溝を南半と北半に2分割した場合、「主な遺物」は南半側から多く出土している。これは

遺構 番号	出土 位置 遺物 種類	周溝南半 開口部から			周溝北半 開口部から			計	
		最寄	中間	最奥	最寄	中間	最奥	土器	鉄器
	1	土器							2
	鉄器								0
2	土器							1	
	鉄器								0
3	土器							2	
	鉄器								0
4	土器							1	
	鉄器								0
5	土器							1	
	鉄器		3						3
5B	土器							0	
	鉄器								0
6	土器							2	
	鉄器				2	1			3
7	土器							2	
	鉄器	6	2	1					9
8	土器							0	
	鉄器								0
9	土器					(不明 1)		1	
	鉄器								0
10	土器							1	
	鉄器								0
出土頻度		2	4	4	2	1	1	9	3
	土器計	1	6	3	1	0	1	12	
	鉄器計	6	5	1	2	1	0		15
遺物計		7	11	4	3	1	1		27

第5表 円形周溝出土遺物点数

古い円形周溝の南側に新しい周溝を設けて拡張したものが2基(2、7号)があることが原因しているかもしれない。

周溝を6分割したブロックで「主な遺物」が全く出土しないところは認められないが、出土頻度数が多い位置は、周溝南半部中央、南半部最奥、開口部両側の3箇所、特別に多い箇所は特定されないが、「主な遺物」の出土数量には差が認められる。

【主な遺物の組成】数量に關係なく土器と鉄器が出土した周溝は3基（27%）のみで、土器だけが出土した周溝は6基（55%）土器も鉄器も出土しない周溝は2基（18%）みられる。また、鉄器だけが出土した周溝も認められていない。鉄器が出土した周溝の1基当たりの点数は、3～9点であるが、土器は、1基当たり1点が5基、1基当たり2点が4基である。1基から土器が2点出土している場合の土器組成をみると、土師器の坏と須恵器の坏の組み合わせが1基、2点とも土師器の坏の組み合わせが1基、土師器の坏と皿の組み合わせが2基である。主な出土遺物の内容と周溝の規模は、特に関係があると即断できないようである。

主な遺物の内容については、前掲のとおりである。土器に関しては同じ頃の一般集落跡の組成と比較して土師器の甕がほとんどなく、土師器の坏、皿、有台坏が圧倒的に多い。これは恐らく供献用という特殊な性格が土器群に反映されているものとみられる。破壊されたものが多くみられることなどから、これらの土器からは供献に転用された特殊性が察知されよう。

遺物の内容について、野尻（2）・（3）遺跡のそれと比較すると、野尻（2）・（3）遺跡では墨書土器、甕、耳皿、甌、ミニチュア土器などの土師器、長頸壺、甕、大甕などの須恵器が出土しているが本遺跡の円形周溝では発見されていない。なお、野尻（2）・（3）遺跡の円形周溝から出土した釘状鉄製品の類例とした北海道平取町カンカン2遺跡の周溝盛土遺構（「X1」）は、「末期古墳の系統を引く周溝墓（横山：1998）との見解もあるが、発掘担当者が鍛打滓の存在を追加報告して、鍛冶作業場の可能性も指摘されている（森岡：1998）」遺構である。さらに、「発掘担当者は、一旦は、（方形）周溝と金属製品（釘状鉄製品など）は同時期としたが、その後両者を別の時期の所屬に考える見解へと訂正した経緯がある（森岡：1996、1998）」（深澤：1999）との指摘もある。このようなことからカンカン2遺跡の周溝盛土遺構と金属製品とは共伴関係を否定されているが、本遺跡の円形周溝から出土した鉄器（工具？）の中に野尻（2）・（3）遺跡の円形周溝出土の釘状鉄製品と類似したものが存在していることだけは事実である。鉄器 工具 について、出土例などについては未だ調査中であるが木製の椀、高台付皿、お盆などの木地を削る「ロクロ」の棒カンナのような工具ではないかと想像している。もしもこのような工具であれば木地師の工人集団と結び付くことも考えられよう。

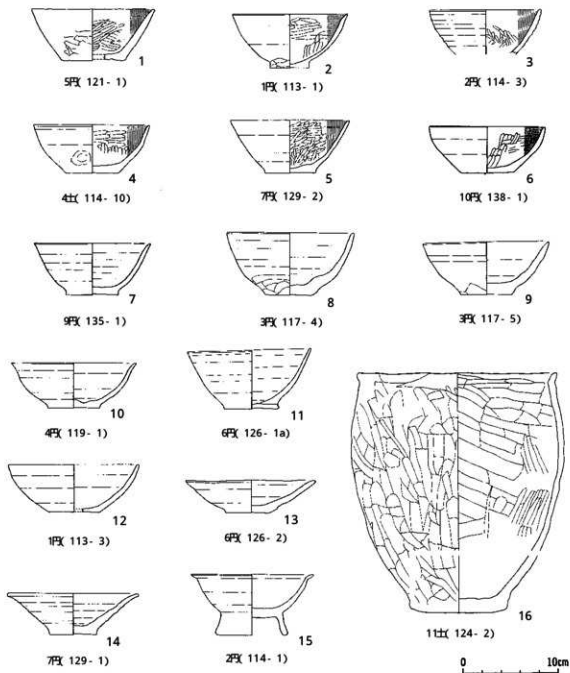
出土遺物は、坏形、高坏、皿形土師器と鉄器が主体を占めている。終末期古墳から9世紀代までの墳墓に多くみられている玉類、武器類などの副葬品的な遺物は野尻（2）・（3）遺跡同様ほとんど出土していないことが特色の一つであろう。

円形周溝から出土した遺物の内容が遺跡によって差があることは、いかなる現象によるものであろう。このような現象は、地域差なのか、時期差なのか、あるいは円形周溝を造営した集落の規模によるものか、あるいは社会的な風潮なのか今は早計な判断を下し難いところである。

【円形周溝・関連土坑出土の土器集成】竪穴式住居跡出土の土器とは時期的差がある。時期差で新たな特徴がある土器がみられるかもしれないので一応集成してみたい。

円形周溝から出土した土器（第174図1～3、4～15）は、坏、皿、有台坏が主体で復元された甕は少ない。坏の成形は、ロクロ成形 回転系切りが多数を占めているがロクロ不使用の類も認められる。ロクロ成形の類は、ロクロ成形 回転系切り ヘラミガキ 内面黒色処理の類とロクロ成形の類に大別される。後者には、底辺部にヘラズリを加えて再調整した類もある。皿、有台坏は、一般の竪穴式住居跡（集落跡）からの出土は比較的小さい土器である。また、須恵器の坏も出土しているが、図（113図-2）は割愛した。

円形周溝関連土坑から出土した土器は、土師器の坏と甕である。いずれも内面黒色処理されている。



第 174 図 円形周溝・関連土坑出土土器集成図

【円形周溝の年代】ここでは土器など遺物の年代を考慮しないで、火山灰の堆積状況と遺構の重複関係だけから円形周溝の適年代を検証してみたい。

本遺跡には十和田a (Toa) 火山灰と白頭山 - 苫小牧 (B Tm) 火山灰とが降下して堆積していることは前述したとおりである。また、平安時代の竪穴式住居跡25軒中の18軒で堆積土中からToa火山灰が検出されている。そしてこれら18軒の住居跡はToa火山灰が降下、堆積する以前に廃絶していたものと推定された。二つの大噴火の年月日については早川由紀夫・小山真人の研究が知られている(早川・小山:1998)。それによれば、Toa火山灰の降下年代は915年で、また、B Tm火山灰は、947年と推定されている。

円形周溝は、11基検出されているが、それらの全ての周溝堆積土からB Tm火山灰が確認され、そのうちの6基分(3、4、7～10号)については、蛍光X線による分析を実施してB Tm火山灰であることを確かめた。また、周溝内の堆積土からB Tm火山灰以外の火山灰は検出されなかった。

Toa火山灰降下以前に廃絶した住居跡	切合い関係	B Tm火山灰が堆積した円形周溝			重複・新旧関係
		有無	分析		
(18軒)					
16号住居跡←	/	1号			1号円溝 < 2号円溝
		2号			2号円溝 > 1号円溝 2号円溝 < 16号住居跡、
(1号住居跡)		3号			(3号円溝開口部付近に1号住居跡)
		4号			
14号住居跡←	/	5号			5号円溝 < 5 B円溝 5号円溝 > 14号住居跡
2号住居跡←	/	5号B			5 B円溝 > 5号円溝 5 B円溝 > 2号円溝
15号住居跡←	/	6号			6号円溝 < 7号円溝 6号円溝 > 15号住居跡
(5号住居跡)		7号			7号円溝 > 6号円溝 (7号円溝開口部付近に5号住居跡)
		8号			
(2号住居跡)		9号			(9号円溝開口部付近に2号住居跡)
6号住居跡←	/	10号			10号円溝 > 6号住居跡

上記の表にまとめたように、円形周溝がToa火山灰が堆積した竪穴式住居跡を直接掘り下げて造営

されている例は5基(2、5、5B、6、10号)それと前後(新旧)関係にある周溝が2基(1、7号)住居跡と周溝の位置関係から住居跡が古いと推測されるもの2基(3、9号)が認められる。これらのことから、円形周溝は、To a火山灰が降下した後に造営が開始され、あるていどの期間を経てからその周溝にB Tm火山灰が降下、堆積したものと推定することができる。このように考えると、本遺跡における円形周溝の年代は、最大限To a火山灰降下以後からB Tm火山灰降下以前までの間に絞り込まれる。したがって、火山灰の推定降下年代を援用する限り、915年から947年までの約30年間に円形周溝の上限が求められるであろう。

円形周溝を造営した人々は、何処の村落の人達なのか、今のところは見当もつかないが周溝の配置からみると複数の系統が合同で円形周溝群を構成していた可能性もみられる。

第6表 円形周溝一覧

遺跡 番号	遺構 番号	形態 規模	(m)		直径(m)		(m)	(m)	開口部(m)		前後関係	関連土坑	周溝出土の主な遺物
			外径	内径	外径	内径			深さ	幅			
1	1号	D	102~ 106	80~ 85	-	-	06~ 07	09~ 12	S-60E-E	19	1円 < 2円 2円 > 16H	1円 48土	土師器環1 須恵器環1
2	2号	B	-	-	110~ 132	95~ 110	023~ 057	08~ 13	S-60E-E	50	2円 > 1円 2円 > 16H	2円 4土坑	土師器高環1 (4号土坑環1)
3	3号	D	103~ 110	77~ 83	-	-	022~ 054	06~ 16	S-63E-E	40			土師器環2
4	4号	E	67~ 74	51~ 60	-	-	029~ 053	06~ 12	S-48E-E	23			土師器環1
5	5号	C	117~ 127	97~ 101	-	-	025~ 060	08~ 14	S-72E-E	13	5円B > 5円 5円 > 14H	5円 11土 5円 118土	土師器環1、鉄器3(刀子 1、工具? 1、不明1)
6	5号B	B	-	-	131~ 138	105~ 114	005~ 027	07~ 13	(S-82E-E)(5S)		5円B > 5円 58円 > 2H	58円 ? 11土 58 ? 118土	(118土坑、土師器環1)
7	6号	D	102~ 105	80~ 90	-	-	039~ 068	06~ 13	S-64E-E	30	7円 > 6円 6円 > 15H		土師器環1、土師器皿1、 鉄器3(工具? 3)
8	7号	A	-	-	130~ 155	105~ 130	031~ 120	07~ 17	S-65E-E	84			土師器環1、土師器皿1、 鉄器3(工具2、棒状2、不明5)
9	8号	E	68~ 73	55~ 59	-	-	008~ 014	05~ 11	S-61E-E	50			
10	9号	D	91~ 105	68~ 80	-	-	030~ 056	06~ 16	S-65E-E	20			土師器環1
11	10号	E	79~ 83	62~ 65	-	-	013~ 037	07~ 15	S-74E-E	30	10円 > 6H		土師器環1

第7表 県内主要古墳・円形周溝等出土遺跡一覧

(引用文献は、番号と同じ)

番号	遺跡名	所在市町村名	古墳	土壌	円形周溝等		時期	
					調査	確認		
1	鹿島沢遺跡	八戸市	3				7世紀後半	
2	丹後平遺跡	八戸市	24	28			7世紀後半～8世紀前半	
3	殿見遺跡	八戸市		9(墳墓)	36	100～	8世紀代～9世紀代	
4	丹後平(1)	八戸市		1	21		8世紀代～9世紀前半	
5	田面木(3次)	八戸市			7		8世紀中葉	
6	丹後平(3)	八戸市			1		8世紀後半	
7	赤御堂遺跡	八戸市			1		古代	
8	根城跡東横地区	八戸市			1		?	
9	狐平遺跡	八戸市			1		奈良もしくは平安時代	
10	柳引遺跡	八戸市			2		奈良ないし平安時代	
11	境沢頭遺跡	八戸市			4		奈良～平安時代	
12	豊巻沢遺跡	三戸郡福地村			(周溝遺構)	2	古代	
13	泉山遺跡	三戸郡三戸町			(環状遺構)	1	平安時代	
14	沖中遺跡	三戸郡三戸町				3	(奈良1、平安1、不明1)	
15	阿光坊遺跡	上北郡下田町	12	2			7世紀後半中心～8世紀初	
16	中野平遺跡	上北郡下田町				6	奈良・平安時代	
17	十三森(2)	上北郡下田町				1(57)	(To・akより古い)	
18	根岸(2次)	上北郡百石町				1	10世紀か、それ以前	
19	平畑(5)	三沢市				1	1	10世紀前半～
20	平畑(3)	三沢市			(墳丘墓)	2	2	10世紀前半～
21	三内沢部遺跡	青森市			(方形・1)	2		平安か
22	近野(2次)	青森市				1		平安時代
23	三内丸山(2)	青森市				2		9世紀末～10世紀初
24	新町野遺跡	青森市				11		10世紀中葉 91年ころ～94年ころ以前)
25	山崎遺跡	東津軽郡今別町			(方形)	1		?
26	杉の沢遺跡	南津軽郡浪岡町			(馬蹄形1環状5)	6		平安時代と思われる
27	野尻(2)遺跡	南津軽郡浪岡町				22		9世紀後半～10世紀初頭
28	野尻(3)遺跡	南津軽郡浪岡町				8		9世紀後半～10世紀初頭
29	山元(2)遺跡	南津軽郡浪岡町			(環状遺構)	1		重複から平安時代と思われる
30	山元(3)遺跡	南津軽郡浪岡町			(方形・1)	4		新しい?
31	季平下安原遺跡	南津軽郡尾上町		(人骨)1				10世紀末～11世紀初
32	原遺跡	南津軽郡尾上町			(部分発掘)	15		8世紀後半
33	鳥海山遺跡	南津軽郡平賀町			(方形)	1		平安時代後半

34	大光寺新城遺跡	南津軽郡平賀町			1	?
35	大面遺跡	南津軽郡碓ヶ関村		(竪穴遺構)	1	(平安時代)
36	浅瀬石遺跡	黒石市			1	平安時代以降
37	石上神社遺跡	西津軽郡木造町		(馬蹄形状)	4	平安時代か
			39	40	156	176

番号	遺 跡 名	所在市町村名	古墳	土壌	円 形 周 溝 等		時 期
					調 査	確 認	
2 (追加)	丹後平遺跡	八戸市	15	1			(前出)
38	浪岡遺跡	南津軽郡浪岡町				21	平安時代
39	長溜池遺跡	南津軽郡浪岡町			(完掘)	1	6 B - Tm以前
			(54)	(41)		(157)	(203)

県内主要古墳・円形周溝等出土遺跡一覧の文献 (一覧の番号と文献の番号は一致している)

- 音喜多 富 寿 1958 「青森県八戸市大字沢里鹿島沢古墳群踏査予報」『史想』9号
江 坂 輝 彌
音喜多 富 寿 1960 「鹿島沢古墳群調査略報」『奥南史苑』4号
- 八戸市教育委員会 1988 「丹後平古墳発掘調査概報」市埋文第24集
1991 「丹後平古墳」市埋文第44集
- 八戸市教育委員会 1993 「殿見遺跡発掘調査報告書」市埋文第49集
1994 「殿見遺跡発掘調査報告書」市埋文第57集
- # 1990 「丹後平(1)遺跡」市埋文第37集
- # 1991 「田茂木遺跡(第3次調査)」市埋文第41集
1992 「田茂木遺跡(第4次調査)」市埋文第45集
- # 1984 「丹後平(3)遺跡」市埋文第13集
- # 1989 「赤御堂遺跡」市埋文第33集
- # 1983 「史跡根城跡発掘調査」(根城跡東構地区)市埋文第11集
- # 1991 「狐平遺跡」市埋文第72集
- 青森県教育委員会 1999 「柳引遺跡」県埋文第262集
- 八戸市教育委員会 1997 「境沢頭遺跡」市埋文第72集
- 青森県教育委員会 1984 「壘巻沢遺跡」県埋文第83集
- # 1995 「泉山遺跡」県埋文第181集

- 14 三戸町教育委員会 1999 (葛西勲氏のご教示と新聞報道による)
- 15 下田町教育委員会 1989～「阿光坊遺跡発掘調査報告書」 一 町埋文第1～3集
1991
- 16 青森県教育委員会 1991 「中野平遺跡」県埋文第134集
下田町教育委員会 1997 「中野平遺跡」町埋文第9集
- 17 下田町教育委員会 1999 (新聞報道、「平成11年度青森県埋蔵文化財発掘調査報告会」資料)
- 18 百石町教育委員会 1995 「根岸(2)遺跡第2次発掘調査報告書」町文化財調査報告書第4集
- 19 三沢市教育委員会 1991 「平畑(5)遺跡」市埋文第8集
1992 「平畑(5)遺跡」市埋文第9集
- 20 # 1996 「平畑(3)遺跡」市埋文第14集
- 21 青森県教育委員会 1978 「三内沢部遺跡」県埋文第41集
- 22 # 1975 「近野遺跡発掘調査報告書()」県埋文第22集
- 23 青森市教育委員会 1994 「三内丸山(2)・小三内遺跡発掘調査報告書」市埋文第23集、(小三内E地区)
- 24 # 2001 「新町野遺跡発掘調査報告書」市埋文第541集
- 25 青森県教育委員会 1982 「山崎遺跡」県埋文第68集
- 26 # 1979 「杉の沢遺跡」県埋文第45集
- 27 # 1996 「野尻(2)遺跡・野尻(3)遺跡」県埋文第186集
- 28 # 1996 「野尻(2)遺跡・野尻(3)遺跡」県埋文第186集
- 29 # 1995 「山元(2)遺跡」県埋文第171集
- 30 # 1994 「山元(3)遺跡」県埋文第159集
- 31 # 1988 「李平下安原遺跡」県埋文第11集
- 32 尾上町教育委員会 1989 「原遺跡発掘調査報告書」町埋文第8集
青森山田高等学校 1990 「東北北部における終末古墳の研究(1)」『摺糸文』第18号
考古学研究会 1992 「東北北部における終末古墳の研究(2)」『摺糸文』第19号
- 33 青森県教育委員会 1977 「鳥海山遺跡発掘調査報告書」県埋文第32集
- 34 平賀町教育委員会 1990 「大光寺新城遺跡発掘調査報告書」町埋文第19集
- 35 青森県教育委員会 1980 「大面遺跡発掘調査報告書」県埋文第55集
- 36 # 1976 「黒石市牡丹平南遺跡・浅瀬石遺跡」県埋文第26集
- 37 # 1977 「石上神社遺跡発掘調査報告書」県埋文第35集

(追加文献など)

- 2 八戸市教育委員会 1998 「掘りdayはちのへ - 八戸市埋蔵文化財ニュース 創刊号 - 」
- 38 浪岡町史編纂室 2000 「浪岡町史 第一巻」図 - 44、608～610ページ、外
- 39 青森県教育委員会 2000 「長瀬池遺跡の発掘調査」(生徒向け)現地説明会資料(神原夫氏のご教示による)

第 5 節 まとめ

1 遺跡の立地

新町野遺跡は、青森市の中心部から南へ約 6 km 離れた標高約 20~40m の低丘陵地に立地し、近くを荒川の支流である牛館川と合子沢川が流れている。南方約 1 km には平安時代の大集落である野木遺跡が所在している。

2 検出遺構

縄文時代の遺構は、竪穴式住居跡 2 軒、土坑 15 基、溝状ピット 14 基である。

平安時代及びそれ以降の遺構は、竪穴式住居跡 25 軒、円形周溝 11 基、土坑 36 基、焼土状遺構 8 基、焼成ピット 18 基、柱穴状ピット 13 基（1 群）、道路状遺構 2 条、溝状遺構 8 条、竪穴遺構 1 基である。

3 出土遺物

縄文時代の遺物は、早期から晩期までの縄文土器、石鏃・石匙・不定形石器・磨製石斧・敲磨器類・半円状扁平打製石器などの石器、及び土偶、石製円版などの土製品と石製品である。

平安時代の遺物は、坏・皿・有台坏（足高高台）・甕・壺・鉢（埴）・手捏・製塩土器などの土師器、坏・長頸壺・広口甕（鉢）・大甕・甕などの須恵器、支脚・鞆羽口・鈴などの土製品、刀子・紡錘車・工具？・器種不明鉄器などの鉄製品、その他砂鉄、鉄滓、炭化材、砥石などである。須恵器の生産地は、五所川原窯群の外に胆沢城周辺にある瀬谷子窯群の製品が含まれていることが判明した。これは窯跡が特定され、交易ルートの一部が具体化された点で注目される。

4 まとめ

縄文時代 竪穴式住居跡の時期は、伴出した土器から縄文前期末葉から中期初頭（円筒下層式 d 式—円筒上層 a 式）に位置付けられる。三内丸山遺跡と一部併行した時期もあった。土坑は、断面形がフラスコ状を呈するものが多く認められたが、これらの土坑は伴出土器が僅少で、それから時期を決定付け難いが、検出されている住居跡に伴った可能性が高いだろう。溝状ピットは、縄文住居（集落）が廃棄された後に構築され、一時期は狩猟区域として利用されていたことを示している。

出土土器は、早期から晩期までのものが認められたが、型的には散発的である。

平安時代 多くの遺構が検出され、本遺跡の主体をなしている。

竪穴式住居跡の規模は、20㎡以下のものが 90% を占めている。掘立柱建物跡、外周溝を伴う竪穴式住居跡は全くみられない。カマドの位置は、特別集中している箇所はないが北東から南東向きに構築された住居が多い。カマドの煙道部は、地下式と半地下式の構造が確認された。地下式から半地下式への改造は十和田 a 火山灰（915 年）が降下する以前から開始されていたことが明らかになった。また、住居の多くは十和田 a 火山灰が降下する以前に廃棄されていた。丘陵頂部で多くの住居（集落）が営まれた時期は、火山灰の降下年代を援用する限り 9 世紀の後半から 10 世紀の初頭までの期間と推定される。これに関連して、竪穴式住居跡から出土した須恵器の多くは五所川原窯跡群と推定された。竪穴式住居跡の多くに堆積した十和田 a 火山灰の降下年代（915 年）から推測すれば五所川原窯跡群の操業年代の一部は 9 世紀末葉には開始されていた可能性が高いものと考えられる。

円形周溝は、住居が廃棄されてきた空き地を利用して造営された。その形態の特徴、規模などはこれまで県内各地で調査されたものと大きな差異はないが、周溝が完全に一周したものと主体部が明確に掘出されたものは1例も確認されなかった。全ての周溝堆積土からは白頭山・苫小牧火山灰が確認された。破壊された土器、鉄器が出土した。これらの遺物は、埋葬儀式に伴う供献遺物とみられ、供献行為には一定の慣行が認められた。このような円形周溝は、主体部は不明であるが、遺構の形態の特徴、出土土器の状態などから従来「墳墓」、「円形周溝墓」、「墳丘墓」などと報告されてきた遺構と同類とみなされる。そしてその造営年代は、火山灰の降下年代から推測する限り、十和田a火山灰（915年）と白頭山・苫小牧火山灰（947年）の間に限定される。円形周溝と重複した土坑のなかには、追葬などの二次的な施設（土坑墓）を示唆しているような遺構も認められた。

焼成ピットと土坑の一部は、これまでに出土例が知られている炭焼き窯のような遺構である可能性が推測された。

本遺跡の平安時代は、10世紀初頭を境としてその様相、性格が二つに分かれていた。前半期（9世紀後半～10世紀初頭）は、一般的集落として営まれ、その後半期（10世紀初頭～中葉）は、群集墓として墓域が形成されていたものと推定される。

今回の発掘調査では、上記のような縄文時代と平安時代の生活を知る上で貴重な情報を得ることができた。

今後は、これまでに刊行された報告書も見直し、問題点を整理して、本遺跡から発信されている種々の情報を総合的に検討することが肝要であろう。

最後に、調査の準備から本書の刊行に至るまで、いろいろとご指導、ご協力をいただいた多くの方々に改めて、感謝の意を表します。

（担当者一同）

引用・参考文献(円形周溝の引用・参考文献を除く)

- 青森県教育委員会 1996 第167集 『朝日山(3)遺跡』
 # 1998 第239集 『新町野遺跡・野木遺跡』
 # 1998 第246集 『白砂・大沢遺跡発掘調査報告書』
 # 1999 第263集 『樺引遺跡』
 # 1999 第264集 『野木遺跡』
 # 2000 第275集 『新町野遺跡』
- 青森県埋蔵文化財 1998 「現地説明会資料 新町野遺跡」
 調査センター・青
 森市教育委員会
- 青森県埋蔵文化財 1996 「青森県内の円形周溝地名表」『研究紀要』第1号
 調査センター
 神 康夫
- 青森市教育委員会 1997 第33集 『新町野遺跡試掘調査報告書』
 # 1998 第37集 『新町野遺跡発掘調査報告書』
 # 1998 第38集 『野木遺跡発掘調査報告書』
 # 1999 第46集 『新町野・野木遺跡発掘調査概報』
 # 2000 第53集 「第 章 内真部(9)遺跡発掘調査」『市内遺跡発掘調査報告書』
- 五所川原市教育委 1998 第21集 『犬走須恵器窯跡発掘調査報告書』
 員会・犬走須恵器
 窯跡発掘調査団
- 早川由起夫 1998 「日本海をはさんで10世紀に相次いで起こった二つの大噴火の年月日-十和田湖と白頭山-」
 小山 真人 『火山』第43巻第5号、403-407頁
- 中村 有吾 1999 「札幌市内の考古遺跡における樽前a, 白頭山苫小牧テフラの発見とその意義」『第四紀研
 平川 一臣 究』第38巻第4号、345-348頁
- 工藤 清泰 1998 「東北地方の古代集落-津軽平野の様相」『第24回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』
- 深澤百合子 1999 「沙砂川流域カンカン2遺跡の金属製品の新解釈」『北海道考古学』第35巻
- 北海道考古学会 1999 「1998年度研究大会記事」『北海道考古学会』第35巻、89-100頁
- 平取町教育委員会 1996 『平取町カンカン2遺跡』
- 森岡 健治 1998 「平取町カンカン2遺跡の周溝盛土遺構について」『道を辿る 時の絆』269-281頁、石附
 喜三男先生を徳本刊行委員会
- 横山 英介 1998 「療文化にみる政治的陰翳」『道を辿る 時の絆』231-243頁、石附喜三男先生を徳本
 刊行委員会
- 山内 清男 1979 『日本先史土器の縄紋』先史考古学会

写 真 图 版



1号縄文住居跡完掘 (S)



1号縄文住居跡堆積土 (E)



2号縄文住居跡完掘 (E)



2号縄文住居跡堆積土 (W)



9号土坑完掘 (N)



9号土坑堆積土 (S)



1号土坑完掘 (S)

写真1 縄文時代竪穴式住居跡・土坑(1)



13号土坑完掘 (S)



13号土坑堆積土 (S)



14号土坑完掘 (E)



14号土坑堆積土 (S E)



15号土坑完掘 (E)



15号土坑堆積土 (S)



16号土坑完掘 (S)



16号土坑堆積土 (S)

写真2 縄文時代土坑(2)



17号土坑完掘 (S)



17号土坑堆積土 (S)



18号土坑完掘 (S)



18号土坑堆積土 (S)



19号土坑完掘 (N)



19号土坑堆積土 (S)



20号土坑完掘 (S)



20号土坑堆積土 (S)

写真3 縄文時代土坑(3)



2号土坑完掘 (S)



2号土坑堆積土 (S)



2号土坑完掘 (S)



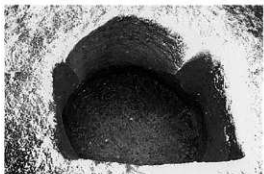
2号土坑堆積土 (S)



2号土坑完掘 (S)



2号土坑堆積土 (S)

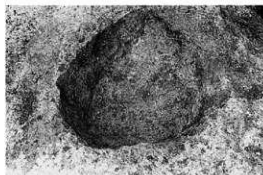


2号土坑完掘 (S)



2号土坑堆積土 (S)

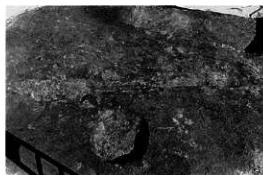
写真4 縄文時代土坑(4)



57号土坑完掘(S)



57号土坑堆積土(W)



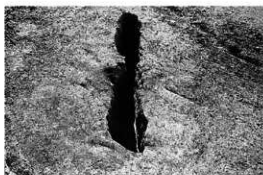
1号溝状ピット完掘(W) 手前1号焼成ピット



1号溝状ピット堆積土(S)



2号溝状ピット完掘(W)



3号溝状ピット完掘(N)

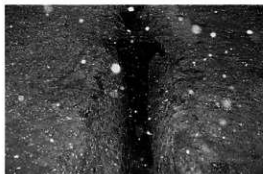


3号溝状ピット堆積土(S)

写真5 縄文時代土坑(5)溝状ピット(1)



4号溝状ピット完掘 (W)



4号溝状ピット堆積土 (W)



5号溝状ピット完掘
(E)



5号溝状ピット堆積土 (E)



6号溝状ピット完掘
(E)



6号溝状ピット堆積土 (E)



9号溝状ピット完掘 (W)



9号溝状ピット堆積土 (W)

写真6 溝状ピット(2)



10号溝状ピット完掘 (N)



10号溝状ピット堆積土 (N)



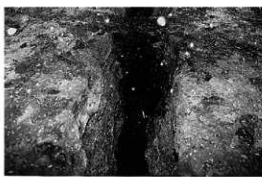
11号溝状ピット完掘 (E)



11号溝状ピット堆積土 (E)



12号溝状ピット完掘 (W)



12号溝状ピット堆積土 (E)



13号溝状ピット完掘 (N)



13号溝状ピット堆積土 (S)

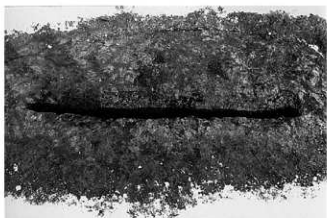
写真7 溝状ピット(3)



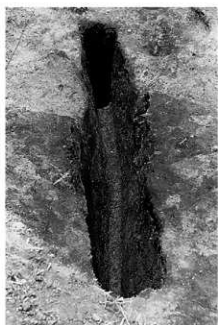
14号溝状ピット完掘 (N)



14号溝状ピット堆積土 (S E)



20号溝状ピット堆積土 (S)



19号溝状ピット完掘 (N)



20号溝状ピット堆積土 (S E)

写真8 溝状ピット(4)



1号住居跡完掘 (S)



1号住居跡堆積土 (S)



1号住居跡遺物出土状況 (W)



1号住居跡カマド完掘 (S)



2号住居跡完掘 (W)



2号住居跡堆積土 (S)



2号住居跡カマド完掘 (W)

写真9 平安時代竪穴式住居跡(1)



3号住居跡完掘(S)



3号住居跡堆積土(S)



3号住居跡カマド完掘(S)



4号住居跡完掘(S)



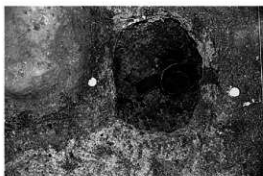
4号住居跡堆積土(N)



4号住居跡遺物出土状況(E)



4号住居跡カマド完掘(S)



4号住居跡カマド右袖側ビット内遺物出土状況(S)

写真10 平安時代竪穴式住居跡(2)



5号住居跡完掘(E)



5号住居跡堆積土(E)



5号住居跡旧カマド完掘(S)



5号住居跡新カマド完掘(E)



6号住居跡完掘(SE)



6号住居跡堆積土(W)



6号住居跡カマド完掘(E)

写真11 平安時代竪穴式住居跡(3)



7号住居跡完掘(W)



7号住居跡堆積土(W)



7号住居跡新カマド完掘(W)



7号住居跡旧カマド完掘(N)



8号住居跡完掘(N)



8号住居跡堆積土(S)



8号住居跡カマド遺物出土状況(N)



8号住居跡旧カマド完掘(W)

写真 12 平安時代竪穴式住居跡(4)



9号住居跡完掘 (W)



9号住居跡堆積土 (E)



9号住居跡旧カマド完掘 (S)



9号住居跡新カマド完掘 (W)



10号住居跡完掘 (W)



10号住居跡堆積土 (W)



10号住居跡堆積土 (S)



10号住居跡カマド完掘 (W)

写真 13 平安時代竪穴式住居跡(5)



11号住居跡完掘 (W)



11号住居跡積土 (W)



11号住居跡旧カマド完掘 (W)



11号住居跡新カマド完掘 (W)



12号住居跡積土 (S)



12号住居跡積土 (W)



13号住居跡完掘 (S)



13号住居跡積土 (W)

写真 14 平安時代竪穴式住居跡(6)



13号住居跡ピット1堆積土 (E)



13号住居跡カマド完掘 (N)



14号住居跡完掘 (N)



14号住居跡堆積土 (E)



14号住居跡カマド完掘 (N)



15号住居跡完掘 (SW)



19号住居跡堆積土 (S)



19号住居跡カマド完掘 (W)

写真 15 平安時代竪穴式住居跡(7)



16号住居跡完掘 (N)



16号住居跡堆積土 (S)



16号住居跡堆積土 (W)



16号住居跡カマド完掘 (N)



17号住居跡完掘 (SW)



17号住居跡堆積土 (N)



17号住居跡堆積土 (E)



17号住居跡カマド完掘 (SW)

写真 16 平安時代竪穴式住居跡(8)



18号住居跡完掘 (S)



18号住居跡堆積土 (W)



18号住居跡堆積土 (S)



18号住居跡カマド完掘 (S)



19号住居跡堆積土 (W)



19号住居跡堆積土 (S)



19号住居跡完掘 (W)



19号住居跡カマド完掘 (W)

写真 17 平安時代竪穴式住居跡(9)



20号住居跡完掘 (W)



20号住居跡堆積土 (N)



20号住居跡堆積土 (W)



20号住居跡カマド完掘 (W)



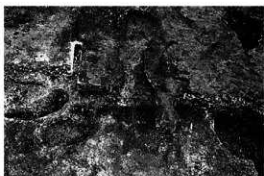
21号住居跡完掘 (W)



21号住居跡堆積土 (N)



21号住居跡堆積土 (E)



21号住居跡カマド完掘 (W)

写真 18 平安時代竪穴式住居跡 (10)



22号住居跡完掘 (W)



22号住居跡堆積土 (N)



22号住居跡堆積土 (W)



22号住居跡カマド完掘 (W)



23号住居跡完掘 (W)



23号住居跡堆積土 (E)



23号住居跡カマド完掘 (W)

写真 19 平安時代竪穴式住居跡(11)



24号住居跡完掘(N)



24号住居跡堆積土(S)



24号住居跡新カマド完掘(N)



24号住居跡堆積土(E)



24号住居跡旧カマド完掘(W)



25号竪穴住居跡完掘(N)



25号竪穴住居跡ビット1完掘(W)



25号竪穴住居跡ビット1堆積土(W)

写真 20 平安時代竪穴式住居跡(12)



25号竪穴住居跡ピット7完掘 (SW)



25号竪穴住居跡遺物 P - 21出土状況 (N)



25号竪穴住居跡カマド堆積土 (東西 N)



25号竪穴住居跡カマド堆積土 (南北 W)



25号竪穴住居跡カマド完掘 (W)



1・2号円形周溝完掘 (N)



1号円形周溝堆積土 (A - B SP)



1号円形周溝堆積土 (B - C SP)

写真 21 平安時代竪穴式住居跡(13) 円形周溝(1)



1号円形周溝堆積土 (E)



1・2号円形周溝堆積土 (東西 SP S)



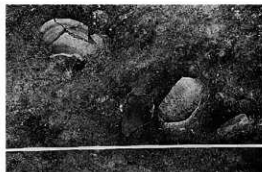
1・2号円形周溝堆積土 (G - H SP交点 S)



2号円形周溝堆積土 (A - B SP E)



2号円形周溝 (C - D SP E)



2号円形周溝遺物出土状況



4号土坑完露 (SW) 1号円形周溝と重複



4号土坑堆積土 (SW)



1号円形周溝内4号B土坑堆積土 (W)



3号・4号円形周溝完掘 (N)



3号円形周溝堆積土 (A - B SP E)



3号円形周溝 (C - D SP E)



3号円形周溝堆積土 (I - J SP E)



3号円形周溝堆積土 (E - F SP E)



3号円形周溝遺物堆積土 (G - H SP SE)

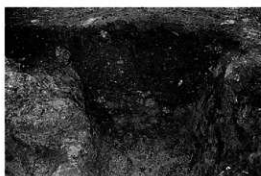


3号円形周溝堆積土 (G - H SP SE)

写真 23 円形周溝(3)



4号円形周溝堆積土 (A - B SP SE)



4号円形周溝堆積土 (C - D SP E)



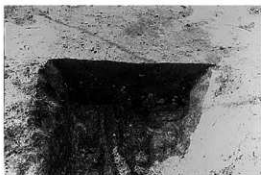
4号円形周溝堆積土 (E - F SP S)



4号円形周溝堆積土 (G - H SP E)



4号円形周溝遺物出土状況 (W)



5号円形周溝堆積土 (A - B SP E)



5号B円形周溝堆積土 (C - D SP S)



5号・5号B円形周溝堆積土 (E - F SP N)

写真 24 円形周溝(4)



5号円形周溝堆積土 (G - H SP W)



5号円形周溝堆積土 (I - J SP S)



5号円形周溝堆積土 (K - L SP E)



5号円形周溝堆積土 (M - N SP E)



5号円形周溝堆積土 (O - P SP S)



5号・5号B円形周溝堆積土 (Q - R SP S)



5号円形周溝堆積土 (S - T SP)



5号円形周溝遺物出土状況 (E · MP - 167)

写真 25 円形周溝(5)



5号円形周溝内11号土坑堆積土(東西 N)



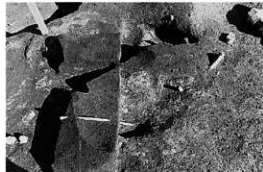
5号円形周溝内11号土坑堆積土(南北 W)



5号円形周溝内11号B土坑堆積土(南北 W)
(左上 11号土坑)



5号円形周溝内11号B土坑堆積土(東西 S)



5号円形周溝内11号B土坑完掘



11号B土坑出土土器と炭化材(上面)



11号B土坑出土炭化材(右上の下面 N)

写真 26 円形周溝(6)



6号・7号円形周溝完掘直前 (N)



6号円形周溝堆積土 (A - B SP E)



6号円形周溝堆積土 (C - D SP 西端 S)



6号円形周溝堆積土 (C - D SP 東端 S)



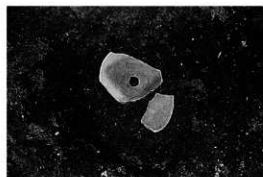
6号円形周溝内堆積土 (E - F SP S)



6号円形周溝堆積土 (G - H SP S)



6号円形周溝遺物出土状況



6号円形周溝底部穿孔土器出土状況 (W)

写真 27 円形周溝 (7)



7号円形周溝堆積土 (A - B SP E)



7号円形周溝堆積土 (C - D SP E)



7号円形周溝堆積土 (E - F SP S)



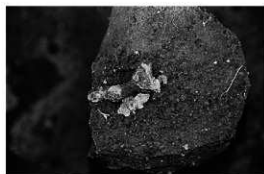
7号円形周溝堆積土 (G - H SP S)



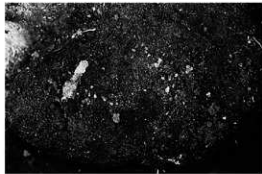
7号円形周溝遺物出土状況 (E)



7号円形周溝遺物出土状況 (鉄器 S)



7号円形周溝遺物出土状況 (鉄器 S)



7号円形周溝遺物出土状況 (鉄器 S)

写真 28 円形周溝(8)



8号円形周溝堆積土 (A - B SP W)



8号円形周溝堆積土 (C - D SP E)



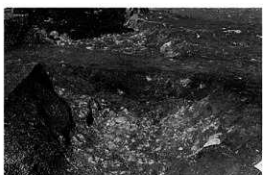
8号円形周溝堆積土 (E - F SP S)



9号円形周溝堆積土 (A - B SP W)



9号円形周溝堆積土 (C - D SP E)



9号円形周溝堆積土 (E - F SP SE)



9号円形周溝堆積土 (G - H SP NE)

写真 29 円形周溝(9)



9号円形周溝積土 (I - J SP SE)



9号円形周溝積土 (K - L SP S)



10号円形周溝積土 (A - B SP E)



10号円形周溝積土 (C - D SP E)



10号円形周溝積土 (G - H SP W)



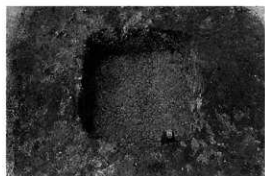
10号円形周溝積土 (I - J SP W)



2号土坑完掘 (N)



2号土坑堆積土 (N)



3号土坑完掘 (E)



3号土坑堆積土 (S)



5号土坑遺物出土状況 (W)



5号土坑堆積土 (W)

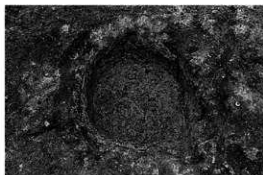


6号土坑完掘 (S)

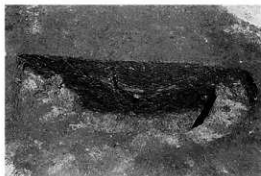


6号土坑堆積土 (S)

写真 31 平安時代土坑 (1)



7号土坑完掘(N)



7号土坑堆積土(S)



8号土坑完掘(E)



8号土坑堆積土(S)



8号土坑遺物出土状況(SE)



10号土坑完掘(N)



27号土坑完掘(NE)



27号土坑堆積土(NE)

写真 32 平安時代土坑(2)



28号土坑完掘 (W)



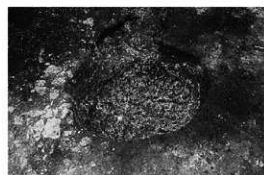
40号土坑完掘 (N)



40号土坑堆積土 (S)



40号土坑堆積土 (W)



4号土坑完掘 (S)



4号土坑堆積土 (W)



42号土坑完掘 (S)



43号土坑完掘 (W)

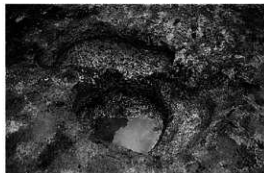
写真 33 平安時代土坑 (3)



4号土坑完掘・遺物出土状況 ()



4号土坑堆積土 (N)



45号土坑完掘 (N)



45号土坑堆積土 (N)



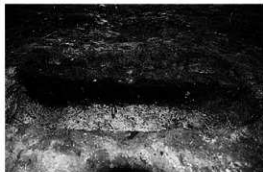
46号土坑完掘 (W)



46号土坑堆積土 (E)



47号土坑完掘 (N)



47号土坑堆積土 (N)

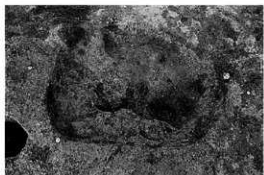
写真 34 平安時代土坑(4)



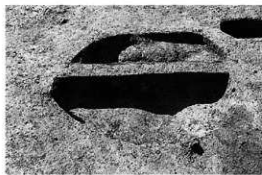
48号土坑堆積土 (S)



49号土坑堆積土 (S)



50号土坑完掘 (S)



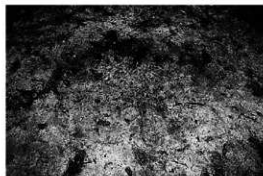
50号土坑堆積土 (N)



51号土坑完掘 (W)



51号土坑堆積土 (E)



52号土坑完掘 (S)

写真 35 平安時代土坑 (5)



53号土坑堆積土 (E)



53号土坑堆積土 (W)



54号土坑完掘 (N)



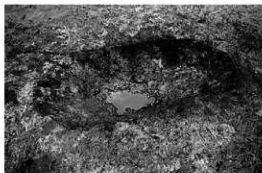
54号土坑堆積土 (S)



55号土坑完掘 (E)



55号土坑堆積土 (W)



56号土坑完掘 (S)

写真 36 平安時代土坑 (6)



59号土坑堆積土(南北 E)



60号土坑完掘(E)



60号土坑堆積土(南北 E)



61号土坑完掘(W)



61号土坑炭化物出土状況(N)



61号土坑堆積土(南北 W)



62号土坑完掘(N)



63号土坑完掘(S)

写真 37 平安時代土坑(7)



1号焼成ピット完掘(S)



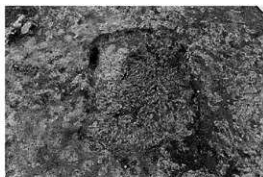
1号焼成ピット堆積土(S)



2号焼成ピット完掘(S)



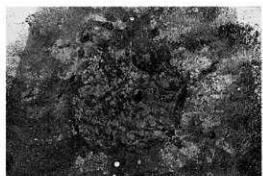
2号焼成ピット堆積土(S)



3号焼成ピット完掘(S)



3号焼成ピット堆積土(W)



4号焼成ピット完掘(W)



4号焼成ピット堆積土(S)

写真38 焼成ピット(1)



5号焼成ピット完掘 (E)



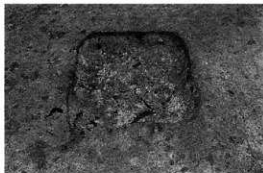
6号焼成ピット完掘 (SW)



6号焼成ピット完掘 (N)



7号焼成ピット完掘 (S)



8号焼成ピット完掘 (SW)



8号焼成ピット堆積土 (N)



9号焼成ピット完掘 (E)

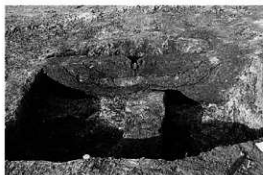


9号焼成ピット堆積土 (E)

写真39 焼成ピット(2)



10号焼成ピット完掘(N)



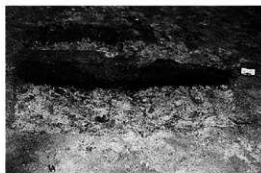
10号焼成ピット堆積土(S)



11号焼成ピット完掘(S)



12号焼成ピット完掘(W)



12号焼成ピット堆積土(W)



13号焼成ピット完掘(S)



13号焼成ピット堆積土(S)



13号焼成ピット堆積土(E)

写真40 焼成ピット(3)



14号焼成ピット完掘(W)



14号焼成ピット堆積土(N)



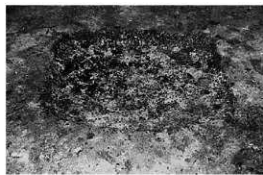
15号焼成ピット完掘(N)



15号焼成ピット堆積土(N)



15号焼成ピット堆積土(W)



16号焼成ピット完掘(W)



16号焼成ピット完掘(W)



16号焼成ピット堆積土(S)

写真41 焼成ピット(4)



17号焼成ピット完掘 (SE)



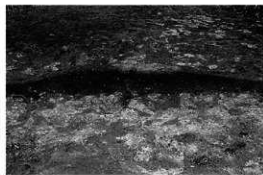
18号焼成ピット堆積土 (W)



18号焼成ピット堆積土 (S)



1号焼土状遺構堆積土 (W)



18号焼成ピット完掘 (W)



2号焼土状遺構堆積土 (E)



3号焼土状遺構堆積土 (N)

写真 42 焼成ピット(5)・焼土状遺構(1)



4号・5号焼土状遺構完掘(S)



4号・5号焼土状遺構堆積土(S)



6号焼土状遺構完掘(S)



6号焼土状遺構堆積土(SW)



7号・8号焼土状遺構完掘(W)



8号焼土状遺構堆積土(W)



8号焼土状遺構堆積土(W)

7号焼土状遺構堆積土(W)
(上段の写真と連続する)

写真43 焼土状遺構(2)



7号・8号焼土状遺構と柱穴状ピット群



1号道路状遺構堆積土(N)



2号道路状遺構堆積土(N)



1号溝状遺構堆積土(N)



2号溝状遺構堆積土(E)



3号溝状遺構堆積土(E)



4号溝状遺構堆積土(N)

写真 44 柱穴状ピット群・道路状遺構・溝状遺構(1)



5号溝状遺構完掘 (W)



5号溝状遺構堆積土 1 (E)



5号溝状遺構堆積土 2 (E)



5号溝状遺構堆積土 (W)



6号溝状遺構完掘 (N)



7号溝状遺構完掘 (E)

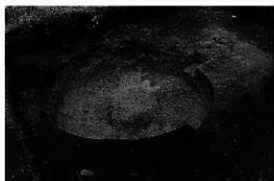
写真 45 溝状遺構 (2)



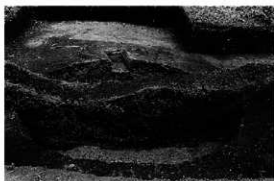
8号溝状遺構完掘 (S)



8号溝状遺構堆積土 (W)



1号竪穴遺構完掘 (SW)



1号竪穴遺構堆積土 (南北 W)



1号竪穴遺構出土状況 (E)

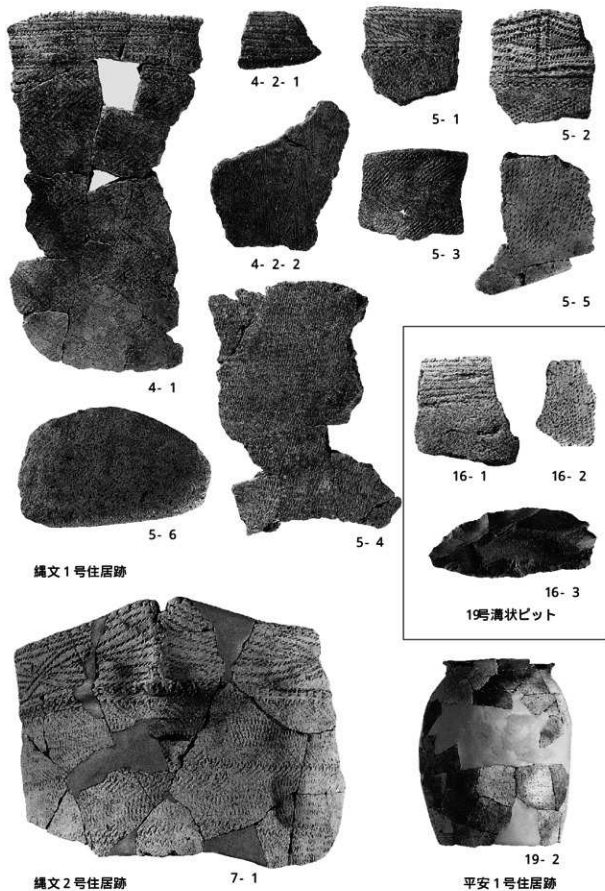


写真47 遺構内出土遺物(1)



19- 1



19- 5



19- 3



20- 10



20- 7



21- 17



19- 6



19- 4



21- 14

平安1号住居跡

写真48 遺構内出土遺物(2)

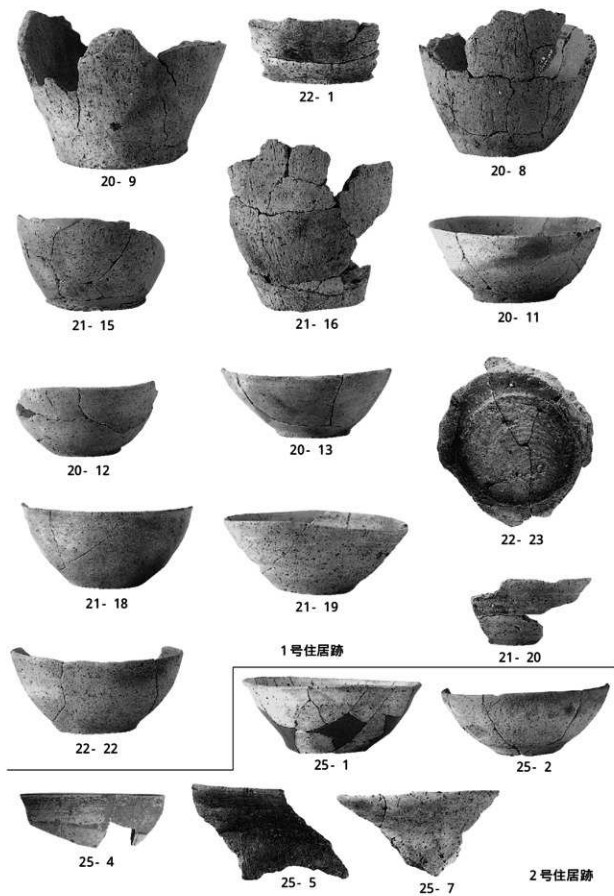


写真 49 遺構内出土遺物(3)



25- 1



25- 6



25- 11



25- 3



25- 12



25- 13



25- 8



25- 9



22- 24



22- 25



26- 15

1号住居跡

2号住居跡



30- 8



同一
個体



31- 10



30- 9



30- 12



30- 10

3号住居跡

写真 50 遺構内出土遺物(4)



29- 1



29- 2



30- 3



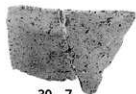
30- 4



30- 5



30- 6



30- 7



31- 15



30- 11



30- 13



31- 16



31- 18

3号住居跡



33- 4



33- 5



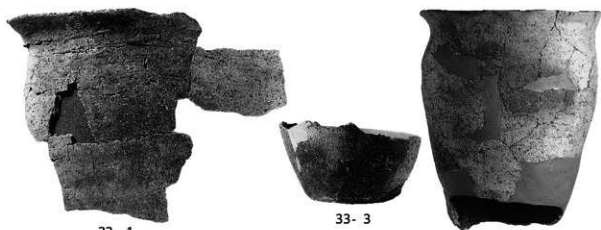
34- 7



34- 8

4号住居跡

写真 51 遺構内出土遺物(5)



33- 1

33- 3

33- 2



34- 9



34- 9



34- 10



34- 10

4号住居跡



38- 10



38- 16



38- 14



38- 11



38- 12



38- 15



38- 13



39- 26



39- 25



39- 24



39- 21



39- 22



39- 20

5号住居跡

写真 52 遺構内出土遺物(6)

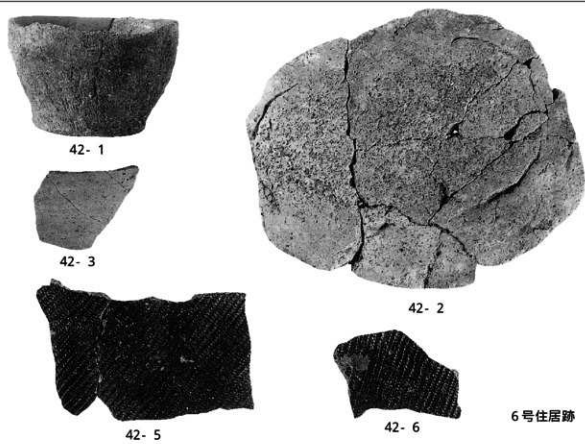
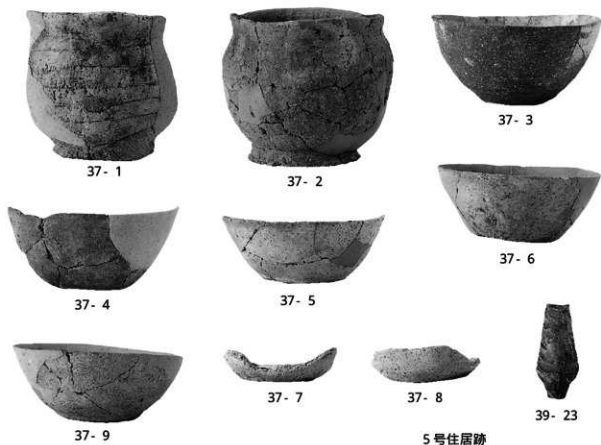


写真 53 遺構内出土遺物(7)

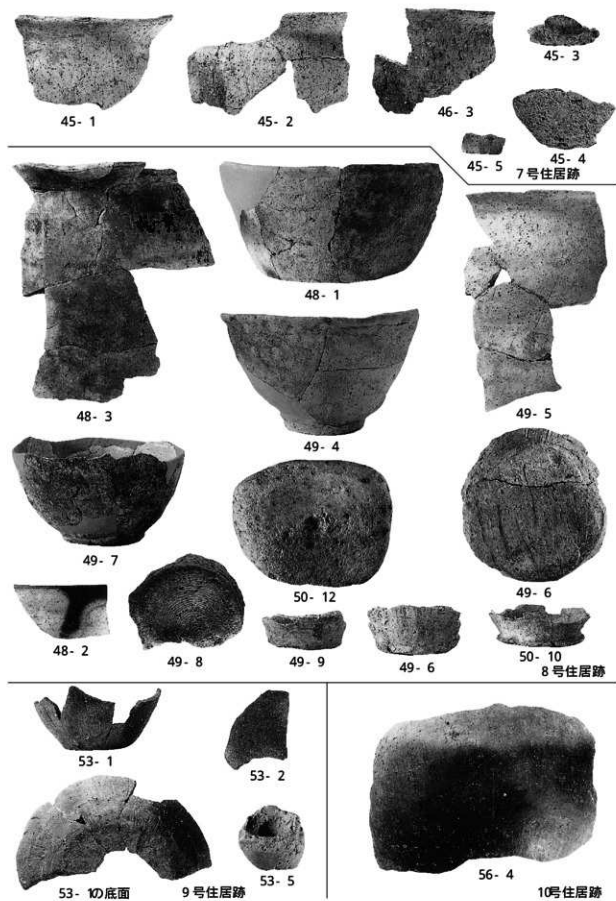


写真 54 遺構内出土遺物(8)

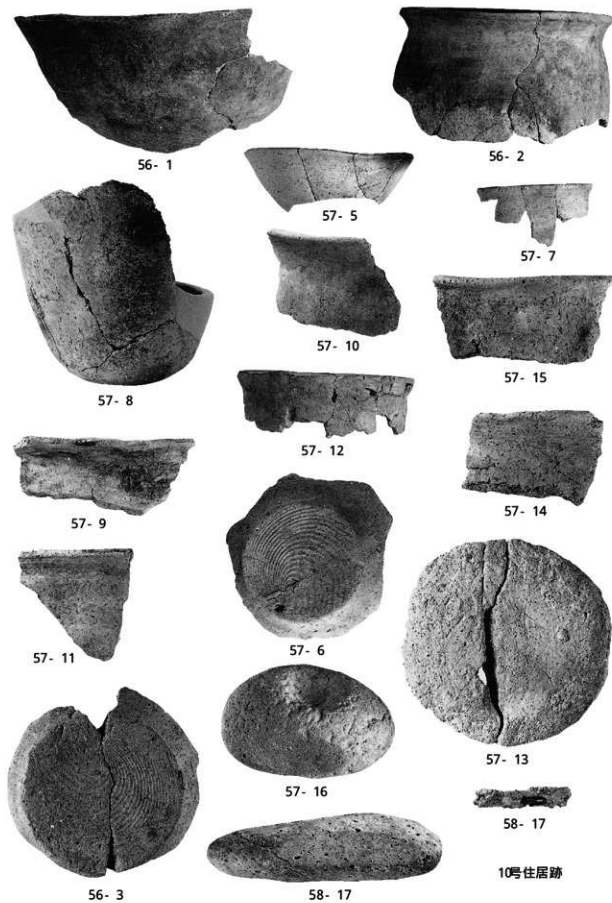


写真 55 遺構内出土遺物(9)

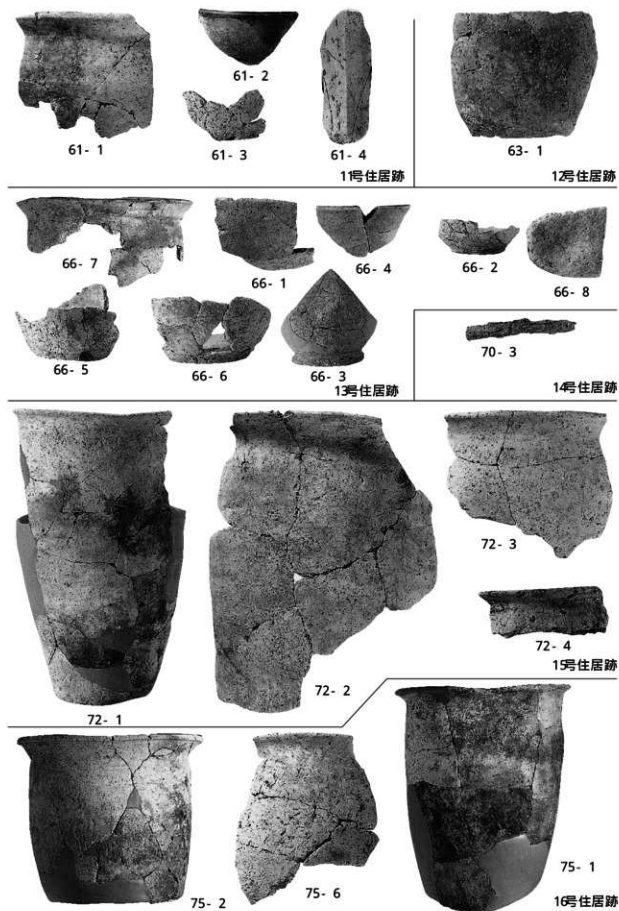


写真 56 遺構内出土遺物 (10)

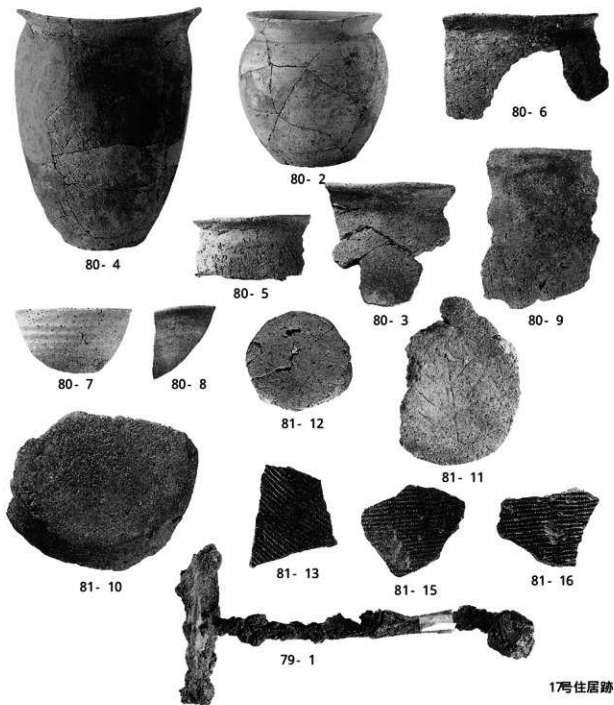
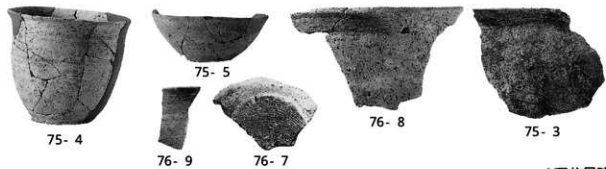


写真 57 遺構内出土遺物(11)



83- 1



83- 2



83- 3



83- 4



83- 7



84- 9



83- 6



84- 11



83- 10



84- 8



83- 5

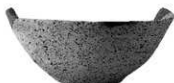
18号住居跡



88- 15



87- 1



87- 2



87- 3



87- 4



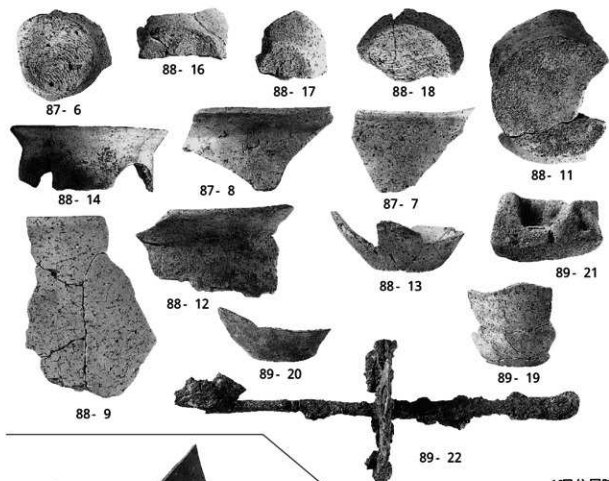
87- 5



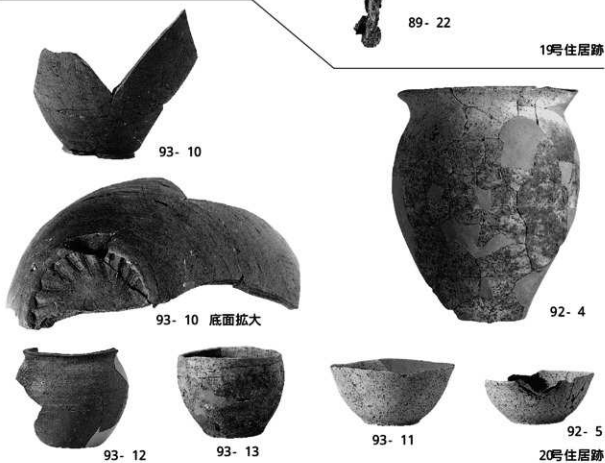
88- 10

19号住居跡

写真 58 遺構内出土遺物(12)



19号住居跡



20号住居跡

写真 59 遺構内出土遺物(13)



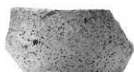
92- 2



92- 6



93- 14



92- 7



92- 3



93- 9



92- 1



93- 8

20号住居跡



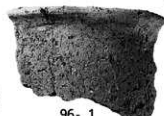
97- 5



97- 4



97- 7



96- 1



97- 7 底面拡大



97- 6



96- 3



97- 8



96- 2



98- 10



98- 12

(97- 9 写真 61)

21号住居跡

写真 60 遺構内出土遺物(14)



101- 1



101- 2



101- 3

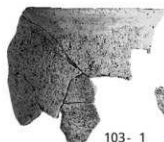


101- 5



101- 4

2号住居跡



103- 1



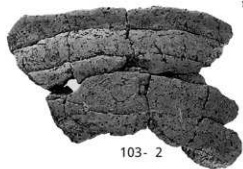
103- 4



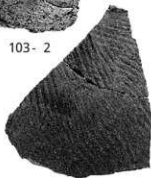
103- 3a



103- 2



103- 2



97- 9
(21H)



103- 3b

2号住居跡



106- 1



106- 2



106- 3



106- 4

2号住居跡

写真 61 遺構内出土遺物(15)

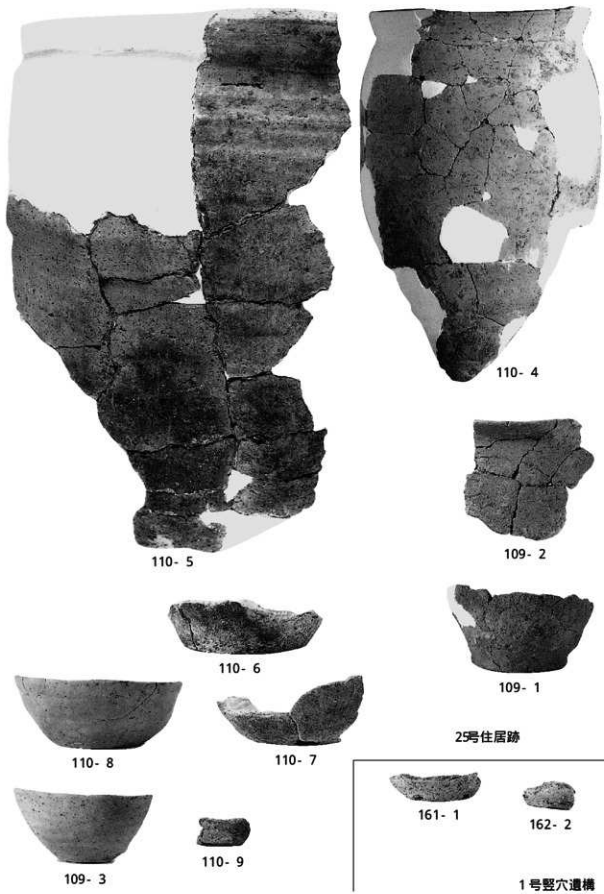


写真 62 遺構内出土遺物(16)



113- 1



113- 2



113- 3



113- 4



113- 5



113- 6



113- 9



113- 10

1号円形周溝



113- 11



113- 13



113- 12



113- 14



114- 1



114- 3



114- 4



114- 5



114- 2

2号円形周溝



114- 6



114- 7



114- 8



114- 10

4号土坑



117- 4



117- 5



117- 6



117- 7

3号円形周溝



119- 1



119- 2

4号円形周溝

写真 63 遺構内出土遺物(17)

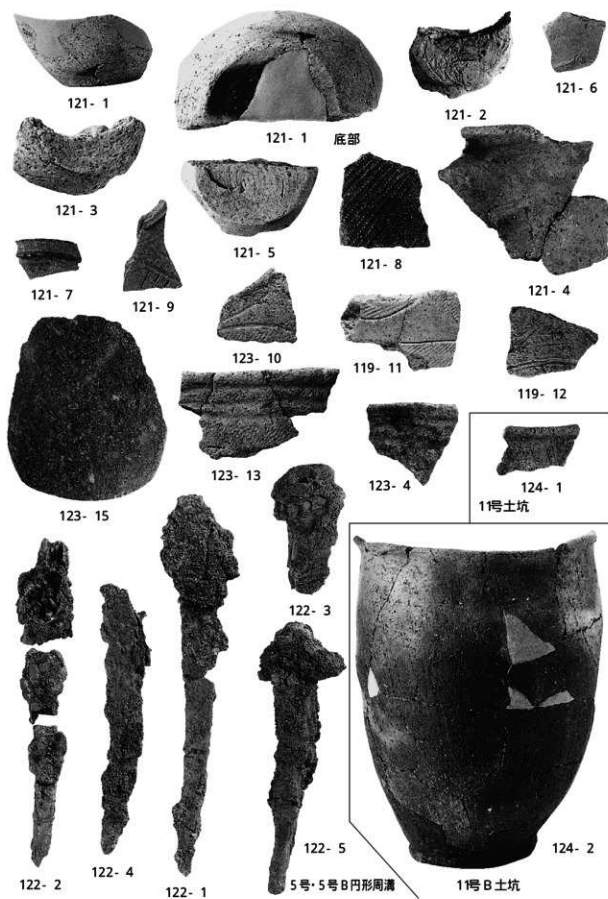
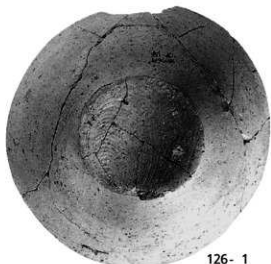


写真 64 遺構内出土遺物(18)



126-1

復元前 (A面)



126-1

復元後 (C面)



126-1

底部復元前 (B面)



126-1



126-2



127-1



127-2



127-3



127-4

6号円形周溝

写真 65 遺構内出土遺物 (19)

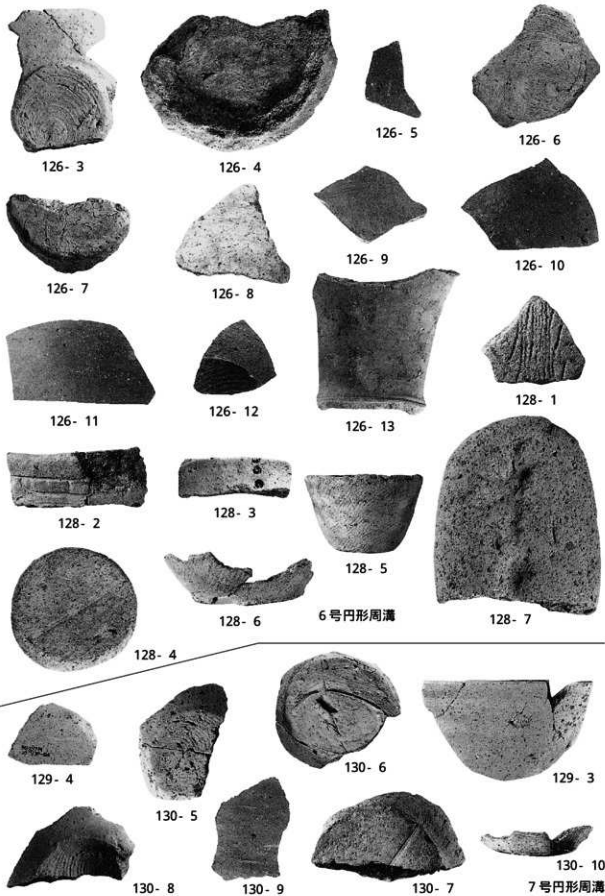


写真 66 遺構内出土遺物(20)



129- 1



129- 2



131- 2



131- 3



131- 4



132- 5



132- 6



131- 1



132- 7



132- 8



132- 11



132- 15



132- 14



132- 9



132- 10



132- 13



132- 12

7号円形周溝

写真 67 遺構内出土遺物(21)

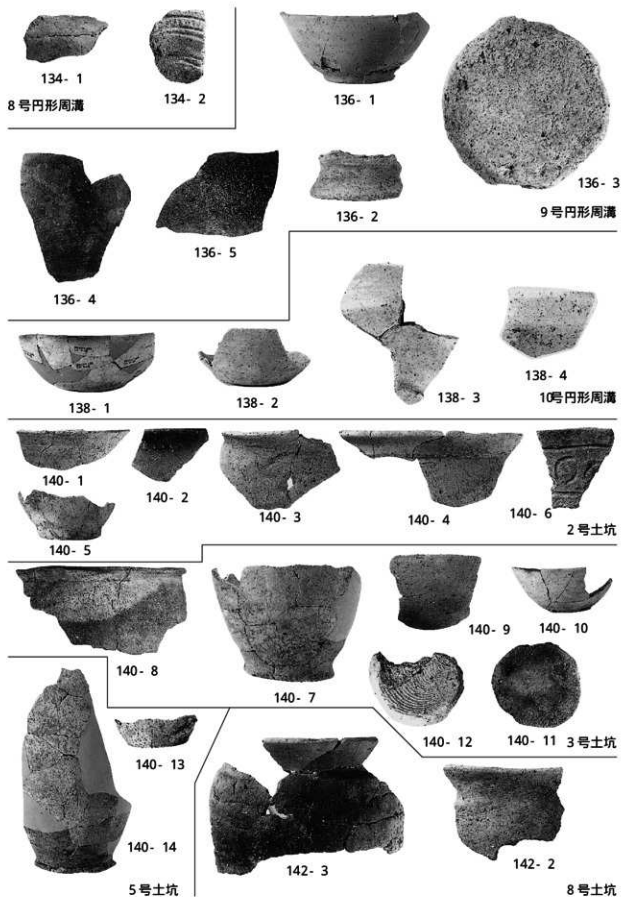


写真 68 遺構内出土遺物(22)

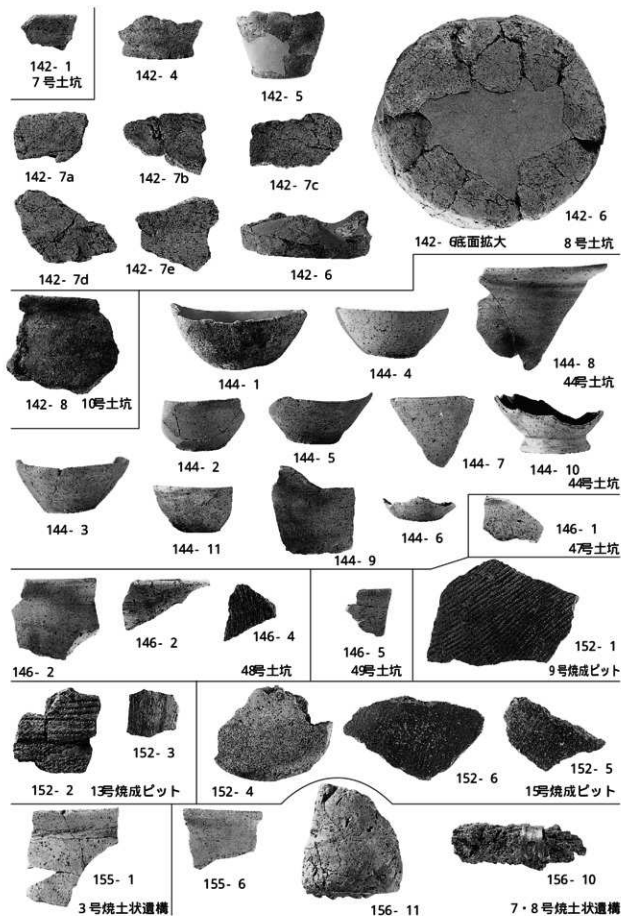
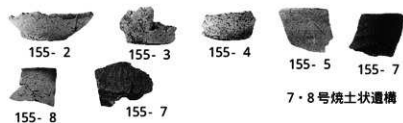


写真 69 遺構内出土遺物(23)



7・8号焼土状遺構

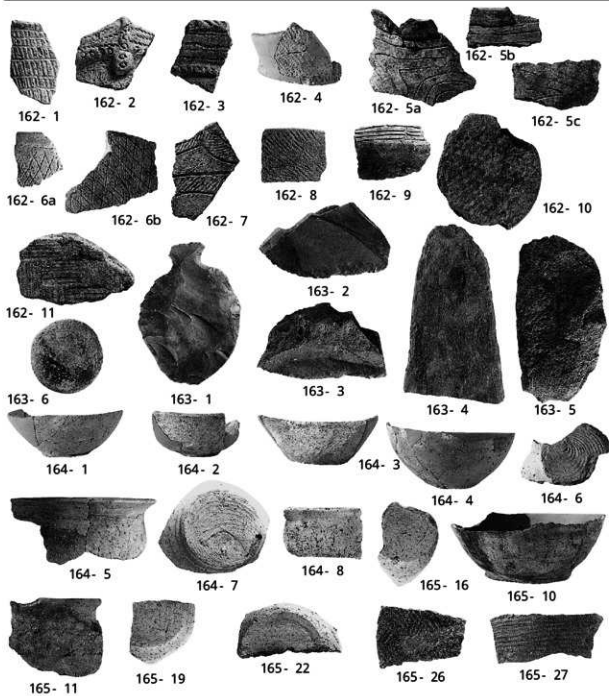


写真 70 遺構内出土遺物(24)・遺構外出土遺物(1)

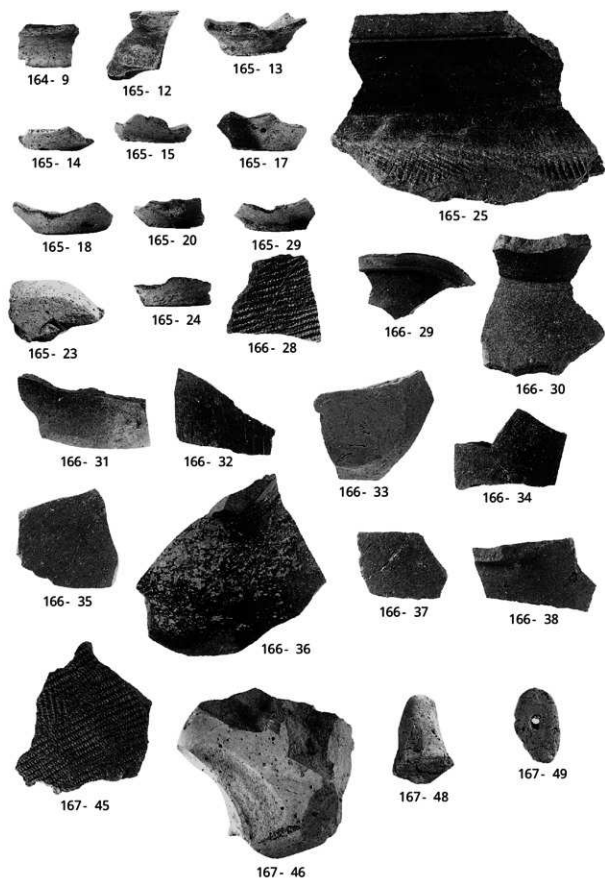


写真 71 遺構外出土遺物(2)

報 告 書 抄 録

ふりがな	しんまちのいせきはくつちょうさほうこくしょに
書名	新町野遺跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	青森市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第54巻 - 1
編集者名	北林八洲晴、木村淳一、鷲尾智加子
編集機関	青森市教育委員会
所在地	〒030 8555 青森県青森市中央一丁目22-5 TEL017-734-1111
発行年月日	西暦2001年3月21日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しんまちの 新町野	あおもりしおおさざ 青森市大字 ごうしざわあざまつちり 合子沢字松森	02201	161	40 46 49	140 45 7	19980701 ～ 19981120	23800	工業団地造成 (青森中核工業 団地造成工事) に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
新町野	集落跡	縄文	竪穴式住居跡 2軒 土坑 15基 溝状ピット 14基	縄文土器 石器	
		平安	竪穴式住居跡 2軒 円形周溝 11基 竪穴遺構 1基 土坑 36基 焼成ピット 18基 焼土状遺構 8基 柱穴状ピット 13基 道路状遺構 2条 溝状遺構 8条	土師器 須恵器 鉄製品 石製品 土製品	

既刊埋蔵文化財関係報告書一覧

青森市の文化財	1	1962	『三内雲面遺跡調査概報』	＃	第38集	1998	『野木遺跡発掘調査報告書』
＃	2	1965	『四ツ石遺跡調査概報』	＃	第39集	1998	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
＃	3	1967	『玉清水遺跡調査概報』	＃	第40集	1998	『小牧野遺跡発掘調査報告書』
＃	4	1970	『三内丸山遺跡調査概報』	＃	第41集	1998	『野木遺跡発掘調査概報』
＃	5	1971	『野木和遺跡調査報告書』	＃	第42集	1998	『熊沢遺跡発掘調査概報』
＃	6	1971	『玉清水 遺跡発掘調査報告書』	＃	第43集	1999	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
＃	7	1971	『大浦遺跡調査報告書』	＃	第44集	1999	『蕨野(2)遺跡発掘調査報告書』
＃	8	1973	『孫内遺跡発掘調査報告書』	＃	第45集	1999	『小牧野遺跡発掘調査報告書』
		1979	『蚩沢遺跡』	＃	第46集	1999	『新町野・野木遺跡概報』
		1983	『四戸橋遺跡調査報告書』	＃	第47集	1999	『稲山遺跡発掘調査概報』
青森市の埋蔵文化財		1983	『山野峠遺跡』	＃	第48集	2000	『熊沢遺跡発掘調査報告書』
＃		1985	『長森遺跡発掘調査報告書』	＃	第49集	2000	『稲山遺跡発掘調査概報』
＃		1986	『田茂木野遺跡発掘調査報告書』	＃	第50集	2000	『小牧野遺跡発掘調査報告書』
＃		1987	『横内城跡発掘調査報告書』	＃	第51集	2000	『桜峯(1)雲谷山吹(3)遺跡発掘調査報告書』
＃		1988	『三内丸山 遺跡発掘調査報告書』	＃	第52集	2000	『大矢沢野田(1)遺跡調査報告書』
青森市埋蔵文化財調査報告書				＃	第53集	2000	『市内遺跡発掘調査報告書』
＃	第16集	1991	『山吹(1)遺跡発掘調査報告書』	＃	第54集	1-6	
＃	第17集	1992	『埋蔵文化財出土遺物調査報告書』	＃			
＃	第18集	1993	『三内丸山(2)遺跡発掘調査概報』	＃		2001	『新町野遺跡発掘調査報告書』
＃	第19集	1993	『市内遺跡発掘調査報告書』	＃			野木遺跡発掘調査報告書』
＃	第20集	1993	『小牧野遺跡発掘調査概報』				
＃	第21集	1994	『市内遺跡詳細分布調査報告書』				
＃	第22集	1994	『小三内遺跡発掘調査報告書』				
＃	第23集	1994	『三内丸山(2)小三内遺跡発掘調査報告書』				
＃	第24集	1995	『横内遺跡・横内(2)遺跡発掘調査報告書』				
＃	第25集	1995	『市内遺跡詳細分布調査報告書』				
＃	第26集	1995	『桜峯(2)遺跡発掘調査報告書』				
＃	第27集	1996	『桜峯(1)遺跡発掘調査概報』				
＃	第28集	1996	『三内丸山(2)遺跡発掘調査報告書』				
＃	第29集	1996	『市内遺跡詳細分布調査報告書』				
＃	第30集	1996	『小牧野遺跡発掘調査報告書』				
＃	第31集	1997	『市内遺跡詳細分布調査報告書』				
＃	第32集	1997	『桜峯(1)遺跡発掘調査概報』				
＃	第33集	1997	『新町野遺跡試掘調査報告書』				
＃	第34集	1997	『蕨野(2)遺跡発掘調査報告書』				
＃	第35集	1997	『小牧野遺跡発掘調査報告書』				
＃	第36集	1998	『桜峯(1)遺跡発掘調査報告書』				
＃	第37集	1998	『新町野遺跡発掘調査報告書』				

青森市埋蔵文化財調査報告書第54集 - 1

新町野遺跡発掘調査報告書

発行年月日 平成 13年 3月 21日

発 行 青森市教育委員会
〒030 8555 青森市中央一丁目22-5
TEL 017 734 1111

印 刷 第一印刷株式会社
〒038 0003 青森市石江字江渡3-1
TEL 017 782 2333

